一般国道3号 筑紫野バイパス関係埋蔵文化財調査報告 第7集

以 来 尺 遺 跡 III

上 巻

福岡県筑紫野市大字筑紫所在遺跡の調査

1999

福岡県教育委員会

一般国道3号 筑紫野バイパス関係埋蔵文化財調査報告 第7集

以来尺遺跡 III

上巻

福岡県筑紫野市大字筑紫所在遺跡の調査

1999

福岡県教育委員会

序

福岡県教育委員会は、建設省九州地方建設局福岡国道工事事務所の委託を受けて、一般国道３号筑紫野バイパス建設予定地に所在する埋蔵文化財の発掘調査を昭和56年度から平成９年度にかけて実施しました。調査は終了し、筑紫野バイパスは平成10年度３月に無事開通いたしました。

本書はこのうち、平成４年度から９年度にかけて実施した筑紫野市大字筑紫に所在する以来尺遺跡の発掘調査についての記録であります。そして、この報告をもって本事業の整理報告を完了いたします。

この遺跡では、弥生時代後期の大集落跡を中心に、古墳時代後期の古墳と集落跡、さらには中世の集落や山城を確認するなど、多くの成果をあげることができました。発掘調査の報告書としては決して満足のいくものではありませんが、本書が埋蔵文化財に対する認識と理解、さらには学術研究における活用の一助になれば幸いです。

なお、発掘調査および整理報告にあたり、数々のご協力を頂いた建設省福岡国道工事事務所、筑紫野市教育委員会、地元の方々をはじめ関係各位に対して心から感謝申し上げます。

平成11年３月31日

福岡県教育委員会

教育長　光安常喜

例　言

1．本書は、福岡県教育委員会が建設省九州地方建設局の委託を受けて、平成4（1992）年度から平成9（1997）年度にかけて実施した一般国道3号筑紫野バイパス建設に係わる埋蔵文化財の発掘調査の成果について、報告書の第7集としてとりまとめたものである。

2．本書に記録した以来尺遺跡は、筑紫野バイパス第6地点にあたり、筑紫野市大字以来尺927・929・932番外地に所在する。整理報告は平成8・9・10年度の3ヵ年にわけて実施した。

3．本書に掲載した遺構・遺物実測図は、馬田弘稔・水ノ江和同・齋部麻矢・秦憲二・杉原敏之・森井啓次が作成した。

4．本書に掲載した遺構写真は馬田・水ノ江・齋部・秦・杉原・森井が、遺物写真については水ノ江・齋部・秦・杉原・森井と北岡伸一が撮影した。なお、空中写真についてはフォト大塚に委託した。

5．出土遺物については、九州歴史資料館において岩瀬正信の指導で整理・復元作業を行い、鉄器の保存処理は九州歴史資料館の横田義章氏に依頼した。

6．使用した方位はすべて座標北である。

7．出土遺物・写真・図面等については、すべて九州歴史資料館および福岡県文化財保護課太宰府事務所に保管している。

8．執筆は、1次調査については馬田・水ノ江・齋部・秦・杉原の各自が行い、担当箇所については文末に記してある。また、2次調査については、全て森井が執筆した。本書の編集は杉原が行った。

本文目次．Ⅲ（平成10年度）

Ⅰ　はじめに
1．調査の経過と組織……1
2．位置と環境……3

Ⅱ　発掘調査の記録
1．調査の概要……11
2．弥生時代の遺構と遺物１　―平坦地区の調査３―
(1)　竪穴住居跡……13
(2)　掘立柱建物跡……54
(3)　その他の遺物……62
3．弥生時代の遺構と遺物２　―斜面地区の調査―
(1)　竪穴住居跡……62
(2)　掘立柱建物跡……109
(3)　貯蔵穴……109
(4)　おとし穴……113
(5)　土坑……114
(6)　ピット……114
(7)　その他の遺物……114
4．古墳時代の遺構と遺物
(1)　竪穴住居跡……121
(2)　古墳……133
(3)　その他の遺物……139
5．歴史時代以降の遺構と遺物　―中・近世の調査―
(1)　掘立柱建物跡……141
(2)　堀・区画溝……145
(3)　溝状遺構……155
(4)　柵跡遺構……162
(5)　土壙墓……163
(6)　ピット……163
(7)　その他の遺物……164

Ⅲ　第２次調査の記録
1．調査の経過……169
2．遺構と遺物
(1)　竪穴住居跡……170
(2)　掘立柱建物跡……173
(3)　溝……173
(4)　その他の遺物……174
(5)　まとめ……176

Ⅳ　おわりに……178

図 版 目 次

図版 1　(1)　住1017号群〔付図 8 ・表 3 参照〕の位置（南上空から）

(2)　同群1116・1126・1136・1147号住居、2017号掘立柱建物跡、1008号溝、3001号陥し穴等遺構群（南東から）

図版 2　(1)　住1017号群東半部1012・2006号住居と住1421群2001号住居（北東から）

(2)　同群 2 号陥し穴（南東から）

(3)　同群西半部1013・1017・1162号住居〔壁沿区画溝掘り下げ前〕（北北東から）

(4)　住1017号群〔付図 8 ・表 3 参照〕の位置（北上空から）

図版 3　(1)　住1051号群1009・1051号住居、2015号掘立柱建物跡（西から）

(2)　同群　（西から）

(3)　住1051号群〔付図10・表 4 参照〕の位置（西上空から）

(4)　同　（北上空から）

図版 4　(1)　住1417号群1014・1015・1061・1474・2004号住居（北東から）

(2)　同群1062・1063・3003（旧1064）号住居〔調査区拡張前〕（北から）

(3)　住1417号群〔付図 7 ・表 5 参照〕の位置（北上空から）

図版 5　(1)　住1417号群東半部〔調査区拡張後〕（南東から）

(2)　同　（北東から）

図版 6　(1)　住1417号群2005号住居、2016号掘立柱建物跡（南から）

(2)　同群 1 号陥し穴と 3 号貯蔵穴（北東から）

(3)　住1417号群〔付図 7 ・表 5 参照〕の位置（南から）

図版 7　(1)　建1022号群1215・3001号住居、1022・1023・1030号掘立柱建物跡（北西から）

(2)　同群1217・2003号住居（北北東から）

(3)　建1022号群〔付図11・表 6 参照〕の位置（西上空から）

図版 8　(1)　建1022号群1215号住居（西から）

(2)　同群1217・2003号住居（西から）

(3)　建1022号群〔付図11・表 6 参照〕の位置（北上空から）

(4)　同　（東上空から）

図版 9　(1)　丘陵平坦部北東端の掘立柱建物跡群1043号掘立柱建物跡等（西から）

(2)　同　（南西から）

(3)　丘陵平坦部北東端の建物群の位置（南東上空から）

(4)　同　（南西上空から）

図版10 (1) 丘陵平坦部北東端の1043号掘立柱建物跡（南から）
(2) 1043号掘立柱建物跡Ｐ６礎板痕〔１×２間、32×48cm長方形〕（西から）
(3) 1043号掘立柱建物跡Ｐ１礎板痕〔38×53cm長方形〕（西から）
(4) 1043号掘立柱建物跡Ｐ３礎板痕〔35×52cm長方形〕（西から）
図版11 (1) 丘陵平坦部北東端の建物群から北眼下谷部を望む（南から）
(2) 同群1036号掘立柱建物跡Ｐ３柱底面痕〔１×２間、円径約28cm〕（南西から）
(3) 同群1043号掘立柱建物跡Ｐ４柱底面痕〔円径約30cm〕（南西から）
(4) 同群1043号掘立柱建物跡Ｐ５礎板痕〔23×38cm長方形〕（西から）
図版12 (1) 丘陵平坦部北東端の円形住居群1440号新住居（北東から）
(2) 同1440号旧住居（北東から）
(3) 同1440号旧住居（南東から）
(4) 丘陵平坦部北東隅の円形住居群の位置（南東上空から）
図版13 (1) 丘陵平坦部北東隅の円形住居群1441・1442号住居（北西から）
(2) 同群1440号住居（北西から）
(3) 同群1441・1442号住居（南西から）
(4) 丘陵平坦部北東隅の円形住居群の位置（北西上空から）
図版14 (1) 丘陵平坦部北東隅の1456号住居（南から）
(2) 丘陵南斜面部の１号袋状貯蔵穴（南から）
(3) 丘陵南斜面部の２号袋状貯蔵穴（北から）
(4) 丘陵南斜面部の３号袋状貯蔵穴（南から）
(5) 1456号住居、１～３号袋状貯蔵穴の位置（南上空から）
図版15 (1) 以来尺１号墳と東眼下平野部を望む（西から）
(2) 以来尺１号墳と南眼下谷部を望む（北から）
(3) 以来尺１号墳主体部（南から）
(4) 以来尺１号墳の位置（南上空から）
図版16 (1) 以来尺遺跡からの眺望（福岡南女子高等学校屋上の西から）
(2) 同　（南東上空から）
図版17 (1) 以来尺遺跡からの眺望（福岡南女子高等学校屋上の西から）
(2) 同　（北西上空から）
図版18 (1) 丘陵南谷部から同南斜面部を望む①（南から）
(2) 丘陵西斜面部から同南斜面部・谷頭部を望む（南東から）
図版19 (1) 丘陵南谷部から同南斜面部を望む②（南から）
(2) 丘陵西斜面部から同南谷部～南斜面部～平坦部を望む（南東から）

図版20 (1) 36号竪穴住居跡（南から）
(2) 同　遺物出土状況（南西から）
(3) 37～43号竪穴住居跡（北東から）
(4) 37号竪穴住居跡（東から）
図版21 (1) 37・38・41～43号竪穴住居跡（南から）
(2) 40号竪穴住居跡（北から）
(3) 106号竪穴住居跡（北東から）
図版22 (1) 108・109号竪穴住居跡（西から）
(2) 111号竪穴住居跡（東から）
(3) 111号竪穴住居跡石庖丁集積状況（北から）
(4) 同　炭化種子群出土状況
図版23 (1) 109・110・113・118・119号竪穴住居跡（西から）
(2) 109・110・113号竪穴住居跡（西から）
(3) 116・117号竪穴住居跡（南西から）
(4) 124号竪穴住居跡（西から）
図版24 (1) 丘陵南斜面部上位の遺構群1017・1073号住居、1008号溝（南から）
(2) 同　（東から）
(3) 同遺構群の位置（北東上空から）
図版25 (1) 丘陵南斜面部中・下位の遺構群1211・1262・1280号住居、1021号溝（北東から）
(2) 同中位の遺構群1211号住居、1018号溝（東から）
(3) 同中位の遺構群1211号住居、1021号溝（東から）
(4) 同中位の遺構群1210・1211号住居、1020号溝（東から）
(5) 同遺構群の位置（東上空から）
図版26 (1) 丘陵南斜面部中位の遺構群1187号住居、1009・1010号溝（東から）
(2) 同中位の遺構群1209号住居、1018号溝（南東から）
(3) 同中位の遺構群1209号住居、1020号溝（東から）
(4) 同中位の遺構群1010・1011号溝（東から）
(5) 同遺構群の位置（東から）
図版27 (1) 丘陵南斜面部の遺構群を通路頂部から望む（南東から）
(2) 同上位遺構群から同下位遺構群を望む（東から）
(3) 同中位の遺構群1014・1018号溝（西から）
(4) 同遺構群の位置（西から）
図版28 (1) 丘陵南斜面部下位の住1286号群（南東から）

(2) 同　（南東から）
図版29 (1) 丘陵南斜面部下位の住1286号群（東から）
(2) 同　（南東から）
図版30 (1) 丘陵南斜面部下位の住1286号群（北から）
(2) 同住1286号群1262・1283・1285・1286・1289・3015号住居と通路（北から）
(3) 同群の位置（東上空から）
図版31 (1) 丘陵南斜面部下位の住1286号群（北西から）
(2) 同　（北西から）
図版32 (1) 通路と丘陵東眼下を望む（南上空から）
(2) 通路と丘陵北遠方を望む（南東上空から）
図版33 (1) 通路と丘陵南谷部を望む（南上空から）
(2) 通路と丘陵南東眼下を望む（北西上空から）
図版34 (1) 通路と丘陵南谷部～南斜面部～西斜面部を望む（北東上空から）
(2) 同　（南西上空から）
図版35 (1) 通路と丘陵南谷部～南斜面部～西斜面部を望む（西から）
(2) 通路と丘陵南谷頭部を望む（東から）
図版36 (1) 通路01トレンチ〔01区〕のE—E'西壁土層（西から）
(2) 同　04トレンチ〔04区〕（南東から）
(3) 同　各トレンチ〔各区〕の位置〔『以来尺遺跡II集』本文参照〕
図版37 (1) 通路面の結界標柱穴〔6区〕（北から）
(2) 同　〔7区〕（北から）
(3) 同　〔8区〕（西から）
(4) 同　〔9・10区〕と3001号袋状貯蔵穴（南から）
図版38 (1) 丘陵南斜面部上位の住1322号群（南から）
(2) 丘陵西斜面部上位（橋脚部）の住居群（南東から）
(3) 丘陵南斜面部上位の住1330号群1387号住居（東から）
(4) 丘陵南～西斜面部遺構群と通路（西上空から）
(5) 同　（北西から）
図版39 (1) 丘陵西斜面部下位の住1380号群1380号住居カマド（西から）
(2) 丘陵南斜面部下位の住1376号群1374～1376・1473・3021号住居（南西から）
(3) 丘陵南～西斜面部遺構群の位置（西上空から）
(4) 丘陵西斜面部上位の1358～1360号住居（南西から）
図版40 弥生時代平坦地区竪穴住居跡出土土器．1

図版41　弥生時代平坦地区竪穴住居跡出土土器．2
図版42　弥生時代平坦地区竪穴住居跡出土土器．3
図版43　弥生時代斜面地区竪穴住居跡出土土器．1
図版44　弥生時代斜面地区竪穴住居跡出土土器．2
図版45　弥生時代斜面地区竪穴住居跡出土土器．3
図版46　弥生時代斜面地区竪穴住居跡出土土器．4
図版47　弥生時代斜面地区竪穴住居跡出土土器．5
図版48　弥生時代斜面地区竪穴住居跡出土土器．6
図版49　弥生時代斜面地区竪穴住居跡・掘立柱建物跡・土坑出土土器
図版50　(1)　平坦地区出土石庖丁・砥石
(2)　平坦地区出土砥石
(3)　平坦地区出土その他の石製品
(4)　斜面地区出土石庖丁
図版51　(1)　斜面地区出土砥石．1
(2)　斜面地区出土砥石・石製品．2
(3)　包含層・その他の地点出土石庖丁
(4)　包含層・その他の地点出土砥石
図版52　(1)　平坦地区出土鉄製品
(2)　斜面地区出土鉄製品
(3)　表採・包含層出土鉄製品
(4)　玉類
図版53　(1)　39号竪穴住居跡（南から）
(2)　同　カマド（南から）
(3)　39号竪穴住居跡　カマド土層断面（南東から）
(4)　107号竪穴住居跡（北東から）
図版54　(1)　住1004号群（付図９・表２参照）の位置（東から）
(2)　同群1004・1050・1055・1059・1060・2002号住居（東から）
図版55　(1)　住1004号群1004号住居カマド（南から）
(2)　同　（東から）
(3)　同群1004・1005・1060・1064号住居（東から）
(4)　住1004号群〔付図９・表２参照〕の位置（南上空から）
図版56　古墳時代竪穴住居跡出土土器
図版57　古墳時代竪穴住居跡・古墳出土土器、その他の遺物

図版58 (1) 5号掘立柱建物跡（東から）
(2) 6号掘立柱建物跡（西から）
(3) 21号掘立柱建物跡（南東から）
図版59 (1) 1・2号堀・土塁（東から）
(2) 1号堀（南から）
(3) 1号堀5区東壁土層断面（西から）
(4) 1号堀3区東壁土層断面（西から）
図版60 (1) 2・6号堀東壁土層断面（西から）
(2) 同　西壁土層断面（東から）
(3) 1～3号区画溝（南から）
(4) 2号区画溝北壁土層断面（南から）
図版61 (1) 3号区画溝西壁土層断面（北東から）
(2) 1号区画溝銅銭出土状況（北西から）
(3) 15・16・21号溝（西から）
(4) 16・21号溝（北西から）
図版62 (1) 17・18号溝・88号竪穴住居跡（南西から）
(2) 17・20号溝（南東から）
(3) 土塁土層断面（北東から）
(4) ピット1351（南西から）
図版63 中・近世遺構出土・採集の遺物
図版64 (1) 2次調査1号竪穴住居跡（東から）
(2) 2次調査2・2次調査3号竪穴住居跡（東から）
図版65 2次調査竪穴住居跡・溝出土土器・石製品・鉄製品

挿　図　目　次

第1図 国道3号筑紫野バイパス用地内の各調査地点（1/10,000）……折込
第2図 以来尺遺跡周辺の遺跡分布図―古墳時代前期～中期前半―（1/50,000）…… 4
第3図 以来尺遺跡周辺の遺跡分布図―古墳時代中期後半～後期―（1/50,000）…… 6
第4図 以来尺遺跡周辺の遺跡分布図―歴史時代―（1/50,000）…… 9
第5図 以来尺遺跡調査地点（1/5,000）……10
第6図 以来尺遺跡遺構配置略図（1/1,200）……12

第７図　1008・1009・1010・1013～1017・1019・1027・1047・1051・1054・1061・
1062号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4）……19
第８図　1063・1215号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4）……33
第９図　1417・1418・1429・1430・1438・1439号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4）……40
第10図　1440号竪穴住居跡出土土器実測図．１（1/4　６は1/6）……43
第11図　1440号竪穴住居跡出土土器実測図．２（1/4）……44
第12図　1440号竪穴住居跡出土土器実測図．３（1/4　33～36は1/6）……45
第13図　1440・1441号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4　62は1/6）……46
第14図　1442～1447・1449・1451・1455・1456号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4）……48
第15図　1471・1474～1478・3003号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4）……49
第16図　平坦地区掘立柱建物跡出土土器実測図（1/4）……57
第17図　平坦地区出土石庖丁・砥石実測図（1/2　1/4）……60
第18図　平坦地区その他の石製品・鉄製品・玉類実測図（１～３は2/3　４～10は1/3
11～17は1/2　18は1/1）……61
第19図　36号竪穴住居跡実測図（1/60）……63
第20図　36号竪穴住居跡出土土器実測図．１（1/4）……64
第21図　36号竪穴住居跡出土土器実測図．２（1/4）……65
第22図　37・42・43号竪穴住居跡実測図（1/60）……67
第23図　38・109・110・113・118号竪穴住居跡実測図（1/60）……68
第24図　40号竪穴住居跡実測図（1/60）……69
第25図　83号竪穴住居跡実測図（1/60）……71
第26図　105・106号竪穴住居跡実測図（1/60）……72
第27図　38・40号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4）……74
第28図　40・83・105・106・108号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4）……75
第29図　108・119号竪穴住居跡実測図（1/60）……76
第30図　111号竪穴住居跡実測図（1/60）……78
第31図　111号竪穴住居跡石庖丁集積実測図（1/4）……79
第32図　109・112号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4　５は1/8）……80
第33図　112号竪穴住居跡実測図（1/60）……81
第34図　1068～1070・1072・1073・1076・1078・1105・1108・1112・1118・
1121号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4）……82
第35図　1116・1124・1127・1145・1147・1153・1156号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4）…85
第36図　1209・1210・1211・1212・1219号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4）……89

第37図　1236・1237・1259・1262・1264～1266号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4）……90
第38図　1267・1268・1284～1286・1288・1289号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4）……92
第39図　1295号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4）……95
第40図　1295・1298・1300号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4）……96
第41図　1324・1325・1329・1331・1332・1338・1339号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4）…98
第42図　1340・1343・1345・1351・1355号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4）……99
第43図　1356号竪穴住居跡出土土器実測図．1（1/4）……101
第44図　1356号竪穴住居跡出土土器実測図．2（1/4　16～18は1/6）……102
第45図　1356号竪穴住居跡出土土器実測図．3（1/4）……103
第46図　1359・1365・1369・1370・1372～1376・1378号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4）…105
第47図　1381・1382・1385・1388・1391・1397・1405・1412・1479・2002号竪穴住居跡
出土土器実測図（1/4）……107
第48図　斜面造成住居跡群Ｐ501―502ベルト内出土土器実測図（1/4）……108
第49図　39号掘立柱建物跡 P1182遺物出土状態（1/20）……109
第50図　39号掘立柱建物跡出土土器実測図（1/4）……110
第51図　１～３号貯蔵穴出土土器実測図（1/4）……111
第52図　土坑1019、SX1008、ピット229・270・353・801・984・1613出土土器実測図（1/4）……112
第53図　斜面地区出土石庖丁実測図（1/4）……115
第54図　斜面地区出土砥石・石錘実測図（1/3）……116
第55図　斜面地区出土鉄製品・玉類実測図（１～７は1/2　８～18は1/1）……117
第56図　その他の出土土器実測図（1/4）……118
第57図　表採・包含層・その他の遺構出土石庖丁・砥石実測図（１～７は1/2　８～18は1/3）…119
第58図　表採・包含層出土鉄製品実測図（1/2）……120
第59図　39・41号竪穴住居跡実測図（1/60）……122
第60図　39号竪穴住居跡カマド実測図（1/30）……123
第61図　39・41号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）……124
第62図　107号竪穴住居跡実測図（1/3）……125
第63図　1004号住居カマド実測図（1/20）……126
第64図　1004号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）……127
第65図　1025号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）……129
第66図　1227・1228号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）……130
第67図　1307・1321・1357・1380・1408・1410号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）……131
第68図　１号墳出土土器実測図（1/3）……138

第69図　古墳時代その他の遺物実測図（１～７は1/2　８～13は1/1　14・15は1/3）……139
第70図　その他の遺構出土土器実測図（1/3）……140
第71図　表採・包含層出土土器実測図（1/3）……140
第72図　５・29号掘立柱建物跡実測図（1/60）……142
第73図　６号掘立柱建物跡実測図（1/60）……143
第74図　５・６・29号掘立柱建物跡出土土器（1/4）……144
第75図　１・２号堀（旧１号・７号溝）・６号溝土層断面図（1/60）……145
第76図　１号堀（旧１号溝）出土土器実測図（1/3　16・17は1/6）……147
第77図　１号堀（旧１号溝）出土陶磁器実測図（1/3）……148
第78図　１・２号堀（旧１・７号溝）出土土器・陶磁器実測図（1/3）……149
第79図　土塁・２号堀（旧７号溝）１号区画溝（旧溝８）・６・14号溝土層断面図（1/60）…152
第80図　１・２号区画溝（旧８・９号溝）出土土器・陶磁器実測図（1/3　４は1/4）……154
第81図　２・３号区画溝（旧９・10号溝）土層断面図（1/30）……155
第82図　２・３号区画溝（旧９・10号溝）出土土器・陶磁器実測図（1/3）……156
第83図　６・16号溝出土土器・陶磁器実測図（1/3）……157
第84図　1008号溝出土土器・陶磁器実測図（1/3）……159
第85図　1002・1013・1017～1019・1021号溝ピット5092出土土器・陶磁器実測図（1/3）…160
第86図　１号柵跡実測図（1/120）……162
第87図　１号土壙墓実測図（1/30）……163
第88図　その他の遺構出土中・近世土器・陶磁器実測図（1/3）……164
第89図　表採・包含層出土の中・近世土器・陶磁器実測図（1/3）……165
第90図　中・近世遺構出土・表採の石製品・鉄製品実測図（1/2・1/3）……167
第91図　中・近世遺構出土の鉄製品・その他の遺物実測図（1/2・1/3）……168
第92図　２次調査遺構配置図（1/150）……169
第93図　２次調査１号竪穴住居跡実測図（1/60）……171
第94図　２次調査２・３号竪穴住居跡実測図（1/60）……172
第95図　２次調査１号掘立柱建物実測図（1/60）……174
第96図　２次調査出土土器実測図（1/4）……175
第97図　２次調査出土鉄製品・石製品実測図（1/2）……176
第98図　筑紫神社周辺字図（1/10,000）……177

表　目　次

表１　筑紫氏関係年表
表２　住1004号群周辺の重複関係把握表
表３　住1017号群周辺の重複関係把握表
表４　住1051号群周辺の重複関係把握表
表５　住1417号群周辺の重複関係把握表
表６　建1022号群周辺の重複関係把握表
表７　以来尺１号墳の計画規模把握一覧表
表８　竪穴住居跡・住居一覧表
表９　掘立住建物跡一覧表
表10　溝状遺構一覧表
表11　区画溝一覧表
表12　おとし穴一覧表
表13　通路一覧表
表14　土坑・土壙墓・不明土坑一覧表
表15　貯蔵穴一覧表
住居計測表
表16　1004号Ａ住居計測表
表17　1004号Ｂ住居計測表
表18　1005号住居計測表
表19　1006号住居計測表
表20　1008号Ａ住居計測表
表21　1008号Ｂ住居計測表
表22　1009号Ａ住居計測表
表23　1009号Ｂ住居計測表
表24　1012号Ａ住居計測表
表25　1012号Ｂ住居計測表
表26　1013号Ａ住居計測表
表27　1013号Ｂ住居計測表
表28　1014号住居計測表
表29　1015号住居計測表
表30　1016号Ａ住居計測表
表31　1016号Ｂ住居計測表
表32　1017号住居計測表
表33　1050号Ａ住居計測表
表34　1050号Ｂ住居計測表
表35　1051号Ａ住居計測表
表36　1051号Ｂ住居計測表
表37　1054号Ａ住居計測表
表38　1054号Ｂ住居計測表
表39　1055号住居計測表
表40　1056号住居計測表
表41　1057号住居計測表
表42　1058号住居計測表
表43　1059号Ａ住居計測表

表44　1059号Ｂ住居計測表
表45　1060号住居計測表
表46　1061号Ａ住居計測表
表47　1061号Ｂ住居計測表
表48　1062号住居計測表
表49　1063号住居計測表
表50　1064号Ａ住居計測表
表51　1064号Ｂ住居計測表
表52　1109号住居計測表
表53　1110号住居計測表
表54　1113号住居計測表
表55　1114（1139）号住居計測表
表56　1117（1140）号住居計測表
表57　1135号Ａ住居計測表
表58　1135号Ｂ住居計測表
表59　1135号Ｃ住居計測表
表60　1136（1152）号住居計測表
表61　1137（1142）号住居計測表
表62　1138号住居計測表
表63　1141号住居計測表
表64　1143号住居計測表
表65　1144号Ａ住居計測表
表66　1144号Ｂ住居計測表
表67　1146号住居計測表
表68　1149号住居計測表
表69　1150号住居計測表
表70　1151号住居計測表
表71　1159号住居計測表
表72　1162号Ａ住居計測表
表73　1162号Ｂ住居計測表
表74　1163号住居計測表
表75　1215号住居計測表
表76　1216号住居計測表
表77　1217号住居計測表
表78　1417号住居計測表
表79　1418号住居計測表
表80　1427号住居計測表
表81　1430号Ａ住居計測表
表82　1430号Ｂ住居計測表
表83　1438号住居計測表
表84　1439号住居計測表
表85　1474号住居計測表
表86　2002号住居計測表
表87　2003号Ａ住居計測表
表88　2003号Ｂ住居計測表
表89　2004号Ａ住居計測表
表90　2004号Ｂ住居計測表
表91　2004号Ｃ住居計測表
表92　2004号Ｄ住居計測表
表93　2005号Ａ住居計測表
表94　2005号Ｂ住居計測表
表95　2006号Ａ住居計測表
表96　2006号Ｂ住居計測表
表97　2007号Ａ住居計測表
表98　2007号Ｂ住居計測表
表99　3001号Ａ住居計測表
表100　3001号Ｂ住居計測表
表101　3002号住居計測表
表102　3003号住居計測表
表103　3004号住居計測表
表104　3005号Ａ住居計測表
表105　3005号Ｂ住居計測表
表106　127号Ａ案住居計測表
表107　127号Ｂ案住居計測表
表108　128号Ａ案住居計測表
表109　128号Ｂ案住居計測表

表110　130号案住居計測表
表111　131号案住居計測表
表112　132号案住居計測表
表113　134号案住居計測表
表114　1022号Ａ建物計測表
表115　1022号Ｂ建物計測表
表116　1023号Ａ建物計測表
表117　1023号Ｂ建物計測表
表118　1023号Ｃ建物計測表
表119　1030号Ａ建物計測表
表120　1030号Ｂ建物計測表
表121　2015号建物計測表
表122　2016号Ａ建物計測表
表123　2016号Ｂ建物計測表
表124　2016号Ｃ建物計測表
表125　2017号建物計測表

ス　ナ　ッ　プ

スナップ１　以来尺遺跡現地説明会
スナップ２　変りゆく以来尺遺跡
スナップ３　開通した筑紫野バイパス（原田付近）

付　図　目　次

付図１　以来尺遺跡遺構配置図（1/200）
付図２　以来尺遺跡の丘陵平坦部北東端遺構群配置割付図（1/100）
付図３　以来尺遺跡の丘陵南側斜面遺構群配置割付図①（1/100）
付図４　以来尺遺跡の丘陵南側斜面遺構群配置割付図②（　〃　）
付図５　以来尺遺跡の丘陵南側斜面遺構群配置割付図③（　〃　）
付図６　以来尺遺跡の丘陵南側斜面遺構群配置割付図④（　〃　）
付図７　住1417号群〔住1014・1015、1016A～C・1062・1063・1417・1418・1427、1430A・B、1438・1439・1474、2004A～C、2005A・B、3002・3003号　建2016A～C号　溝1008号　おとし穴１・２号〕実測図（1/60）
付図８　住1017号群〔住1012A・B、1013A・B、1017・1109・1110・1113・1114・1117、1135A～C、1136～1138・1141・1143、1144A・B、1146・1149～1151、1162A・B、2006A・B、2007A・B、3004、3005A・B号　建2017号　陥し穴3001号〕実測図（1/60）
付図９　住1004号群〔住1004A・B、1005・1006、1008A・B、1050A・B、1055・1056・1058～1060、1064A・B、 1163・2002号〕実測図（1/60）
付図10　住1051号群〔1009A・B、1051A・B、1054A・B、1057・1159・1216号　建2015号〕実測図（1/60）
付図11　建1022号群〔住1215・1217、2003A・B号　建1022A・B、1023A～C、1030A・B号〕実測図（1/60）
付図12　以来尺１号墳実測図（1/60）

Ⅰ はじめに

1．調査の経過と組織

一般国道３号筑紫野バイパスは平成10年３月に全線開通した。この筑紫野バイパス建設は、福岡南バイパス（現国道３号：福岡市東区二又瀬～筑紫野市永岡）の後を受け、昭和48年度から事業化したもので、筑紫野市永岡から佐賀県基山町白坂までの総延長は4.3kmとなる。筑紫野バイパスの開通には単に交通網の整備にとどまっていない。この福岡市への交通アクセスが整備されることにより、筑紫野市周辺はもとより、小郡市や隣県の鳥栖市・基山町までも福岡都市圏のベットタウンとして、日進月歩の勢いで日々変化している。路線開通が及ぼした効果は日頃から目にするところである。

この筑紫野バイパスの建設に先立ち、建設省九州地方建設局福岡国道工事事務所から福岡県教育庁文化課あてに当該地の埋蔵文化財調査に関する依頼があり、文化課は14カ所の文化財包蔵推定地を昭和51年までに提示・回答した。そして、福岡国道工事事務所との協議の結果、供用開始を優先させる筑紫野市原田～佐賀県基山町白坂間（第７～14地点）の調査を先行させた。文化課は昭和56年度から59年度までの４カ年にわたって発掘調査を実施し、その成果はすでに報告している（『一般国道３号筑紫野バイパス関係埋蔵文化財調査報告第１集　合の原遺跡』福岡県教育委員会1986）。

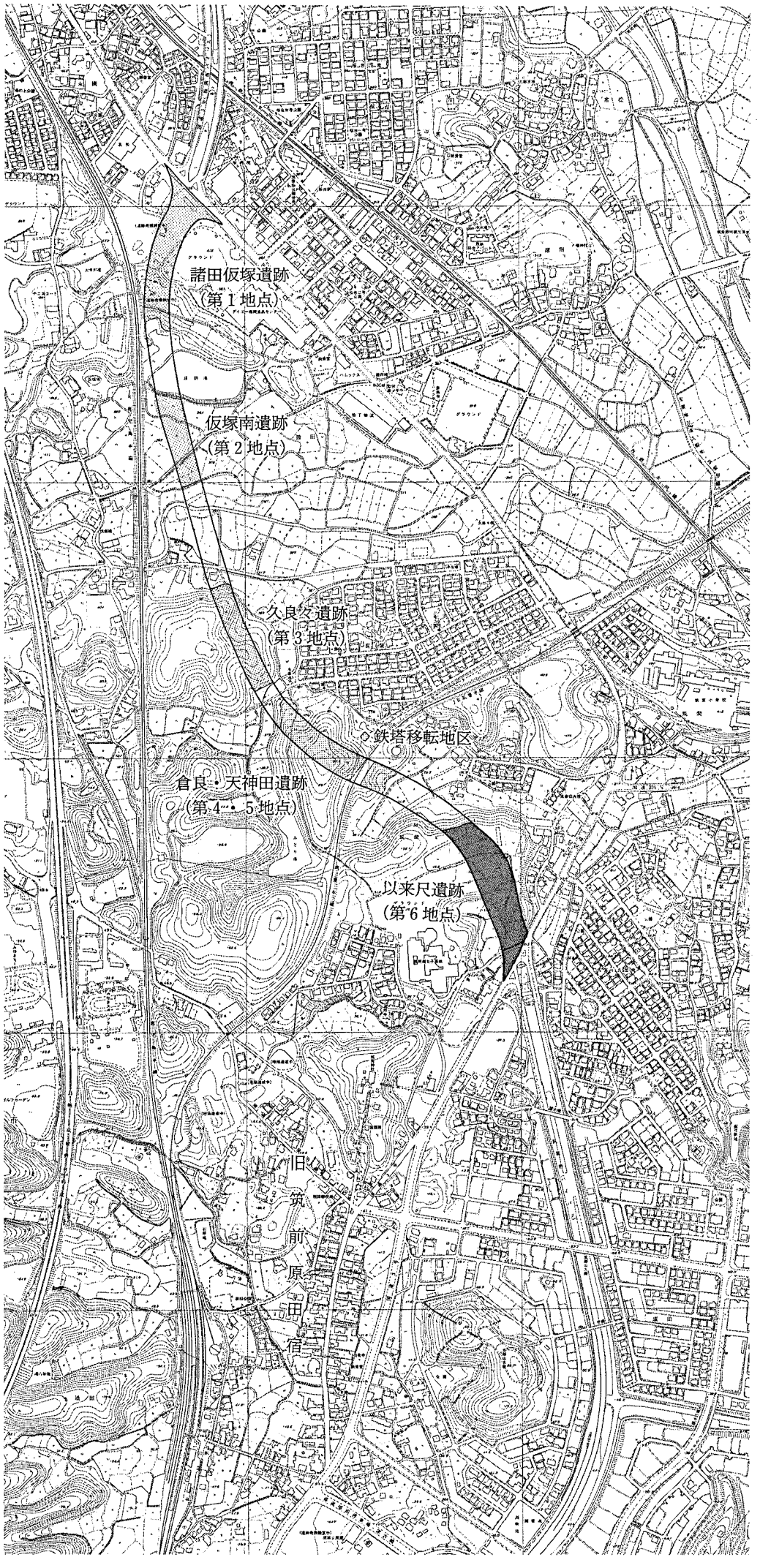
第１～６地点（筑紫野市永岡～筑紫）についての調査は平成２年度から開始し、６年度をもって終了した。ただし、第６地点については、農道付け替えにより平成９年度に補足調査を行っている。そして、今回の第６地点以来尺遺跡の報告をもって本事業は終了する。各調査の地点と期間は以下のとおりである。

第１地点	諸田仮塚遺跡	筑紫野市大字諸田字仮塚および大字永岡字原 平成２年８月～平成３年４月（平成10年３月報告）
第２地点	仮塚南遺跡	筑紫野市大字諸田字仮塚 平成３年４月～平成３年11月（平成８年３月報告）
第３地点	久良々遺跡	筑紫野市大字筑紫字久良々 平成５年６月～平成５年10月（平成７年３月報告）
第４・５地点	倉良遺跡	筑紫野市大字筑紫字倉良・天神田 平成４年２月～平成４年５月（平成７年３月報告）
鉄塔移転地区	天神田遺跡	筑紫野市大字筑紫字倉良・天神田 平成２年５月～平成２年６月（平成７年３月報告）
第６地点	以来尺遺跡	筑紫野市大字筑紫字以来尺 平成４年５月～平成７年１月・平成９年10月（平成９・10・11年報告）

平成４～６年度の調査関係者ならびに、平成７・８年度の整理関係者については、すでに以来尺遺跡Ⅰ・Ⅱにおいて掲載しているので、ここでは、２次調査を行った平成９年度の調査関係者ならびに平成10年度の整理関係者について掲載する。

建設省九州地方建設局福岡国道工事事務所

	平成９年度	平成10年度
事務所長	藤本　聡	藤本　聡
副所長	兼式征二郎	木塚　成実
	別府　五男	兼式征二郎
建設監督官	有家　信義	有家　信義
	柴田　智	逆瀬川万久
調査第二課長	田中　義高	赤星　文生
調査係長	沓掛　孝	沓掛　孝
建設技官	島田　隆一	大塚　利香
工務課長	河野　良行	河野　良行
工務第一係長	梶原　俊之	梶原　俊之
工務第三係長	斎藤　敬嗣	城　康雄
福岡県教育委員会		
総括		
教育長	光安　常喜	光安　常喜
教育次長	松枝　功	藤吉純一郎
指導第二部長	竹若　幸二	
総務部長		富永　勲
文化課長	石松　好雄	
文化財保護課長		石松　好雄
文化財保護室長兼参事	柳田　康雄	
参事		柳田　康雄
課長補佐	城戸　秀明	角　伸幸（兼務）
課長技術補佐	井上　裕弘	井上　裕弘
庶務		
管理係長	黒田　一治	角　伸幸
事務主査	久保　正志	鶴我　哲夫
主任主事	鶴我　哲夫	田中　利幸
調査		
総括	橋口　達也	
調査第一係長		橋口　達也
調査第二係長		佐々木隆彦
主任技師	秦　憲二	秦　憲二
技師	森井　啓次	森井　啓次
北九州教育事務所		
参事補佐	馬田　弘稔	
主任技師		水ノ江和同
筑豊教育事務所		
主任技師	水ノ江和同	
九州歴史資料館		
主任技師	齋部　麻矢	齋部　麻矢
		杉原　敏之
技師	杉原　敏之	
甘木歴史資料館		
副館長		馬田　弘稔



第1図　国道3号筑紫野バイパス用地内の各調査地点（1/10,000）

2．位置と環境

古墳時代の周辺遺跡

ここでは宝満川西岸地域を対象として、古墳時代の遺跡の様相を述べるが、本地域の古墳時代の遺跡は、前期初頭から中期前半（５ｃ前半）と後半（５ｃ後半）以降との間で大きな画期が見られることから、大きく２時期に分けて説明する。

古墳時代前期から中期前半

この時期の古墳は、二日市地峡の西側の低丘陵に集中している。天拝山麓では三角縁神獣鏡を１面出土した原口古墳がある。原口古墳は全長80mの前方部が短小で撥形に開く前方後円墳で、古式の大型古墳である。三国丘陵では、津古生掛古墳(全長33ｍ)・津古１号墳(全長42ｍ)・津古２号墳（全長29ｍ）・三国ノ鼻１号墳（全長66ｍ）の前方後円墳が存在している。これらの前方後円墳は首長墓系列と考えられ、三国丘陵を本拠とする有力勢力が存在していたことを窺わせる。

こうした前方後円墳の周辺には、小型の古墳が群集している。天拝山麓では原口古墳の北2.2㎞に、方墳を主体とする古剣塚古墳群がある。三国丘陵では津古古墳群の所在する谷の対岸に筑紫野市隈・西小田７・10地点で周溝墓が所在している。600ｍ北西に方墳である津古片曽葉１号墳や、横隈山７地点では周溝墓が確認されている。

また、前方後円墳の所在していない地区でも、小規模な古墳群が存在しており、阿志岐地区では、銅鏃29本をはじめ、鉄剣、鉄鏃、鉄斧、鉄鋸など豊富な鉄製品の出土した阿志岐Ｂ群26号墳に代表される円・方墳群が群集している。高雄地区では、菖蒲浦古墳群や下高雄古墳が所在し、特に菖蒲浦１号墳からは方格規矩鏡と漆塗りの櫛、滑石製臼玉のほか多くの副葬品が出土した。７基の主体部を持ち、墳裾にも主体部があることが注目される。二日市地区の峠山遺跡では４基の周溝墓が確認されている。

これらの墓を造営した集落は、あまり確認されていない。後期古墳のように古墳と造営主体と思われる集落が隣接していないようだ。確認されているのは、筑紫野市大島遺跡・御笠地区遺跡・小郡市三沢西島遺跡・三沢栗原遺跡などで微高地上に多く見られる。三沢西島遺跡は、住居から多くの滑石製玉類の未製品とその加工具である砥石が出土したことからは滑石工人の集落と考えられ、隣接する伊勢山遺跡にも滑石工人の集落があることから、ここに一つの小地域が存在していたと考えられる。花聳１号墳は墳丘規模は不明で、主体部は竪穴式石室で三角板革綴短甲１領の出土が注目される。花聳１号墳は、これらの工人を統轄する首長であったかもしれない。

第 2 図　以来尺遺跡周辺の遺跡分布図―古墳時代前期～中期前半― (1/50,000)

古墳時代中期後半から後期

本地域では、５ｃの前半代から大型古墳の造立が衰退傾向にあり、前方後円墳として知られているのは、小郡市横隈山古墳と筑紫野市剣塚１号墳である。三国丘陵に所在する横隈山古墳は全長35ｍの帆立貝式の前方後円墳で、発掘調査が実施されていないため時期は明らかになっていないが、墳丘から採取された円筒埴輪・家形埴輪から５ｃ後半～６ｃ初頭と推定されている。津古丘陵では、これ以降大型古墳は造立されていない。剣塚１号墳は本地域最後の大型前方後円墳であり、天拝山麓に所在する推定全長42ｍの前方後円墳で、６ｃ前葉に属する。その墳丘下には前期の方墳群があり、整形のため下位の墳丘をカットしている。

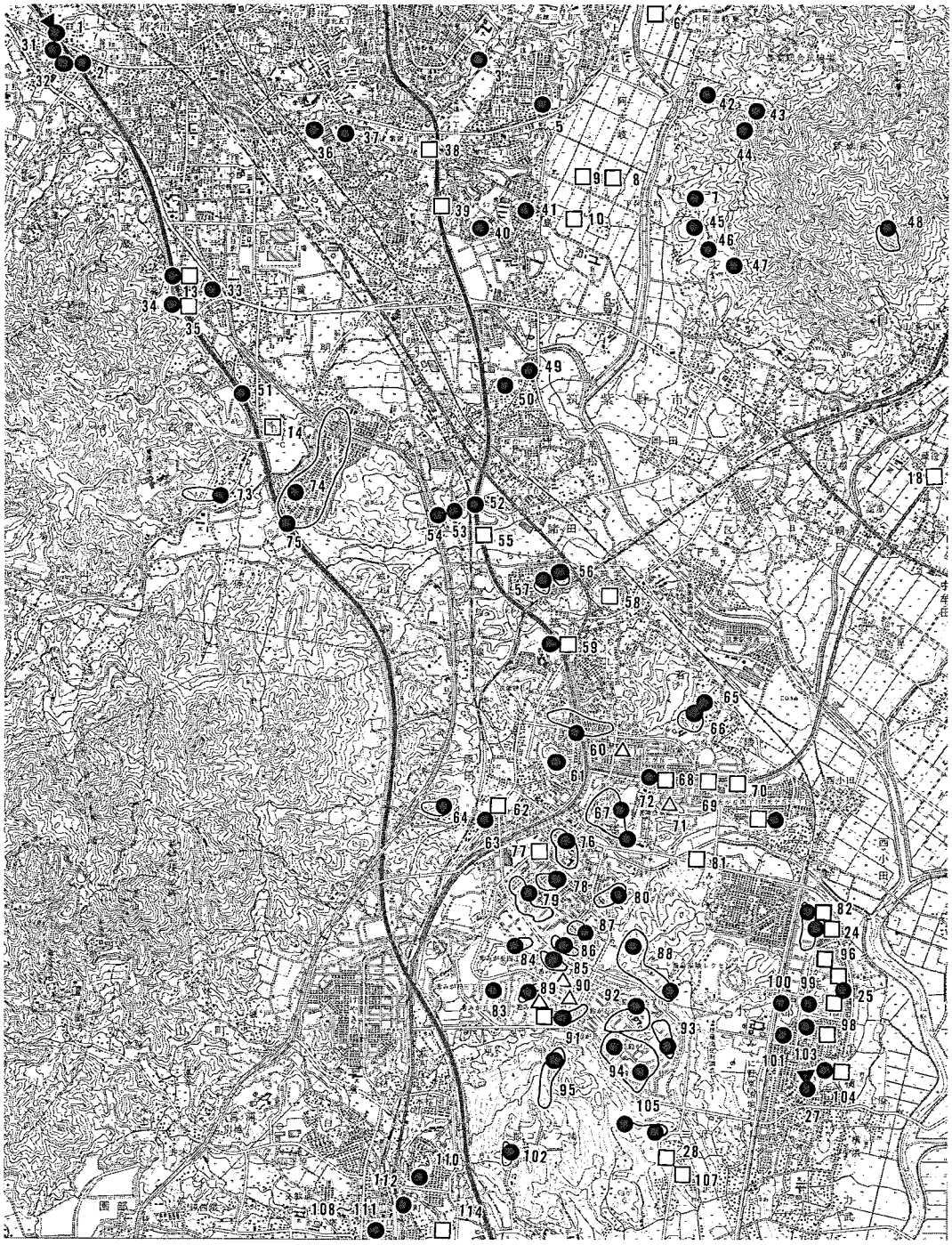
前方後円墳の造立が衰退した後は、筑紫野市の五郎山古墳や大振山古墳などの大型円墳が首長墳として造られている。五郎山古墳は６ｃ中葉の径25ｍの装飾古墳で、騎馬・鳥や船・家などのモチーフが描かれている。大振山古墳は、「巡り尾Ｉ遺跡23号墳」と報告された、径35ｍ、二段築成の円墳で、墳丘の高さは６ｍを測り、６ｃ末～７ｃ初頭に位置づけられる。この２つの大型円墳は、近接していることから同一首長系列と考えられる。

首長墓以外の小型古墳は、いくつかの小地域に分れて群集しており、近年の調査でその造営主体と思われる集落の存在も明らかになってきている。

鷺田川西岸には鷺田山古墳群・八隈裏山古墳・八隈古墳群が位置しており、隣接した集落が八隈遺跡と畑添遺跡で確認されている。山口川の扇状地西岸には、古賀古墳群・扇祀古墳群から見下ろす台地上に貝元遺跡が所在している。久良々川北岸には円筒・形象埴輪を有する諸田仮塚遺跡や、仮塚古墳群に対して仮塚南遺跡がある。高雄川沿いにはカケ塚古墳やイカリノ上古墳に対して、野黒坂遺跡や大曲り遺跡などがある。阿志岐地区では、大型古墳こそ造られないが、小型古墳の造営は前期から連綿と続いており、これに対応する集落も、御笠遺跡群に見ることができる。

弥生時代中期に有力な集団が所在していた、宝珠川中流域北岸の隈地区では、５ｃ頃から再度集落が営まれている。丘陵上には隈・平原古墳群が所在し、谷沿いには、竪穴住居から子持勾玉や白玉の出土した集落の橋詰遺跡が位置している。平原古墳群では帆立貝式古墳(径40ｍ)を頂点とし、隈・西小田６地点は径21ｍの円墳を中心とした群集墳が形成されている。さらに谷を遡ると、初期須恵器の窯跡が作られた隈・西小田遺跡８・10地点が所在しており、10地点ではその工人を統括する首長の墓と思われる仿製鏡をもつ方墳も確認された。

宝珠川上流域北岸には、前述の６ｃ代の五郎山古墳と大振山古墳を頂点とする、巡り尾古墳群が位置している。対岸にも群集墳があるものの、丘陵尾根部に点在している程度の小規模なものである。また、合ノ原遺跡では横穴墓も見ることができる。これに対応する集落には、町口遺跡や不別当遺跡などの小集落を見るのみで、大型円墳の造立集団の所在は不明確である。宝珠川下流域北岸でも、津古内畑遺跡で６ｃ代の集落と群集墳が確認されているが、やはり小



第 3 図　以来尺遺跡周辺の遺跡分布図―古墳時代中期後半～後期―（1/50,000）

規模なものである。

三国丘陵では、宝満川に面した丘陵については、台地の先端部分に小規模ながら多くの集落が営まれ、その後背丘陵に古墳が築かれていることが多い。集落は丘陵や台地の緩斜面を造成した平坦面に立地していることが多く、居住域が規制されていた可能性がある。同様の居住規制は以来尺遺跡にも見られる。また、この地域の群集墳の盟主的な古墳は、径20m程度の円墳で、以来尺１号墳と同規模である。

これに対して三沢地区や苅又地区のような内陸部になると、谷の入口付近に三沢上棚田遺跡など集落があり、谷を遡って墓域が造られている。こうした内陸地域では、生活基盤を農業以外に置いている可能性がある。例えば、上田町遺跡は谷の最もおくまった部分に位置する集落で、その周囲に苅又窯跡群が確認されていることから、須恵器工人の集落であった可能性が高い。また、６ｃ中頃には三沢古墳群の古墳の周囲からは馬を埋葬した墓が多く見つかっている。これは、古墳の被葬者の埋葬に際して、殉死させたものと考えられている。このことから、馬の飼育を生業とする集団が存在していた可能性がある。さらに、内陸地域には横穴墓が集中しており、墳丘を持つ墓を造れなかった階層が存在していたことを示している。

７ｃに入ると、公的施設が建設されるため、地域の中心地をより明白に見ることができる。６ｃに前方後円墳を築いた剣塚古墳の周辺には、杉塚廃寺・塔ノ原廃寺などの古代寺院が所在し、その後も有力豪族の拠点であったことが窺える。阿志岐地区でも蘆城駅家の比定地になっており、御笠地区遺跡では大型建物の存在が確認されている。三国丘陵では７ｃ以降、急激に集落が衰退し、地域の中心は大板井遺跡や上岩田遺跡などの所在する南の微高地に移っている。

（秦）

1　古剣塚古墳群
2　唐人塚古墳群
3　菖蒲浦古墳群
4　下高雄古墳
5　吉ノ浦遺跡
6　御笠遺跡Ｂ地区
7　阿志岐古墳群
8　御笠地区遺跡Ｄ地区
9　御笠地区遺跡Ｅ地区
10　御笠地区遺跡Ｇ地区
11　峠山遺跡
12　原口古墳
13　八隈遺跡
14　貝元遺跡
15　日焼遺跡
16　大島遺跡
17　坂井田遺跡
18　八ケ坪遺跡
19　隈・西小田遺跡10地点
20　隈・西小田７地点
21　隈・西小田遺跡６地点
22　隈・平原古墳群
23　津古古墳群
24　津古生掛遺跡
25　三国ノ鼻１号墳
26　津古片曽葉古墳群
27　横隈山７地点
28　三沢栗原遺跡
29　三沢西島遺跡
30　花鋒１・２号墳
31　井ノ尻古墳群
32　原ノ前古墳群
33　鷺田山遺跡
34　八隈裏山古墳群
35　畑添遺跡
36　五穀神社古墳
37　カケ塚
38　大曲川遺跡
39　野黒坂遺跡
40　イカリノ上古墳
41　上ノ浦遺跡
42　尺ケ浦古墳群
43　大谷古墳群
44　星隈古墳群
45　脇道古墳群
46　老松神社古墳群
47　天山古墳群
48　殿様塚古墳群
49　鳥井元古墳
50　銭塚
51　扇祀古墳群
52　諸田仮塚遺跡
53　假塚古墳群
54　大牟田古墳群
55　仮塚南遺跡
56　筑紫台団地遺跡（名越古墳群）遺跡
57　兄弟塚古墳群
58　矢倉遺跡
59　以来尺遺跡
60　台ノ原遺跡
61　五郎山古墳
62　町口遺跡
63　前小原遺跡
64　上原田古墳群
65　隈古墳
66　木那野古墳群
67　大振山（巡り尾）古墳群
68　平原遺跡
69　橋詰遺跡
70　天神遺跡
71　隈・西小田遺跡８地点
72　平原古墳群
73　古賀古墳群
74　立明寺古墳群
75　萩原古墳
76　不別当古墳群
77　不別当遺跡
78　真竹遺跡
79　土浦古墳群
80　須川遺跡
81　津古・東宮原遺跡
82　津古土取遺跡
83　北山遺跡Ｅ地点
84　勝負坂遺跡Ｉ地点
85　永浦遺跡Ｃ地点
86　永浦・勝負坂遺跡Ａ地点
87　勝負坂遺跡Ａ地点
88　ハサコの宮遺跡
89　勝負坂遺跡Ｊ地点
90　三枝遺跡Ａ地点
91　上田町遺跡
92　鈴隈遺跡Ｉ区
93　一ノ口遺跡
94　三沢松尾口遺跡
95　立石遺跡
96　津古中ゾリ遺跡
97　三国ノ鼻遺跡
98　横隈北田遺跡
99　横隈井ノ浦遺跡
100　三沢京江ケ浦遺跡
101　三沢東古賀遺跡
102　黒岩神社古墳
103　横隈鍋倉遺跡
104　横隈狐塚遺跡
105　三沢古墳群
106　三沢上棚田遺跡
107　三沢中棚田遺跡
108　大行神古墳
109　千塔山１・２号墳
110　大塚１・２号墳
111　八幡１・２号墳
112　上野古墳
113　北の上遺跡
114　伊勢山遺跡

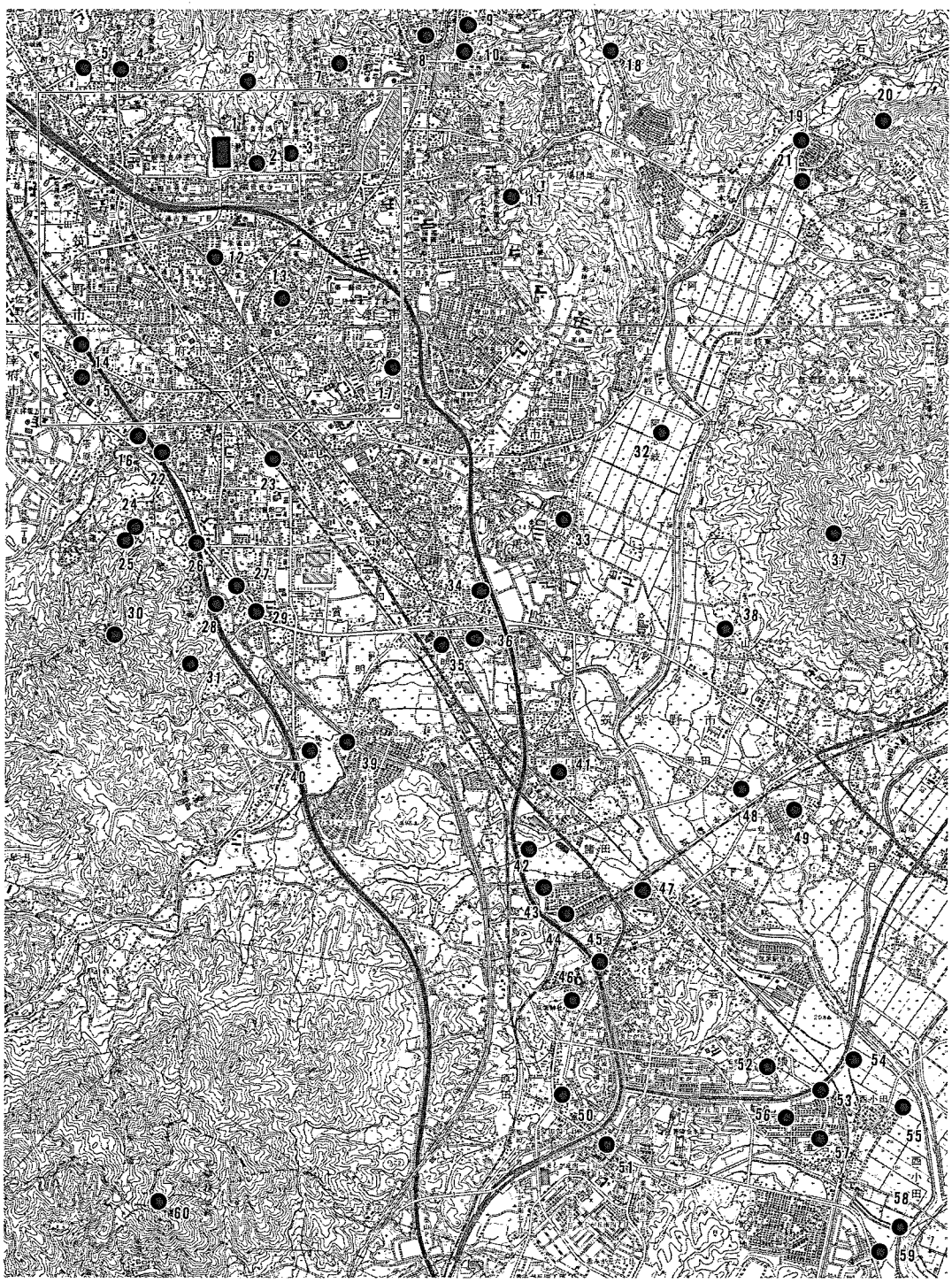
□集落　●古墳　△窯跡

歴史時代の周辺遺跡

奈良時代に入ると、筑紫に置かれた「遠の朝廷」大宰府が九州を統轄するようになる。特に以来尺遺跡の位置する二日市地峡は、大宰府から南下する唯一のルートであり、肥前肥後・豊前豊後へ抜ける官道として、各地域からの往来の激しい場所であった。以来尺遺跡の東約1㎞にある岡田遺跡では近年大型の道路状遺構が見つかり、これを裏付けている。この機能は中世を経て近世・近代まで続き、江戸時代には筑前六宿の一つである原田宿が置かれた。この宿は長崎街道・日田街道・薩摩街道・太宰府天満宮参詣道が合流しており、「筑前国続風土記」に「肥前・肥後・筑前三つの国の境あり」と書かれたように、国境に宿駅があった。また以来尺遺跡の約400ｍ西南には、『延喜式神名帳』に記載のある式内社「筑紫神社」が控える。延喜の制では名神大社に列せられ、従四位上の位にあった。もともとは城山の山手にあったものを、何時の時代か山麓に移したとの記録もある。『筑紫』の名の起源という伝説もある神社である。中世には武藤少貳氏の傍流である筑紫氏が杜司になり勢力を誇っていた。筑紫氏は室町時代筑前南部・肥後東部一帯に勢力のあった武家である。その由来は建久年間に大宰府の少貳氏の養子が初めて筑紫の姓を名乗ったとある。その後大内氏にくだり、秋月氏などと行動を共にして戦国の代をわたるが、天正十四（1586）年に、当時の居住地であった五箇山城が島津氏の攻撃によって落城するまで、この勢力は続いた。以来尺遺跡の北東約4.5㎞にある「矢倉遺跡」が当初の筑紫氏の居住地に比定されているが、本体は現在の筑紫小学校の下にあると思われる。当時の遺跡としては他に、天拝山山頂には天判山城が、その山麓には飯盛城がある。　　（齋部）

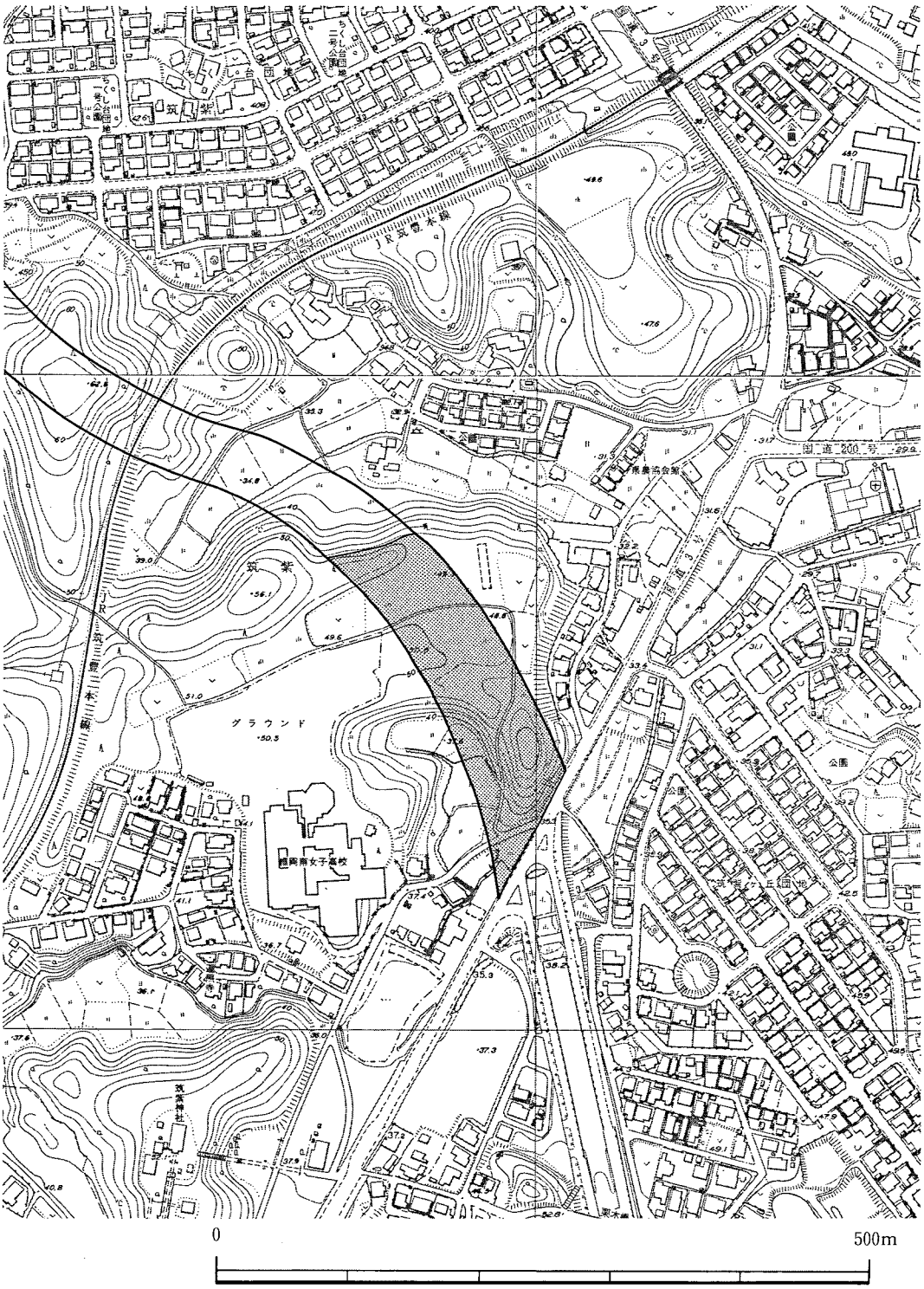
表１　筑紫氏関係年表

年号	西暦	筑紫氏関係	筑紫氏宗領
延元元年	1336年		
建武四年	1338年	武藤氏に少弐頼尚と南朝征討への参戦命令	
		武藤経重　筑紫に移住し、筑紫姓を名乗る	武藤経重
應永七年	1400年	筑紫次郎宛の少弐貞頼の文書　少貳氏から土地をあてがわれる	筑紫次郎
應永廿七年	1420年	武藤白幡宛の少弐満貞の文書	筑紫尚門（頼勝）
長禄二年		白幡弥次郎頼勝宛の少弐教頼の文書	〃
嘉吉元年	1441年	筑紫下野入道宛少弐教頼の本領安堵の文書　筑紫村地頭職	〃
		肥前基肄・養父郡、夜須半郡郡を領有し、勝尾城を居城とする。	〃
文安二年		白幡弥次郎頼勝宛の少弐教頼の文書	〃
	1477年	筑紫大隅守と呼ばれる	筑紫秀門
文明十一年	1479年	筑紫孫次郎満門宛少弐政資の本領安堵の文書　筑紫氏所領拡大	筑紫満門
	1484年	大内政弘筑前侵入　大内方につく	〃
		綾部城攻め　少弐方につく	〃
明応六年	1497年	大内義興太宰府侵攻　大内氏方につく	〃
	1521年	満門謀殺	〃
	1551年		筑紫正門
永禄二年	1559年	筑紫惟門の兵、博多侵入	筑紫惟門
	1566年	筑紫広門、毛利に通じ大友に反す	筑紫広門
	1569年	毛利方か	〃
	1570年	毛利方か	〃
	1578年	筑紫広門、秋月と宝満山城を攻める	〃
	1579年	筑紫広門、秋月とともに高橋と戦う	〃
	1581年	筑紫広門、秋月と高橋・立花の大友軍と観音寺口で戦う	〃
	1585年	筑紫広門、秋月と岩屋城を攻める	〃
天正十四年	1586年	筑紫広門、高橋と講和	〃
〃	〃	勝尾城陥落し、筑紫広門、島津に降る	〃



1 大宰府跡
2 学校院跡
3 観世音寺
4 筑前国分寺
5 筑前国分寺尼寺
6 金光寺
7 崇福寺
8 浦の城
9 安楽寺経塚
10 安楽寺
11 高尾山城
12 榎寺
13 般若寺
14 剣塚遺跡
15 杉塚廃寺
16 塔原廃寺
17 米囓城
18 原遺跡
19 たか取城
20 竜ケ城
21 御笠地区A遺跡
22 桶田山遺跡
23 堀池遺跡
24 武蔵寺
25 武蔵寺経塚群
26 道場山遺跡
27 原口遺跡
28 八隈遺跡
29 鷺田山土塁
30 天判山城
31 飯盛城
32 御笠地区D遺跡
33 上の浦2号墳
34 ホリ遺跡
35 俗明院跡
36 大坪八反畠遺跡
37 天ケ城
38 柴田城
39 鎧田遺跡
40 貝元遺跡
41 常松遺跡
42 天神田遺跡
43 倉良遺跡
44 久良々遺跡
45 以来尺遺跡
46 筑紫神社
47 矢倉遺跡
48 岡田遺跡
49 下ノ原遺跡
50 筑前原田宿
51 西小田A遺跡
52 不別当遺跡
53 橋詰遺跡
54 坂本遺跡
55 西小田B遺跡
56 空前遺跡
57 津古内畑遺跡
58 津古脇田遺跡
59 津古中遺跡
60 基肄城跡

第4図　以来尺遺跡周辺の遺跡分布図―歴史時代―（1/50,000）



第5図　以来尺遺跡調査地点（1/5,000）

II　発掘調査の記録

1．調査の概要

以来尺遺跡の発掘調査は、平成４（1992）年５月６日から平成７（1995）年１月20日にかけて実施された。途中４ヵ月、第３地点の久良々遺跡の調査に移行したため、実際の調査期間は２年４ヵ月である。また平成９年10月、バイパス建設に伴う農道付け替えにより、調査区東側について緊急調査をおこなった。これを以来尺遺跡２次調査と呼ぶ。これら県教育委員会の調査とは別に西側隣接地を学校施設の増改築により、筑紫野市教育委員会が調査を実施しており、すでに報告されている（『以来尺遺跡II』筑紫野市文化財調査報告書第39集　筑紫野市教育委員会1994）。よって、この以来尺遺跡が所在する丘陵では、これまでに３箇所の調査が行われている。

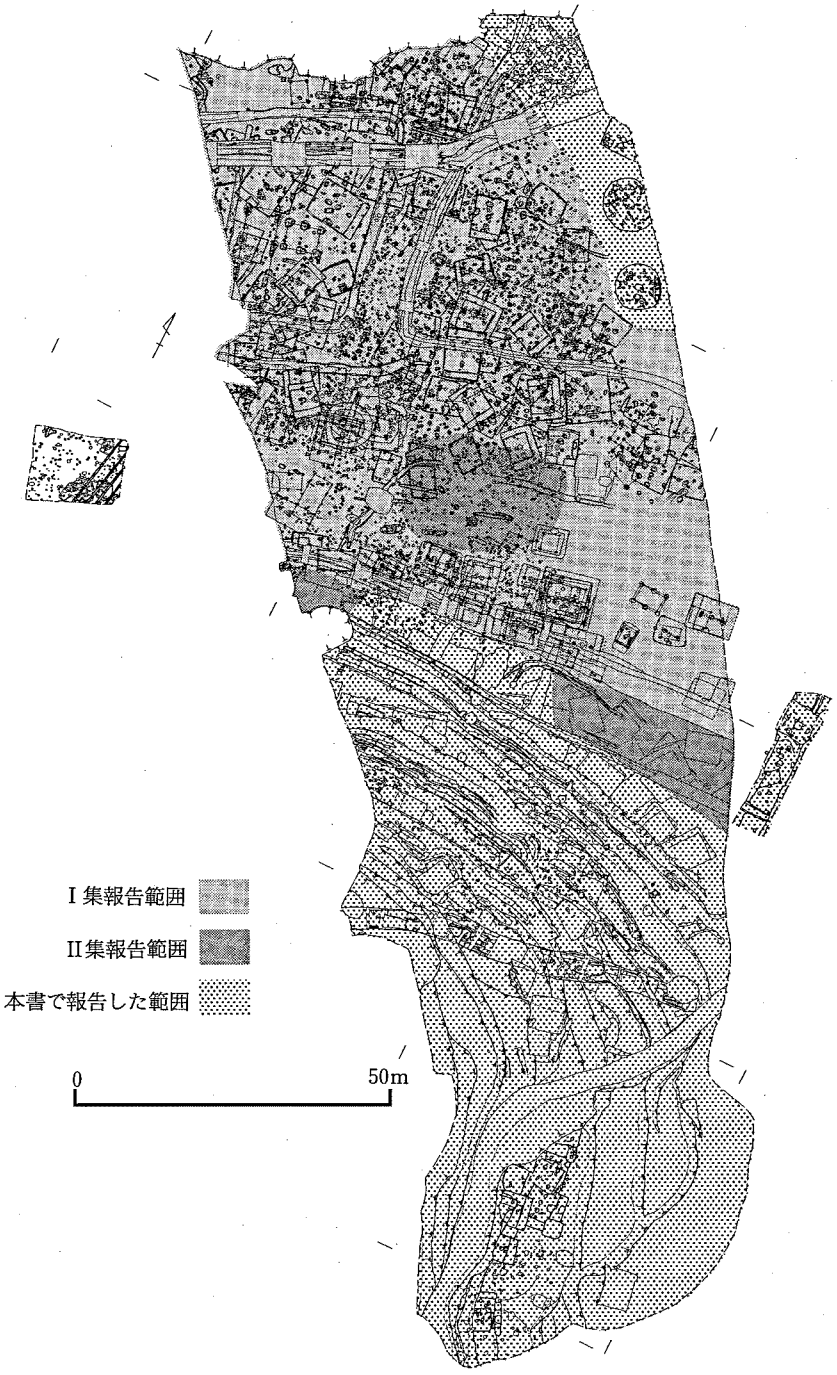
このうち、福岡県教育委員会では、標高46～48ｍの丘陵の平坦部から斜面部にかけての場所を調査した。調査面積は２次調査を含めて12,360㎡に及ぶ。この調査の経過については、すでに報告した『以来尺遺跡Ｉ』に詳しいので、そちらを参照していただきたい。

本遺跡は旧石器時代から近世に及ぶ複合遺跡であるが、中心となるのは弥生時代後期の集落であり、ほかに古墳時代後期の集落と墳墓、中世の山城や集落などの遺構・遺物がある。これまで、２ヵ年にわたって本遺跡の報告を行ってきた。本年度は、弥生時代の遺構と遺物（平坦地区、斜面地区）のほか、古墳時代以降の遺構と遺物について報告する。

調査においては、随時協議を行い、発掘作業員の手配や関係機関との調整に関してご協力・ご配慮をいただいた筑紫野市教育委員会をはじめ、調査終盤において、作業員の手配でご尽力いただいた那珂川町教育委員会の方々に心よりお礼申し上げます。また、猛暑の夏や寒さの厳しい冬においても、かわらず作業に従事し、常に調査に協力していただいた作業員の方々にもあわせてお礼申し上げます。

調査の経過

平成４年５月６日	調査開始　調査員：水ノ江
平成４年７月21日	調査員：秦合流
平成５年４月１日	調査員：水ノ江と馬田交代
平成５年４月30日	気球写真撮影
平成５年11月４日	調査員：秦と齋部交代
平成６年８月24日	調査員：齋部と杉原交代
平成６年12月12日	気球写真撮影
平成７年１月６日	報道機関への発表
平成７年１月８日	現地説明会（400人参加）
平成７年１月20日	調査終了　調査員：馬田・杉原
平成９年10月29日	農道付け替え部分調査開始　調査員：森井
平成９年11月18日	農道付け替え部分調査終了　調査員：森井



第 6 図　以来尺遺跡遺構配置略図（1/1,200）

2．弥生時代の遺構と遺物１　―平坦地区の調査３―

(1)　竪穴住居跡

1004号住居群（図版54、付図９、表２）

住1004号群（1004Ａ・Ｂ）と住1056号群（1056・1058）、住2002号群（2002）、住1059号群（1006、1008Ａ・Ｂ、1055、1059Ａ・Ｂ、1163）、住1060号群（1060、1064Ａ・Ｂ）、住1050号群（1005、1050Ａ・Ｂ）、以来尺１号墳、溝1002号群（1002・1005・1006）との重複関係

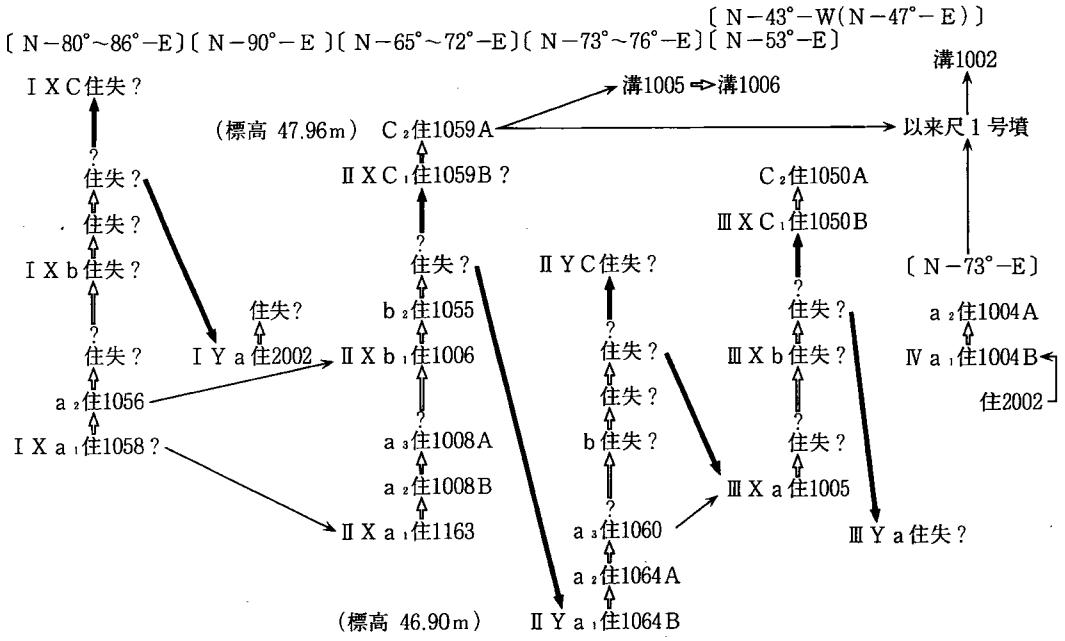
上記の住居群18軒・古墳１基・溝３条の計22遺構群の重複関係を、表２に示す。

なお、表２では継続した建て替え・掘り替えが確認できた新・旧関係を旧⇨新、この新・旧関係は確認できないが遺構間に切り合いが認められる新・古関係を古→新で表記する。

また、上記の新・旧や新・古関係から、意図的（規制的・継起的）に隣接させた（させられた）と指摘できる前・後関係を前➡後、後世の削平に因り遺存状態が悪いため切り合い関係は不明であるが新・旧や新・古あるいは前・後の関係類似例を、それぞれ旧？⇨新や古？→新あるいは前？➡後で示す。

また、便宜上、住居群をⅠ～Ⅳ群とＸ・Ｙ列とａ～ｃ類に分け、個別住居の表記については、

表２　住1004号群周辺の重複関係把握表



a_1住1163号・b_1住1006号などを、文意で明かな場合は1163号・1006号、あるいは単にa_1・b_1dなどと略記する。

住居の主軸方向は、1050号A・B例だけが〔北西－南東〕主軸N－43°－WのN－W計測で、その他はすべて〔北東－南西〕か〔東－西〕主軸のN－E計測となるため、1050号A・B例についてはその主軸と直交する方向N－47°－Eを併記する。

I群X列

①a_1住1058号床面はa_2住1056号張り床下で確認し、a_2北壁方形区画H21はa_1同H21を北に拡幅して配すことから、a_1⇨a_2へと掘り替えたもので、〔I群X列a類(a_1住1058号⇨a_2住1056号)〕。

②なお、a_2北壁は後述するII群X列B類(b_1住1006⇨b_2住1055号)のb_1床面に切られることから、〔I群X列a類→II群X列a類〕。

I群Y列

③a類住2002号は後述するIV群a類(a_1住1004号B⇨a_2住1004号A)に切られることから、〔I群Y列a類→IV群a類〕。

④なお、〔I群X列a類住2002号はその住居規模から、外の17軒の住居群いずれとも重複関係にあり、同時併存はしない〕。

II群X列

⑤a_1住1163号床面はa_2住1008号B張り床下で、a_2床面はa_3住1008号A張り床下でそれぞれ確認し、a_2主柱穴P11もa_3同P11に切られることから、a_1⇨a_2⇨a_3へと掘り替え・建て替えたもので、〔II群X列a類(a_1住1163号⇨a_2住1008号B⇨a_3住1008号A)〕。

⑥b_1住1006号床面はb_2住1055号張り床下で確認したことから、b_1⇨b_2へと掘り替えたもので、〔II群X列b類(b_1住1006号⇨b_2住1005号)〕。

⑦c_1住1059号B床面はc_2住1059号張り床下で確認し、c_1棟持柱穴P22もc_2同P22に切られることから、c_1⇨c_2へと建て替えたもので、〔II群X列c類(c_1住1059号B⇨c_2住1059号A)〕。

⑧なお、c類壁や棟持柱P22掘り形は(溝1005号⇨溝1006号)に切られることから、〔II群X列c類→(溝1005号⇨溝1006号)〕。

II群Y列

⑨a_1住1064号B床面はa_2住1064号A張り床下で、a_2床面はa_3住1060号張り床下でそれぞれ確認し、a_1棟持柱穴P22はa_2・a_3同P22掘り形に切られることから、a_1⇨a_2⇨a_3へと掘り替えたもので、〔II群Y列a類(a_1住1064号B⇨a_2住1064号A⇨a_3住1060号)〕。

⑩なお、a_3床面は後述するIII群X列a類住1005号床面に切られることから、〔II群Y列a類→III群X列a類〕。

III群X列

⑪a類住1005号北東壁隅高床・中央部床・北壁を後述するIV群a類(a_1住1004号B⇨a_2住

1004号A)に切られることから、〔Ⅲ群X列a類→Ⅳ群a類〕。

⑫c_1住1050号B床面ではc_2住1050号A張り床下で確認したことから、c_1⇨c_2へと建て替えたもので、〔Ⅲ群X列c類（c_1住1050号B⇨c_2住1050号A)〕。

Ⅳ群

⑬a_1住1004号Bカマド燃焼室床面はa_2住1004号A同張り床下で、a_1床面もa_2張り床下でそれぞれ確認し、a_1主柱穴P12・14もa_2同P11・14に切られることから、a_1⇨a_2へと建て替えたもので、〔Ⅳ群a類（a_1住1004号B⇨a_2住1004号A)〕。

⑭なお、a類カマド西袖・住居西半部は後述する以来尺1号墳に切られ、同古墳は中世溝1002号に切られることから、〔Ⅳ群a類→1号墳→溝1002号〕。

住居の群在（重複と移動）関係について（表2、各住居計測表参照）

住居の主軸方向と床面（張床面）標高

Ⓐ同群同列としたⅡXa_1住1163（46.39m、71°）とⅡXc_2住1059A（47.96m、65°）との比高差は1.57mと大きいが、方向差は6°と小さい。

Ⓑまた、住1059Aと同群別列のⅡYa_1住1064B（46.90m、74°）との比高差も1.06mと大きいが、方向差は9°と小さい。

Ⓒそして、Ⅱ群計10軒全体での方向差も65°～76°で11°と小さい範囲内で収まり、Ⅲ群計3軒での方向差も比高差が0.75mと大きいが47°～53°で6°と小さい範囲内で収まり、Ⅰ群計3軒での方向差も80°～90°で10°と小さい範囲内で収まる。

Ⓓしかし、Ⅰ群とⅡ群、Ⅱ群とⅢ群、Ⅲ群とⅠ群との最大方向差は、それぞれ25°、29°、43°といずれも大きい。

Ⓔ以上のⒶ～Ⓓの事項から、表2に示すように、同列内ではa類？⇨b類？⇨c類へと順次建て替え・掘り替えが行われ、b類最新住居からc類最古住居への移動と共に、別列a類最古住居へも居住を分けて移動した（させられた）ことが考えられる。

住居の規模と重複関係

ⒻⅡX列内ではa_1住1163（面積約19.2m²）がa_3住1008A、（同約35.8m²）の約½と最も小さく、ⅡY列内でもa_1住1064B（同約21.2m²）がa_3住1060（同約40.9m²）の約½と最も小さい。

Ⓖしかし、ⅡX列内のc_2住1059A（同約38.7m²）も上記ⅡYa_1住1164Bの約½と大きい。

Ⓗなお、上記c_1南東壁隅～a_1北西壁間距離は約4.80mを測り、重複しないことから、同時併存し得る。

Ⓘ以上Ⓕ～Ⓗの事項からも、既述Ⓔの事項は考えられよう。

住居の移動方向

ⒿⅠ～Ⅲ群いずれのX列住居群も、南⇉北（標高下位の丘陵傾斜面部⇉より標高上位の丘陵平坦面部）へと移動する。

Ⓚａ～ｃ類いずれの住居群も同類内での掘り替えに際しては、西⇨東（丘陵基部⇨より丘陵先端部）へと移動する。

Ⓛ以上Ⓙ・Ⓚの事項は、外敵からはより安全・生活空間からはより利便性を考慮した事由と考えられる。

Ⓜなお、Ⓙの名群いずれのＸ列全体の移動方向はⅢＸｃ類住1050Ａ・Ｂの主軸方向Ｎ－43°－Ｗにほぼ等しい。

Ⓝ加えて、ⅡＸa_3住1008Ａ北東壁隅とⅡＸc_2住1059Ａ北東壁隅との接線も上記43°にほぼ一致し、また、b_2住1055北東壁隅部もこの接線に接し、換言すれば、極めて整然とした直線的移動である。

Ⓞ以上Ⓙ～Ⓝの事項からも、既述Ⓔの事項は考えられ、群での新・古関係はⅠ？→Ⅱ？→Ⅲと把握できよう。

なお、1004Ａ・Ｂ号住居の個別については、古墳時代の項で説明する　（馬田）

1005号住居（図版55、付図９、表２・18）

重複関係は、住1004号で詳述。

柱配置は、主柱Ｐ11・14以外は不明であるが、中世溝1002号北側の北東壁隅部床面と同溝南側の南東壁隅部床面との比高差が23cmあることから、前者は壁隅高床・後者は一段低い中央部床の一部とし、高床幅を（東柱筋－東壁）間230cm×½＝115cmとして復原した。

上記の（東柱筋－東壁）間換算の算出値は28.8cm。　（馬田）

1006号住居（図版55、付図９、表２・19）

重複関係は、住1004号で詳述したが、柱配置は不明。　（馬田）

1008号住居（図版54、付図９、表２・20・21）

重複関係は、住1004号で詳述。　（馬田）

1008号Ａ住居

柱配置は、主柱Ｐ11が旧住ＢのＰ11よりも柱径18cm分だけ東に移動することから、計４主柱が東に移動した外接棟持柱Ｐ21・22配置で復原し、桁行Ａ換算の算出値は31.6cm。

1008号Ｂ住居

柱配置は、新住Ａ同様で復原し、桁行Ａ換算の算出値は新住Ａに一致。　（馬田）

遺物（図版40　第７図１）ボール形の椀で、内面に指圧痕が残る。外面は磨滅のため調整不明。（齋部）

1009号住居（図版３、付図10、表４・22・23）

重複関係は、住1051号で詳述。（馬田）

1009号Ａ住居

柱配置は、検出した北壁と北柱筋間に棟持柱Ｐ22掘り形を配し、Ｐ22を北柱筋に外接させることから、この検出北縁は後世の削平に因り、削減した北壁沿高床南縁と判断できる。

桁行Ａ・棟持柱間a_1換算の算出値平均は、30.2cm。（馬田）

1009号Ｂ住居

桁行Ａ換算の算出値は、30.3cm。（馬田）

遺物（第７図２）器台裾部で、小片であり磨滅も激しく調整は不明である。Ｐ―２からの出土。（齋部）

1010号竪穴住居跡

遺物（第７図３・４）３は高坏口縁部小片で復元不可。磨滅も激しく調整不明。４は底部小片で、磨滅のため調整不明。器壁は厚く熱を受けて赤色化する。（齋部）

1012号住居（図版２、付図８、表３・24・25）

重復関係は、住1017号で詳述。

1012号Ａ住居

柱配置は、主柱穴Ｐ12・14を欠失するが、梁行Ｂが315cmを測ることから、351＝30.0×11.7と計算し、梁行Ｂ＝351＝30.5×11.5＝350.8、桁行Ａ＝366＝30.5×12.0と算出したものである。

（ＨＰ211－ＨＰ212）間約90cmは、上記桁行Ａ約366cm×¼＝91.5cmと一致するに等しく、桁行Ａと棟持柱間$a_1$276cmとの差である棟持柱差－90cmと一致する。

桁行Ａ換算の算出値は、30.5cm。

1012号Ｂ住居

Ａ住同様に、梁行Ｂが337cmを測ることから、337＝30.1×11.2＝337.1と計算し、梁行Ｂ＝

337＝29.3×11.5＝336.95、桁行A＝352＝29.3×12.0＝351.6と算出した。

（南柱筋－ＨＰ212）間114cmは、上記桁行A約352cm×⅓＝117cmとほぼ等しく、（南柱筋－ＤＰ111）間114cmに一致する。

桁行A・（ＤＰ211－ＤＰ212）間換算の算出値平均は、29.3cm。　（馬田）

1013号住居（図版２、付図８、表３・26・27）

重複関係と住居の諸施設配置については、住1017号で詳述。

1013号Ａ住居

柱配置は、主柱穴Ｐ12･14を欠失するが、梁行Ｂが240cmを測ることから、240＝30.0×8.0と計算し、梁行Ｂ＝208＝30.0×8.0、桁行Ａ＝270＝30.0×9.0と算出した。

東壁の北寄り配置の方形区画H21内の（ＨＰ211－ＨＰ212）間87cmは、西壁の北寄り配置の（ＤＰ211－ＤＰ212）間約87cmと一致し、この87cm等間の柱穴様小ピットＨＰ211･212、ＤＰ211･212配置は、a_1住1162Ｂ⇨a_2住1162Ａ⇨a_3住1013Ｂ⇨a_4住1013Ａ⇨a_5住1017の各住居共に一致する。

桁行Ａ換算の算出値は、30.0cm。

1013号Ｂ住居

Ａ住同様に、梁行Ｂが238cmを測ることから、238＝30.1×7.9＝237.8と計算し、梁行Ｂ238＝29.8×8.0＝238.4、桁行Ａ＝268＝29.8×9.0＝268.2と算出した。

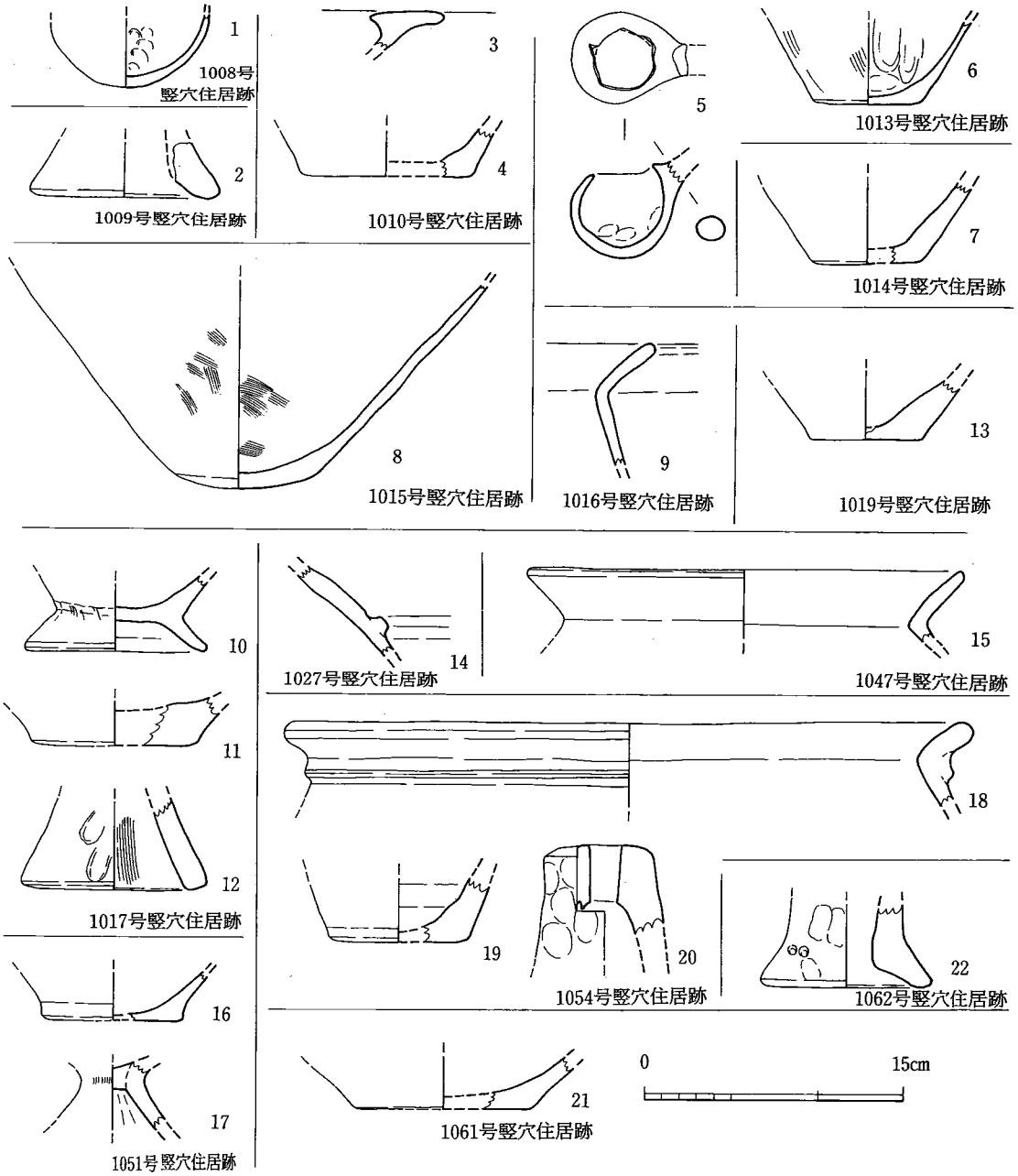
北柱筋を、前述の初出の旧a_1住1162ＢのＨＰ211に通らせ、また、新出の当a_3住1013ＢのＨ21南縁をもこの北柱筋下に配す。

同様に、当a_3住1013ＢのＨ21北縁もa_1住1162Ｂの北壁筋を通らせる。

上述のような初出a_1以降の意図的継承は、a_1～a_3での棟持柱Ｐ22部を、a_4・a_5で中央土坑Ｄ11に重複させる事象、換言すると、Ｄ11とＰ22共に**住居施設での標象として継承され**、a_1以降の新出住居の北への拡幅志向、Ｄ11、Ｈ21、ＤＰ211・212の住居中央から北寄り配置の事象をも思慮されたものとして、今後、検討すべきことと考えられる。

桁行Ａ換算の算出値は、29.8cm。　（馬田）

遺物（第７図５・６）５は瓢形の柄杓で、口縁部は薄く作るため僅かに欠ける。柄は全く残らない。剝離が激しく外面の調整は不明。一部黒斑がある。内面には指圧痕が残る。口径4.0cm、深さ4.4cm。６は底部片で、小型品となるか。底径6.5cm。外面底はナデ、胴部には一部粗いハケ目が残るが、磨滅が激しく明らかでない。内面はタテナデ調整を施し、指圧痕が残る。主柱穴からの出土。　（齋部）



第7図　1008・1009・1010・1013～1017・1019・1027・1047・1051・1054・1061・1062号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4）

1014号住居（図版４、付図７、表５・28）

重複関係は、住1417号で詳述。

柱配置は、棟持柱Ｐ21・22を北・南側の柱筋に外接させ、東壁中央土坑Ｄ21は中央北寄りに配すが、（ＤＰ211－ＤＰ212）間62cm×５＝310cm は桁行Ａ299cmとほぼ同じで、この299cm×½＝144.5cmは南・北壁沿高床幅と一致する。

桁行Ａ換算の算出値は、29.9cm。（馬田）

遺物（第７図７）甕の底部小片。内面はナデ調整で煤が付着する。外面は磨滅する。（齋部）

1015号住居（図版４、付図７、表５・29）

重複関係は、住1417号で詳述（表５参照）したが、a_1住1015⇨a_2住1061Ｂ⇨a_3住1061号Ａの順に掘り替える。

柱配置は、棟持柱Ｐ21・22を柱筋外に独立させ、中央土坑Ｄ11は中央西寄りに配すが、a_2・a_3住への掘り替えも、主に西壁の拡張で行われ、また、北壁の順次の拡張に伴いＤ11も順次北へと移動し、a_3で北壁中央西寄りの方形区画Ｈ21配置とこの動向は継承される。

桁行Ａ・棟持柱間a_1換算の算出値平均は、30.3cm。（馬田）

遺物（図版50、第７図８・第17図８）壺胴部下半。内外面ともハケメが残るが、磨滅が激しい。また粘板岩製の砥石が１点出土している（第17図８）。（齋部）

1016号住居（図版４、付図７、表５・30・31）

重複関係は、住1417号で詳述。

1016号Ａ住居

壁は、新出の住1417号に切られて西壁の一部が遺存するのみであるが、柱配置や西壁中央部の方形区画Ｈ21配置などはよく復原でき、Ｈ21幅116cmは、梁行Ｂ約232cm×½＝116cmに一致することから、（東柱筋－西壁）間も約116cm等間に復原されよう。

桁行Ａ換算の算出値は、28.9cm。

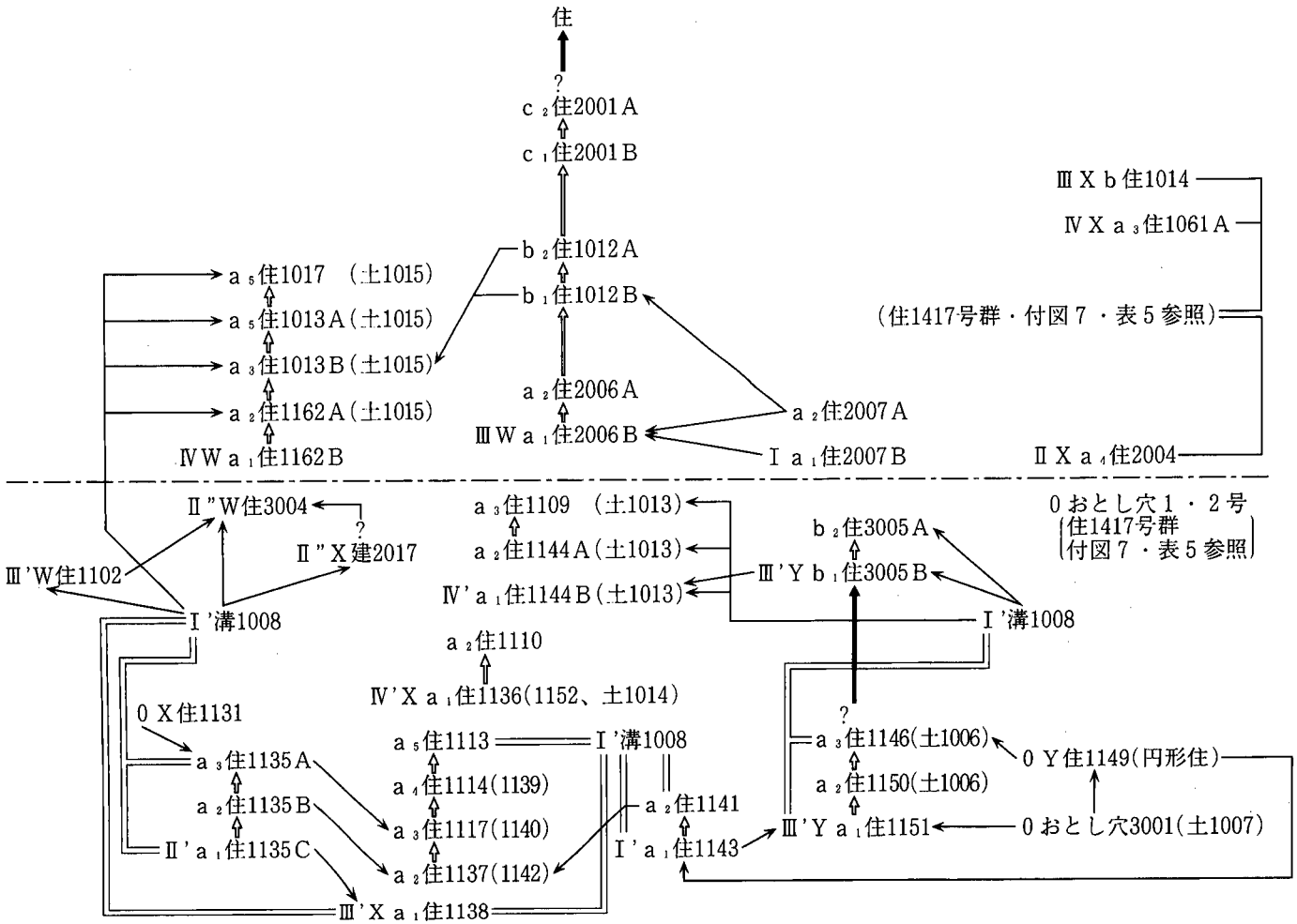
住1016号Ｂ住居

桁行Ａ260cmは、建て替え後の新住1016号Ａの棟持柱間$a_1$260cmと一致する。

桁行Ａ換算の算出値は、30.3cm。（馬田）

遺物（第７図９）甕小片で、口縁部付近はナデが残るが他は不明。（齋部）

表 3　住1017号群周辺の重複関係把握表



1017号住居（図版２、付図８、表３・28）

Ⅳ住1017号群（住1013Ａ・Ｂ、住1017、住1162Ａ・Ｂ）とⅠ住2007号群（住2007Ａ・Ｂ）、Ⅲ住1012号群（住1012Ａ・Ｂ、住2001Ａ・Ｂ、住2006Ａ・Ｂ）、Ｏ住1149号群（住1129・1131～1133・1149、おとし穴１・２・3001）、Ⅰ'住1141号群（住1141・1143、溝1008）、Ⅱ'住1135Ａ～Ｃ）、Ⅲ'3005号群（住1102・1113・1114・1117・1137・1138・1146・1150・1151、住3005Ａ・Ｂ）、Ⅳ'住1109号群（住1109・1110・1136、住1144Ａ・Ｂ）、Ⅱ"住3004号群（住3004、建2017）、住1139号群（住1139・1140・1142・1152）、溝１、土坑1006号群（土坑1006～1015）との重複関係。

上記の住居群44軒・建物１棟・溝２条・土坑10基・おとし穴３基の計60遺構群の重複関係把握例を表３に示す。（旧⇨新、古→新、前➡後、＝併存可の表記内容については、住1004号での説明を参照のこと）。

なお、土坑1006号群のなかで、土坑1007は、１・２号おとし穴と同様のおとし穴と判断し、新たに番号を付して3001号おとし穴とした。

上記のおとし穴3001号は、円形住居の住1149号に切られることから〔Ｏ群おとし穴3001→Ｏ群Ｙ列住1149〕であるが、おとし穴１・２号と他の円形住居とは重複しないことに加えて、丘陵斜面でほぼ同じ標高で直線上の位置（付図３参照）で出土していることから、同時併存〔Ｏ群Ｘ列住1129・1131～1133＝Ｏ群おとし穴１・２・3001〕と把握してもよい。

また、土坑1006はⅢ'群Ｙ列a_2住1150・a_3住1146の北壁中央土坑Ｄ21、土坑1013はⅣ'群Ｙ列a_1住1144Ｂ・a_2住1144Ａ・a_3住1109の主柱Ｐ13掘り形、土坑1014はⅣ'群Ｘ列a_1住1136・a_2住1110の北壁中央土坑Ｄ21と判断した。

スナップ１　以来尺遺跡現地説明会風景

上述以外の土坑はII”群X列の建2017の柱穴の掘り形と判断し、P1（土坑1015）、P2（土坑1012）、P3（土坑1014）、P4（土坑1010）、P6（土坑1011）、P21（土坑1009）、P22（土坑1008）とした。

住1139号群の4軒は、住1139号が住1114、住1140が住1117、住1142が住1137、住1152が住1136の各住居東半部に付していた番号で、それぞれ同一住居への重複番号と判断した。

なお、I～IV群よりも南側の下段に配された各遺構群については、I’溝1008の所在に留意してI’～IV’群として、O群・II”群と共に上段I～IV群とは識別した。

I群

①a_1住2007A・a_2住2007Bの各主柱P11は、IIIWa_1住2006Bの方形区画H21掘り込みに切られ、同P12もIIIWb_1住1012Bの主柱P13掘り形に切られることから、〔I群→III群W列a・b住〕。

II群

②II群は、「住1417号群周辺の重複関係」で把握したIIXa_1～a_4住2004A～D（住1417号で後述。表5参照）でよいと思われ、I群とは住居規模で重複関係となるが、遺存する壁・柱穴などとの直接の切り合いはない。

III群

③W列も、直接の切り合いは確認できないが住居規模で重複関係にあるX列b住1014（住1417号群として住1417号で後述）と同じIII群として把握した。

④a_2住2006Aの主柱14・棟持柱P22は、b_1住1012Bの中央土坑D11、西壁中央土坑D21にそれぞれ切られることから、〔a_2住→b_1住〕。

⑤また、a住の棟持柱P22掘り形・東壁は、既報告のc_1住2001B（『以来尺II』住1424号群として住1424号で詳述。同書付図5参照）の南壁に切られることから、〔b_1住→c_1住〕。

⑥上述④・⑤や、主軸方向、壁・住居施設配置の同一性と重複関係などから、III群W列は〔a_1⇨a_2⇨b_1⇨b_2⇨c_1⇨c_2〕の順に建て替えと掘り替えたものである。

IV群

⑧W列は、前述III群W列を介した東側のX列a_3住1061（住1417号群として住1417号で後述）と同じIV群として把握した。

⑨a_1住1162Bの北壁はa_2住1162Aの張り床下、a_2住の北壁はa_3住1013Bの張り床下、a_4住1013Aの西壁はa_5住1017Aの張り床下からそれぞれ検出し、a_3の主柱P11はa_4の同11から切られることや、a_1～a_5住居各施設の切り合い関係に加わえ、その施設配置の同一性・重複関係などから、IV群W列は〔a_1⇨a_2⇨a_3⇨a_4⇨a_5〕の順に建て替え・掘り替えたものである。

⑩また、a_3の東壁はIIIWb_2住1012Aの西壁を切ることから、〔III群W列→IV群W列〕。

O群

⑪円形住居のY住1149の壁は、I'Ya_1住1143の西壁に切られ、III'Ya_2住1150・a_3住1146の床面にも切られることなどから、〔O群Y列→I'群、O群Y列→III'群Y列〕。

⑫おとし穴3001の北壁は、III'Ya_1住1151・a_2住1150・a_3住1146の各床面に切られることと前述⑪から、〔O群おとし穴3001→O群Y列→II'群、O群おとし穴3001→O群Y列→III'群Y列〕。

⑬おとし穴3001の北壁は、O群Y列・III'群Ya_1～a_3列住居の実測上の事由から、その北壁・西壁の一部を試掘したのみで、完掘していない。

⑭なお、おとし穴3001（底面標高44.89m・長軸方向N—71°—W）は、住1417号群の住1417で後述するおとし穴1号（同44.41m、同N—37°—W）・2号（同44.95m、同N—19°—E）とは、ほぼ同規模・同標高で、長軸方向もほぼ直交することなどから、いずれもO群として把握できよう。

⑮また、後述するII'a_3住1135A北壁に切られる円形住居のOX住1131～1133や住1129も、OY住1149と同じO群として把握できよう。

I'群

⑯溝1008は、II"群で後述するII"W住3004の壁やII"X建2017のP1・2に切られることから、〔I'群溝1008→II"群W・X列〕。

⑰また、溝1008は後述するIII'W住1102・III'Yb_1住3005Bの各床面、IV'Ya_1住1144B・a_2住1144A・a_3住1109の各主柱P13掘り形のいずれからも切られることから、〔I'群溝1008→III'群W列、同溝1008→III'群Y列、同溝1008→IV'群Y列〕。

⑱a_1住1143は、a_2住1141の東壁や床面に切られ、〔a_1⇨a_2〕へと掘り替えたもの。

⑲a_1の東壁は、後述するIII'Ya_1住1151の北壁に切られることから、〔I'群a_1・a_2→III'群Y列a_1～a_3〕で、⑪で既述したことから、〔O群おとし穴3001→O群Y列→I'群a_1・a_2→III'群Y列a_1～a_3〕。

⑳a_2の北壁は、後述するIII'Xa_2住1137の東壁に切られることから、上記⑲は、〔O群おとし穴3001→O群Y列→I'群a_1・a_2→III'群X列・Y列a_1～a_3〕。

㉑ところで、⑯・⑰既述した溝1008は、O群X・Y列の円形住居とも重複関係にはないが、表3に示したように、O群を除いたI'～III'群と同時に併存し得る溝として把握し、その機能については、別に説明を加える。

II'群

㉒$a_3$1135Cはa_2住1135Bの張り床で埋められ、a_2住は$a_3$1135Aの張り床で埋められていたことから、〔a_1⇨a_2⇨a_3〕の順に掘り替えたもの。

㉓また、⑮で既述したように、a_3はOX住1131～33の各円形住居壁を切ることから、O群X列→II'群〕。

㉔なお、a_1・a_2・a_3の各壁は、後述するⅢ'X住a_1・a_2・a_3の各壁にそれぞれ切られることから、〔Ⅱ'群→Ⅲ'群X列〕で、上記㉓から、〔O群X列→Ⅱ'群→Ⅲ'群X列〕。

Ⅲ'群

㉕W列住1102は、北壁をⅡ"W住3004の西壁に切られ、床面がⅠ'溝1008を切ることから、〔Ⅲ'群W列→Ⅱ"群W、Ⅰ'群1008→Ⅲ'群W列〕。

㉖X列のa_1住1138・a_2住1137・a_3住1117・a_4住1114・a_5住1113は、各壁の切り合い関係や張り床の状態から、〔a_1⇨a_2⇨a_3⇨a_4⇨a_5〕の順に建て替え・掘り替えたもの。

㉗また、X列は㉔で既述したように、〔O群X列→Ⅱ'群→Ⅲ'群X列〕である。

Ⅳ'群

㉘X列のa_1住1136は、a_1住1110の張り床で埋められていたことから、〔a_1⇨a_2〕の順に建て替えたものである。

㉙Y列のa_1住1144Bはa_2住1144Aの張り床で埋められ、a_2住はa_3住1109の張り床で埋められていたことや、各主柱P13・14の掘り形の重複関係などから、〔a_1⇨a_2⇨a_3〕の順に掘り替えたものである。

Ⅱ"群

㉚W列の住3004は、㉕で既述したように、〔Ⅲ'群→Ⅱ"群住3004〕。

㉛また、W列とX列の建2017は、⑯で既述したように、〔Ⅰ'群溝1008→Ⅱ'群W・X列〕。

㉜なお、住3004（主軸S—37°—W）と建2017（同N—53°—W）は、住居・建物規模から重複関係にあり、同時併存はしないが、遺存する壁・柱穴間の切り合いがなく、新・古、新・旧関係は不明。

㉝しかし、主軸は整然と直交し、その重複状況などから、共にⅡ"群と把握した。

住1017号は、既述のようにⅣ群W列a_1住1162B⇨a_2住1162A⇨a_3住1013B⇨a_4住1013A⇨a_5住1017（以下、単にa_1などと略す）の順に掘り替えたもので、既報告の住1421号A～C（『以来尺Ⅱ』、住1424号群として住1424号で重複関係を、住1421号で個別規模を説明。同書付図5・表36～38参照）との住居規模・諸施設配置の類似が指摘できる。

住1421号Aの南壁については、本書の付図8にも図示したが、a_1の北東壁隅との最短距離は377cmで、a_1の主軸方向はN—8°—E、住1421号C（同N—31°—E）⇨住1421B（同N—45°—E）⇨住1421A（同N—39°—E）である。

a_1では、**西壁沿区画溝D21HM**（幅97cm・深さ28cm）を棟持柱間a_1約499cmより若干短かい約439cmの長さで配すが、（449cm—439cm）×½＝30cmは、棟持柱径をも示唆するものか。

また、**東壁沿区画溝H21M**（幅84cm・深さ16cm）を（北—南）壁間約591cmの長さで配す。

住1421号A・Bでは、このような壁沿区画溝は配さないが、床中央部に**棟持柱筋区画溝a_1HM**（幅34～67cm、深さ40cm）を配す。

上記のように、類例が非常に少ないこのような**区画溝**を共に配し、共にこれらの区画溝は、掘削後すぐに、中央部床面レベルまで埋め返す点などの類似項が指摘できる。

また、住1421号A・Bでは、西壁中央部に方形区画H21と柱穴様小ピット、H21部を除く各壁に壁隅・壁沿高床を配すが、a_1では西壁中央北寄りで、調査者担当の以来尺遺跡出土住居では類例の多い柱穴様小ピットDP211・212（DP212は未確認）を配し、方形区画H21と柱穴様小ピットHP211・212（HP212は未確認）は北東壁隅に配す。

a_2でも、a_1のD21HM・H21Mを再び掘削し、西壁中央北寄りにDP211・212をa_1と重複して配し、東壁中央北寄りにH21を配すが、HP211・212は検出し得なかった。

なお、a_1・a_2での西壁沿区画溝D21HMは、通有の壁土坑D21配置（掘削）以上の、特別な配慮で、D21に代えて配置（掘削）したものと考えられ、掘削後、すぐに埋めもどしていることなどを含めて、住1421A・Bでのa_1HMと共に今後、検討すべき区画溝であろう。

a_3～a_5では、a_1・a_2のような壁沿区画溝D21HM・H21Mは掘削せず、西壁北寄りにD21（未確認）、DP211・212を配し、東壁北寄りにH21、HP211・212を配す（一部未確認）。

また、a_3・a_4の棟持柱P21・22は北・南壁近くの北・南壁から177～178cmも離した独立棟持柱配置とし、a_5のP21・22は掘り形の一部が北・南壁にくい込む配置をとり、北・南側の柱筋との距離は224cmを削るほどに大きいことなどから、壁建住居、あるいは検出壁外方に大きく離れた垂木尻着地の屋根構造・軸組みを考えねばならない。

なお、a_5の中央土坑D11は、a_1～a_3の旧出住の棟持柱P21部に意図的に配す。

ところで、a_1住1017の柱配置は、主柱穴P12・14を欠失し、桁行Aが不明であるが、梁行Bが246cmを測ることから、246＝30.0cm×8.2と計算し、梁行B＝246＝30.8cm×8.0＝246.4、桁行A＝277＝30.8×9.0＝277.2と算出したもので、桁行A換算の算出値も30.8cm　（馬田）

遺物（第7図10～12）10は高台付壺の下半部。磨滅が激しく調整は不明瞭だが、外面高台接合部に僅かに刷毛目と工具のあたりがが残る。高台付近はナデ。復元高台径10.0cm。11は甕の底部片で、外面はヨコナデ、内面と外底部はナデ。12は器台の裾部で、端部を四角におさめる。外面に指ナデ、内面にしぼりの痕跡が見える。（齋部）

1019号竪穴住居跡

遺物（第7図13）甕底部小片。磨滅のため調整不明。P-4から出土。（齋部）

1027号竪穴住居跡

遺物（第7図14）甕の胴部小片。台形の突帯を貼付する。全面ナデ調整。（齋部）

1047号竪穴住居跡

遺物（第７図15）甕口縁部小片。器片の剝離が激しく調整不明。復元口径15.4cm。（齋部）

1050号住居（図版54、付図９、表２・33・34）

重複関係は、住1004号で詳述。

1050号Ａ住居

柱配置は、棟持柱Ｐ21以外は不明で、（西壁―Ｐ21）間換算の算出値は31.0cm。

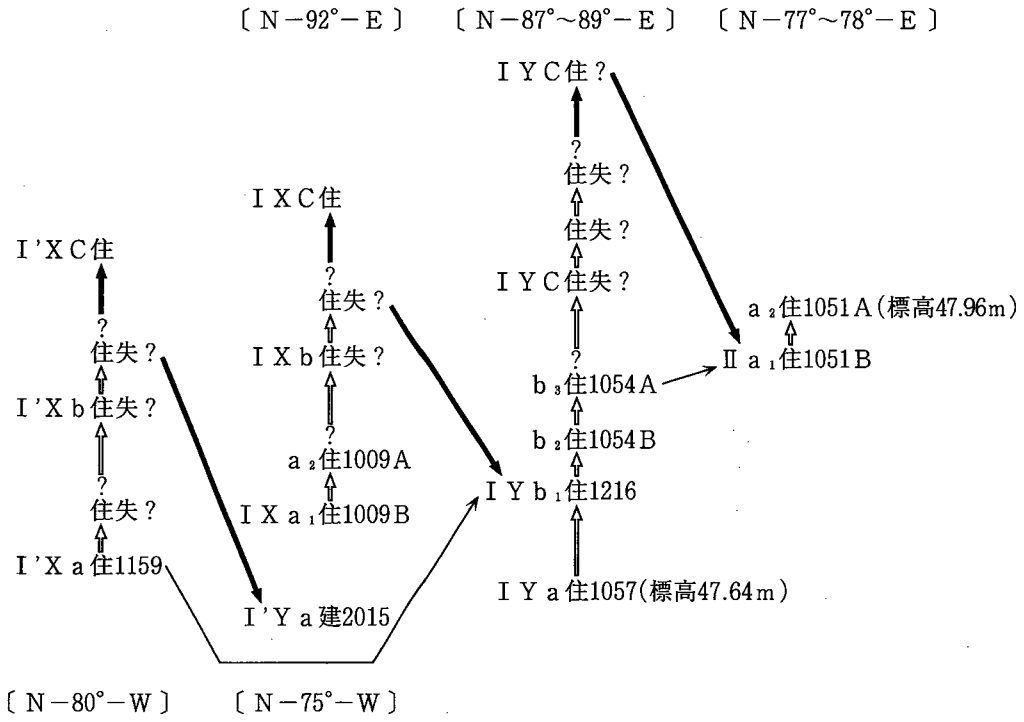
1050号Ｂ住居

柱配置は、棟持柱Ｐ21以外は不明で、（西壁―Ｐ21）間換算の算出値は28.8cm。（馬田）

1051号住居（図版３、付図10、表４・35・36）

住1051号群（1051Ａ・Ｂ）と住1159号群（1159）・建2015号群（2015）、住1009号群（1009Ａ・Ｂ）・住1054号群（1054Ａ・Ｂ、1057、1216）、以来尺１号墳、溝1002号、ＳＸ1007号穴（風倒木痕）との重複関係

表４　住1051号群周辺の重複関係把握表



上記の住居群９軒・建物１棟・古墳１基・溝１条・風倒木痕２の計14遺構群の重複関係を、表４に示す（旧⇨新、古→新、前➡後の表記については、住1004号での説明を参照のこと）。

Ｉ'群Ｘ列

①住居群９軒と建物１棟は、それぞれの規模からいずれも重複関係にあり、同時併存しない。

②Ｉ'Ｘ列ａ住1159号はＩ群Ｙ列b_1住1216号床面下で確認したことから、〔Ｉ'Ｘａ⇨ＩＹb_1〕。

Ｉ'群Ｙ列

③上述①の重複関係のなかで、Ｉ'群Ｙ列ａ建2015号（Ｎ—75°—Ｗ）とＩＸａ住1159（Ｎ—80°—Ｗ）とＩ群Ｙ列ａ住1057号は、後世の削平に因り、遺構間の直接の切り合いによる新・古関係を確認できない。

④しかし、上記のように主軸がほぼ同じで、建2015号Ｐ１掘り形を、住1159号南壁中央土坑Ｄ11部を継承して意図的に配したことも考えられ、あるいは〔ＩＸａ住1159？⇨Ｉ'Ｘｂ住？➡Ｉ'Ｙａ建2015〕か。

Ｉ群Ｘ列

⑤Ｉ群Ｘ列a_1住1009号Ｂ床面はa_2住1009号Ａ張り床下で確認し、a_1住主柱Ｐ12・方形区画ＨＰ212が、a_2住では共に北西方向に移動することから〔a_1住⇨a_2住〕へと規模拡大したもの。

Ｉ群Ｙ列

⑥Ｉ群Ｙ列b_1住1216号は、Ｉ群Ｙ列b_3号住1054号Ａ張り床下で確認したことから、[b_1→b_3]。

⑦しかし、B_3住主柱Ｐ11掘り形内で重複して長方形を呈する柱痕を検出し、b_3住棟持柱Ｐ22掘り形内でも２個の柱痕を検出したことに加え、b_3住主柱Ｐ12掘り形北側にも主柱掘り形が所在することから、b_3住にはb_2住1054号Ｂが重複すると把握し、〔b_1⇨b_2⇨b_3〕とした。

⑧なお、掘り下げ段階では、b_2住の所在を予期せず、b_1・b_2住Ｐ12掘り形埋土と張り床材土との識別ができず、b_2住Ｐ12掘り形→b_1住Ｐ12掘り形と誤認して掘り下げた。

⑨また、Ｉ群Ｙ列ａ住1057号とＩＹｂ住1054号Ａ・Ｂの新・古関係についても、b_1住1216号Ｂ・b_2住1054号Ｂの重複を予期しなかったため、b_1・b_2住張り床材土とａ住東壁沿高床の生活面地山部の汚れの識別ができず、ｂ住張り床→ａ住北壁と誤認して掘り下げたが、⑥・⑦の事項も含めて、〔a_1⇨b_1⇨b_2⇨b_3〕として把握した。

Ⅱ群

⑩Ⅱ群はａ住1051号のみで、ａ住が直接ＩＹｂ住1054号を切るものとして住1054号を掘り下げたが、張り床下の地山床が壁周辺20～30㎝間でレベル差を有し、主柱Ｐ12掘り形内で２個の柱痕を確認したことから、[a_1住1051号Ｂ⇨a_2住1051号Ａ] へと掘り替えたものと把握した。

⑪なお、計14遺構群のなかでは、住1004号群の重複関係で既述したように、以来尺１号墳を切る中世溝1002号が最も新しく、１号墳西側周溝部に切られる風倒木痕1005号土坑と１号墳主体部掘り形と住居群に切られる風倒木痕ＳＸ1007号が最も古い。

1051号Ａ住居

柱配置は、（Ｐ11－Ｐ12）間桁行Ａが374cmであるが、主軸間柱Ｐ31かＰ32を棟持柱Ｐ22として復原すると、（北柱筋－Ｐ31）間131cm・（北柱筋－Ｐ32）間182cmを測り、梁行Ｂは前者が131cm×２＝262cmで住1057号の地山削り出し造作の東壁沿高床遺存南端部（標高47.75ｍ）付近となり、Ｐ11・12柱痕底の標高が47.44ｍ・47.43ｍであるが出土せず、後者の182cm×２＝368cmでは桁行Ａの374cmとほぼ同じで大きいことなどから、Ｐ21を西柱筋下、Ｐ22を東柱筋内側の配置として復原した。

なお、上記復原では、桁行374×⅔＝249cmは棟持柱間252cmとほとんど一致する。

また、同様に東側Ｐ22のみを東柱筋内側に配置した例として、既報告の建2011号群・住1046号群中の住1035号Ｂなど（『以来尺Ｉ』）がある。

桁行Ａ・棟持柱間a_2換算の算出値平均は30.15cm。

1051号Ｂ住居

桁行Ａ・棟持柱間a_1換算の算出値平均は、29.8cm。（馬田）

遺物（図版50、第７図16・17、第17図３）16は磨滅のため調整不明。17は外面に刷毛目が僅かに残るが、他は磨滅のため不明。他に砂岩質でほぼ完形の石庖丁が出土している（第17図３）。（齋部）

1054号住居（図版３、付図10、表４、37・38）

重複関係は、住1051号で詳述。

1054号Ａ住居

柱配置は、主柱Ｐ11・棟持柱Ｐ22を旧住1054号Ｂより北西方向に移し、旧住の北・西壁の掘り替えで規模拡大し、棟持柱間a_1換算の算出値は、31.3cm。

1054号Ｂ住居

桁行Ａ・棟持柱間a_1換算の算出値平均は、30.5cm。（馬田）

遺物（第７図18～20）18は頸部に突帯を持つ甕の口縁部片で、復元口径38.6cm。突帯付近は横ナデが残るが、他は磨滅のため調整不明。19は底部小片で、内面は強い横ナデ、外面は磨滅のため調整不明。20は支脚上半部。図左端に粘土の合わせ目があり、外面に指圧痕が見られる。復元底径6.0cm。（齋部）

1055号住居（図版54、付図９、表２・39）

重複関係は、住1004号で詳述したが、柱配置は不明。（馬田）

1056号住居（図版54、付図９、表２・40）

重複関係は、住1004号で詳述。

柱配置は不明で、北壁中央部に深さ18cmの方形区画H21、その両側に壁隅高床を配し、H21内は高床面まで化粧張りを施し、北西壁隅高床長・H21長換算の算出値平均は30.7cm。（馬田）

1057号住居（図版３、付図10、表４・41）

重複関係は、住1051号で詳述したが、柱配置は主柱Ｐ12を除き不明であるが、住1057号⇨住1216号⇨住1054号Ｂ⇨住1054号Ａへと掘り替え・建て替えた住居群よりも、住1054号Ａを切る住1051号に住居規模が類似し、北壁中央部に方形区画H21を配す。

また、住1057号の（北壁－北柱筋）間195cm・（H21東縁－東壁）間283cmと、住1051号の同約185cm・北東壁隅高床長約272cmもほぼ等しいなど、住1051の重複関係の説明と表４に示したように、住1051号構築に際しては、古い住1057号を構築していたと言う事象を意識し、その居住空間を継承的に重複させた（重複させられた）と把握できよう。（馬田）

1058号住居（図版54、付図９、表２・42）

重複関係は、住1004号で詳述。

柱配置は不明で、北壁中央部に方形区画H21、その東・西両側に壁隅高床を配し、北西壁隅高床長・21長換算の算出値平均は32.8cm。（馬田）

1059号住居（図版54、付図９、表２・39・40）

重複関係は、住1004号で詳述。

1059号Ａ住居

柱配置は、棟持柱Ｐ22が旧住ＢのＰ22よりも柱径18cm分だけ西に移動するが、主柱Ｐ12はほぼ旧位置に設け、東・西側の柱筋下が両壁沿高縁となる。

桁行Ａ・棟持柱間a_1換算の算出値平均は30.3cmで、Ｐ13部の柱穴様ピット２個とその掘り形は、中世溝1002号掘削に伴い以来尺１号墳を破壊した際の撹乱に因るものである。

1059号Ｂ住居

柱配置は、棟持柱Ｐ21・22が西・東側の柱筋から約94cmも内側で、掘り形径も93cmと大きい。

桁行Ａ・棟持柱間a_1換算の算出値平均は31.1cm。（馬田）

1060号住居（図版54、付図９、表２、45）

重複関係は、住1004号で詳述。

柱配置は、棟持柱Ｐ21を旧住1064号Ａ同Ｐ21の東側に設け、このＰ21に東側の柱筋を外接させることで桁行規模の拡大、そして旧住東壁外への壁沿高床幅の拡大をしたものと考えられる。

桁行Ａ・棟持柱間a_1換算の算出値平均は30.9cm。（馬田）

1061号住居（図版４、付図７、表５・46・47）

重複関係は、住1417号で詳述（表５参照）したが、a_1住1015号⇨a_2住1061号Ｂ⇨a_3住1061号Ａの順に掘り替える。

1061号Ａ住居

柱配置は、棟持柱Ｐ21・22を西・東側の柱筋に内接させ、西・東壁沿高床に加え、北壁中央西寄りに方形区画H21を配し、柱様のＨＰ211・ＨＰ212抜去に伴う**住居遺棄祭祀**を行う。

ＨＰ211部では甕を配し、ＨＰ212部では播火の黒灰色灰が遺存した。

H21長約121cmは、西壁沿高床幅約128cmとほぼ同じで、（北壁－ＨＰ211）間61cm×２＝122cmと一致するに等しく、この61cmは初出a_1住の（Ｐ21－西柱筋）間62cmとも一致するに等しい。

桁行Ａ換算の算出値は、28.8cm。

1061号Ｂ住居

西壁沿小溝が、南柱筋部で東へと折れ、各壁隅に計４の壁隅高床を配す。

桁行Ａ・棟持柱間a_1換算の算出値平均は、29.6cm。（馬田）

遺物（図版52図　第７図21、第18図14）底部小片で磨滅のため調整不明。他に鉄鏃が出土（第18図14）。復元底径10.0cm。（齋部）

1062号住居（図版４、付図７、表５・48）

重複関係は、住1417号で詳述。

柱配置は、主柱穴Ｐ12・14が掘り替え後の住1439号の柱穴などと重複するなど確認できないものもあるが、北壁沿高床幅約118cmは２回の掘り替えを経た新出住1430号Ｂの北壁沿高床幅118cmと一致することなどから、（南壁―北壁）間約503cm×（西壁―東壁）間約312cmの桁行方向規模が長大な小型住居（床面積約15.7m²）の復原でよいと考えられる。

また、当住居は付図１に示すように、遺跡全体では東端部近くに構えられているが、同様な規模を呈する既報告の住1462号Ａ・Ｂ（約465cm×269cm、約12.5m²。『以来尺Ｉ』第164図参照）がやはり東端部近くで構えられていることなどからも、付図７の復原でよいと考える。

桁行Ａ・棟持柱間a_1換算の算出値平均は、32.1cm。（馬田）

遺物（図版50　第７図22、第17図11）器台の裾部。外面に指圧痕が残り、直径３mm程の貫通し

ない孔が２個並ぶ。内面は磨滅しているがナデか。復元径9.0cm。ほかに粘板岩製の砥石の破砕資料が出土している（第17図11）。（齋部）

1063号住居（図版４、付図７、表５・49）

重複関係は、住1417号群で詳述したが、柱配置は不明。（馬田）

遺物（図版40・50　第８図１～17　第17図14・15）１は袋状口縁壺。磨滅のため調整は不明だが、屈曲部は明瞭に稜がつく。復元口径15.6cm。２は小型壺の下半部。外面は底部付近に僅かにタテ刷毛が残る。内面はナデ調整。復元底径7.0cm。３～７は甕。３・５は外面に刷毛目が僅かに残る。４・５・７は磨滅のため調整不明。７は頸部に接合時のナデツケが残る。復元口径は14.0・16.0・20.0・25.8cm。８は磨滅の為調整不明。９は壺の胴部下半で、外面中位はタテハケ、下位はランダムなハケが残る。内面は削り。10～15はミニチュア土器で、10・13は坏状に、14は鉢状になる。10は内外面ハケ調整、12は内面ナデ調整、15は内外面とも指押さえで、他は磨滅のため調整不明。14は外面僅かに工具痕が残り、内面には部分的に煤が付着する。14は口径9.1cm・器高6.0cm、底径4.1cm。ほかに粘板岩製と花崗岩製の砥石がそれぞれ出土している。粘板岩製の表面にはタール状のものが付着している（第17図14・15）。（齋部）

1064号住居（図版55、付図９、表２・50・51）

重複関係は、住1004号で詳述。

1064号Ａ住居

柱配置は、棟持柱Ｐ21・22を住Ｂの各棟持柱の北側、主柱Ｐ11・12も旧住Ｂ北壁部に設けることで住居規模を北に拡大し、桁行Ａ換算の算出値は29.6cm。

1064号Ｂ住居

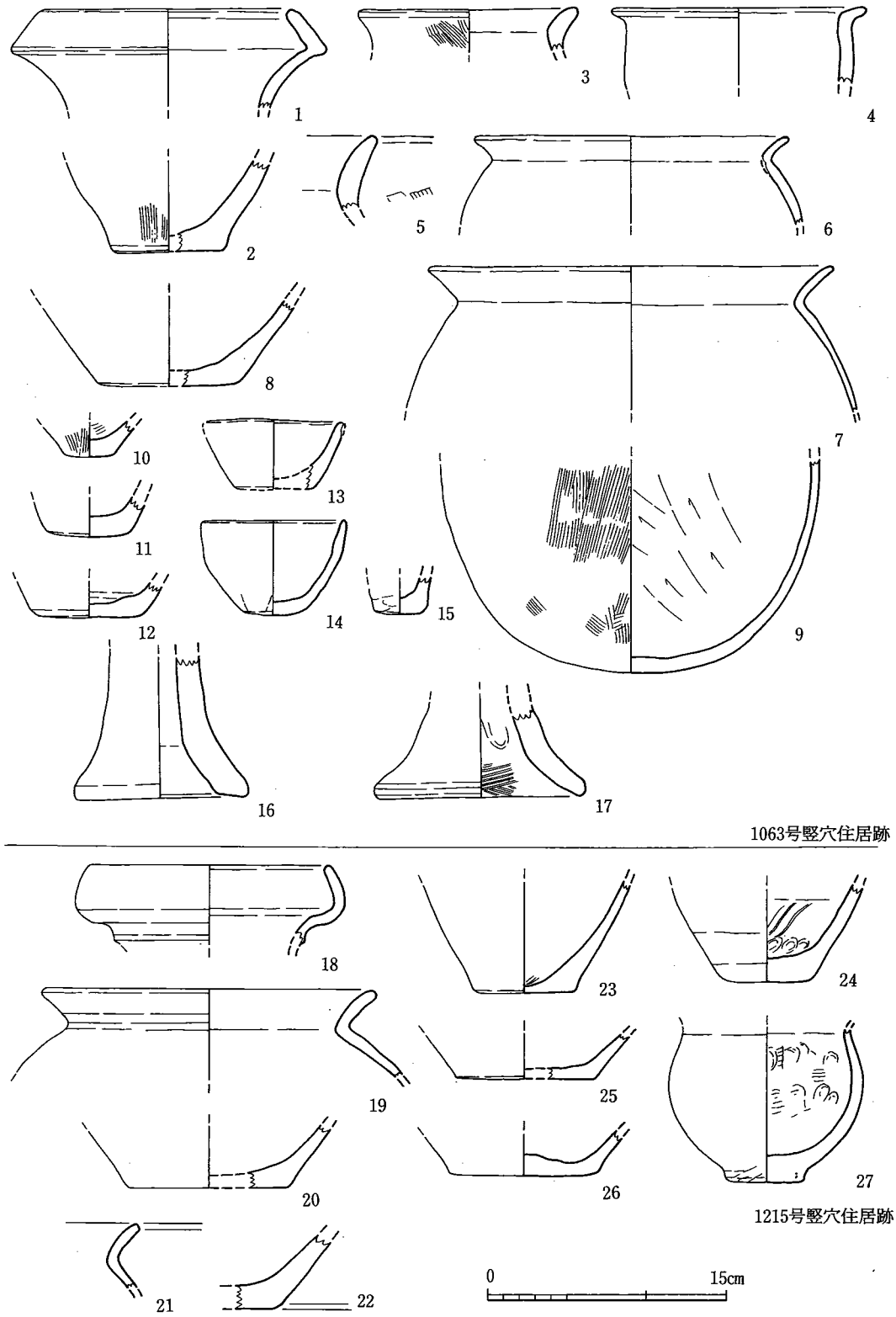
柱配置は、西・東側の柱筋にわずかに外接するＰ21・22を配し、桁行Ａ換算の算出値は32.0cm。（馬田）

1162号住居（図版２、付図８、表３・72・73）

重複関係と住居の諸施設配置については、住1017号で詳述。

1162号Ａ住居

柱配置は、主柱穴Ｐ12・14を欠失するが、梁行Ｂが208cmを測ることから、208＝30.1cm×6.9＝207.7と計算し、梁行Ｂ＝208＝29.7×7.0＝207.9、桁行Ａ＝238＝29.7×8.0＝237.6と算出した。



第8図　1063・1215号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4）

東壁北寄り配置の方形区画H21幅約104cmは、上記の梁行Bの計測値208×½＝104cmに一致し、桁行A換算の算出値は29.8cm。

1162号B住居

A住同様に、梁行Bが206cmを測ることから、206＝29.9×6.9＝206.3と計算し、梁行B＝206＝29.4×7.0＝205.8、桁行A＝235＝29.4×8.0＝235.2と算出した。

棟持柱間a_1約499cmは（東壁—西壁）間約501cmと一致するに等しく、（東壁—東柱筋）間約148cmと（西柱筋—西壁）間約147cmとA住のH21長約145cmもほとんど等しい。

また、［a_1住1162B⇨a_2住1162A⇨a_3住1013B⇨a_4住1013A⇨a_5住1017］の順に掘り替えたことについては、住1017で詳述したが、a_1～a_5の各（DP211—DP212）間と各（HP211—HP212）間は、いずれも共に約87cmで一致する。

桁行A・（HP211—HP212）換算の算出値平均は、29.2cm。（馬田）

1163号住居（図版54、付図9、表2・74）

重複関係は、住1004号で詳述。

柱配置は、棟持柱P21・22を新住1008号B壁沿高床縁の東・西側柱筋外接として復原し、桁行A・棟持柱間a_1換算の算出値平均は31.3cm。（馬田）

1215号住居（図版8、付図11、表6・75）

重複関係は、建1022号で詳述。

住居南半部を欠失するが、住居構築に際しての『祭祀行為痕』・『基準杭（抜去）痕』（『以来尺II』で既報告の住1049号で既述）である中央土坑D11内の柱穴様小ピットDP111を検出したので、柱配置・壁規模の復原は、このDP111を住居中心Oとして復原した。

桁行A換算の算出値は、28.7cm。（馬田）

遺物（第8図18～27）18は袋状口縁壺で、頸部に断面三角の突帯を巡らす。復元口径15.0cm。19・21は甕の口縁片。19は復元口径21.6cm。21は小片のため復元不可。どちらも内外面とも磨滅のため調整不明。20・22～26は底部片。20・22・25・26は磨滅が激しく、外面底部付近のヨコナデしか見えない。22・26は熱を受けて赤色化する。23・24の外面は剥離が激しく一部指圧痕が見えるのみ。23の内面は斜め方向に工具等による調整痕があり、底部付近はナデを施す。24は中位がヨコナデ、底部付近は指圧痕が並び、内底部はナデ調整。どちらも外底部は熱を受けて赤色化し煤が付着する。27は小型の鉢で外面は剥離が激しい。内面は工具等でナデた後指ナデを施し、指圧痕が見られる。外底部には、若干煤が付着する。（齋部）

1216号住居（図版３、付図10、表４・76）

重複関係は、住1051号で詳述。

柱配置は、棟持柱Ｐ21・22を西・東柱筋から大きく内側の中央土坑Ｄ11寄りに配す。

なお、Ｄ11は新住1054号Ｂへの掘り替えに伴い新住北柱筋近くまで移動させるが、この移動は北壁拡大に伴い北壁中央部に施設を加えた方形区画Ｈ21配置を意図したもので、既報告の住1003号群中の住1003号Ｂ⇨住1003Ａ号、住1436号⇨住1435号Ｂ例などがある（『以来尺Ⅱ』付図６参照）

桁行Ａ・棟持柱間a_1換算の算出値平均は、29.3cm。（馬田）

1217号住居（図版７、付図11、表６・77）

重複関係は、建1022号で詳述したが、住居規模は各壁を欠失するために不明。

柱配置は、棟持柱Ｐ21は外接・Ｐ22は内接し、棟持柱間a_1・桁行Ａを共に300cmで復原でき、中央土坑Ｄ11中心は、北柱筋間を除き、いずれも300cm×½＝150cm等間となる。

桁行Ａ（棟持柱間a_1）換算の算出値は、30.0cm。

なお、建1022号の表６で示すように、ⅢW住1217（桁行Ａ約300・梁行Ｂ約286cm）とⅢWa_2住127号Ｂ案（同291・280cm）と共にⅢ群で、棟持柱配置を除き、規模がほぼ同じである。

（馬田）

1417号住居（図版４、付図７、表５・78）

Ⅴ住1417号群（住1030Ａ・Ｂ、住1062・1417・1439）とⅠ住1063号群（住1063）、Ⅱ住1016号群（住1016Ａ・Ｂ、住2004Ａ～Ｄ、住2005Ａ・Ｂ）、Ⅲ住1014号群（住1012Ａ・Ｂ、住1014・1018・1427・1438・1474、建2016Ａ～Ｃ）、Ⅳ住3002号群（住1015、住1061Ａ・Ｂ、住3002・3003）、おとし穴１号群（おとし穴１・２）との重複関係

上記の住居群26軒・建物群３棟の計29遺構群の重複関係把握例を表５に示す（旧⇨新、古→新、前➡後、＝併存可の表記内容については、住1004号での説明を参照のこと）。

なお、住3002号については、調査区東端で西壁上面プランを288cmの長さまで検出したが、排土置場として利用したため、掘りさげていない。

また、未掘のため、住居番号を実測図中に付していないので、新たに住3002号の番号を付す。

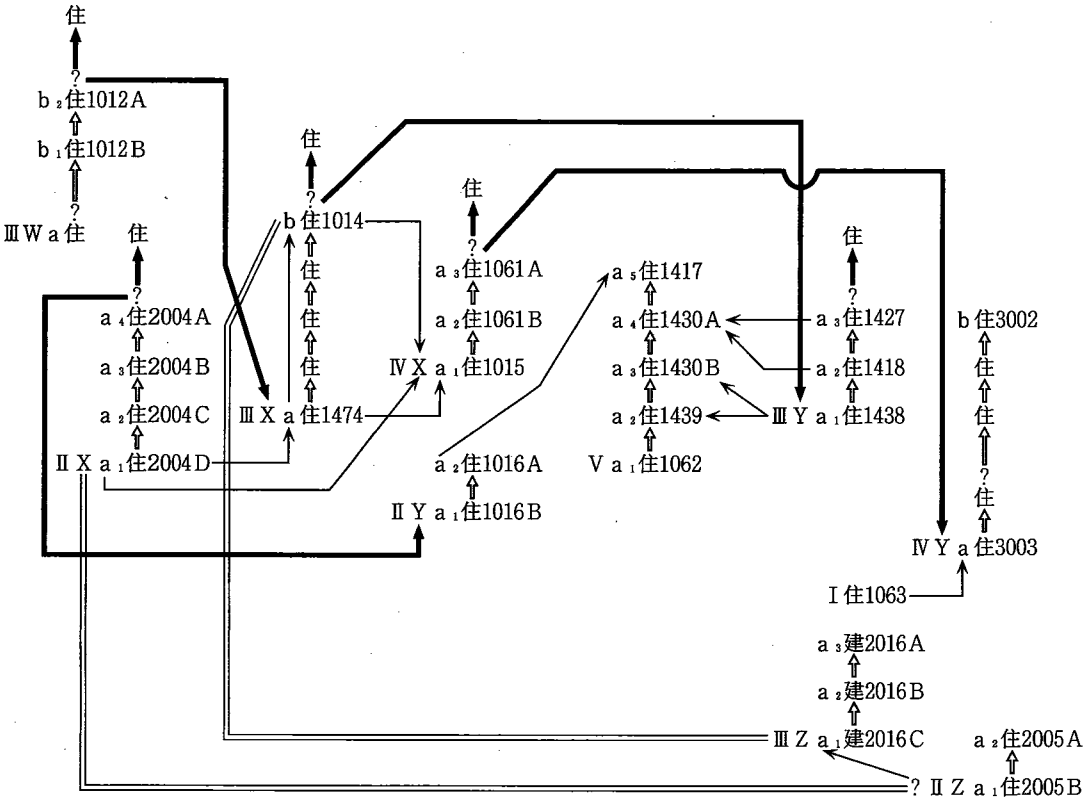
加えて、旧番号住1064号については、重複番号を付していたため、新たに住3003号の番号を付す。

Ⅰ群

①住1063号北壁は、住3003号西壁に切られることから、〔Ⅰ群→Ⅳ群Ｙ列ａ住3003〕。

②なお、北壁東端部の方向に乱れを認めることから、1063号は新・旧住居が重複するものか。

表5　住1417号郡周辺の重複関係把握表



Ⅱ群（X～Z列）

③住2004号A～Dの各棟持柱P21の掘り形を含め、掘り形が4～5個列状に連なるため、調査段階でも、同様に連なる北側に対峙する掘り形群の検出と壁・床面確認に努めたが、壁・床面・中央土坑D11などは検出されなかったので、削平に因り欠失したものと判断した。

④また、住2004号A～DのP22や主柱穴群などが、ⅢXb住1014号床面に切られ、住2004号Dの主柱穴P11もⅣXa住1015号床面に切られることなどから、[Ⅱ群X列→Ⅲ群X列、Ⅱ群X列→Ⅳ群X列]。

⑤住1016号Aの掘り形が検出面からでも72cmと深いため、調査段階でも対峙するP22の検出に留意し、VZa_1住1062号床面に切られた状態で検出し、西壁もVZa_5住1417号西壁に切られることなどから、〔Ⅱ群Y列→Ⅴ群Z列〕。

⑥なお、住2005号A・Bは、壁・床面・中央土坑D11などを欠失し、住居規模も不明であるが、2005号A（主軸S—46°—W）の棟持柱P22掘り形の検出面標高が45.75mで、③･④で既述したⅡX住2004A～D（同S—40°～43°—W、同46.66m）とは主軸方向がほぼ等しく、検出面比高差は91cmを測る。

⑦また、両住居群の棟持柱筋a_1間の距離は約14mを測り、住居規模から重複せず同時併存し

得るが、⑤で既述のⅡＹa_2住1016Ａ（同Ｓ—37°—W、中央部床面同46.85ｍ）と住2005号Ａ・Ｂとの棟持柱筋a_1間の距離は約9.0ｍで、両住居の壁堤規模を加味すると、住居規模から重複関係にある。

Ⅲ群（W～Ｚ）

⑧住1474号（主軸Ｓ—21°—W）の北壁沿高床は、住1014号（同Ｓ—22°—W）の中央部床面に切られることから、〔Ⅲ群Ｘ列ａ住1474→同ｂ住1014〕。

⑨また、両住居は東壁ラインがほぼ一致し、主軸方向も１°差で一致するに等しく、数回の建て替えを経て、ａ住⇨ｂ住に掘り替えたものと判断できよう。

⑩a_1住1438号の北東壁隅部はa_2住1018号の張り床下で、a_2の北壁はa_3住1427号の張り床下でそれぞれ検出し、a_3の北壁西半部は後述するＶＺa_5住1417号に切られることから、［a_1→a_2→a_3→Ⅴ群］。

⑪また、a_2住の北壁西半部は同様にＶＺa_4住1030Ａに切られるが、北壁西半部の続きは、a_3西壁外の住1417北壁沿高床部で検出されず、a_3内で収束する。

⑫同様に、a_1の北壁西半部もＶＺa_4住1030Ａに切られるが、北壁西半部の続きは住1030Ａ西壁外で検出されずa_3内で収束する。

⑬加えて、a_1～a_3の柱配置に連続性・相関性が認められることなどから、既述⑩は〔ⅢＹa_1⇨a_2⇨a_3→Ⅴ群〕としてよい。

⑭また、⑧で既述したⅢＸｂ住1014（主軸Ｓ—22°—W）とⅢＺa_3建2016号（同Ｎ—59°—W）は、大略直交関係にあり、規模での重複関係は認められないことから、同時併存し得る。

⑮なお、建2016号ｃのＰ４は、⑥で既述した住2005号Ａ・ＢのＰ21掘り形に切られるものとして掘り下げたが、Ｐ21→Ｐ４と把握した。

Ⅳ群（Ｘ・Ｙ列）

⑯重複する住居が多く、主柱穴の一部に切り合い関係を誤認した例もあるが、棟持柱Ｐ22の掘り形や中央土坑Ｄ11・ＤＰ111の切り合い関係に加え、各壁の切り合い関係・各住居の柱配置などで、〔a_1住1015号→a_2住1061号Ｂ⇨a_3住1061号Ａ〕の順に建て替えられたと把握できる。

⑰また、上記のことは、a_3の北壁中央部方形区画Ｈ21の柱穴様小ピットＨＰ211部に甕、同ＨＰ212部で播火後の黒色灰が認められ、住居遺棄に伴う方形区画Ｈ21祭祀が確認できたことからもa_2⇨a_3と言えよう。

⑱なお、a_1・a_2西壁沿高床東縁部が復原線と異なるのは、Ⅳ群a_1～a_3住居群の実測前に、古いⅢＸａ住1474号北壁と同ｂ住1014号主柱穴掘り形の検出を試みて、意図的に掘り進めたことに因る。

⑲また、⑧で既述したⅢＸｂ住1014号北壁沿高床南縁部が復原線と異なるのも、Ⅳ群a_1～a_3住居群実測前に、住1014号より古い床面の有無確認を一部試みたことに因る。

⑳ところで、住3002号は、上述のⅣ群X列住居群をはじめ、既述のⅠ～Ⅲ群のどの住居・建物群とも直接の重複関係にはない。

㉑しかし、西側に近接するⅠ群・Ⅱ群Y列・Ⅲ群Y列・Ⅴ群の遺構群とは、壁堤構築部を考慮すれば重複・近接関係にあり、同時併存し得ない。

㉒したがって、Ⅳ群X列がa_1⇨a_2⇨a_3へと建て替えられ、a_3住1061号Aが北方に移動したこと継起として、Ⅳ群Y列a住群が順次構築され、同b住3002号へと建て替え・掘り替えられたものか。

Ⅴ群

㉓a_1住1062号・a_2住1439号・a_3住1030号B、a_4住1030号A・a_5住1417号の住居群は、a_1北壁がa_2北壁沿高床部の張り床下で、a_2北壁がa_3北壁沿高床部の張り床下で、a_3北壁がa_4中央部床面に切られてそれぞれ検出された。

㉔また、各住居群の棟持柱P21・22掘り形の新・旧関係などから、〔a_1⇨a_2⇨a_3⇨a_4⇨a_5〕の順に掘り替えたものである。

㉕ところで、以来尺遺跡の住居群のなかでは、このⅤ群の好例が如実に示すように、壁・高床・中央部床・中央土坑D11（DP111）・壁土坑D21（DP211・212）や柱穴掘り形・柱痕などが複雑に、また、換言すれば整然と、なぜか筆者調査担当空間に限り、検出されるという重要事項が指摘できる。

㉖上記のことは、既報告の『以来尺Ⅰ』の第144図中の101～104号竪穴住居跡実測図に掲図された住居群の検出状況や同書第150図と『以来尺Ⅱ』の付図3との比較などに歴然と示されようが、今後の以来尺遺跡の再検討でも、このことは留意すべきことであろう。

㉗また、このⅤ群の重複状況は、丘陵平坦部から急傾斜面部へと遺跡住居群の立地が移行するその端部に相当し、住1417号群の既述の重複状況も含めて、急傾斜面部住居群での重複（構築）状況を把握する点で、好資料と言える。

おとし穴群（1・2号）

㉕1号（長軸N—37°—E、検出面標高45.56m、底面標高44.41m）の北東隅は、⑭・⑮で既述したⅢZa_1建2016号c（主軸N—55°—W）の柱穴P3に切られることから、〔1号⇨Ⅲ群Z列〕。

㉖2号（同N—29°—E、同45.69m、同44.95m）は、既述遺構群との直接の切り合いはなく、⑧で既述したⅢXb住1014号（同S—22°—W）の南壁まで約130cmと近接する。

㉗以上のように、両者は共に長軸を北—南方向に採り、底面の比高差は8.20m離れるが45cmの差しかなく、付図4で示すように、共に丘陵の急傾斜面部最上位に立地すなど、規模も含めて類似点が多い。

㉘上記のことから、1・2号共にⅢ群よりも古く、既述の住居群に近いことや、下位の急傾斜面部にも多くの住居群が立地することなどからⅠ群以前に掘られたものと考えられ、あるい

は、丘陵平坦部の古い住居・建物群の弥生時代中期前半に属するものか。

㉙なお、ⅢＺａ$_1$～ａ$_3$の建2016号Ａ～Ｃの各南柱筋は全体で若干内彎し、おとし穴１号はａ$_1$・ａ$_2$の建2016号Ａ・Ｂの南柱筋に直交し、同２号はⅢＸａ住1474号・同ｂ住1014号南壁筋と直交する。

㉚上記の特徴は、おとし穴１・２号が丘陵斜面の等高線に短軸方向を合わせ、また、同様に建物主軸を合わせたことに因るものと思われ、付図３～６に示す急斜面部の各段の最北端北壁筋全体のラインは、ほぼ同じ当時の等高線ラインを示すものとみてよいものと思われる。

住1417号の柱配置は、主柱穴Ｐ12・14が未確認であるが、中央土坑Ｄ11・東壁土坑Ｄ21は桁行Ａの½直交軸に北接させるという旧住1062号以来の原則を踏み、新たに、西柱筋中央部に方形区画Ｈ21を配す。

また、Ｈ21部は中央部床面よりも40cm前後掘り込み、掘り込み下半部で得られる黄白色粘質土を化粧張り材土として、中央部床面レベルまで意図的に埋めもどして化粧張りを施す。

なお、Ｈ21部の柱穴様小ピットＨＰ211・212に加えて、中央部前方にＨＰ213を配す。

北西壁隅部床面は標高47.33ｍであるが、北東部床面は同47.10ｍで古い住1427号東壁沿高床面と同レベルとなることから、住1062号⇨住1439号⇨住1430号Ｂ⇨住1430号Ａまで踏習した南・北両壁沿高床の配置系を、新たにＨ21を配したことに因り、北東壁高床配置のみに止揚したものと考えられる。

Ｈ21幅（西壁―西柱筋）102cmは、旧住1430号Ａの（南柱筋―Ｄ21）間101cmと一致するに等しく、Ｈ21長112cmも旧住1430号Ａの北壁沿高床幅116cmとほぼ等しい。

桁行Ａ換算の算出値は、29.8cm。（馬田）

遺物（第９図１）　１は球形に膨らむ胴部片に三角突帯を貼付する。（杉原）

1418号住居（図版４、付図７、表５・79）

重複関係は、住1417号で詳述。

柱配置は、掘り替え前の旧住1438号の南柱筋中央の補柱Ｐ81同様に、Ｐ81を配すと共に、南・北側の柱筋外に独立棟持柱Ｐ21・22を配し、その棟持柱間ａ$_1$約370cm×½＝185cmと桁行Ａ約178cmはほぼ同じ。

桁行Ａ・棟持柱間ａ$_1$換算の算出値平均は、30.3cm。（馬田）

遺物（第９図２・３）　２は底面端部に丸みを持つ。３の復元底径は約9.0cmである。（杉原）

1427号住居（図版４、付図７、表５・80）

重複関係は、住1417号で詳述。

柱配置は、主柱穴Ｐ12・棟持柱Ｐ22を除き未確認であるが、北柱筋は掘り替え前の旧住1418

号の棟持柱Ｐ21に合わせたものとして復原した。

方形区画H21を東壁中央部に配し、H21幅約120cmは、（東壁―西壁）間約482cm×¼＝120.5cmと一致し、（西柱筋―西壁）間約124cmともほぼ等しく、（東柱筋―ＨＰ212）間61cm×２＝122cmともほぼ等しい。

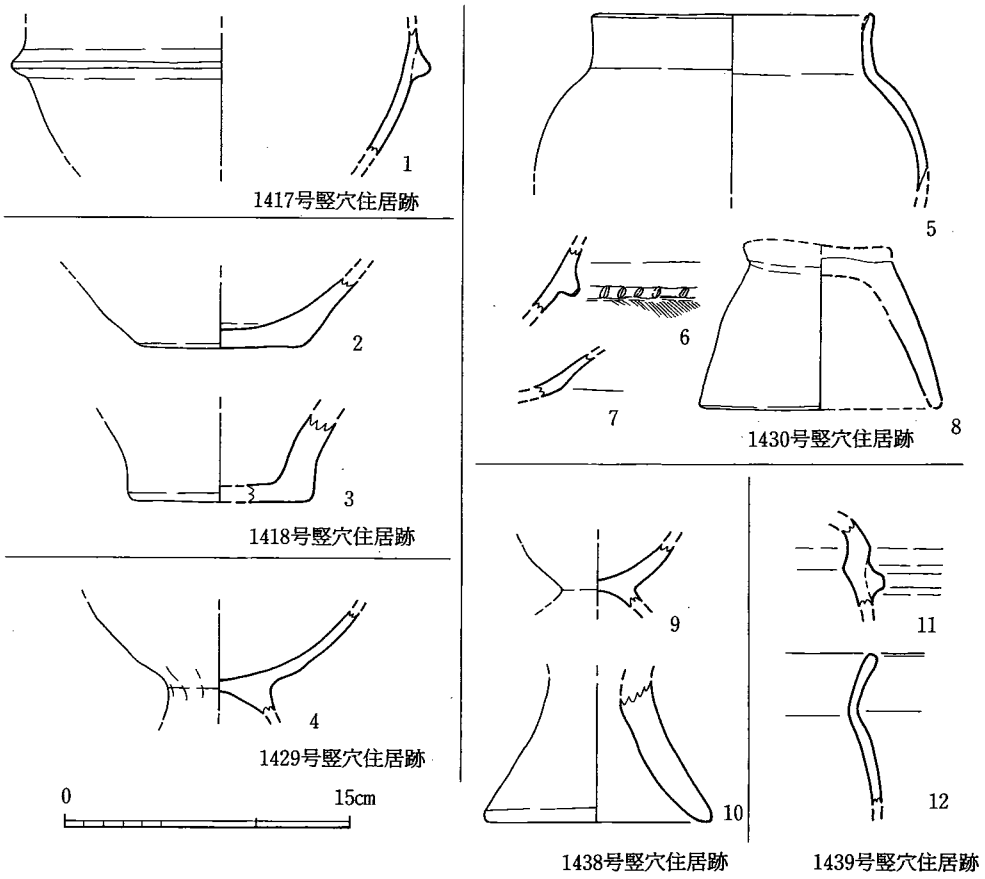
また（ＨＰ211―ＨＰ212）間約137cmは、旧住1418号の北壁沿高床幅約134cmとほぼ等しく、桁行Ａ・（ＨＰ211―ＨＰ212）間換算の算出値平均は、31.0cm。（馬田）

1429号竪穴住居跡

遺物（第９図４）　4は胴部から脚台部にかけて、黒斑がある。（杉原）

1430号住居（図版４、付図７、表５・81・82）

重複関係は、住1417号で詳述。



第９図　1417・1418・1429・1430・1438・1439号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4）

1430号Ａ住居

柱配置は、主柱Ｐ12～14が未確認であるが、桁行Ａ約288cmは掘り替え前の住1430号Ｂの棟持柱間ａ$_1$約281cmとほぼ同じで、北壁沿高床幅約116cmも住1430号Ｂの同高床幅118cmと一致するに等しい。

桁行Ａ換算の算出値は、28.8cm。

1430号Ｂ住居

柱配置は、棟持柱Ｐ21・22を北・南側の柱筋に外接させ、梁行Ｂ約222cmは初出の住1062号の桁行222cmと一致する。

桁行Ａ・棟持柱間ａ$_1$の算出値平均は31.3cmで、表82に示すように、算出６項はいずれも整数比を得る。（馬田）

遺物（第９図５～８）　５は、頸部から直線的に立ち上がる。口縁端部においてはやや丸みを帯びる。復元口径15.3cmを測る。６は刻み目の入る三角突帯を1条貼付けする。７高杯の屈曲部である。８の復元底径は12.9cmを測る。（杉原）

1438号住居（図版４、付図７、表５・83）

重複関係は、住1417号で詳述。

柱配置は、補柱Ｐ81を南柱筋中央に配し、別途に棟持柱Ｐ22も柱筋外に独立して配すのは、その（北壁―南壁）間約529cm×（東壁―西壁）間約301cm規模の北―南方向に細長い小型（床面積約15.9m²）住居系に、補柱Ｐ81の機能を含めて由来するものか。

後述する新出の住1439号や既述の住1062号も細長・小型住居系で、この住1438号と意図的に重複させたものと考えられる。

（西柱筋―西壁）・（東柱筋―東壁）間61cmと（南柱筋―Ｐ21）間62cmは一致するに等しい。

桁行Ａ・棟持柱間ａ$_1$換算の算出値は一致した31.0cmで、算出項はすべて整数比を示す。（馬田）

遺物（第９図９・10）　９は脚台部以下を大きく欠損する。10の復元底径は13.6cmを測る。調整は不明。（杉原）

1439号住居（図版４、付図７、表５・84）

重複関係は、住1417号で詳述。

柱配置は、棟持柱Ｐ21・22をほぼ南・北側の柱筋下に配すが、棟持柱Ｐ21は掘り替え前の旧住1062号の棟持柱Ｐ21を北方に35cm移して建て替えたもので、旧住北壁からの新住北壁の北方への拡幅38cmとほぼ等しい。

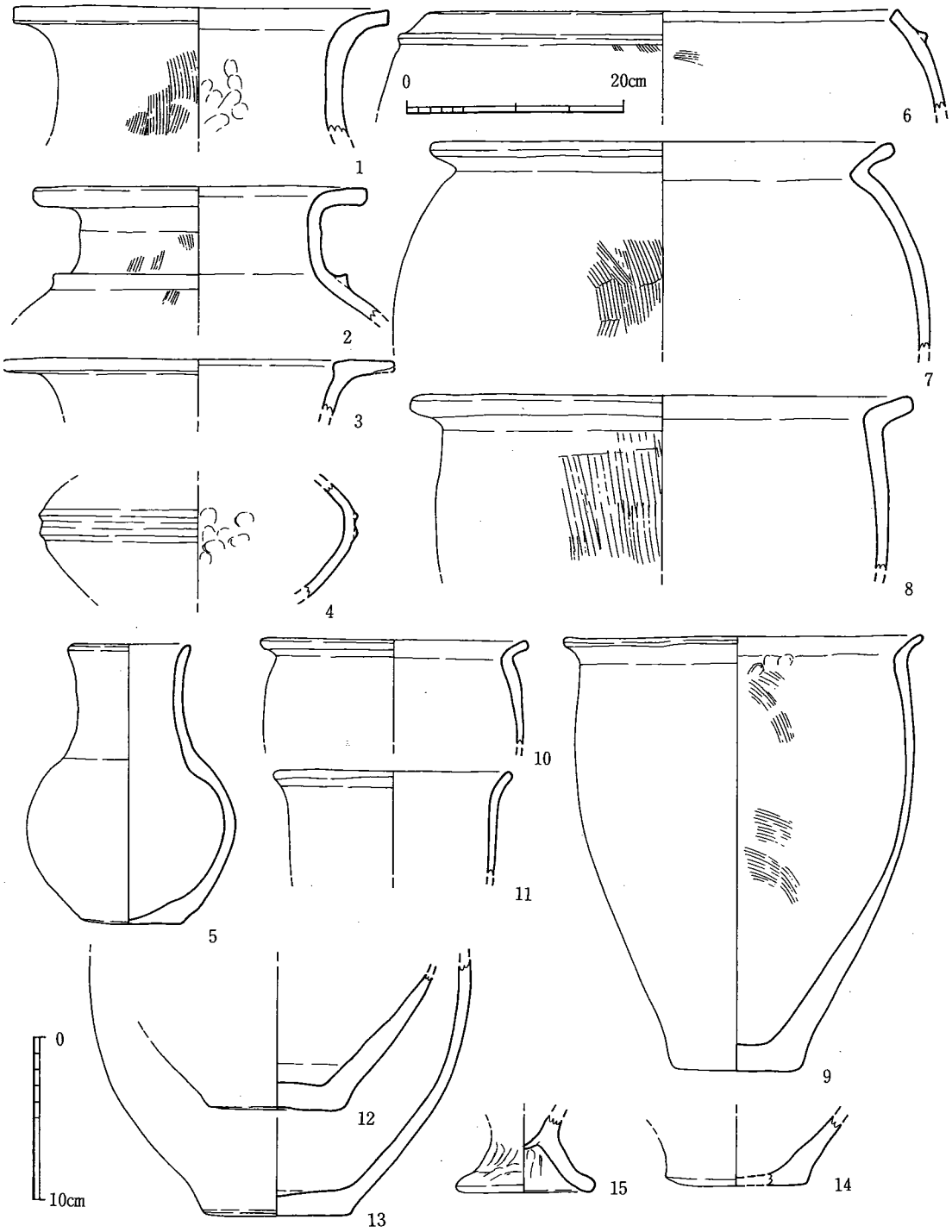
なお、（東柱筋―東壁）間約60cm×２＝120cmは南壁沿高床幅と一致する。

桁行A・棟持柱間a_1換算の算出値平均は、30.4cm。　　（馬田）

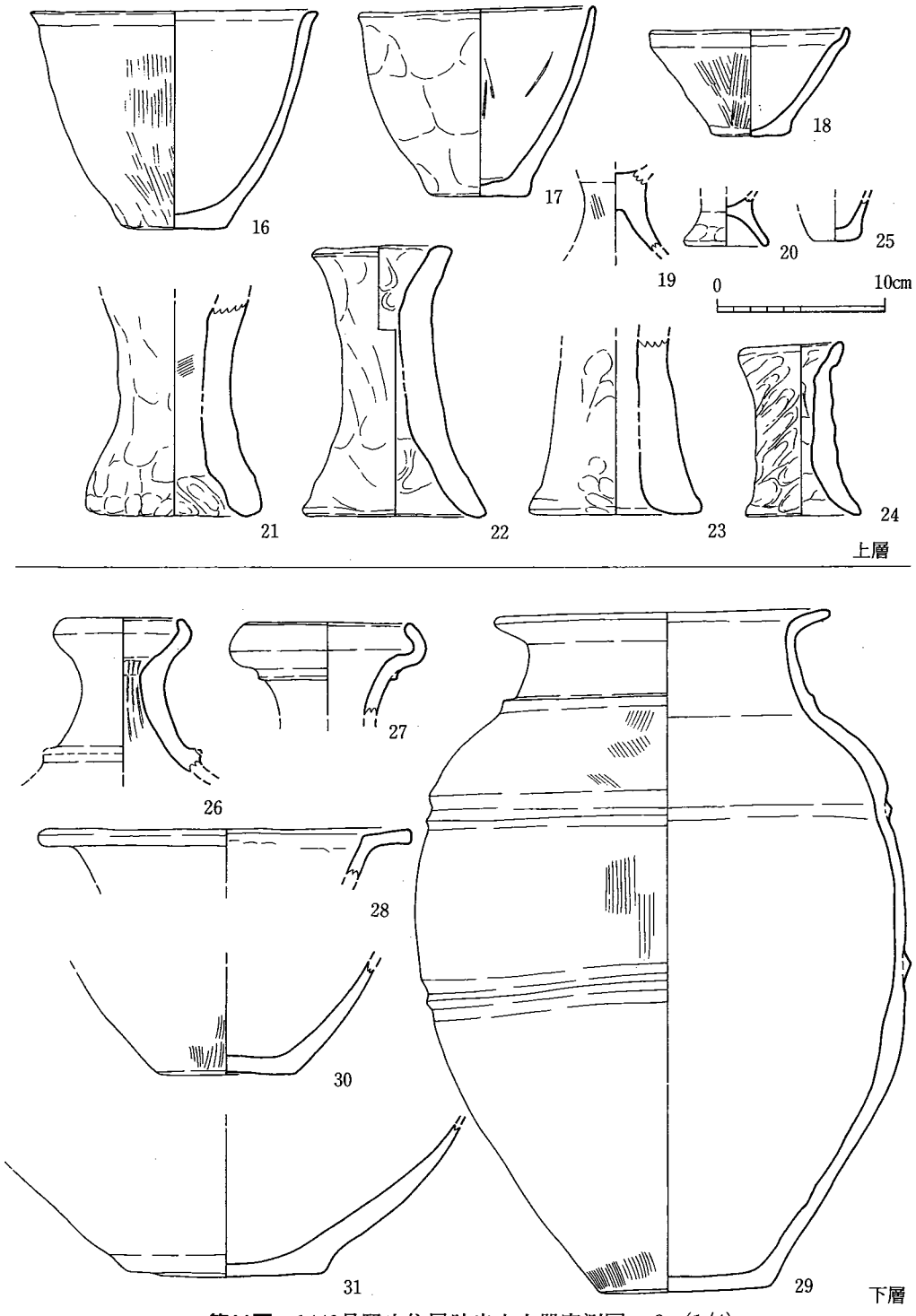
遺物（第9図11・12）11は壺の胴部片で方形の突帯を貼付ける。12は頸部から口縁端へはわずかに開いて直線的に至る。　　（杉原）

1440号竪穴住居跡

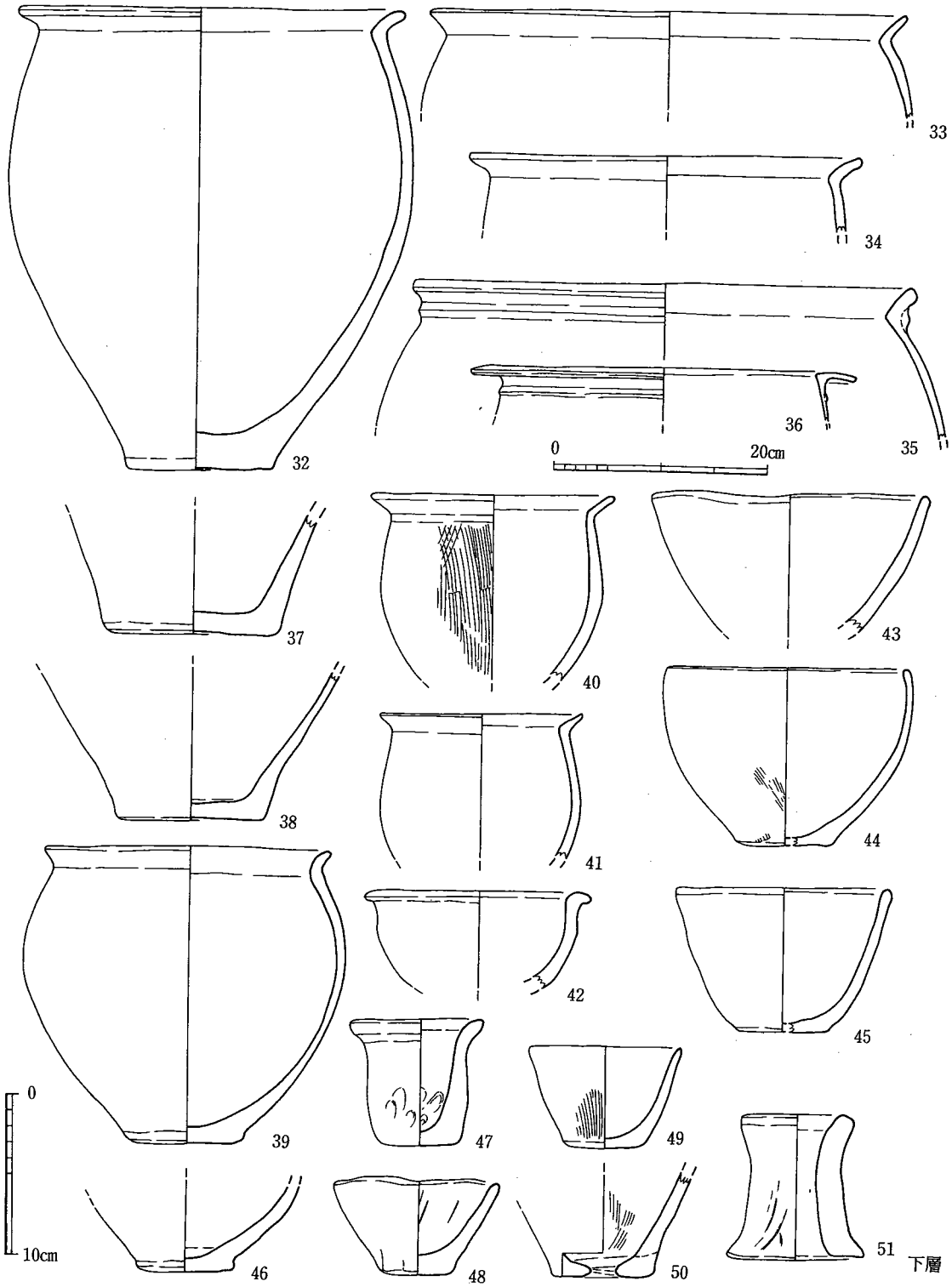
遺物（図版40～42・50・52、第10～12図56　第17図4・5・18　第18図4・6・7・12・15・18）1～25は住居埋土上層からの出土である。1の口頸部は長く、端部へは丸みを持って至る。復元口径23.0cm。2の口縁は丸みを持って大きく外側へ折れる。外面にはわずかにハケ目が残り、内面の磨滅は激しい。3の口縁は大きく外反し、内面屈曲部はわずかな稜を持つ。4は壺の胴部で突帯を2条持つ。外面調整は磨滅、内面は横ナデで、中位には指頭圧痕を残す。5は頸部から口縁端部へはやや内傾しながら直線的に至る。外底面付近に黒斑を残す。6は無頸で内彎したまま端部へ至る。復元口径43.2cm。7の頸部は大きく「く」字に折れる。外面の一部に煤が付着する。内面の調整は不明。8は頸部から口縁端部へは肥厚し至る。外面にはハケ目を施し、内面は磨滅により不明。9は口縁部へは緩やかに屈曲し至る。外面は磨滅し、調整は不明。内面頸部付近には指圧頭痕を残す。口径22.1cm、底径7.9cm、器高26.7cmを測る。10の復元口径は16.3cm。11の頸部はわずかに外反する。12は外底面付近に黒斑を持つ。13の底面は端部において丸みを持つ。外底面付近黒斑を持つ。底形9.1cm。14の底部はやや凸レンズぎみ。15は端部に丸みをもち外面ナデで、内面はケズリ。16は口縁がわずかに外反する。口径17.0cm、底径6.2cm、器高12.8cm。17の内面には工具痕を残す。18は底部より直線的に開き、口縁は直立する。19の外面はハケ目、内面はナデを施す。20は内外面ナデ調整。21～24は器台である。それぞれ指頭圧痕を残す。22の器高は16.0cm。24はシボリ痕を明瞭に残す。25はミニチュア。26～51は下層からの出土。26は頸部内面にシボリ痕を残す。27の調整は不明。復元口径9.2cm。28は内外面磨滅。復元口径は22.0cm。29は口径19.8cm、底径10.0cm、器高40.5cmを測る。30の底径は8.0cm。31の底面はやや凸ぎみで、外底面には黒斑がある。32は胴部中位に張りを持ち、内彎しながら頸部へ至る。口縁は「く」字に屈曲し、端部では肥厚する。底面は平底。胴部外面には煤が付着している。33～35の口縁はいずれも「く」字に外反する。33の復元口径は44.0cm。35の口縁部は突帯を貼付け肥厚し、内面屈曲部に稜を持つ。36の口縁部は直角に折れまがり、平坦面は天井を向く。磨滅により調整不明。37・38はいずれも上げ底ぎみで38の底径は9.2cm。39は球形の胴部にわずかに屈曲する口縁を持つ。外面には煤が付着する。40・41は長い胴部とわずかな口縁が外反するという点で共通する。どちらも磨滅が激しいが40の外面にはハケ目が残っている。42は器厚は全体に厚く、頸部付近にその最大値がある。口縁は粗く横ナデする。43～45はいずれも無頸で端部を丸く仕上げる。43・44は胴部に丸みを持って端部へ、45は直線的に開いてそれぞれ至る。45は復元口径13.4cm、底径6.0cm、器高9.0cm。46は底面に黒斑



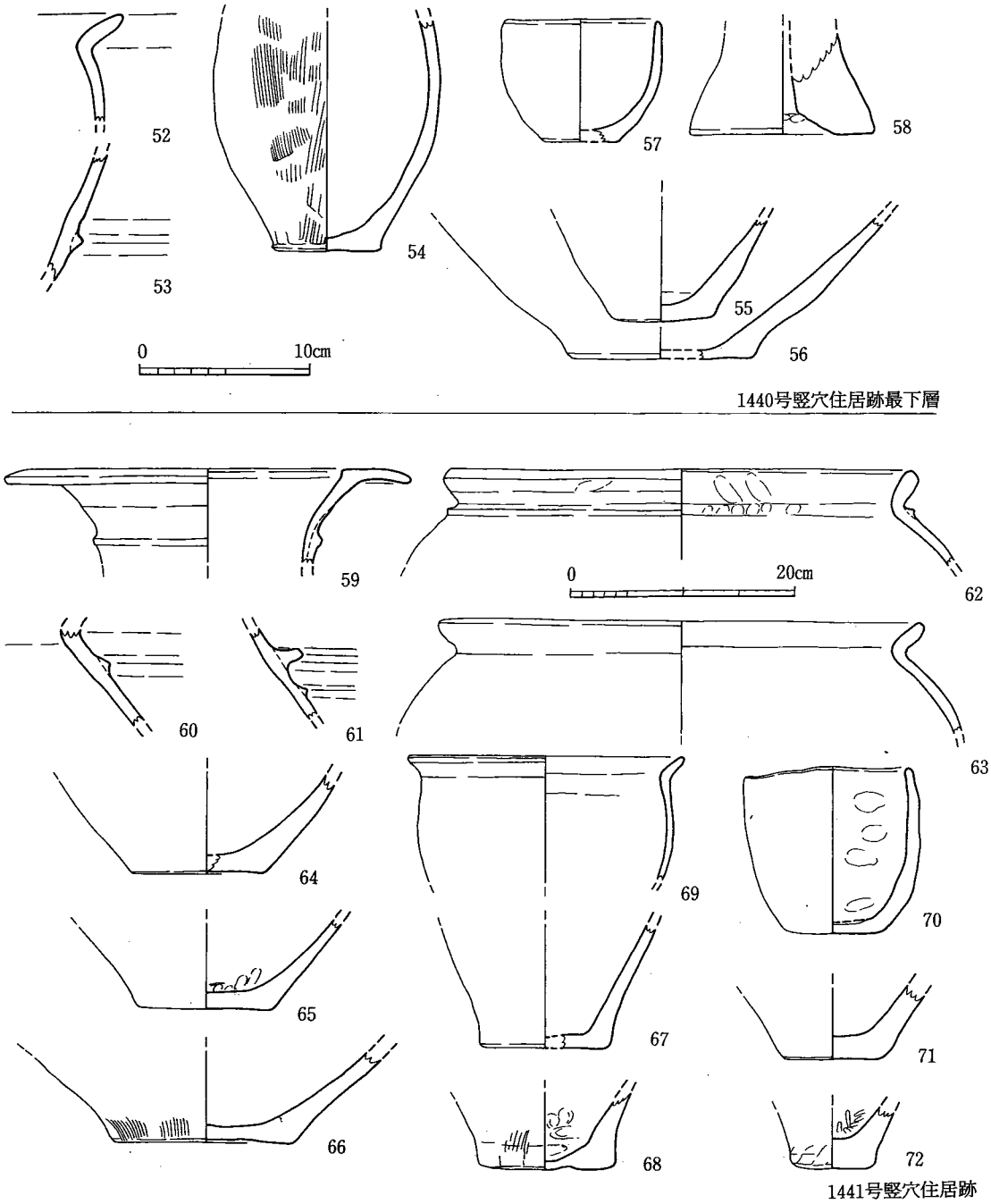
第10図　1440号竪穴住居跡出土土器実測図．1（1/4　6は1/6）



第11図　1440号竪穴住居跡出土土器実測図．2（1/4）



第12図　1440号竪穴住居跡出土土器実測図．3（1/4　33～36は1/6）



第13図　1440・1441号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4　62は1/6）

を持つ。47～48は小型品である。48の口縁は手捏ねのまま仕上げられ、端部は歪む。50は穿孔鉢の底部で外底面に黒斑がある。51は器高9.2cmを測る。52～58は最下層から床面での出土である。54は床面上から出土で、底面は平底で端部は外側にナデている。外面はハケ目、内面はナデ調整。55はやや凸レンズぎみ。56は復元底径10.2cmを測る。57の外面は磨滅し調整は不明だが、内面はナデ調整。58の復元底径は5.5cm。これらのほか石庖丁や砥石鉄製品や勾玉などが出土している（図版50、第17図４・５・18、第18図４・６・７・12・15・18)。第17図の石庖丁４は砂岩製、５は粘板岩製。14の砥石は砂岩製で端部を除いて全面使用されており、一部火を受け煤が付着している。第18図４の柱状片刃石斧は胴部から着柄部を大きく欠損する。最下層出土で玄武岩製。６の打製石斧は磨いた面を切る整形加工が行われていることから再生品と考えられる。粘板岩製。７は緑色片岩製。第18図18は大型の鉄斧で装着部は丁寧に折曲げられている。15は鉋の胴部であろう。（杉原）

1441号竪穴住居跡（図版12）

遺物（図版42・50・52　第13図59～72　第17図13・16・17・19　第18図８・13・17・19）59の口縁部は大きく外に開き、内面稜屈折部の稜がわずかに突出する。内外面の調整は不明。60・61は壺の肩部で、60には三角突帯が１条、61には大きな方形の突帯と三角突帯がそれぞれ貼付く。62は頸部から口縁端部へは肥厚し至る。復元口径は42.1cmを測る。63の復元口径は28.0cm。64はやや上げ底で復元口径９.0cm。65は内外面ともに磨滅著しいが、内底面付近には工具痕、指頭圧痕を残す。66は底径10.4cmで、外底面付近に黒斑がある。67は内外面ともに磨滅激しく、外底面には黒斑がある。68はD-11より出土した。外面の一部にハケ目を残し、内底面には指頭圧痕を残す。復元底径は8.1cmで69は頸部でわずかに屈曲し外反する。70はD-11より出土。外面の磨滅は著しいが内面には指頭圧痕を残す。71は底径６.0cmを測る。72はD-11より出土。内面にはミガキをわずかに残す。ほかに、砥石や石錘、鉄製品勾玉なども出土している。第17図13は砂岩製、16は花崗岩質砂岩製で火を受けている。17は緑色片岩製で板状である。17はP-11より出土した。13とおなじ砂岩製。第18図８は花崗岩製の石錘で欠損品。第18図13は上部を大きく欠損する。17は端部の折曲げが観察できる。19は勾玉の欠損資料で蛇文岩製。（杉原）

1442号竪穴住居跡

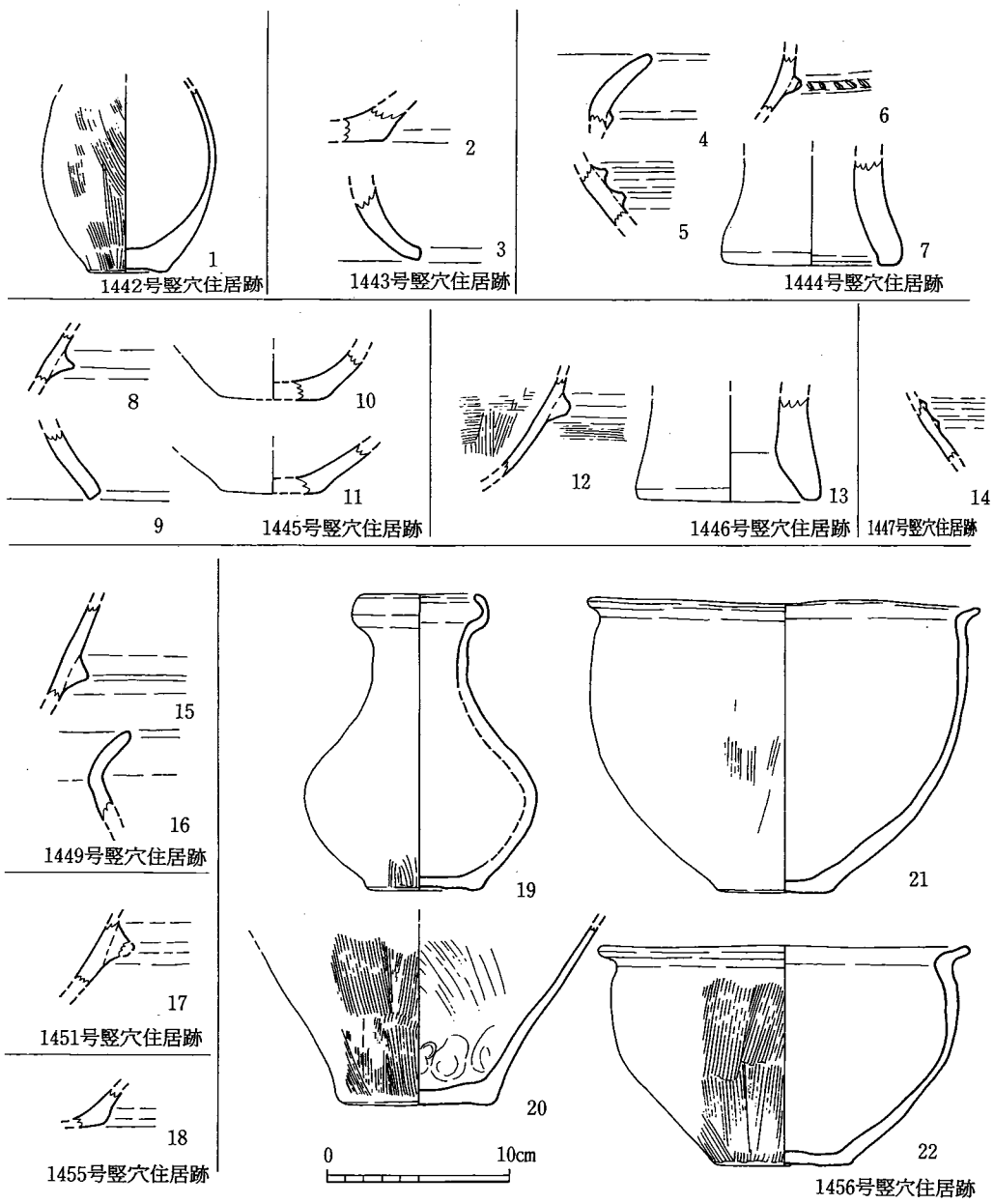
遺物（図版42　第14図１）１はP-１より出土した。外面ハケ目、内面は丁寧なナデにより仕上げる。底部はやや内彎する。（杉原）

1443号竪穴住居跡

遺物（第14図２・３）２の外底面端部の稜はやや鋭い。３の端部は丸みを持つ。（杉原）

1444号竪穴住居跡

遺物（図版50　第14図４～７　第17図18）４の口縁部は直線的に開く。頸部に突帯を貼付ける。５は壺の肩部で方形の突帯を２条貼付ける。６の突帯には刻み目を施す。７は底部の端部がわずかに内彎する。ほかに粘板岩製の砥石が出土している（第17図20）。



第14図　1442～1447・1449・1451・1455・1456号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4）

1445号竪穴住居跡

遺物（第14図８～11）８の方形突帯は端部が鋭い。９は磨滅激しく調整不明。10の底面端部は丸みを持つ。11は底部から胴部へは急激な丸みを持って広がる。（杉原）

1446号竪穴住居跡

遺物（図版50　第14図12･13　第17図６）12の器厚は薄く内外面に丁寧なハケ目を施す。13は磨滅により調整不明。ほかに石庖丁や鉄製品が出土している。第17図６はP-１より出土した花崗岩質砂岩の石庖丁である。（杉原）

1447号竪穴住居跡

遺物（第14図14）14は器厚薄く2条の突帯も丸みを持ってはっきりしない。（杉原）

1449号竪穴住居跡

遺物（第14図15・16）15には三角突帯が1条貼付く。16は頸部で鋭く屈曲する。（杉原）

1451号竪穴住居跡

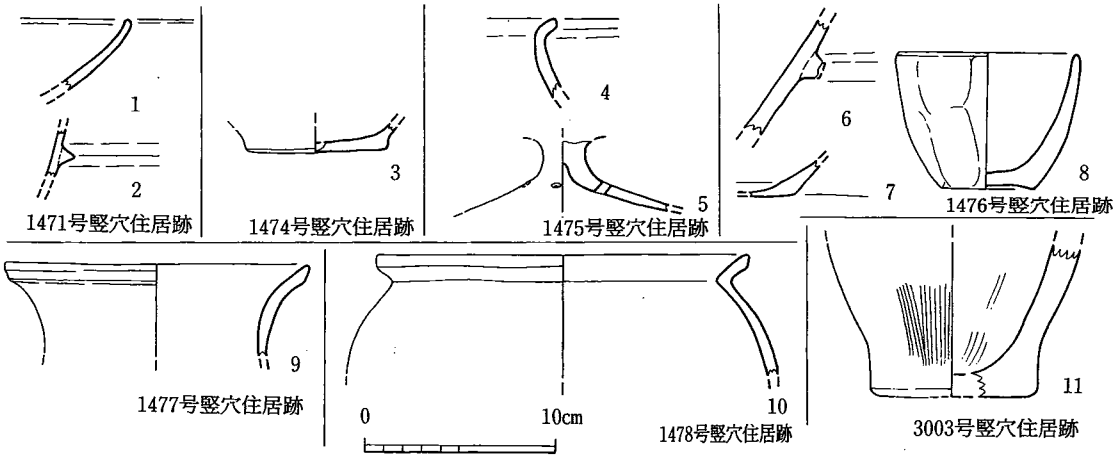
遺物（第14図17）17の突帯は欠損により、形状は不明。（杉原）

1455号竪穴住居跡

遺物（第14図18）18の外底面端部はわずかに丸みを持つ。（杉原）

1456号竪穴住居跡

遺物（図版42、第14図19～22）19は頸部が直線的に立ち上がる。20は平底で復元口径8.0cm。



第15図　1471・1474～1478・3003号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4）

21は口径21.5cm、器高15.8cm、底径6.2cm。22の鉢は器高12.0cm。　(杉原)

1460竪穴住居跡

遺物（図版52、第18図16）16の鑿は先端部付近では両側縁が鋭く作出される。　(杉原)

1471号竪穴住居跡

遺物（第15図１・２）１は口縁端部において丸みを持つ。２は三角突帯を１条貼付ける。

(杉原)

1474号住居（図版４　付図７、表５・81）

重複関係は、住1417号で詳述。

柱配置は、棟持柱Ｐ21・22を南・北側の柱筋に外・内接させ、南・北壁沿高床を配すが南・北壁を欠失するため、その幅は不明。

なお、北側のＰ22掘り形に重複が認められることから、この住居は建て替えを考慮すべきか。

桁行Ａ・棟持柱間a_1換算の算出値平均は、29.5cm。　(馬田)

遺物（第15図３）３は底西端部においてやや丸みを持つ。　(杉原)

1475号竪穴住居跡

遺物（第15図４・５）４の頸部は急に開く。５の脚部は裾部で急に開く。　(杉原)

1476号竪穴住居跡

遺物（第15図６～８）６は突帯が貼付くが欠損により、端部の形状は不明。７の底部は端部に丸みを持つ。９は底部がわずかに内彎する。　(杉原)

1478号竪穴住居跡

遺物（第15図10）10の頸部は鋭く屈曲する。復元口径19.9cm。　(杉原)

1477号竪穴住居跡

遺物（15図９）口縁は緩かに外反する。　(杉原)

2002号住居（図版54、付図９、表２・86）

重複関係は住1004号で詳述したが、北西壁隅部だけの残存で、住居規模は不明である。

(馬田)

2003号住居（図版７・８、付図11、表６・87・88）

重複関係は、建1022号で詳述。

2003号Ａ住居

棟持柱痕Ｐ21･22中心と西･東側の柱筋間は25cmほど離れるが、後述する建て替え前の住2003号Ｂの掘り形遺存規模が、床面を削平されても130cm×80cmの大きさを有すことから、使用した棟持柱径も25cmを越えて各柱筋に外接した配置としてよい。

桁行Ａ・棟持柱間a_1換算の算出値平均は、29.9cm。

2003号Ｂ住居

柱配置は、上述したように径25cmを越える棟持柱Ｐ21・22を、西・東側の柱筋に内接させたとしてよく、桁行Ａ換算の算出値は29.5cm。（馬田）

2004号住居（図版４、付図７、表５・89～92）

重複関係は、住1417号で詳述したように、Ａ⇨Ｂ⇨Ｃ⇨Ｄの順に建て替え・掘り替える。

2004号Ａ住居

柱配置は、棟持柱Ｐ21・22を南・北側の柱筋に内接させ、桁行Ａ約417cm・棟持柱間$a_1$404cmは、初出の住Ｄの同204cm・同208cmからほぼ２倍の柱間規模へと拡大させたことになる。

桁行Ａ換算の算出値は、29.8cm。

2004号Ｂ住居

桁行Ａ・棟持柱間a_1換算の算出値平均は、29.6cm。

2004号Ｃ住居

棟持柱間a_1換算の算出値は、30.9cm。

2004号Ｄ住居

桁行Ａ・棟持柱間a_1換算の算出値平均は、29.4cm。（馬田）

2005号住居（図版６、付図７、表５・93・94）

重複関係は、住1417号群で詳述。

2005号Ａ住居

建2016号Ａ～Ｃの柱穴群の検出作業を入念に実施した際も、棟持柱Ｐ21・22を除く主柱穴・壁土坑Ｄ21などは検出されず、削平に因り欠失したものと判断した。

棟持柱間ａ$_1$換算の算出値は、30.9cm。

2005号Ｂ住居

棟持柱間ａ$_1$換算の算出値は、28.8cm。（馬田）

2006号住居（図版２、付図８、表３・95・96）

重複関係は、住1017号で詳述。（馬田）

2006号Ａ住居

柱配置は、主柱穴Ｐ13を欠失するが、棟持柱Ｐ21・21共に南・北側の柱筋に外接させ、西壁中央部の方形区画H21内のＨＰ211・212と東壁中央土坑Ｄ21内のＤＰ211・212は共に、わずかに西・東側の柱筋内配置とした。

（ＤＰ211―ＤＰ212）間換算の算出値は、29.6cm。

2006号Ｂ住居

中央土坑Ｄ11は削平に因り欠失するが、Ｄ11内の柱穴様小ピットＤＰ111が遺存する。（西柱筋―ＤＰ111）間180cmは、（ＤＰ111―Ｐ22）間181cmと一致するに等しく、180×½＝90cmも方形区画H21長約93cmとほとんど一致し、180×⅓＝60cmも（ＨＰ211―ＨＰ212）間約59cmと一致するに等しく、前述Ａ住の（ＨＰ211―ＨＰ212）間60cmと一致する。

桁行Ａ・（ＤＰ211―ＤＰ212）間換算の算出値平均は、29.8cm。（馬田）

2007号住居（図版２、付図８、表３・97・98）

重複関係は、住1017号で詳述。

2007号Ａ住居

北側の柱筋外の方形区画H21内の柱穴様小ピット（ＨＰ211―ＨＰ212）間換算の算出値は、28.6cm。

2007号Ｂ住居

柱配置は、棟持柱Ｐ21・22を西・東側の柱筋に外接させ、棟持柱間ａ$_1$396cm×¼＝99cmは（Ｈ

P211—HP212）間100cmに一致するに等しい。

桁行A・（HP211—HP212）間換算の算出値は、29.1cm。　（馬田）

3001号住居（図版7、付図11、表6・99・100）

重複関係は、建1022号で詳述。

3001号A住居

柱配置は、棟持柱P21・22共に柱筋内側に配し、棟持柱間a_1と梁行Bは共に約248cmで一致し、248×½＝124cmと方形区画H21の（HP211—HP212）間約128cmもほぼ一致する。

なお、建1022号の表6で示すように、ⅢXa_1住132号案・ⅢYa住134号案・ⅢZa_2住3001号Aはいずれも Ⅲ群で、各住居の（北壁—南壁）間はそれぞれ約504・504・500cmで、一致するに等しい。

また、住3001号Aの桁行Aと住134号案の棟持柱間a_1も共に約360cmで一致し、住132・134号の桁行Aも共に約316cmで一致するなど、主軸の類似だけでなく、柱配置・住居規模に一致する点が多い。

方形区画H21内の（HP211—HP212）間換算の算出値は、32.0cm。

3001号B住居

柱配置は、建て替え後の住3001号Aの棟持柱P22を住3001号Bの北側柱筋下の（P1—P2）間中心に配しており、このことと住3001号Bの内接棟持柱P22に因り復原したが、中央土坑D11は南側柱筋中心で内接する配置である。

また、北壁中央部西寄りに方形区画H21、北壁両端に壁隅高床を配し（HP211—HP212）間142cmは桁行約296cm×½＝148cmとほぼ等しい。

桁行A・（HP211—HP212）間換算の算出値平均は、29.0cm。　（馬田）

3002号住居（図版4、付図7、表5・101）

重複関係は、住1417号群で詳述したが、未掘のため、柱配置は不明。　（馬田）

3003号住居（図版4、付図7、表5・102）

重複関係は、住1417号群で詳述したが、柱配置は不明。　（馬田）

遺物（第15図11）　甕の底部片で、外面にタテハケ、内面に工具のあたりが見える。復元底径8.0cm.　（齋藤）

3004号住居（図版2、付図8、表3・103）

重複関係は、住1017号群で詳述したが、住居の規模などは不明。　（馬田）

3005号住居（図版２、付図８、表３・104・105）

重複関係は、住1017号群で詳述したが、主柱Ｐ11～14は壁隅配置か。

3005号Ａ住居・3006号Ｂ住居の桁行Ａ換算の算出値は、それぞれ31.1cm・31.0cm。　（馬田）

(2)　掘立柱建物跡

1022号掘立柱建物跡（図版８、付図11、表６・114・115）

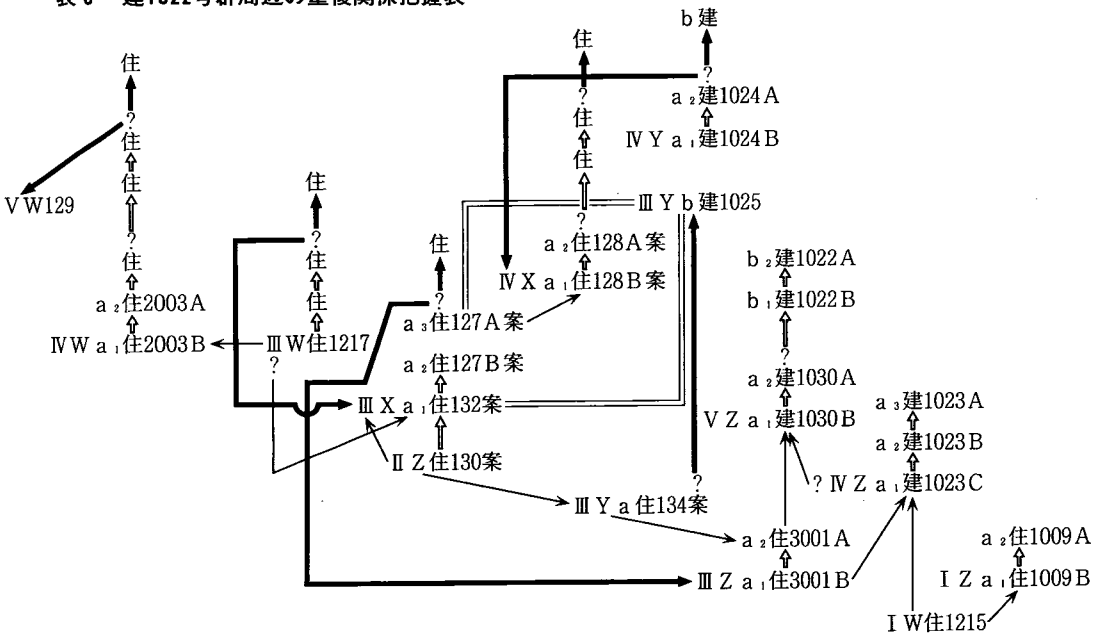
Ⅴ建1022号群（建1022Ａ・Ｂ、建1023Ａ・Ｂ、住131号案）とⅠ住1215号群（住1009Ａ・Ｂ、住1215）、Ⅱ住130号案、Ⅲ住3001号群（住1217、住3001Ａ・Ｂ、住127Ａ・Ｂ案、住132・134案、建1025）、Ⅳ建1023号群（住2003Ａ・Ｂ、住128Ａ・Ｂ案、建1023Ａ～Ｃ、建1024Ａ・Ｂ）、溝1002号群（溝1002・１）との重複関係

上記の住居群16軒・建物群10棟の計26遺構群の重複関係把握例を表６に示す（旧⇨新、古→新、前➡後の表記については、住1004号での説明を参照のこと）。

なお、上計26遺構群のなかで、『以来尺Ⅰ』では建1024・1025号を報告し、『以来尺Ⅱ』では127～132・134号竪穴住居跡（以下、住127号など略す）が報告されており、筆者はこれら３桁番号の住居の掘り下げ作業終了近くの段階で新たに調査担当者に加わり、住131号については住1217号の４桁番号を付していた（住2003は報告書作成時の実測図検討段階での住居把握番号）。

また、住3001号Ａは前担当者が133号の番号を付して掘り下げた住居に1024号を、住3001号Ｂ

表６　建1022号群周辺の重複関係把握表



は同様に1025号を付していたものであるが、『以来尺Ⅰ』での既報告住1024・1025号と重複して番号を付していたため、本報告で住3001号A・Bとしたものである。

ところで、本報告では筆者報告の4桁遺構群の重複関係の把握上、既報告3桁番号住居群に対して、127号案などのように筆者「案」での規模復原を含む試考をさせて頂きました。

なお、溝1002号は溝1号と共に中世の溝で上述の26遺構群よりも新しいが、溝1002号が住3001号B以西で攪乱を受けるが、この溝は住130号案の棟持柱P21部までは掘り込みが続くが、このP21以西では住130・132・134号案の柱穴群などが検出でき、溝1002号は確認していないため、調査区東外から続くこの溝はこの攪乱部までで収束するか、南に屈折するのだろうと担当者の説明を得ている。

Ⅰ群（W・Z列）

①Z a住（a_1住1009B→a_2住1009A）のa_2住の方形区画H21柱穴様小ピットHP211は、W住1215の流入埋土下で検出したことから、〔Ⅰ群W列→Ⅰ群Z列〕。

②住1215北壁は、後述のⅣZ a建1023（a_1建1023C⇨a_2建1023B⇨a_3建1023A）のP3掘り形に切られることから、〔Ⅰ群→Ⅳ群〕。

Ⅱ群（Z列）

③住130案の北壁は後述するⅢX a_2住127B案（a_1住132案⇨a_2住127B案⇨a_3住127A案）に切られ、東壁沿高床も後述するⅢY a住134案に切られることから、〔Ⅱ群→Ⅲ群X列〕・〔Ⅲ群Y列〕。

④また、上記の住134案東壁は、後述するⅢZ a_2住3001A（a_1住3001B⇨a_2住3001A）北壁に切られることと③から、〔Ⅱ群→Ⅲ群Y列a→Ⅲ群Z列〕。

⑤加えて、上記の住3001B北東壁隅は②で既述したⅣZ a建1023A～CのP5掘り形に切られ、住3001A東壁沿高床・住3001B北壁は後述のⅤZ a建1030A・BのP6掘り形に切られることから、〔Ⅱ群→Ⅲ群Y列a→Ⅲ群Z列a→Ⅳ群Z列a〕・〔Ⅱ群→Ⅲ群Y列a→Ⅲ群Z列a→Ⅴ群Z列a〕。

Ⅲ群（W～Z列）

⑥X住127案（a_2住127B案→a_3住127A案）は、X a_1住132案の北壁を切ることから、（a_1→a_2⇨a_3）。

⑦なお、周辺の丘陵地勢は、住127案部より住132案部へと標高が低くなるが、住132案の西柱筋～西壁間部は住127案西壁部への盛土壁堤構築で、住127案内への水の流入を防ぐことができ、主軸差も4°とほぼ一致することなどから、⑥のX例は〔a_1⇨a_2⇨a_3〕の順で掘り替え・建て替えたものと把握した。

⑧また、X a住127案西壁はW住1217中央土坑D11を切り、住127案西壁沿高床東縁部は逆に住1217号棟持柱P22の掘り形に切られる状態での掘り下げとなっているため、諸般の事情に因

り、W住1217→Ｘａ住127案とし、〔Ⅲ群Ｘ列→Ⅲ群Ｘ列〕と把握した。

⑨ところで、Ｙｂ建1025はＸa_1住132・$a_2$127Ａ・127Ｂ案とは220～280㎝離れ、重複もしないことから、同時併するものか。

Ⅳ群（Ｗ～Ｚ列）

⑩Ｘａ住128案とⅢＸａ住127案との新・古関係については、住128案東壁沿高床面が最も高く、住128案中央部床面東半部、住127案東壁沿高床面、住127案中央部床面の順に各床面が低く掘り上げられ、図示したように、a_1住128案西壁ラインが住127案中央部床面検出前の段階で確認・実測していることから、（住128→住127）ではなく、住127案→住128案と把握でき、〔Ⅲ群Ｘ列→Ⅳ群Ｘ列〕。

⑪また、Ｘａ住128案中央土坑Ｄ11と土坑内の柱穴様小ピットＤＰ111は、Ｙａ建1024のＰ６掘り形とそのＰ６に一致し、住居と建物の主軸差は３°でほとんど一致することなどから、古い建1024Ｐ６の配置を新しい住128案構築の際にも意図的に継承し（継承させられ）、重複させた（させられた）ものと把握した。

⑫なお、Ｗａ住2003棟持柱Ｐ22の掘り形は、既述のⅢＷａ住1217中央土坑Ｄ11を切ることから、〔Ⅲ群Ｗ列→Ⅳ群Ｗ列〕。

Ⅴ群（Ｗ・Ｚ列）

⑬Ｗ住129南壁は、ⅢＷ1217棟持柱Ｐ21を切り、既述のⅣＷａ住2003棟持柱Ｐ22の掘り形に切られる状態（Ⅲ群Ｗ列→Ⅴ群Ｗ列→Ⅳ群Ｗ列）で掘り下げられている。

⑭しかし、a_1住2003Ｂの規模は既述したⅠ～Ⅳ群中では最も大きく、棟持柱Ｐ21・22の掘り形も上部が削平を受けて床面も遺存しないが、現存で長軸長118～130㎝と大きい隅丸長方形を呈し、住129の規模（北壁―南壁間約470㎝）とほぼ同じで、住129の柱配置が不明瞭であるが、ＶＷ住129は古いⅣＷａ住2003の配置を意識し、新しく構築したものと把握し、〔Ⅲ群Ｗ列→Ⅳ群Ｗ列→Ⅴ群Ｗ列〕として表記した。

建1022号Ａ

床束Ｐ81・82を配し、（Ｐ81―Ｐ82）間約231㎝は桁行約458㎝×½＝229㎝と一致するに等しく、桁行Ａ・棟持柱間a_1換算の算出値平均は30.5㎝。

建1022Ｂ

以来尺遺跡出土の数多くの建物・住居について桁行・棟持柱間換算の算出値と算出比を示してきたが、多数の例では梁行は整数比とならないなかで、桁行15.0・梁行10.0・棟持14.0で梁行も含めて三者共に整数比となる数少ない例である。

桁行Ａ・棟持柱間a_1換算の算出値平均は、30.7㎝。　（馬田）

1023号掘立柱建物跡（図版７、付図11、表６・116～118）

重複関係は、建1022号で詳述。

1023号Ａ建物

棟持柱を配さず、床束Ｐ81・82を配すが、（Ｐ81―Ｐ82）間143cmは桁行429cm×⅓＝143cmと一致する整然とした柱配置で、床束（Ｐ81―Ｐ82）間換算の算出値は28.6cm。

1023号Ｂ建物

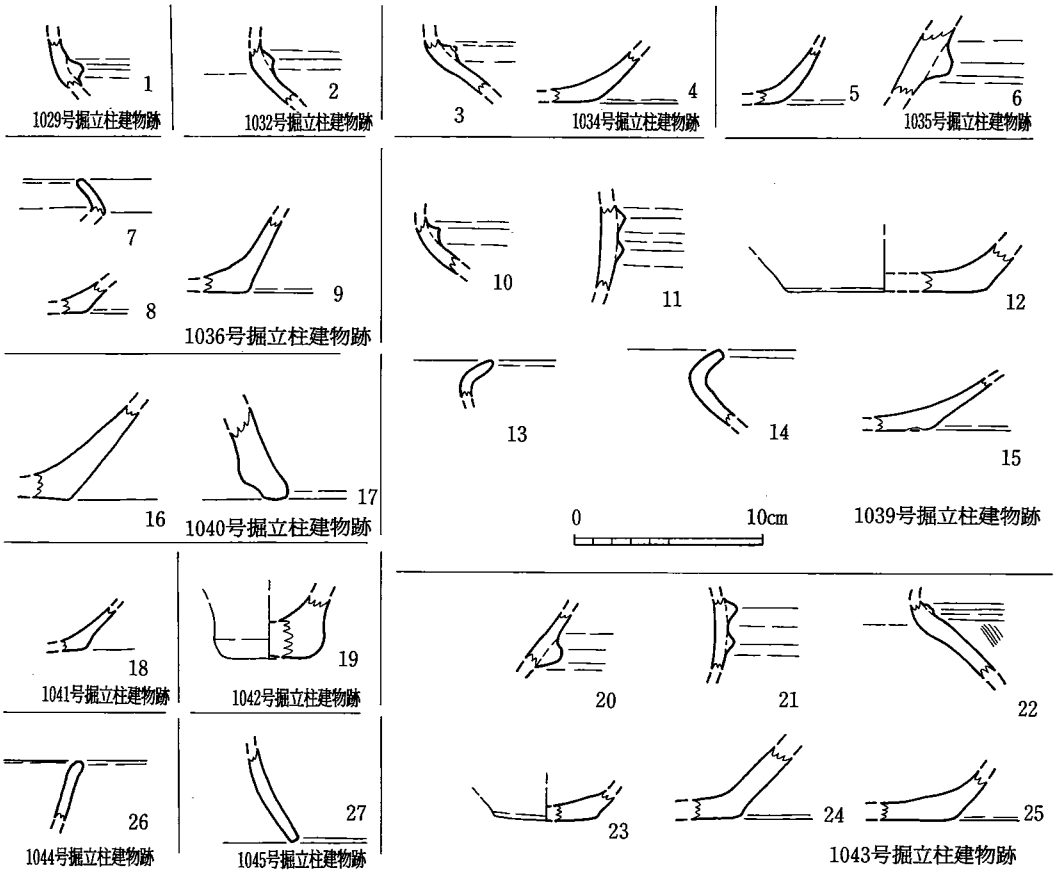
床束（Ｐ81―Ｐ82）間換算の算出値は、28.0cm。

1023号Ｃ建物

桁行Ａ・床束間（Ｐ81―Ｐ82）換算の算出値平均は、28.8cm。　（馬田）

1029号掘立柱建物跡

建物（第16図１）１の器面調整は不明。　（杉原）



第16図　平坦地区掘立柱建物跡出土土器実測図（1/4）

1030号掘立柱建物跡（図版７、付図11、表６・119・120）

重複関係は、建1022号で詳述。（馬田）

1030号Ａ建物

柱配置は、棟持柱Ｐ21・22を北・南側の柱筋に内接させ、棟持柱間a_1換算の算出値は30.7㎝。

1030号Ｂ建物

棟持柱内接の柱配置で、桁行Ａ換算の算出値は30.2㎝。（馬田）

1032号掘立建物跡

遺物（第16図２）２の三角突帯の稜は不明瞭である。（杉原）

1034号掘立柱建物跡

遺物（第16図３・４）３は突帯の端部を欠損する。４は底面端部に丸みを持つ。（杉原）

1035号掘立柱建物跡

遺物（第16図５・６）５は底面端部に丸みをもつ。６は方形突帯が貼付く。（杉原）

1036号掘立柱建物跡

遺物（第16図７～９）７の口縁端部は丸い。８・９はいずれも平底である。（杉原）

1039号掘立柱建物跡

遺物（第16図10～15）10･11の三角突帯の稜は鋭い。12の復元口径は10.4㎝を測る。13の器面調整は不明。14は内外面ともにナデ調整。15は調整不明。（杉原）

1040号掘立柱建物跡

遺物（第16図16・17）16は底面端部に稜を持つ。17は二次的加熱の可能性あり。（杉原）

1041号掘立柱建物跡

遺物（第16図18）18は外底面にやや膨らみを持つ。（杉原）

1042号掘立柱建物跡

遺物（第16図19）19の器面調整は不明。（杉原）

1043号掘立柱建物跡

遺物（図版52　第16図20～25、第18図11）20・21の突帯はいずれもはっきりしない形である。22は外面にわずかにハケ目を観察できる。23はやや凸ぎみの底部。24･25は調整不明。 ほかに鉄製品が出土している（第18図11）。11は透孔付鏃で鏃身先端と茎部を欠損。　（杉原）

1044号掘立柱建物跡

遺物（第16図26）26の端部はわずかに肥厚する。　（杉原）

1045号掘立柱建物跡

遺物（第16図27）27の裾端部は方形で横ナデする。　（杉原）

2015号掘立柱建物跡（図版３、付図10、表４・121）

重複関係は、住1051号で詳述したが、桁行規模は、Ｐ１以西あるいはＰ３以東の柱配置も考慮すべきかも知れないが、桁行２間約529cmでの桁行Ａ換算の算出値は、29.4cm。　（馬田）

2016号掘立柱建物跡（図版６、付図７、表５・122～124）

重複関係は、住1417号群で詳述。

2016号Ａ建物

柱配置は旧出のＢ・Ｃ建物同様に棟持柱を配さず、桁行比1.30前後の梁間１間型の桁行１間規模の建物で、桁行Ａ・梁行Ｂ換算の算出値平均は29.2cm。

2016号Ｂ建物

桁行Ａ・梁行Ｂ換算の算出値平均は29.0cm。

2016号Ｃ建物

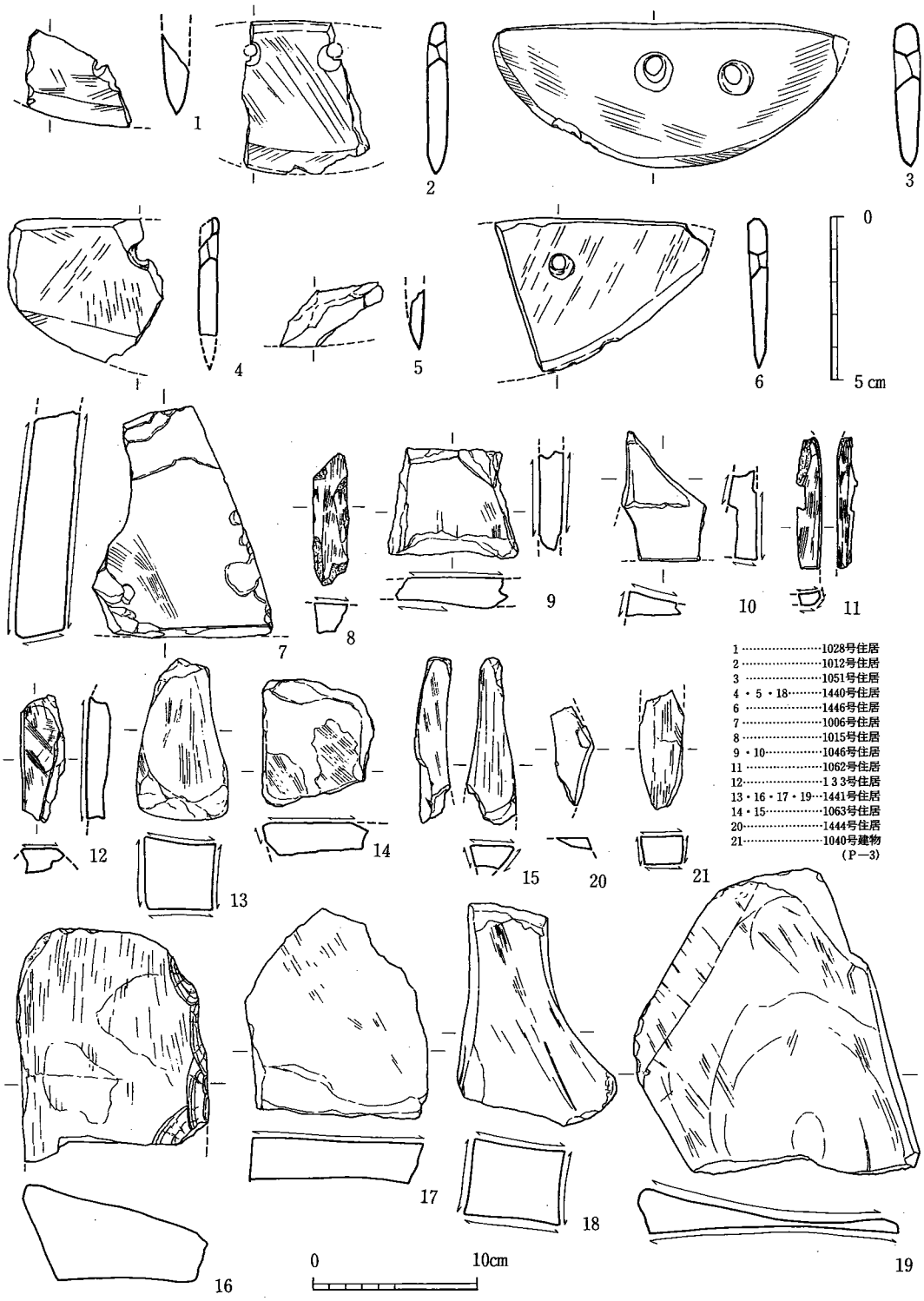
桁行Ａ・梁行Ｂ換算の算出値平均は、30.3cm。　（馬田）

2017号掘立柱建物跡（図版２、付図８、表３・125）

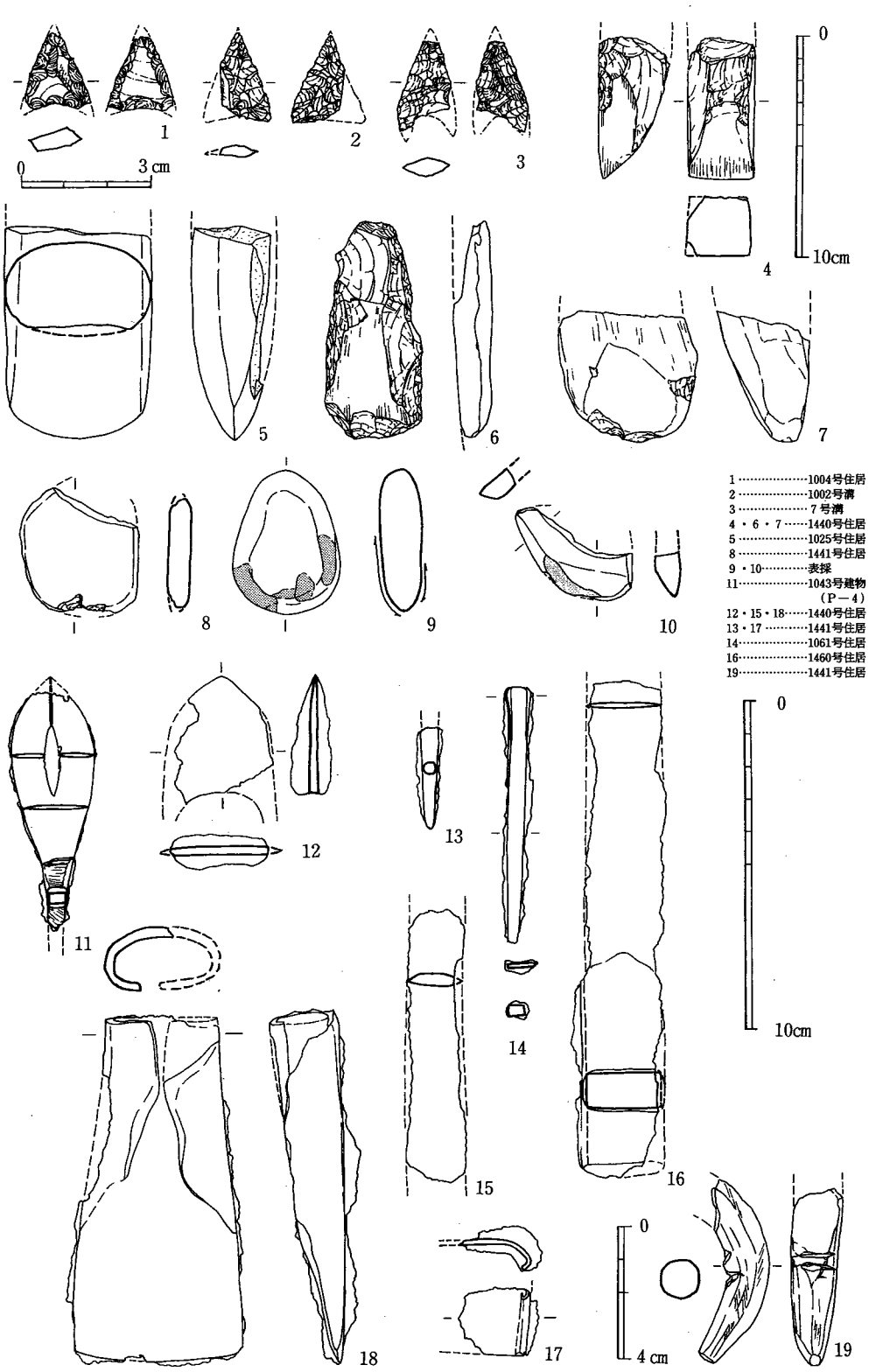
重複関係は、住1017号で詳述。

付図８の断面図に示すように、Ｐ１は掘り形を検出し得ずに、直接柱痕のみを掘り下げてしまったものと思われ、柱径は約52cmと著しく大きく、Ｐ２の柱底痕でも43～48cmと大きい。

各柱穴掘り形底・柱痕底の標高は、Ｐ１が45.08m・Ｐ２が45.45m・Ｐ３が45.22m・Ｐ４が44.89m・Ｐ６が44.00m・Ｐ21が45.32m・Ｐ22が44.74mを測り、建物の立地は丘陵南斜面で北側の柱筋（Ｐ１―Ｐ３）が標高高位、南側の柱筋（Ｐ４―Ｐ６）が標高低位である。



第17図　平坦地区出土石庖丁・砥石実測図（1/2　1/4）



第18図　平坦地区その他の石製品・鉄製品・玉類実測図
（1～3は2/3　4～10は1/3　11～17は1/2　19は1/1）

上記のように、北柱筋では、Ｐ２が隅柱のＰ１・３よりも37cm・23cm浅いことから、南柱筋でもＰ５が隅柱のＰ４・Ｐ６よりも20～40cm前後浅い標高44.37m～45.09mの掘り形底面で掘り込まれていたなら、Ｐ５部の住1145（床面標高44.60m）・住1218（同44.50m）に切られて欠失したことも考えられ、Ｐ６掘り形も住1116北壁に切られることや、Ｐ１の掘り形が検出し得なかったこと（以来尺遺跡では、丘陵平坦部の円形住居北東端部1440号も地山と埋土の区別が簡単には識別し得ず、掘り下げ当初は小トレンチを多く設けて壁面検出を行ったほどである）などからも、表３に示したように、II"Ｘ建2017はII"住3004と共に、Ｉ'溝1008やＯＹ住1149などの円形住よりは新しいが、弥生時代後期ではない中期後半まで古く考える必要もあろう。

ところで、上記のようにも時期を考えなくても、この建物の規模（507cm×534cm）と棟持柱Ｐ21・22を配すが総柱でないことや、急傾斜地、等高線方向と柱筋が45°近くズレることなどから、この建物が単なる高床建物ではなく、丘陵眼下の展望を意図した特殊な大型建物であることは、まちがいないであろう。

桁行Ａ・棟持柱間a_1換算の算出値平均は、29.8cm。（馬田）

(3) その他の遺物

ここでは、遺構の報告のないものや混入遺物ついても報告する。

石庖丁（図版50　第17図）1012号・1028号住居（2・1）よりそれぞれ出土している。粘板岩製でどちらも欠損品。

砥石（図版50　第17図７・９・10・12）いずれも住居跡出土である。1006号では花崗岩質砂岩の砥石が１点出土しており、全体に火を受け赤変している（7）。1046号住居では緑色片岩製と珪質層灰岩製の砥石が出土している（9・10）。12は粘板岩製。

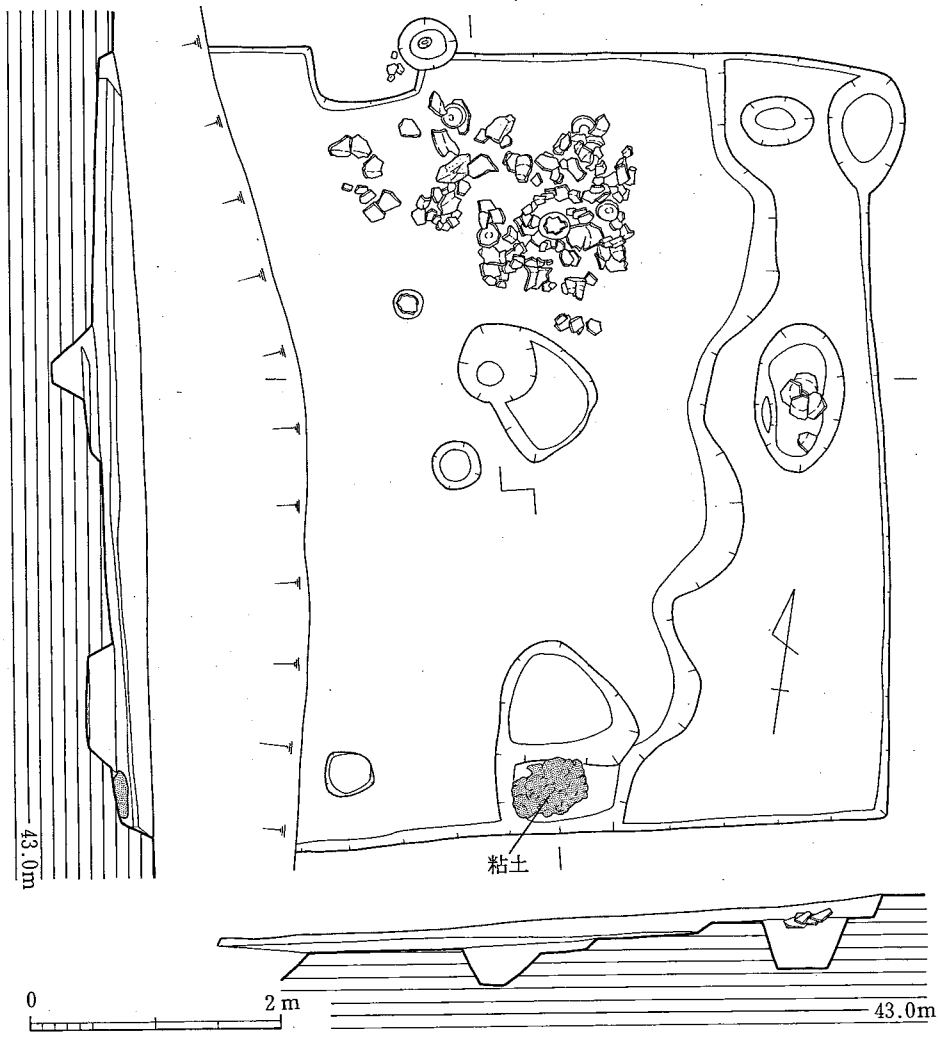
石器（図版50　第18図１～３・５・10）１は素材面を大きく残す。1004号住居出土。２は1002号溝より出土。左基端から胴部を大きく欠損する。黒曜石製。３は７号溝より出土で同じく黒曜石製。５は玄武岩製の磨製石斧で胴部から着柄部にかけて大きく欠損する。10025号住居のカマド付近より出土。10は一部に研磨がみられ、火を受けている。砂岩製。（杉原）

３．弥生時代の遺構と遺物２　―斜面地区の調査―

(1) 竪穴住居跡

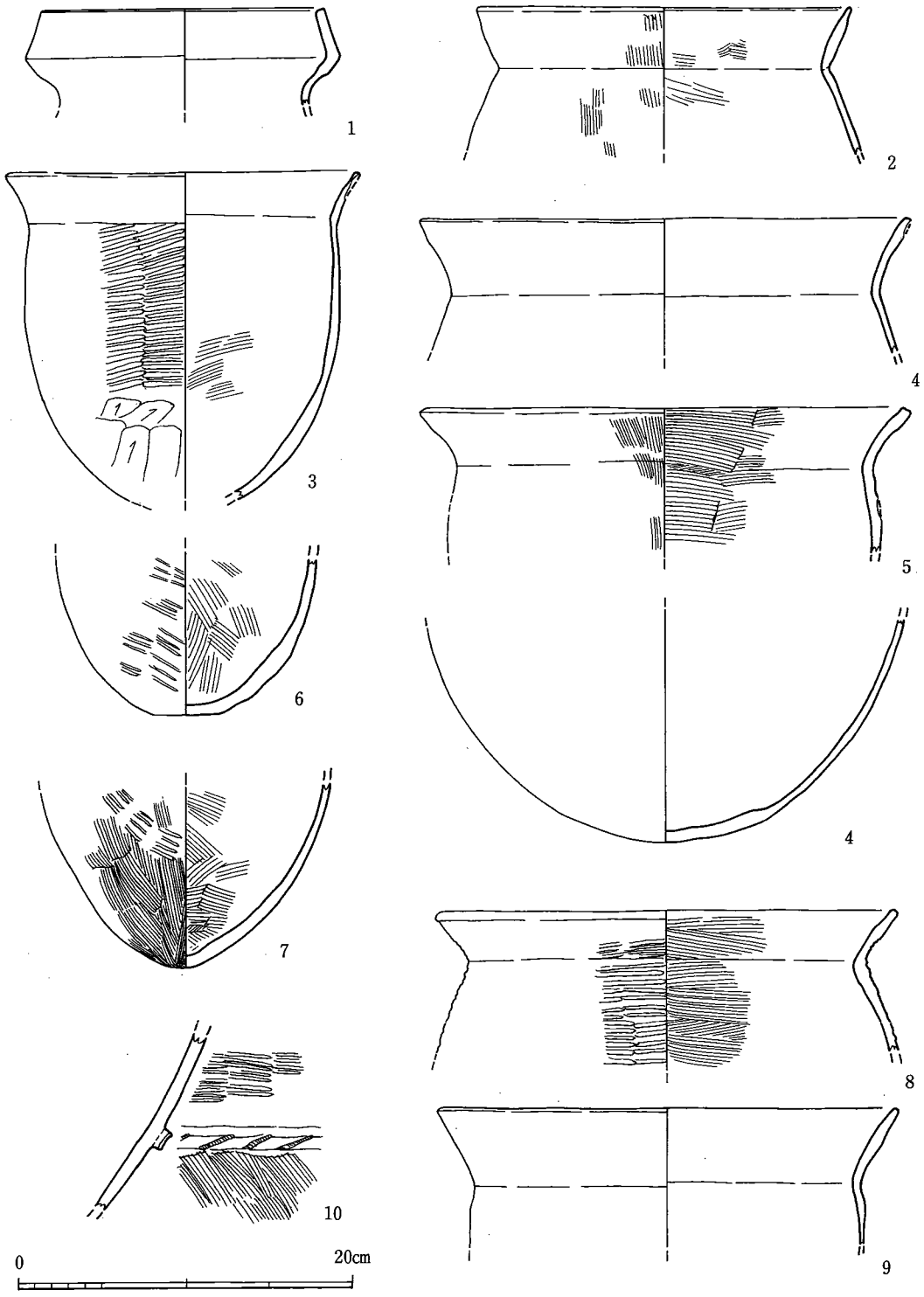
36号竪穴住居跡（図版20　第19図）

36号竪穴住居跡は斜面地区の南端部住居跡群の中でも、東側に1軒だけ孤立した状態で存在す

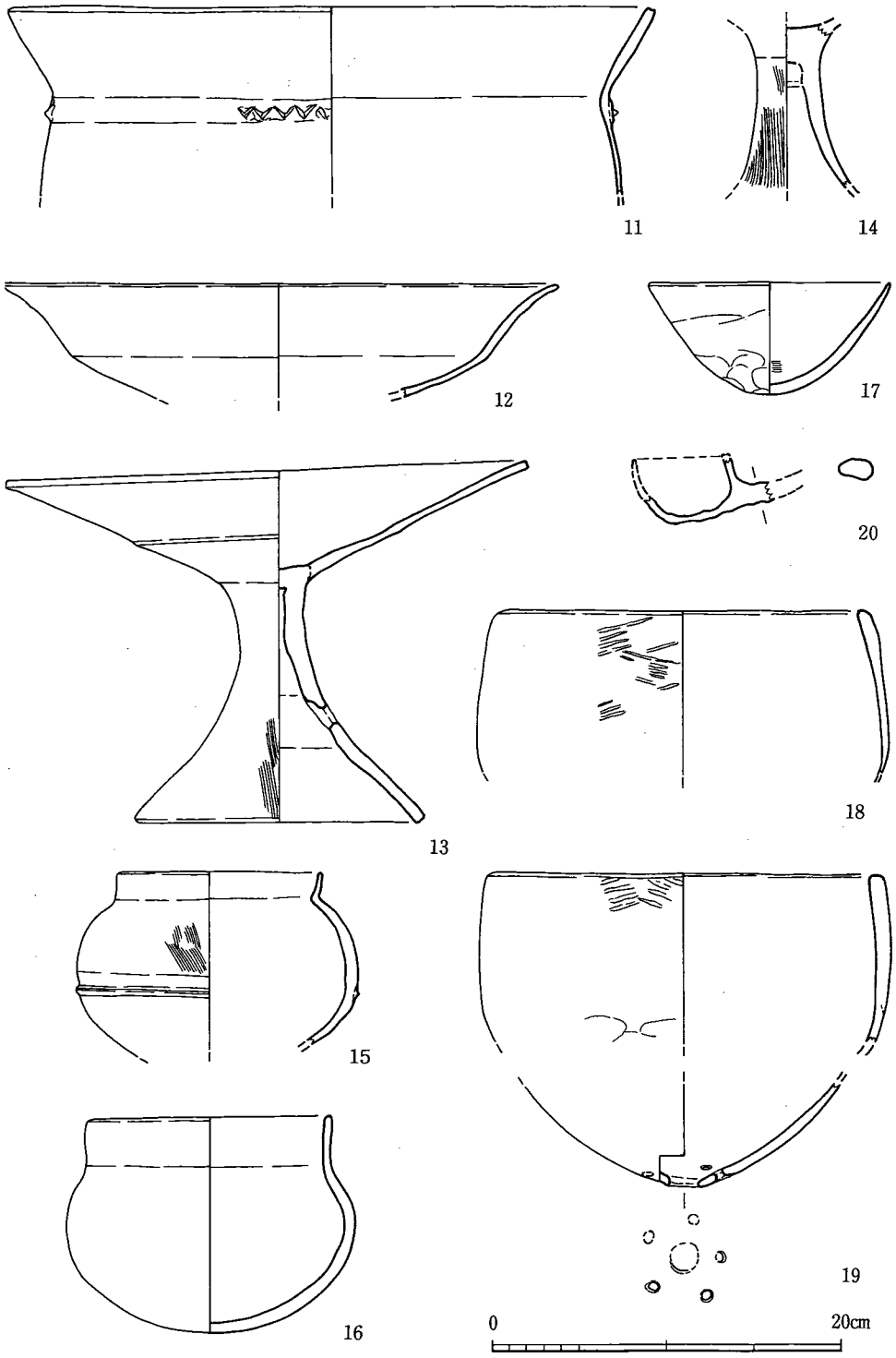


第19図　36号竪穴住居跡実測図（1/60）

る。半径15m以内に他の竪穴住居跡はなく、この住居跡自体も削平により西側壁が残っていない。南北方向は6.5mが測れるが、西壁が存在しない東西方向には最高で5.2mまでしか測れない。東壁には地山の削りだしによるベッド状の高まりが見られるが、幅は0.7～2.0mの範囲で波打っており直線的ではない。床面はフラットではあるが、貼り床の痕跡はなく、また炉跡や主柱穴も認められない。南壁の中央部には138×110×33cmの屋内土坑状の掘り込みがあるが、テラス状の高まりの部分に黄白色の粘土塊があるだけで、他に遺物はまったく出土していない。本住居跡の北側でかなり纏まった遺物の出土を見たが、これらはいずれも埋土中に投棄されたような状態で出土しており、住居跡の生活に直接的に関係したものではない。調査においては、当初方形のプランやサイズから竪穴住居跡という認識で掘り進めたが、ベッド・炉跡・主柱穴・床面状況等から人間が生活した遺構とするには多くの問題点が生じた。正確不明の遺構ということになるが、ここでは便宜的に竪穴住居跡として位置づけた。



第20図　36号竪穴住居跡出土土器実測図．1（1/4）



第21図　36号竪穴住居跡出土土器実測図．2 (1/4)

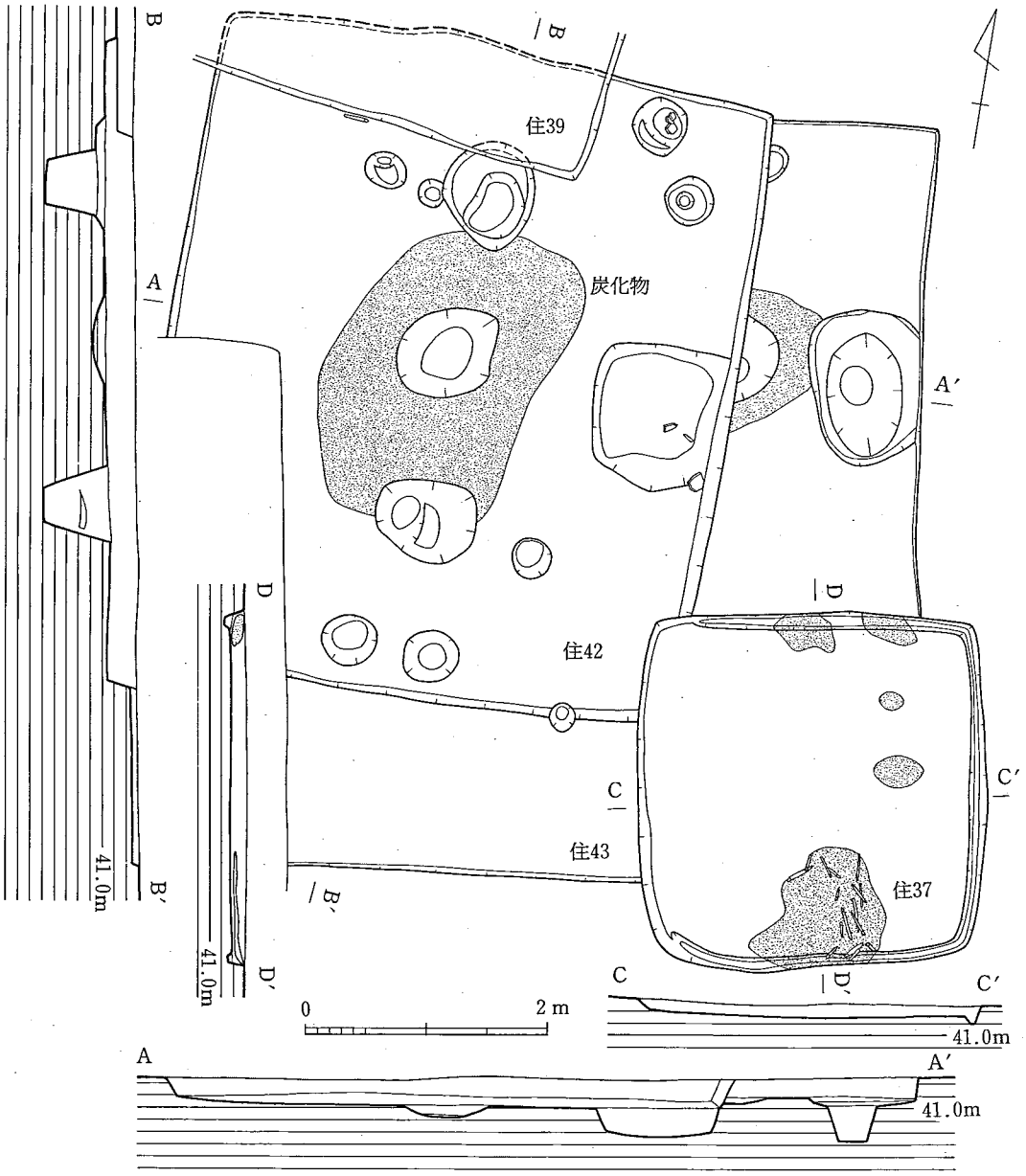
遺物（図版43・51　第20・21図　第54図１）　１は復原口径17cmの壺の口縁部で、器面調整はナデ。２～11は甕で、器面調整は外面についてはタタキ後にハケが施されるのが一般的。3のように底部付近が削られるものもある。底部は丸底もしくはわずかに平坦部の残る平底で、３・５・７には二次加熱による変色が窺える。内面の器面調整が窺えるものについてはすべてハケ。10・11は大型甕で、突帯文にはハケ工具による刻目が施される。11は全体に二次加熱による変色が見られる。12～14の高坏は摩滅が著しいが、脚部外面の調整はハケ。13の坏部口唇には平坦面が作られ、屈曲はごくわずか。15・16は小型の丸底の鉢で、15のように胴部に1本の突帯文が貼り付けられるのは珍しい。17は手捏ねで、指頭圧痕が目立つ。18・19は二次加熱による変色が見られること、および19の底部に見られる大きな穿孔とそれを巡る小さな５つの穿孔から甑と考えられる。外面にはタタキが痕跡的に残る。20は遺存状態が悪く器形の判断に苦しむが、おそらく小型の柄杓形土器であろう。第54図１は埋土より出土した砂岩質の砥石で、全面に亘り使用される。残存長8.4cm、幅5.7cm、厚さ1.2cm。本来はもっと長いものであったようだが、欠損してこのような長さになっている。欠損後の使用は窺えない。また、３×2.5mmのガラス小玉が出土している（『以来尺遺跡Ⅰ』第247図216）。　（水ノ江）

37号竪穴住居跡（図版20・21　第22図）

37号竪穴住居跡は斜面地区の南端部住居跡群の中でも、中央部東寄りに位置し、直接的には42・43号竪穴住居跡を切るという先後関係を有する。2.9×2.8mというかなり小型の正方形プランで、壁高は最高でも12cm。北壁・東壁・南壁の３方向にのみ幅12～15cm、深さ３～５cmの壁溝が「コ」字状に巡る。炉跡や柱穴はまったく検出しておらず、また遺物は弥生土器の小片が少量出土しているだけで、図示できるものはない。ただし、床面に貼り付くように炭化物や焼土が広がっているが、これらは壁溝が埋まった後によるものであり、本住居跡が何等かの機能をしている段階に伴うものではないと考えられる。上部構造物（屋根等）の焼失の痕跡とも考えられるが、それにしては量的に少ない感じがする。本住居跡については、その規模や床面構造から、他の住居跡とは異なった機能を有していた可能性が高い。　（水ノ江）

38号竪穴住居跡（図版21　第23図）

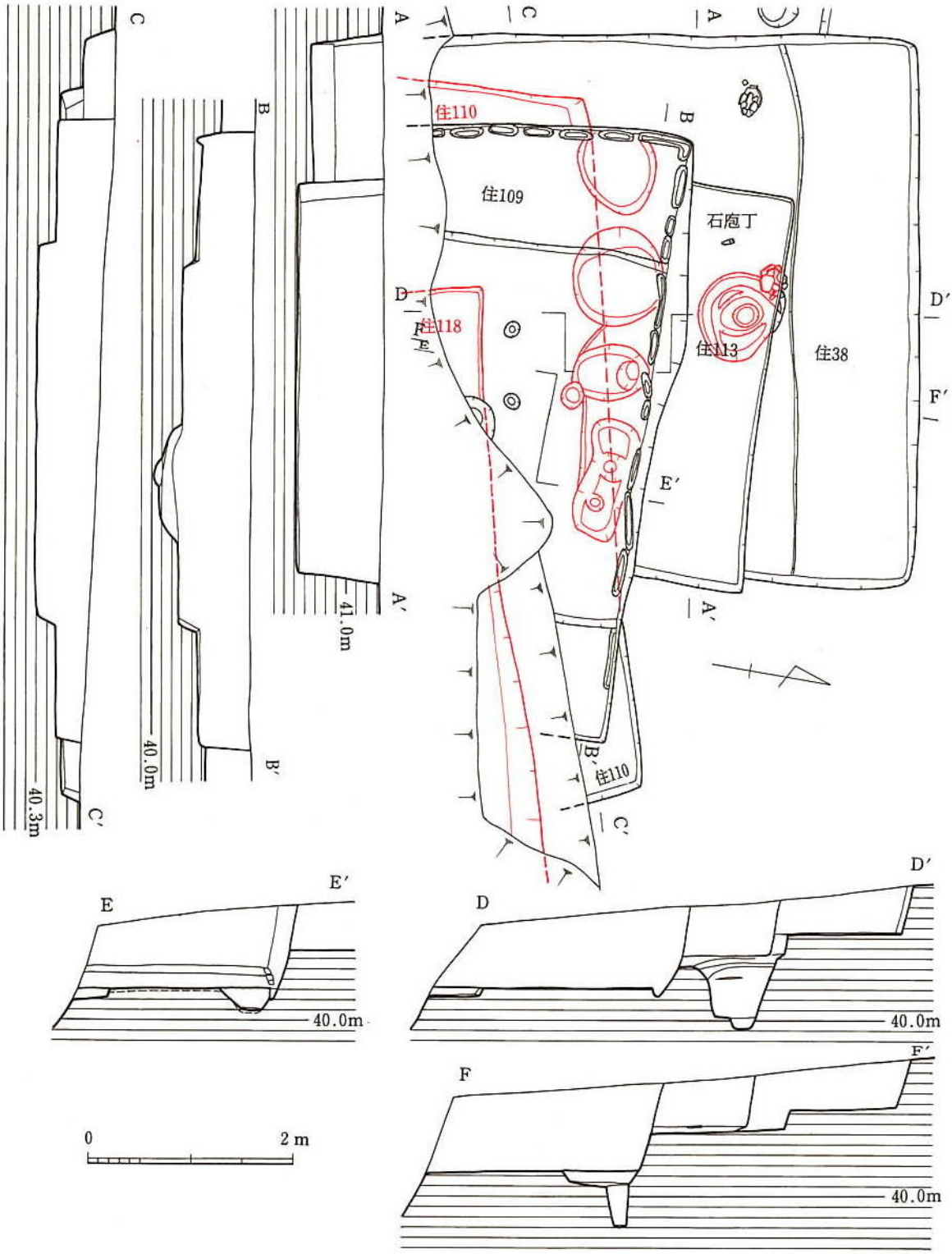
南東部の斜面区南側に位置し、西半部を市道によって開削され、109・110・113・118号竪穴住居跡に切られているため、東側1/3が残るのみである。短辺は5.4mを測るが、長辺は炉が失われているため、規模を復元できないが、長方形２本柱竪穴住居跡であろう。上面を大きく削平されているにもかかわらず壁の残りはよく、床面までもっとも深いところで80cmを測る。東側主柱穴は113号竪穴住居跡の下から検出され、掘形から見て柱は抜き取られていると思われる。地山削り出しのベット状遺構が確認された。第27図２の甕は床面に貼りついて出土した。



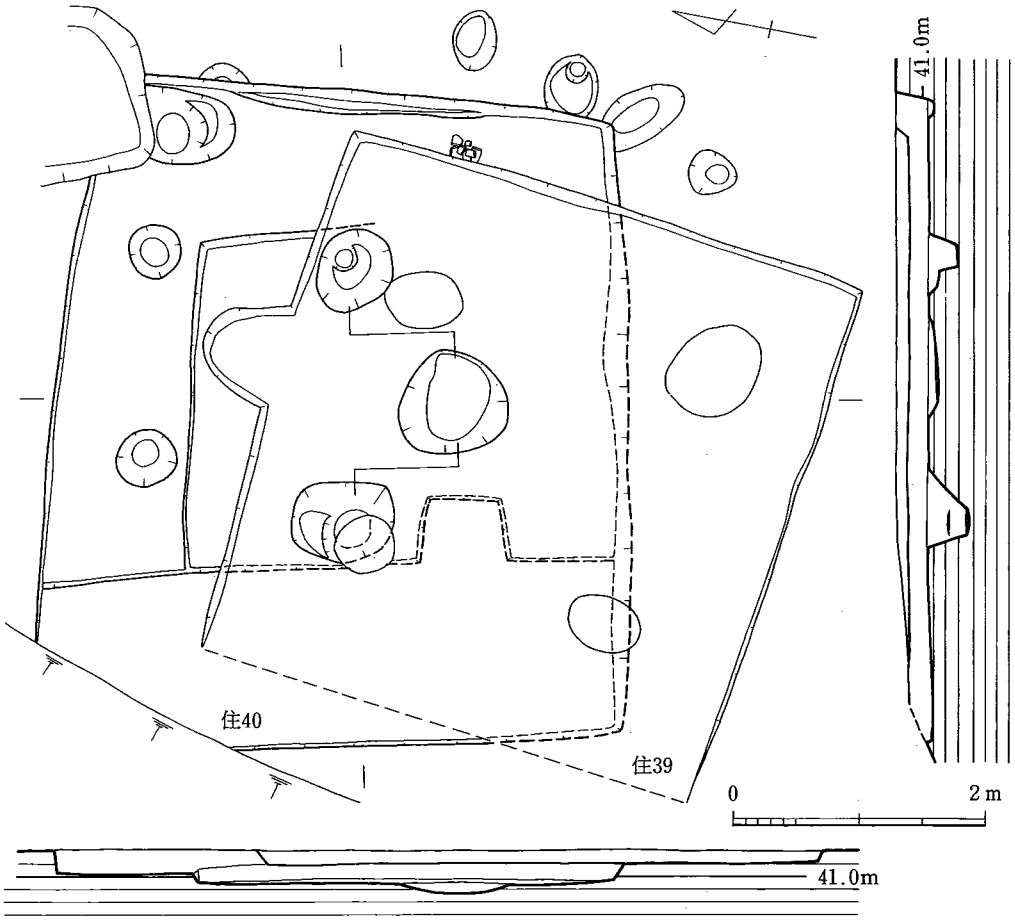
第22図　37・42・43号竪穴住居跡実測図（1/60）

遺物（図版44　第27図１～６　第53図１　第54図２）

１は甕で、胴部が失われている。肩部の内面は器面が剝落している。底部は外面が削りの後ナデで、胴下半分を削っていたと思われる。２は胴部が若干失われた甕で、外面下半は１と同様で、削りの後ナデで内面はハケがよく残っている。器壁は薄く、つくりは丁寧で、胎土も精良である。３は甕の底部片で外底中央を除いて、２次焼成によって赤変しているので、支脚使



第23図　38・109・110・113・118号竪穴住居跡実測図（1/60）



第24図　40号竪穴住居跡実測図（1/60）

用と思われる。4は小型甕の底部で器壁が厚くつくりが悪い。5は鉢でつくりは丁寧である。外面はハケ目をナデ消しており、内面は磨滅している。6は沓型支脚のミニチュアであろう。第54図2は粘板岩製の砥石片で、欠損した後も整形使用した面や、整形した面があるので、最終的には小型の手持ち砥石として使用したことが伺われる。第53図1は結晶片岩系の石材の石庖丁で床面に貼りついて出土した。（水ノ江）

40号竪穴住居跡（図版21　第24図）

40号竪穴住居跡は斜面地区の南端部住居跡群の中でも、北側中央部に位置し、古墳時代の39号竪穴住居跡に大きく切られ、また北東隅と北西隅は削平され残らない。それでも5.3×4.7mという数値は得られ、北側にわずかに開く正方形に近い長方形プランであったことがわかる。幅1.1～1.4mの地山削りだしによるベッドが、南側に開く「コ」字状に巡り、主柱穴は東西の

長軸線上に径55～75cm、深さ30cm程度のものが2基並ぶ。炉跡は85×70×８cmで、かなり南壁に寄っており、屋内土坑は存在しない。西側のベッドには55×65cmの地山削りだしによる突出部が付くが、その性格は不明。東壁の中央付近には、幅10cm程度、深さ３cmの溝が約２cm分掘られるがやはり性格不明。本住居跡は本遺跡で検出された多くの竪穴住居跡の中にあって、いくつかの特徴はかならずしも普遍的なものではない。遺物の出土は少なく、図示できた６点のうち多くは埋土からの出土。

遺物（図版44　第27図７～９・第28図10～12）７～10はいずれも埋土から出土した甕で、９の器面調整は内面がタタキ後のハケ、内面がハケである。二次加熱の痕跡はない。11の小型甕は床面からの出土で、二次加熱の痕跡はない。12は南側の主柱穴から出土したボウル状の鉢で、器面調整としてハケが施されるが、指頭圧痕も部分的に窺える。底部外面は地面との接地面になるためか、擦れたような摩滅が窺える。（水ノ江）

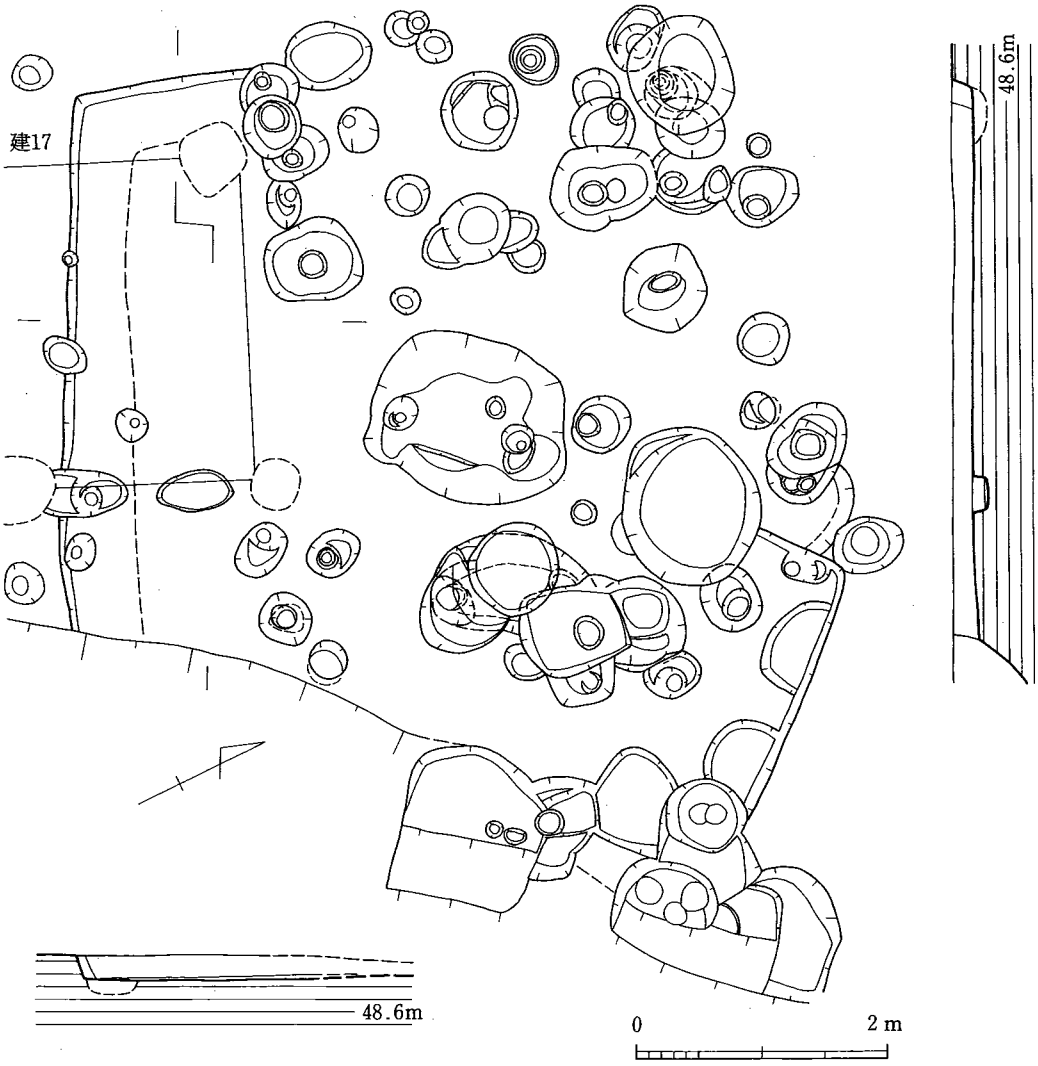
42号竪穴住居跡（図版21　第22図）

42号竪穴住居跡は斜面地区の南端部住居跡群の中でも、中央部東寄りに位置し、37～39・43号竪穴住居跡に切られるという先後関係を有する。当初、43号住居跡を切るという認識で調査を進め遺構番号を付けたが、その過程で切り合い関係に誤りがあったことに気づき、したがって、43号住居跡の正確なプランやサイズを把握することができなかった。本住居跡については、5.4×4.7ｍの長方形プランで、壁高は最高で25ｍ。ベッドはなく、長軸線上に80×70×55ｍの2基の主柱穴と、80×75×11cmの炉跡が一直線上に並ぶ。床面での炭化物の広がりは大きく、炉跡を中心に2.6×1.7ｍにもなる。東壁中央部には123×108×23cmの長方形の屋内土坑が付く。遺物は少なく図示できるものもほとんどなかったが、2点の鉄器が床面に貼り付くように出土している。

遺物（図版52　第55図３・５）３は鏃で有ろうか。先端部は刃部が作り出されているようで、断面形態は最大で８×３cmの長方形になる。５は残存長16.5cmの鉈（やりがんな）で、先端部はわずかに欠損し、基部も欠損している。（水の江）

43号竪穴住居跡（図版21　第22図）

43号竪穴住居跡は斜面地区の南端部住居跡群の中でも、中央部東寄りに位置し、37～39号竪穴住居跡には切られるが、42号竪穴住居跡は切るという先後関係を有する。しかし、42号住居跡の項目でも説明したように、それとの切り合い関係を調査時点において誤認しており、結果として全体像が不明瞭で、南北方向については6.5ｍという数値が得られるが、東西方向については最高で5.3ｍという数値が得られるだけで、平面プランが正方形になるのか長方形になるのかは不明という事態が生じた。壁高は最高でも13cmで主柱穴は未確認。炉跡も約半分程度にし



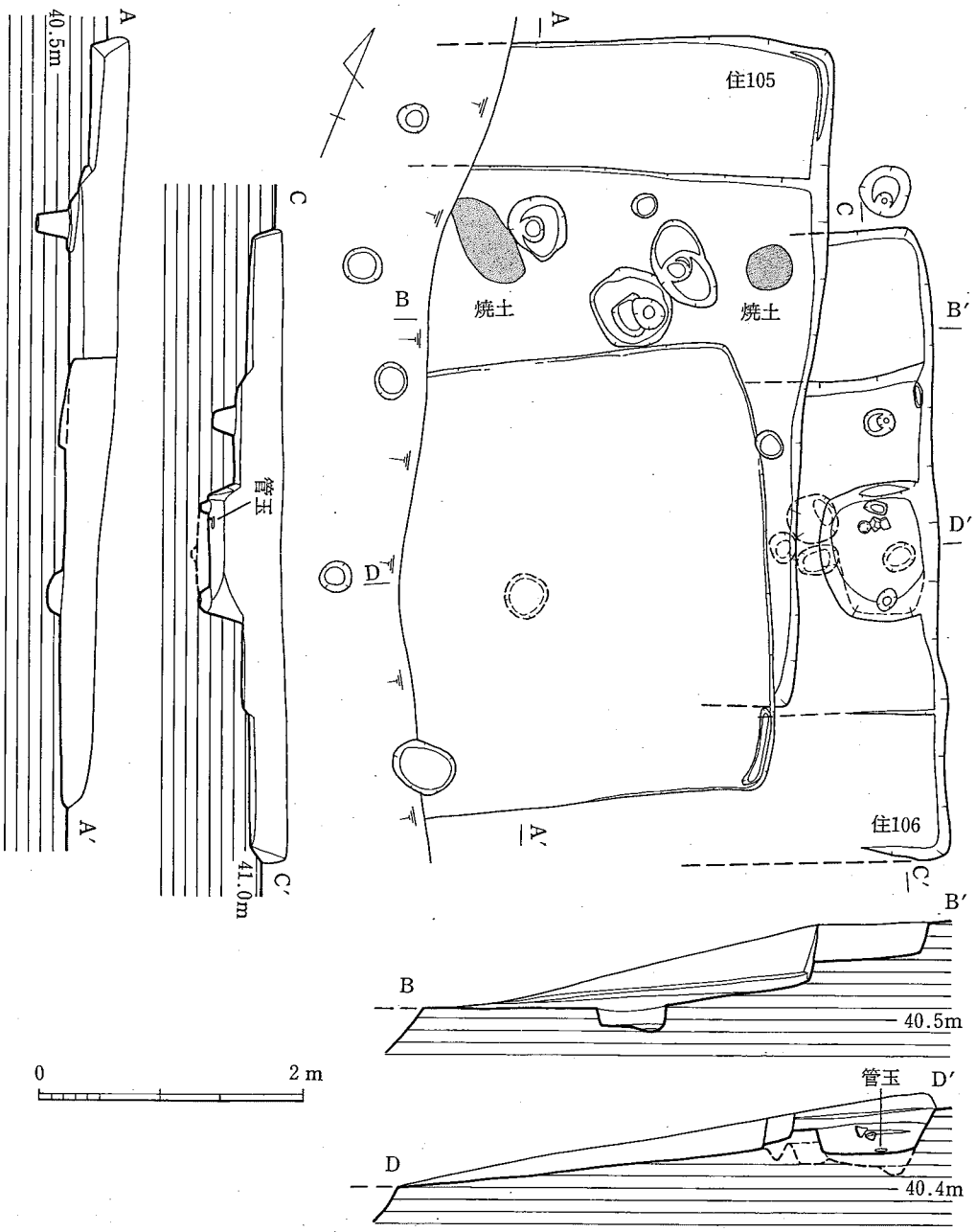
第25図　83号竪穴住居跡実測図（1/60）

か検出できなかった。唯一、東壁中央部の北寄りに、128×92×53cmの楕円形プランの屋内土坑が確認できた。遺物の出土はごく少量で小破片であり、図示できなかった。　（水ノ江）

83号竪穴住居跡（図版21　第25図）

調査区北東部に位置し、２号堀に南端を切られており、北側が検出されていないため規模は確定できない。床面中央部は貼床が薄かったが、壁沿いの貼床下に溝状の落ち込みが見られる。これは、除湿用の床下施設と思われる。主柱穴・炉は未検出の北側に位置していたものと思われる。

遺物（第28図13･14）　13は小型甕の底部である。２次焼成を受け赤変している。14は小型の



第26図　105・106号竪穴住居跡実測図（1/60）

器台の裾部であろう。　（秦）

105号竪穴住居跡（図版20　第26図）

南東部の斜面区南側に位置している。西半部を市道によって開削されており、遺構の中央部を107号竪穴住居跡に切られるため、ほとんど残っていない。遺構の規模は、長辺は5.5mで、主柱穴を中点とすると短辺4.8mの長方形2本柱竪穴住居跡を復元できる。上面を大きく削平されており、壁の残りもよくない。炉は107号竪穴住居跡に切られて検出されず、屋内土坑は西側にあるものと思われる。わずかながら作り付けのベット状遺構が確認された。北側主柱穴はベット状遺構の中央に接して確認されたが、南側は不明瞭ながら、107号竪穴住居跡の床下から検出された。床面から焼土が多く出土した。

遺物（第28図15・16）

15は複合口縁壺の口縁部で、16は小型器種の底部である。　（秦）

106号竪穴住居跡（図版20　第26図）

南東部の斜面区南側に位置している。西半部を市道によって開削されており、遺構の中央部を105・107号竪穴住居跡に切られるため、ほとんど残っていない。主柱穴も107号竪穴住居跡の床下から検出されているため明瞭でない。遺構の規模は、長辺は5.2mで、主柱穴を中点とすると短辺4.4mの長方形2本柱竪穴住居跡を復元できる。短辺5.25mの長方形2本柱竪穴住居跡である。上面を大きく削平されており、壁の残りもよくない。屋内土坑は東壁中央に検出されており、底面の両端には小ピットがある。埋土中の土器片の下から、ガラス製管玉が出土した。炉は107号竪穴住居跡に切られて検出されなかった。わずかながら作り付けのベット状遺構が南北両辺に確認された。

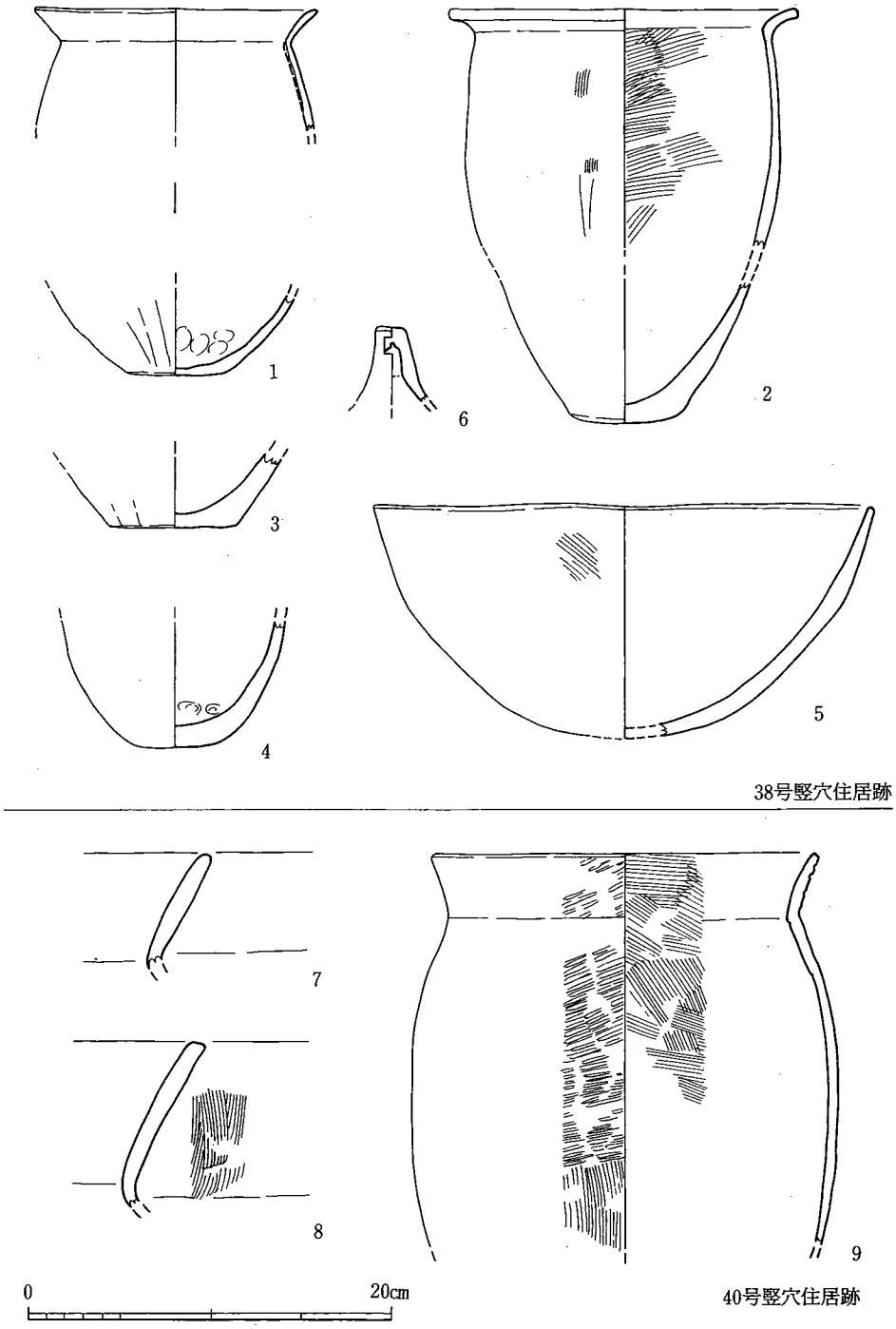
遺物（図版44　第28図17・18）

17は受部の丸い支脚である。2次焼成を受けており外面は全面赤化している。18は鉢であろう。また、半欠するガラス製管玉が出土している（『以来尺Ⅰ』第247図　218・103号→106号住居跡）。　（秦）

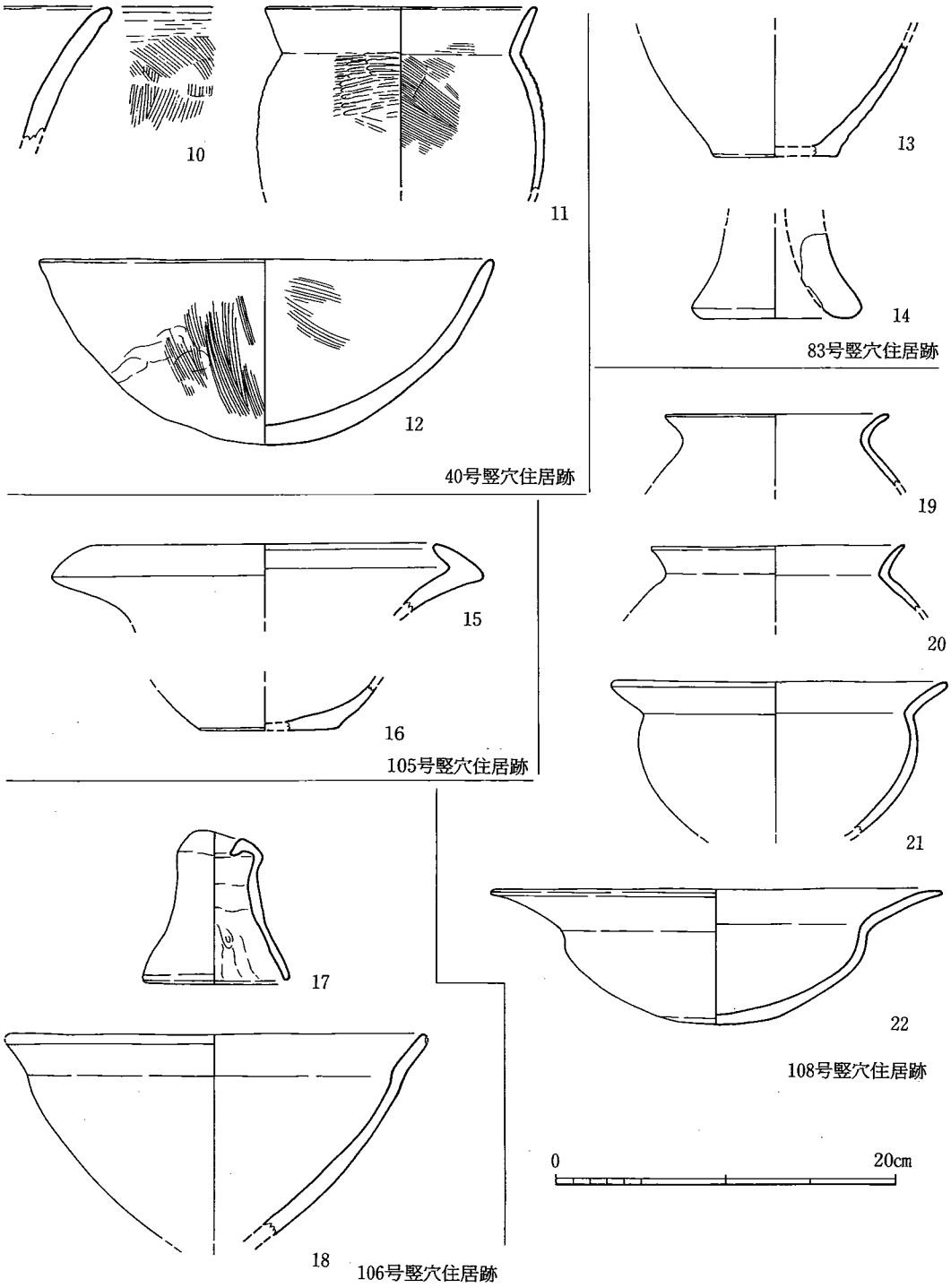
108号竪穴住居跡（図版22　第29図）

南東部の斜面区南側に位置し、111・119号竪穴住居跡を切っている。西半部を市道によって開削されており、東側1/3が残るのみである。短辺は4.06mを測るが、長辺は炉が失われているため、規模を復元できない 長方形2本柱竪穴住居跡であろう。上面を大きく削平されているにもかかわらず、壁の残りはよく、床面までもっとも深いところで64cmを測る。東側主柱穴は掘形から見て、柱を抜き取ったと思われる。地山削り出しのベット状遺構が確認されたが、その上面は床面と同様に硬化していた。第28図20は床面に貼りついて出土した。

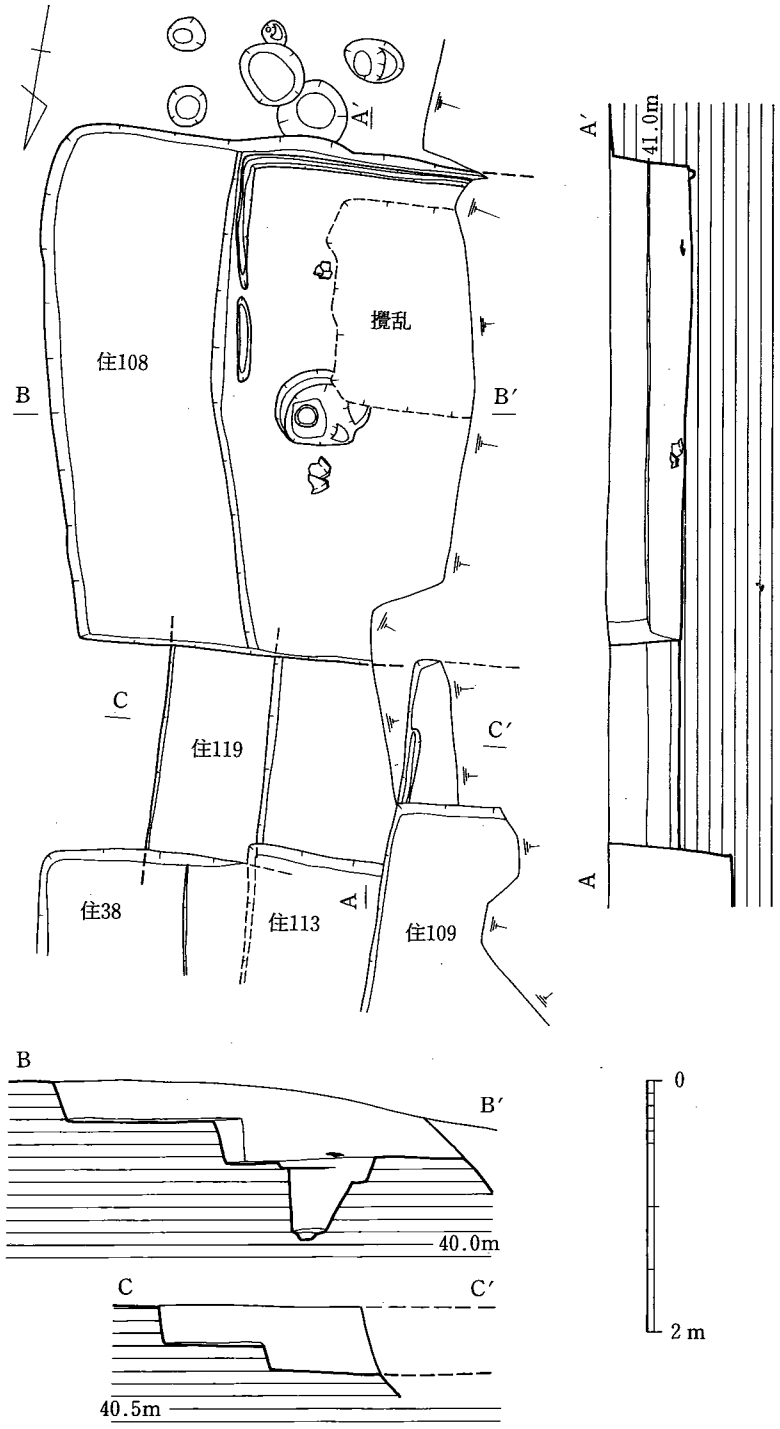
遺物（図版44　第28図19～22）



第27図　38・40号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4）



第28図　40・83・105・106・108号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4）



第29図　108・119号竪穴住居跡実測図（1/60）

19・20は小型丸底壺の口縁部と思われ、器表面は磨滅しているため調整は不明。21・22は鉢で、器表は磨滅している。　(秦)

109号竪穴住居跡（図版22　第23図）

南東部の斜面区南側に位置し、38・111・113・118号竪穴住居跡を切っている。西半部を市道によって開削されており、東側1/3が残るのみである。短辺は4.06mを測るが、長辺は炉が失われているため、規模を復元できないが、長方形2本柱竪穴住居跡であろう。上面を大きく削平されているにもかかわらず、壁の残りはよく、床面までもっとも深いところで70cmを測る。屋内施設は東壁中央に接して、屋内土坑があり、南北壁に作り付けのベット状遺構が確認された

遺物（図版44　第32図1～11）　1は複合口縁壺の口縁部で、胎土は精良で異質であることから搬入品の可能性もある。2・3は壺か甕の底部、4は小型の平底に焼成前の穿孔が見られるものことから、甑の可能性がある。5は埋土から出土した甕棺で、口縁部を最大径とし、復元口径は46.0cmを測る。ハケは丁寧で、均一なつくりである。6は甕棺の口縁部で、口唇部は箆状工具の刺突による格子目文がある。7・8は高杯の杯部で、胎土は精良である。9は脚部。10は器台の裾部であろう。外面下位は2次焼成により赤変している。3は小型機種の底部である。11は鉢であろう。　(秦)

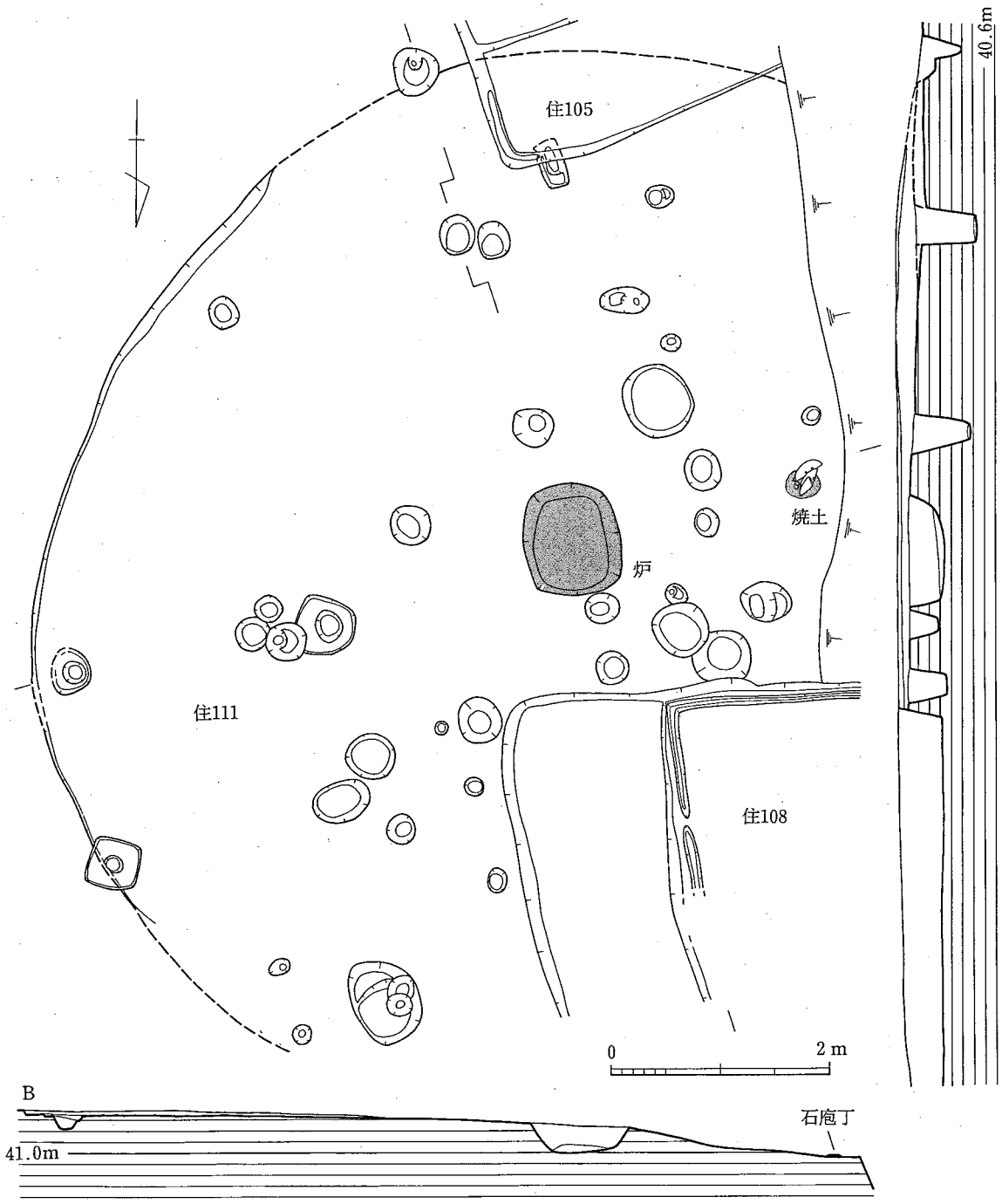
110号竪穴住居跡（図版23　第23図）

南東部の斜面区南側に位置し、大部分を市道によって開削され、109号竪穴住居跡に切られているため、南東・北東のコーナーが残るのみである。また、38号竪穴住居跡の床面から検出されたことから、庫の区画で最も古い遺構と思われる。コーナー間が6.7mを測るため、これは長辺になると思われる。短辺は炉や主柱穴が失われているため、規模を復元できないが、長方形2本柱竪穴住居跡であろう。南東コーナーは北東コーナーより60cm程高いことから、地山削り出しのベット状遺構と思われる。また、壁沿いに護岸施設と思われる矢板の痕跡が見られる。

残りが悪いため、遺物量も少なく、時期を特定する遺物は出土していない。　(秦)

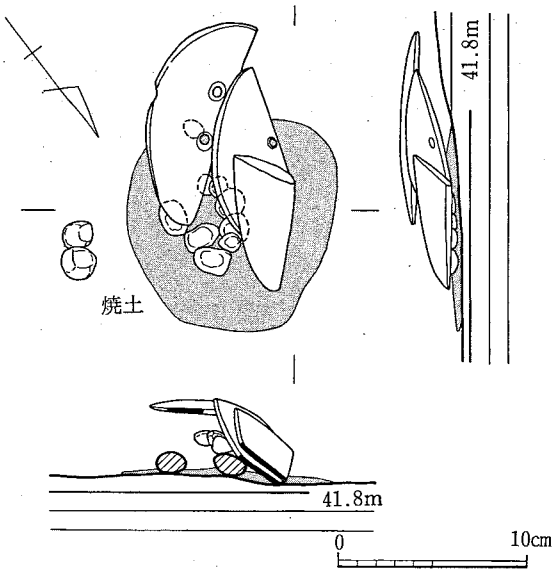
111号竪穴住居跡（図版22　第30図）

南東部の斜面区南側に位置する。西半部を市道によって開削されており、105・108号竪穴住居跡に切られている。上面を大きく削平されている、壁は東側にわずかしか残っていない。また、主柱穴の並びも明確でないため、中央炉と遺存する壁のラインから、径9.0～10.0mの大型円形竪穴住居跡を想定した。床面は硬化しておらず、貼床も確認できなかった。中央炉は平面隅丸方形で、壁はほぼ垂直に立ち上がっており、箱形を呈する。底面・側面はよく焼けており、底面・壁面を覆うように焼土が厚く堆積していた。その上に上位まで炭化物の層があり、最上



第30図　111号竪穴住居跡実測図（1/60）

層は埋土が被っていた。この炉のまわりには小ピットが巡っている。中央炉の西側では、床面近くで集積された3枚の石庖丁が出土した。(第31図) 1枚は遺構検出時に遊離したため出土状態がわからないが、おそらくほかの3枚と同様であっただろう。集積状態にあったものはややずれているものの、刃を揃えて重なっており、1枚は欠損しているが本来は完形であったものと思われる。3枚の石庖丁の下からは炭化した山桃の種が、5個まとまって出土した。山桃の種を除くと、その下は赤化しており、小さな火の使用が推定できる。このことから石庖丁の集積は、保管したものではなく、祭祀に使用した山桃を覆うためのものであったと考えられる。



第31図　111号竪穴住居跡石庖丁集積実測図 (1/4)

残りが悪いため、遺物量も少なく、時期を特定する遺物は出土していない。

遺物 (図版50　第53図2～4)　第53図2～4はいずれも輝緑凝灰岩製の石庖丁で、2・3は完形で、4は半欠であるが集積の最上部にあったため欠損したもので、本来完形であったとおもわれる。いずれも刃こぼれが見られ、4には刃の研ぎ直しが見られることから、祭祀のために製作されたものではなく、実際に使用していたものを用いたと考えられる。

また、本遺構検出時に半欠の輝緑凝灰岩製石庖丁 (第57図4) が出土しており、遺構面の残りの悪さから、これも集積の一部であった可能性が高い。　(秦)

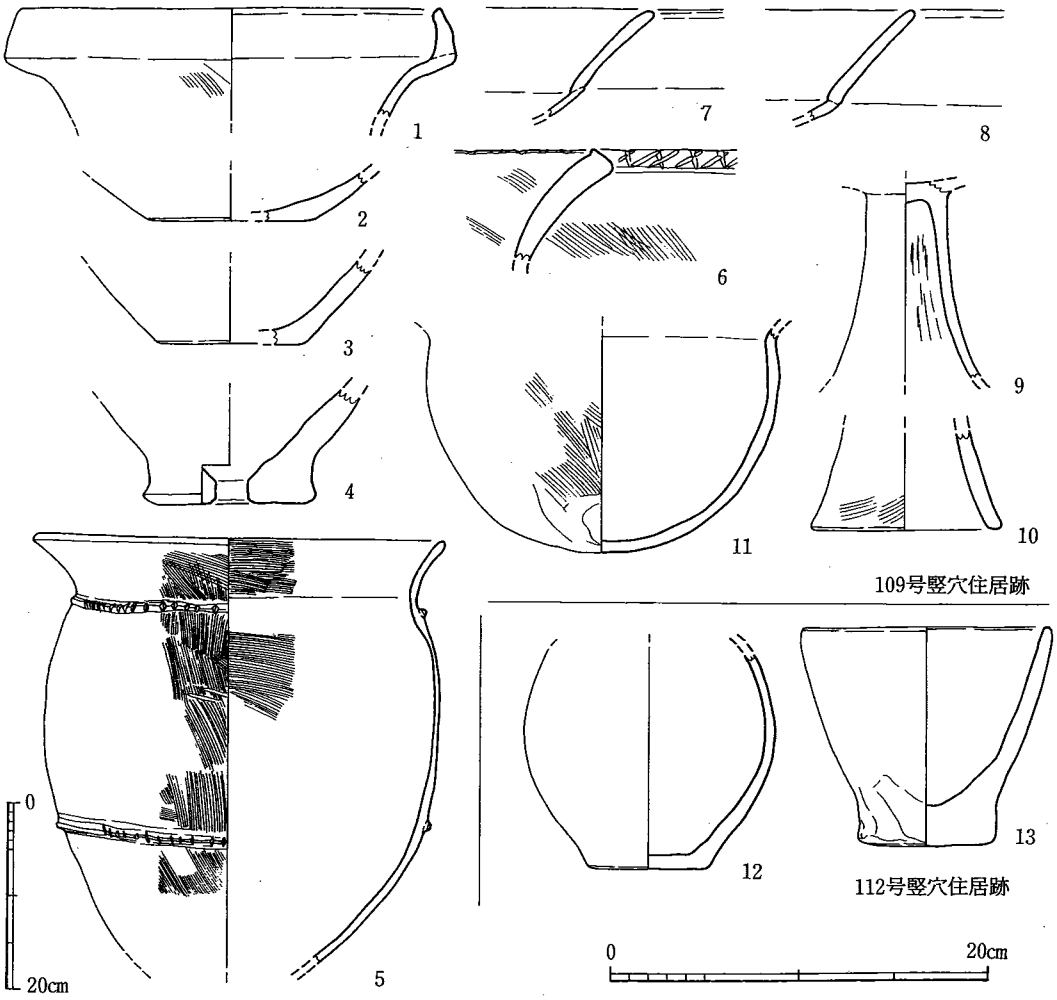
112号竪穴住居跡 (第33図)

南東部の斜面区南側に位置する。西半部を市道によって開削されており、南側を38号竪穴住居跡に切られている。そのため、北東コーナーしか確認されなかったので規模を復元することができない。壁の残りも悪く、わずかしか残っていない不明確な遺構である。遺物は床着状態で2点出土している。

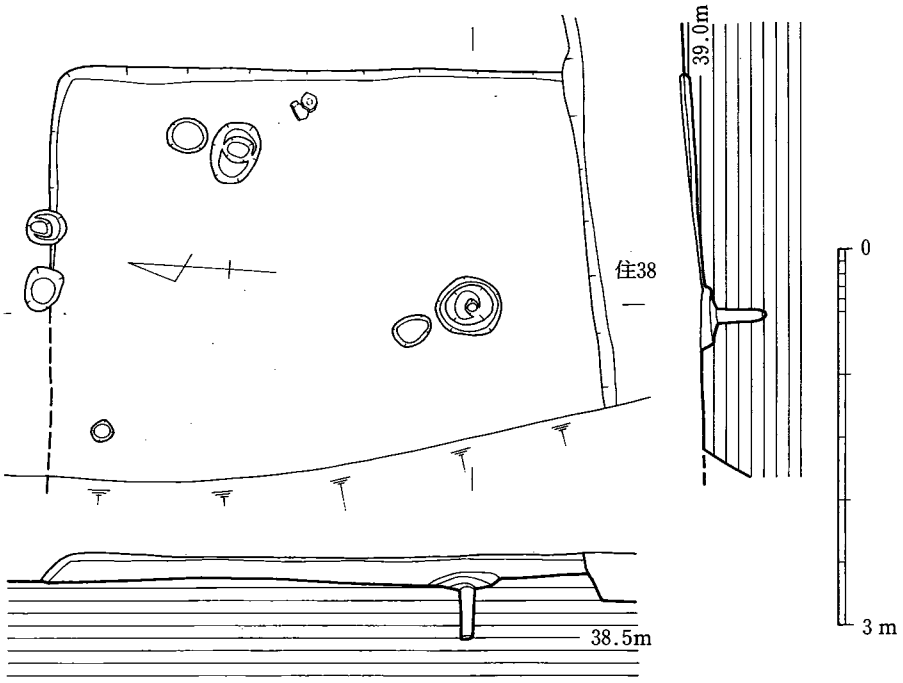
遺物 (図版44　第32図12・13)　12は内面が焼成不良であることから、小型の壺と思われる。13は鉢でつくりは荒く、調整もほとんど施されていない。　(秦)

113号住居跡（図版23　第23図）

南東部の斜面区南側に位置する。38号竪穴住居跡を切っており、109号竪穴住居跡に大きく切られているため、主柱穴・炉は不明で、規模を復元できない。遺物が少なく図化できる土器が出土していない。また、片岩製の石庖丁が床面直上で出土しているが、遺物整理時に行方不明となっており、図示できなかった。　（秦）



第32図　109・112号竪穴住居跡出土土器実測（1/4　5は1/8）



第33図　112号竪穴住居跡実測図（1/60）

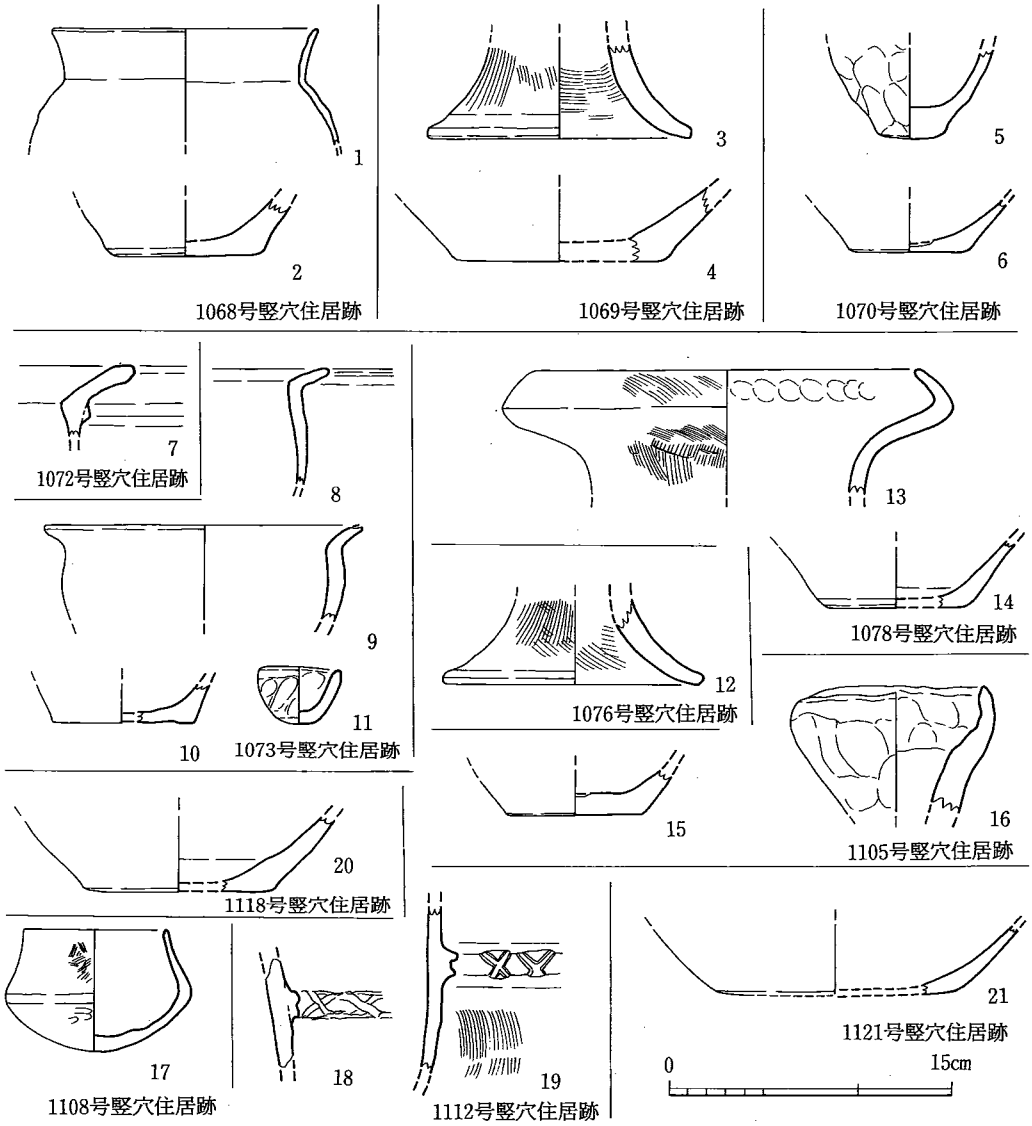
118号竪穴住居跡（図版23　第23図）

南東部の斜面区南側に位置する。大部分を市道によって開削されており、わずかしか残っていない。109号竪穴住居跡の床下から検出されたため、壁の残りもよくない。北東コーナーしか確認されなかったので規模を復元することができない。（秦）

119号竪穴住居跡（図版23　第29図）

南東部の斜面区南側に位置する。西半部を市道によって開削されており、38・108・109・113・118号竪穴住居跡を切られているため、わずかしか残っていない。108号竪穴住居跡と平行で、わずかに北にずれているだけなので、検出が困難であったが、東壁の位置と地山削り出しのベット状遺構がやや高かったため単独の竪穴住居跡と判断した。コーナーも、主柱穴等の屋内施設も検出されなかったので、規模を復元できない。

残りが悪いため、遺物量も少なく、時期を特定する遺物は出土していない。（秦）



第34図　1068・1069・1070・1072・1073・1076・1078・1105・1108・1112・1118・1121号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4）

1067号竪穴住居跡

遺物（図版52、第55図16）滑石製の管玉。若草色を呈し、丁寧に磨き上げる。径0.3cm、長さ0.7cmを測る。（齋部）

1068号竪穴住居跡

遺物（第34図１・２）どちらも磨滅が激しく調整不明。１の復元径は14.0cm、２の底径は7.6cm。（齋部）

1069号竪穴住居跡

遺物（第34図３・４）３は器台の裾部。外面はタテハケを施す。内面は裾付近にヨコハケを施して面取り状にし、上位はナデる。復元径13.8cm。４は外面ナデ。（齋部）

1070号竪穴住居跡

遺物（第34図５・６）５は小型壺の胴部下半。内面はナデ調整、外面には指圧痕が残る。６は磨滅のため調整不明。（齋部）

1072号竪穴住居跡

遺物（図版52　第34図７・第55図９）第34図７は甕口縁部小片。頸部に断面三角形の突帯を貼付。他にガラス小玉が出土。紺色を呈し、作りはやや雑である（第55図９）。（齋部）

1073号竪穴住居跡

遺物（図版45･53　第34図８～11　第53図６）８～10は甕。いずれも磨滅のため調整不明。11はミニチュア土器で、内外面とも手捏ねで指圧痕が残る。また砂岩製でかなり研ぎ直しを行ったと見られる石庖丁の完形品が１点出土している（第53図５）。（齋部）

1076号竪穴住居跡

遺物（第34図12）器台の裾部片。外面タテ、内面ヨコのハケ調整で、端部付近はヨコナデ。復元径13.4cm。（齋部）

1078号竪穴住居跡

遺物（第34図13･14）13は袋状口縁壺。外面はハケ調整、内面はナデる。内面には口縁部屈曲時の指圧痕が列状につく。復元口径20.4cm。14は剥離が激しく調整不明。（齋部）

1105号竪穴住居跡

遺物（図版52　第34図15･16　第54図４）15は底部小片で、磨滅のため調整不明。16は内外面に指圧痕が残る。口径9.8cm。また粘板岩製の砥石が１点出土しており、線状痕を明瞭に残す（第54図４）。（齋部）

1108号竪穴住居跡

遺物（図版45　第34図17）小型壺。口縁から体部中位を屈曲させる。外面上位に工具痕、下位にミガキが残る。内面はナデ調整。復元口径9.5cm、器高7.5cm。（齋部）

1109号住居（図版１、付図８、表３・52）

重複関係は、住1017号で詳述したように、a_1住1144Ｂ⇨a_2住1144Ａ⇨a_3住1109と掘り替えるが、西側の主柱Ｐ14の位置はほとんど移動させず、東側の13をa_1⇨a_2で約37cm、a_2⇨a_3で約19cm移動させ、住居拡幅・移動方向の志向は北と東が指摘できる。

桁行Ａ換算の算出値は、29.3cm。

1110号住居（図版１、付図８、表３・53）

重複関係は、住1017号で詳述したように、a_1住1136⇨a_2住1110号と掘り替えるが、中央土坑Ｄ21はa_1と重複することから、東・西側の柱筋は変えずに北壁・西壁を拡幅したものと判断。

（ＤＰ211―ＤＰ212）間換算の算出値は、30.7cm。（馬田）

1112号竪穴住居跡

遺物（第34図18・19）甕の胴部小片。「×」の刻み目を入れた断面台形の突帯を巡らす。外面突帯付近はヨコナデ、他はタテハケ。内面は調整不明。（齋部）

1113号住居（図版２、付図８、表３・54）

重複関係は、住1017号で詳述したように、a_1住1138⇨a_2住1137⇨a_3住1117⇨a_4住1114⇨a_5住1113の順に、北壁掘り替えで、わずかではあるが北方への住居規模の拡大を測る。

柱配置は、棟持柱Ｐ21と東・西壁間が共に約279cmで一致する。

また、北壁の遺存検出面の地山標高は、北東壁隅が45.25ｍ、西端が45.32ｍであることから、付図８に図示したように、北西壁隅高床が欠失したもので、主柱（Ｐ11―13）の北柱筋は高床南縁を通ると考えられるが欠失する。

なお、高床幅は、高床長約238cm×½で復原し、高床長換算の算出値は29.8cm。

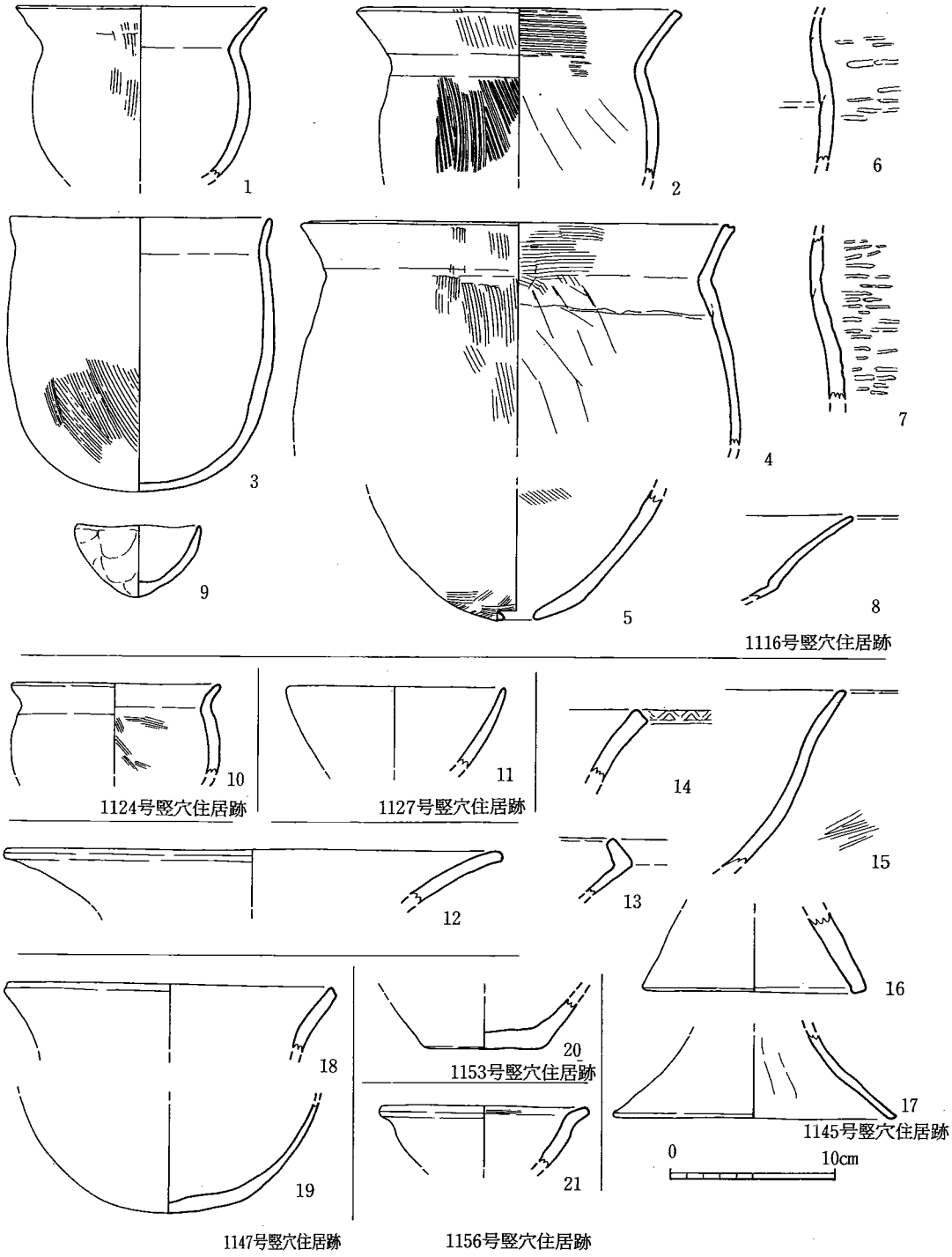
1114号住居（図版１、付図８、表３・55）

重複関係は、住1017号で詳述し、掘り替え関係は住1113号でも既述。

（北壁―Ｐ21）間・（東壁―Ｐ21）間換算の算出値平均は、29.9cm。（馬田）

1116号竪穴住居跡

遺物（図版45　第35図１～９）１～７は甕。１・２は口縁が長く、大きく外反する。１は外面に僅かに刷毛目が残るが、磨滅が激しい。２は胴部外面タテハケ、内面は斜のナデを施す。口縁部は内外面ともカキメ状の横筋が入る。３は胴部下半のみハケ目、他はヨコナデ。４は外面をタテハケし、内面口縁部はヨコハケ、胴部は工具によるナデを施す。復元口径は15.0・19.6・



第35図　1116・1124・1127・1145・1147・1153・1156号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4）

15.8・26.0cm。5は底部に穿孔する。外底部と内面中位に刷毛目が残る。6・7は胴部小片。外面に叩きが残る。内面はナデ調整。8は高杯で、磨滅のため調整不明。9はミニチュア土器。内面ナデ、外面に指圧痕が残る。2～8は全て埋土最上面で出土。（齋部）

1117号住居（図版1、付図8、表3・56）

重複関係は、住1017号で詳述し、掘り替え関係は住1113号でも既述。

（北壁―P21）間・（P21―西壁）間換算の算出値平均は、31.4cm。（馬田）

1118号竪穴住居跡

遺物（第34図20）底部小片で、磨滅のため調整不明。

1121号竪穴住居跡

遺物（第34図21）薄手の底部小片で、磨滅のため調整不明。

1124号竪穴住居跡

遺物（第35図10）小型の甕。全体に磨滅するが、内面に僅かに工具痕が残る。

1127号竪穴住居跡

遺物（第35図11）小型鉢の口縁部。磨滅のため調整不明。（齋部）

1135号住居（図版1、付図8、表3・57～59）

重複関係は、住1017号で詳述したように、a_1住1135C⇨a_2住1135B⇨a_3住1135Aの順に掘り替え、住居規模の復原はa_2・a_3住の北壁側棟持棟P21が東・西壁間の中心配置とした。

1135号A住居・1135号B住居の（西壁―P22）換算の算出値は、共に29.0cm。

1135号C住居の（西壁―東壁）間・（a_2住西壁―a_3住西壁）間換算の算出値平均は、29.7cm。

1136号住居（図版1、付図8、表3・60）

重複関係は、住1017号で詳述し、a_1住1136⇨a_2住1110と掘り替えていることから、住1110でもa_1住を既述。

（DP211―DP212）換算の算出値は、30.7cm。（馬田）

1137号住居（図版１、付図８、表３・61）

重複関係は、住1017号で詳述し、（東壁―Ｐ21）間換算の算出値は、29.7cm。　（馬田）

1138号住居（図版１、付図８、表３・62）

重複関係は、住1017号で詳述し、（東壁―Ｐ21）間換算の算出値は、29.7cm。　（馬田）

住1141号住居（図版１、付図８、表３・63）

重複関係は、住1017号で詳述したように、a_1住1143⇨a_2住1141の順に掘り替える。

柱配置・住居規模は、柱穴や土拡などの諸施設が欠失するため、不明。　（馬田）

1143号住居（図版１、付図８、表３・64）

重複関係は、住1017号で詳述し、既述の掘り替え後の住1141号と同様に、柱配置・住居規模は共に不明。　（馬田）

1144号住居（図版１、付図８、表３・65・66）

重複関係は、住1017号で詳述。

1144号Ａ住居・1144号Ｂ住居の桁行Ａ換算の算出値は、それぞれ29.6cm・29.3cm。　（馬田）

1145号竪穴住居跡

遺物（第35図12～17）12は磨滅の為調整不明。13は袋状口縁壺小片。調整は不明。14は甕の口縁小片で、磨滅するが端部の刻みは残る。15は鉢。外面に僅かに刷毛目が残るが磨耗が激しく調整は不明瞭。16は器台裾部。外面端部付近ヨコナデ以外は調整不明。17の脚は器壁が薄く内面タテナデが見える。16・17は復元径13.6・17.0cm。　（齋部）

1146号住居（図版１、付図８、表３・67）

重複関係は、住1017号で詳述したように、a_1住1151⇨a_2住1150⇨a_3住1146の順に掘り替える。

柱配置の復原は、北壁中央土拡Ｄ21を主柱（Ｐ13―Ｐ14）間中心での配置としたもので、桁行Ａ換算の算出値は29.2cm。　（馬田）

1147号竪穴住居跡

遺物（第35図18・19）共に磨滅が激しく調整不明。18は復元口径10.0cm。　（齋部）

1149号住居（図版１、付図８、表３・68）

重複関係は、住1017号で詳述。

円形住居であるが、柱や中央土拡Ｄ11・壁土拡などの諸施設を欠失するため、柱配置の内円径は不明。

住居規模は、円形壁の外円径は約600cm。（馬田）

1150号住居（図版１、付図８、表３・69）

重複関係は、住1017号で詳述したように、a_1住1151⇨a_2住1150⇨a_3住1146の順に掘り替える。

桁行Ａ換算の算出値は、29.2cm。（馬田）

1151号住居（図版１、付図８、表３・70）

重複関係は、住1017号で詳述したように、a_1住1151⇨a_2住1150⇨a_3住1146の順に掘り替える。

柱配置の復原は、a_3で既述したとおりで、a_1から新住への順次の掘り替えが北壁の北への拡張でなされ、a_3の（北柱筋―Ｄ21）間が16cmを測ることから、a_1の（Ｄ21―北柱筋）間が約32cm、a_2の同間が約16cmで、順次約16cm北へのＤ21の移動配置とした。（馬田）

1153号竪穴住居跡

遺物（第35図20）磨滅のため調整不明。復元底径7.0cm。（齋部）

1156号竪穴住居跡

遺物（第35図21）口縁部内面に僅かに刷毛目が見える。内面はナデか。（齋部）

1159号住居（図版３、付図10、表４・71）

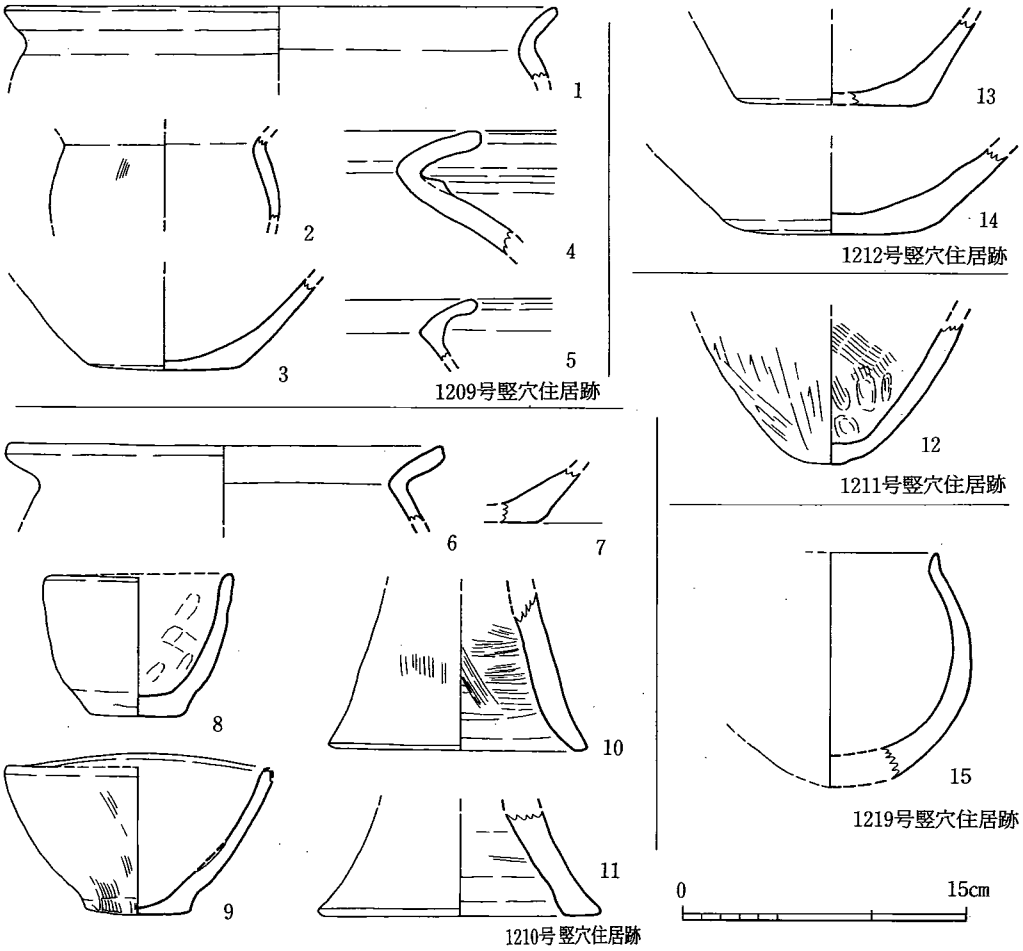
重複関係は、住1051号で詳述したが、柱配置は主柱Ｐ12を除き不明で、（東柱筋―東壁）間換算の算出値は、30.4cm。（馬田）

1192号竪穴住居跡

遺物（図版52　第55図10・11）双方ともガラス小玉。10は水色を、11は不透明な紺色を呈する。11は気泡を若干含む。（齋部）

1209号竪穴住居跡

遺物（図版45　第36図１～５）全て甕。１は熱を受けて赤色化し剥離が激しい。復元口径29.4cm。２は小型品、３は底部のみでどちらも磨滅のため調整不明。４は口縁を外へ大きく屈曲さ

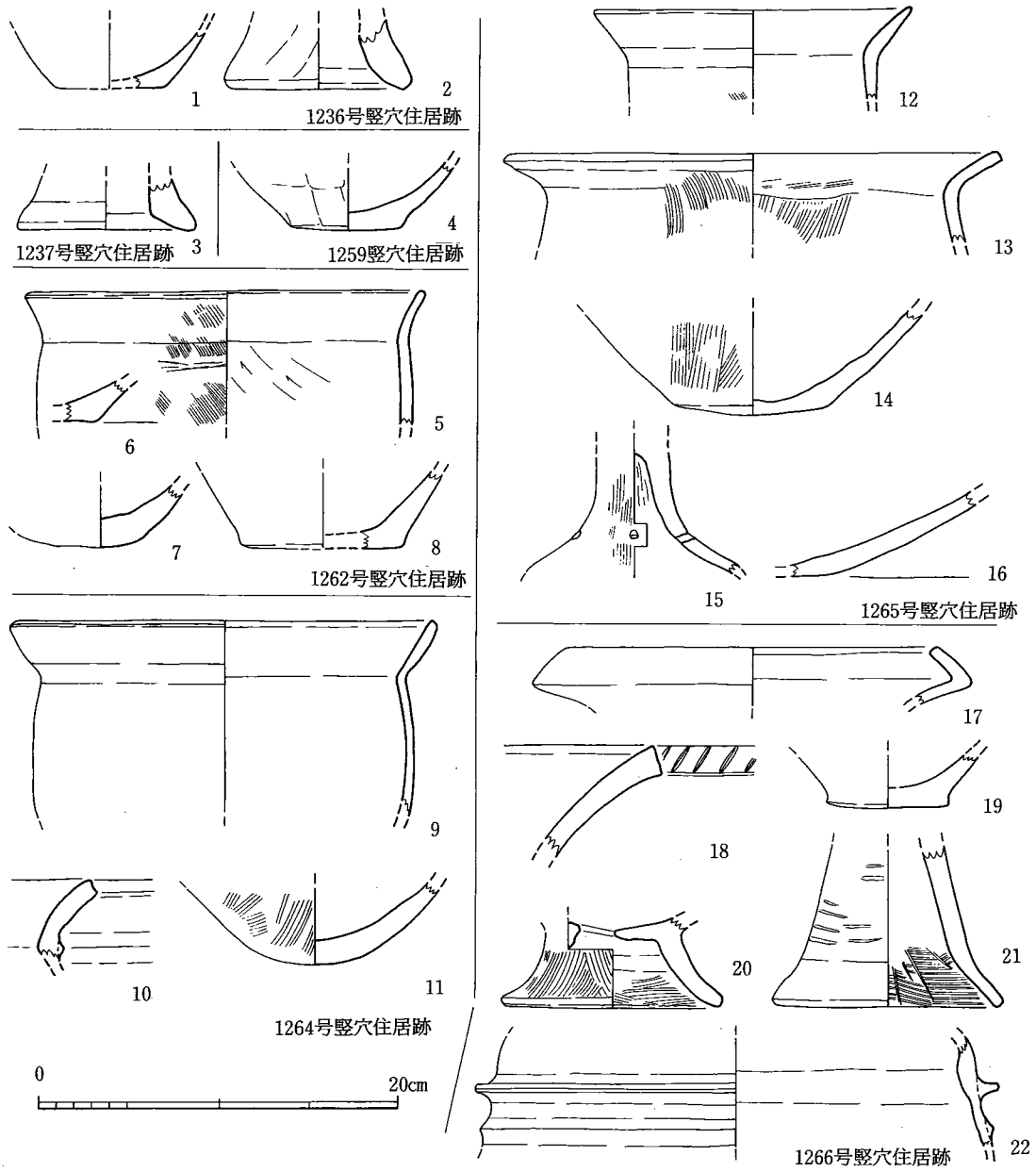


第36図　1209・1210・1211・1212・1219号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4）

せ、頸部に断面三角の突帯を貼付する。内面と口縁付近はヨコナデする。5は内面屈曲部の稜が明確につき、口縁端部はやや玉状につくる。（齋部）

1210号竪穴住居跡

遺物（図版45　第36図6～11）6・7は甕の小片で、磨滅のため調整不明。8・9は小型の鉢。8は内面に強いナデの跡が残り、外底部はナデる。外面は剥離が激しく底部付近にヨコナデが残るのみ。9はやや不整形で、内面と外底部はナデ、外面は底部付近に僅かにハケ目が残るが磨滅が激しく不明瞭。復元口径10.0・14.2cm、器高7.6・7.8～8.6cm、底径4.9・5.6cm。10・11は器台。ともに内外面を工具によるヨコナデ調整する。10は外面に僅かにハケ目が見えるが、その他は不明。端部は熱を受けて赤色化する。復元径13.7・14.8cm。（齋部）



第37図　1236・1237・1259・1262・1264～1266号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4）

1211号竪穴住居跡

遺物（図版45　第36図12）底部のみの破片。外面は下方から上方へタテケズリし底部をその後ナデ、内面は中位を刷毛目、底部付近をナデ調整する。押し出しによって鋭角の底部を作り出しており、内底に指圧痕が残る。　（齋部）

1212号竪穴住居跡

遺物（図版52　第36図13・14　第54図５）甕底部のみの小片で、磨滅が激しく調整不明。13は熱を受けて赤色化・剥離が激しい。また、角柱状に使い込まれた粘板岩製の砥石が１点出土している（第54図５）。（齋部）

1219号竪穴住居跡

遺物（図版45　第36図15）ボール形の椀になるか。内外面とも調整不明。外面は熱を受けて赤色化・剥離する。一部黒斑有り。（齋部）

1236号竪穴住居跡

遺物（第37図１・２）１は磨滅激しく調整不明。２は器台裾部で外面に僅かに斜のナデが見え、熱を受けて赤色化する。（齋部）

1237号竪穴住居跡

遺物（第37図３）器台裾部小片で、内面に明瞭な稜がつく。全面ナデ。（齋部）

1259号竪穴住居跡

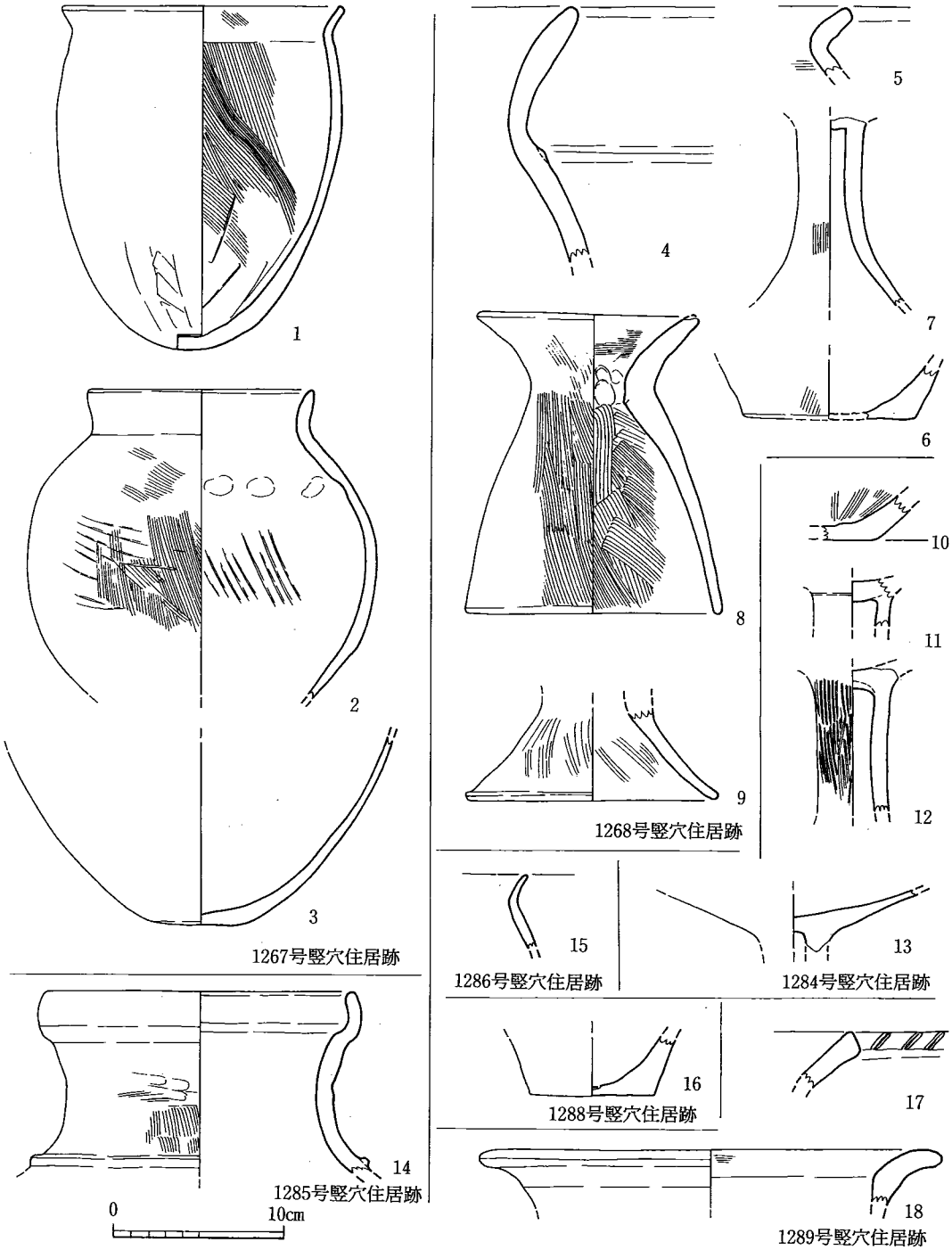
遺物（第37図４）底部小片で、外面は全て工具等によるタテナデ。内面は磨滅のため調整不明。（齋部）

1262号竪穴住居跡

遺物（図版52　第37図５～８　第54図６）５の甕は頸部の屈曲が緩やかで器壁も薄い。外面は斜のハケ調整で黒斑が見られる。内面口縁付近はヨコナデ、胴部は工具等によるナデ。復元口径22.3cm。６・８は磨滅のため調整不明。７は内外面ともナデ。７・８は熱を受けて赤色化する。また、緑色変岩製の砥石が１点出土している（第54図６）。（齋部）

1264号竪穴住居跡

遺物（第37図９～11）９は甕の上半部で、胴部外面をヨコナデした後タテナデし、口縁部と内面はヨコナデする。頸部は強いヨコナデ。復元口径23.4cm。10の甕小片は頸部に断面三角の突帯を貼付する。口縁部外面に朱が僅かに残る。11は外面ハケ調整後粗くナデる。内面と外底部はナデ調整。（齋部）



第38図　1267・1268・1284～1286・1288・1289号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4）

1265号竪穴住居跡

遺物（図版45　第37図12～16）12は口縁が外反し、胴部は直立する。外面は僅かに斜の刷毛目が残るが、他は磨滅のため調整不明。13は胴部内外面ともタテハケを施す。口縁部内面はヨコハケ後ヨコナデ。復元口径は18.0・27.6cm。14の底部は外面のタテハケ以外磨滅のため調整不明。15の高坏は脚のみで端部も欠く。裾の屈曲部４ヶ所に４mm程の内傾する孔を穿つ。外面はタテハケが残るが、その後磨きを施す。内面はナデ調整で、絞り痕が残る。16の底部小片は磨滅のため調整不明。（齋部）

1266号竪穴住居跡

遺物（図版46　第37図17～22）17は袋状口縁壺で、屈曲が大きく稜が明確につく。調整は不明。18は口縁端部の平行刻み目のみが確認できる。19は外底端部付近を強いナデによりやや屈曲させる。内外面ともナデ。20は低い支脚で、外面はタテハケ、内面下部はヨコハケを施す。内面上部はヨコナデで、天井部はナデ調整する。脚部径12.4cm、器高5.0cm。21は器台の下部。裾をやや強めに屈曲させる。外面は平行叩きで、裾部はヨコナデする。内面上部は粗いタテナデを施し、裾部は放射状に叩きを施す。脚部径12.6cm。22は丹塗壺の肩部で突線を二条巡らせる。全面ナデが見られる。瓢型壺か。（齋部）

1267号竪穴住居跡

遺物（図版46　第38図１～３）１はやや胴長の甕で、残りが良い。外面は上位・中位がナデ、底部付近はヘラケズリの後ヘラナデする。内面はタテのハケメが良く残り、幅４cm程の工具のあたりが見える。口縁部はヨコナデするが、内面に僅かにハケメが残る。胴部には８cmほどの幅で黒斑が対角線上に２ヶ所つく。口径16.6cm、器高20.4cm。２は直口短頸壺。外面は平行叩きの後中位はハケで調整、底部付近は削る。内面は工具によるナデで、肩部付近に指圧痕が点々と残る。口縁部はヨコナデ。復元口径13.2cm。３の底部はやや平坦になる。器面は磨滅が激しく調整不明。（齋部）

1268号竪穴住居跡

遺物（図版46・51　第38図４～９　第54図７）４～６は甕。４は大型のもので、頸部に断面三角の突帯を貼付するが磨滅が激しい。口縁外面はヨコナデ。５は内面に僅かにヨコハケが見えるが他は磨滅。６は内面と外底部をナデ、体部外面はハケ調整。熱を受けて赤色化する。８の器台は状態が良い。外面はタテハケを施し、その後くびれ部をヨコナデする。内面は上位をヨコハケ、下位を斜のハケ調整し、幅２cm程の工具のあたりが観察できる。くびれ部内面には指圧痕が残る。復元口径13.0cm、器高17.7～18.0cm、脚部径15.2cm。７・９は高坏。７は磨滅が

激しく外面に僅かにタテハケが残るのみ。9は内外面斜のハケ調整。また、片岩製で両面を使用している砥石や、花崗岩製の砥石が1点出土している（第54図7）。（齋部）

1284号竪穴住居跡

遺物（図版52　第38図10～13　第55図1）10の底部小片は内面に放射状のカキメ痕跡が残る他は磨滅。11～13は高坏。11は残存部全てナデ。12は全てナデの後外面を細かく縦方向に磨く。内面には絞り痕が残る。13の杯部片は磨滅のため調整不明。他に鉄鏃が出土（第55図1）。（齋部）

1285号竪穴住居跡

遺物（図版52　第38図14　第54図8）口縁の屈曲は退化する。肩部には断面台形の突線を貼付。内面と口縁部はヨコナデ、外面頸部中央には指圧痕と工具のあたりが見られる。肩部付近はタテハケ。復元口径18.5cm。また、粘板岩製の砥石が出土している（第54図8）。（齋部）

1286号竪穴住居跡

遺物（第38図15）甕の口縁小片で、口縁端部が薄い。磨滅のため調整不明。（齋部）

1288号竪穴住居跡

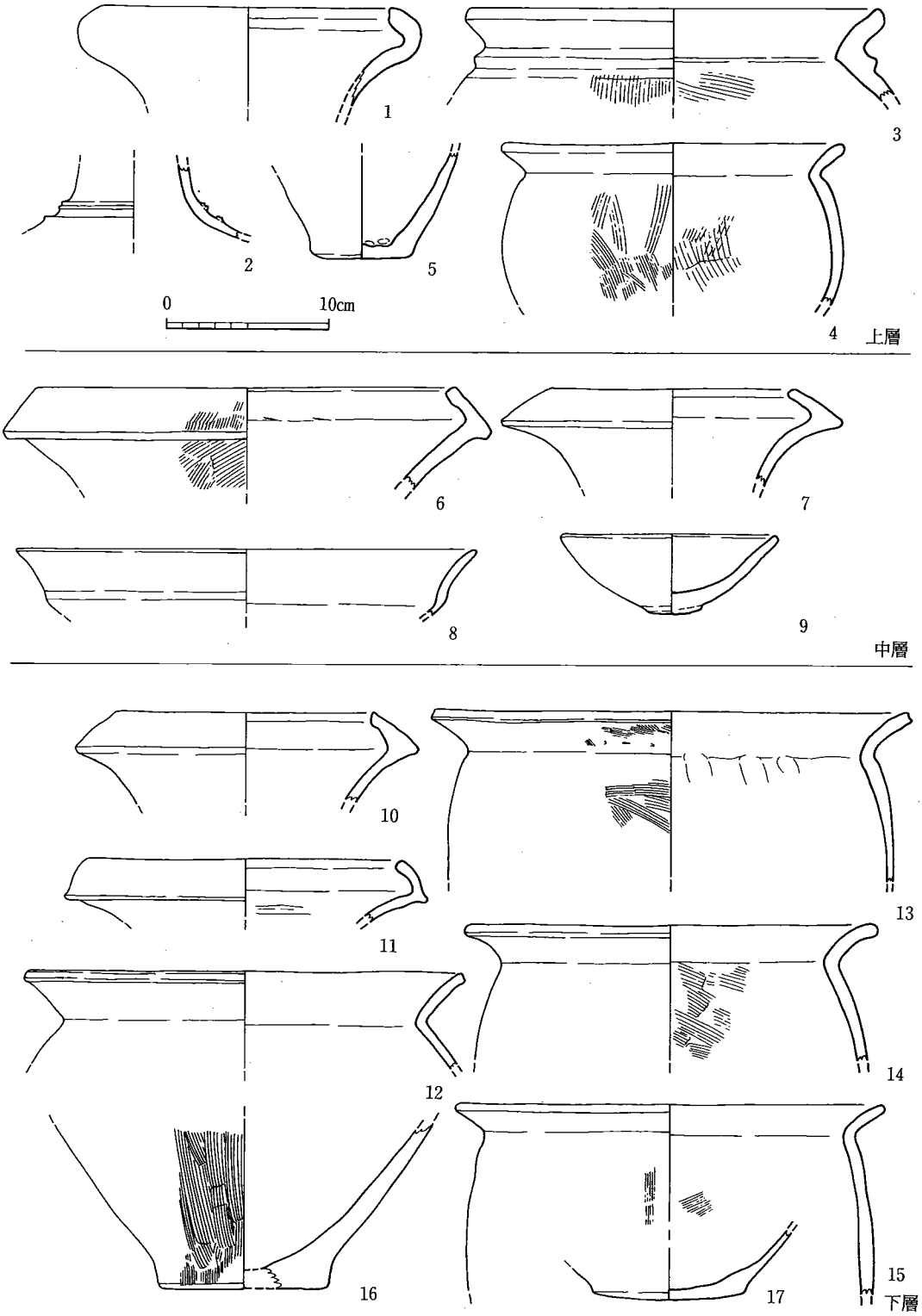
遺物（第38図16）底部小片で、体部はやや直に立ちあがる。磨滅のため調整不明。（齋部）

1289号竪穴住居跡

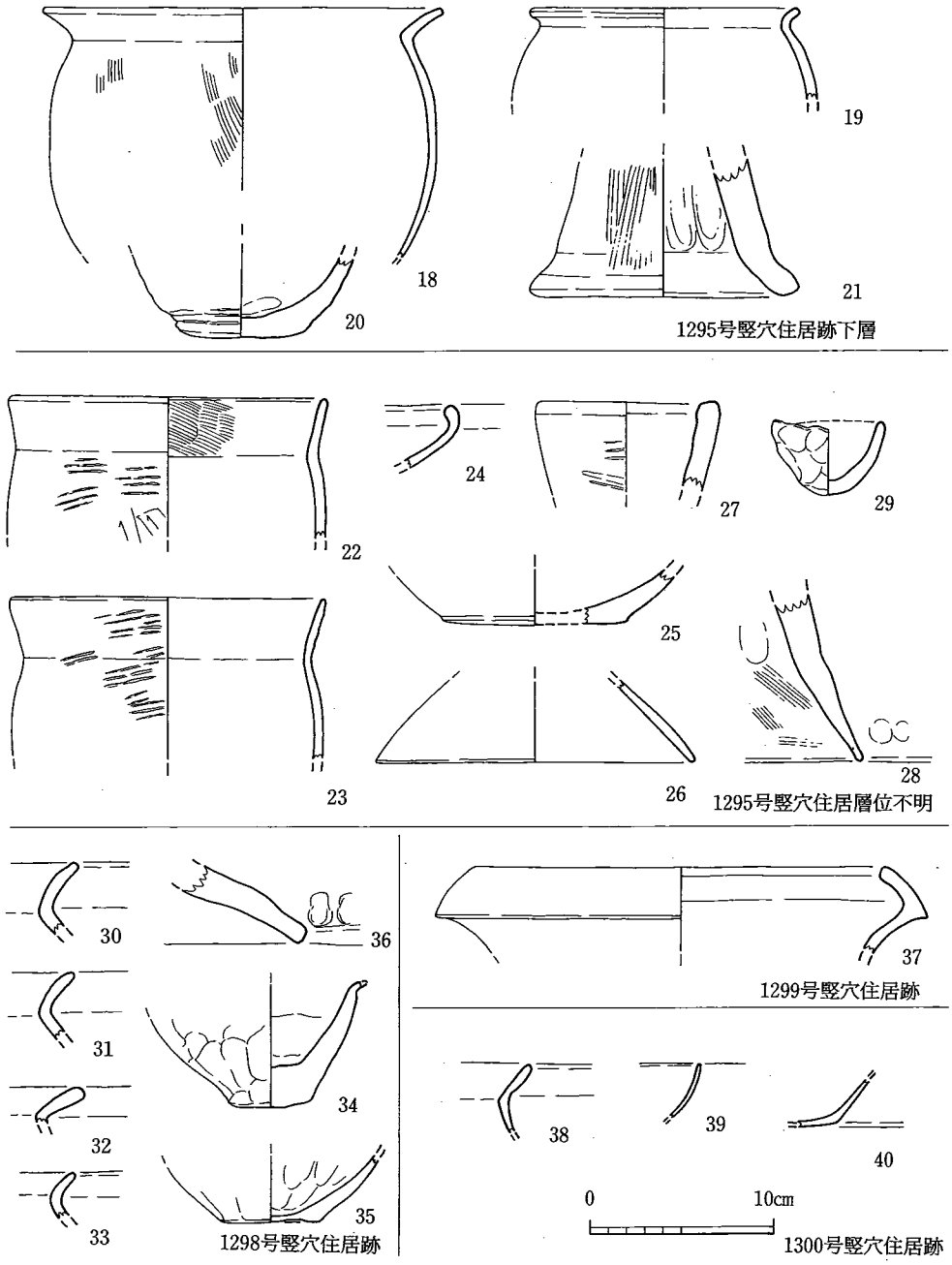
遺物（図版51　第38図17･18　第53図7）17は口縁端部に斜の平行刻み目を施す。他は磨滅のため調整不明。18は外面工具によるナデを施し、内面は口縁付近に僅かにヨコハケが見えるが、その後ヨコナデし明確な稜線を作る。復元口径27.4cm。また、両端を欠損する石庖丁が1点出土している。（第53図7）（齋部）

1295号竪穴住居跡

遺物（図版50　第39図　第40図18～29　第53図8）1～5は上層より出土。1の口縁屈折部は丸みを持ち、端部へは厚く肥厚する。復元口径17.6cm。2は頸部に2条の突帯を持つ。3は頸部内側は鋭く稜を持つ。口縁部内外面には横ナデ、頸部以下には内外面ともにハケ目を施す。4の復元口径は20.8cmを測る。5の底面端部は丸みをもつ。6～9は中層より出土した。6・7いずれも屈折部外側が突出し稜を持つ。6は口縁端部が内側に肥厚する。復元口径25.8cm。7は内面に指頭圧痕を持つ。8は内外面ともに横ナデを施す。9は復元口径15.4cmを測る。10～21は下層より出土した。10の復元口径は18.5cm、11は口縁端部へは丸みを持って至る。12



第39図　1295号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4）



第40図　1295・1298・1300号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4）

の口縁は「く」字に鋭く外反し、端部はわずかに肥厚する。復元口径27.0cmを測る。13は内面頸部付近に指頭圧痕を残し、口縁の屈曲も緩やかである。14は復元口径25.4cmを測る。15は頸部から胴部にかけて煤が付着する。16は平底で端部においてわずかに丸みを持つ。17は凸レンズ状の底部で底径9.6cmを測る。18は球形の胴部を持ち、ここに最大径がある。19の口縁は緩やかに外反し、端部で丸みを持つ。20は内外面磨滅ぎみで調整不明だが、内底面には指頭圧痕を観察できる。21の裾部外面は強いナデにより、わずかな窪みが巡る。22～29は層位不明の遺物である。22の口縁部は端部まで一定の厚みをもって至る。口縁内面にはハケ目を施す。23は22とほぼ同じ器形だが、全体に薄い作りで、タタキ痕が口縁部にも及ぶ。24は端部付近で肥厚する。調整不明。25も調整は不明。26は内外面ともにナデ調整を施す。27の復元口径は10.8cm。28は外面はナデ、内面はハケ目のナデによる調整。29は器面に指頭圧痕を残す。ほかに粘板岩製で胴部が細い石庖丁が１点出土している（第53図８）。（杉原）

1298号竪穴住居跡

遺物（第40図30～35）30～33はいずれも頸部片である。32のみ内外面横ナデ調整であることが判る。35の鉢は作りが粗く、器面もかなりでこぼこする。ナデ調整を施す。（杉原）

1299号竪穴住居跡

遺物（第40図37）37の口縁屈折部では外面が突出し稜を持つ。（杉原）

1300号竪穴住居跡

遺物（第40図38～40）38～40はいずれも小片で完形に復元できず調整も不明。（杉原）

1324号竪穴住居跡

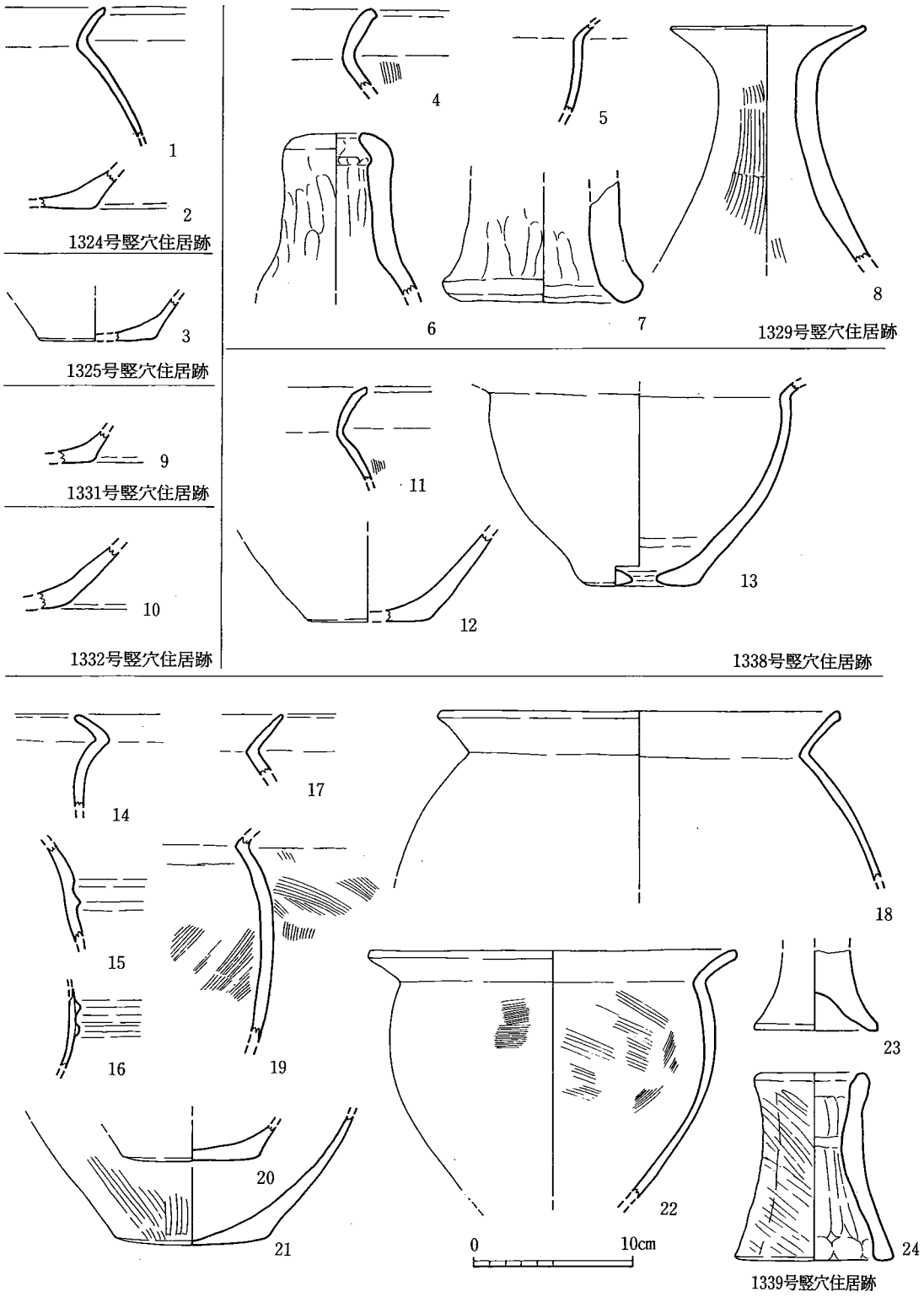
遺物（第41図１・２）１は口縁端部がやや肥厚する。２は磨滅気味だが、内面はナデ調整されている。（杉原）

1325号竪穴住居跡

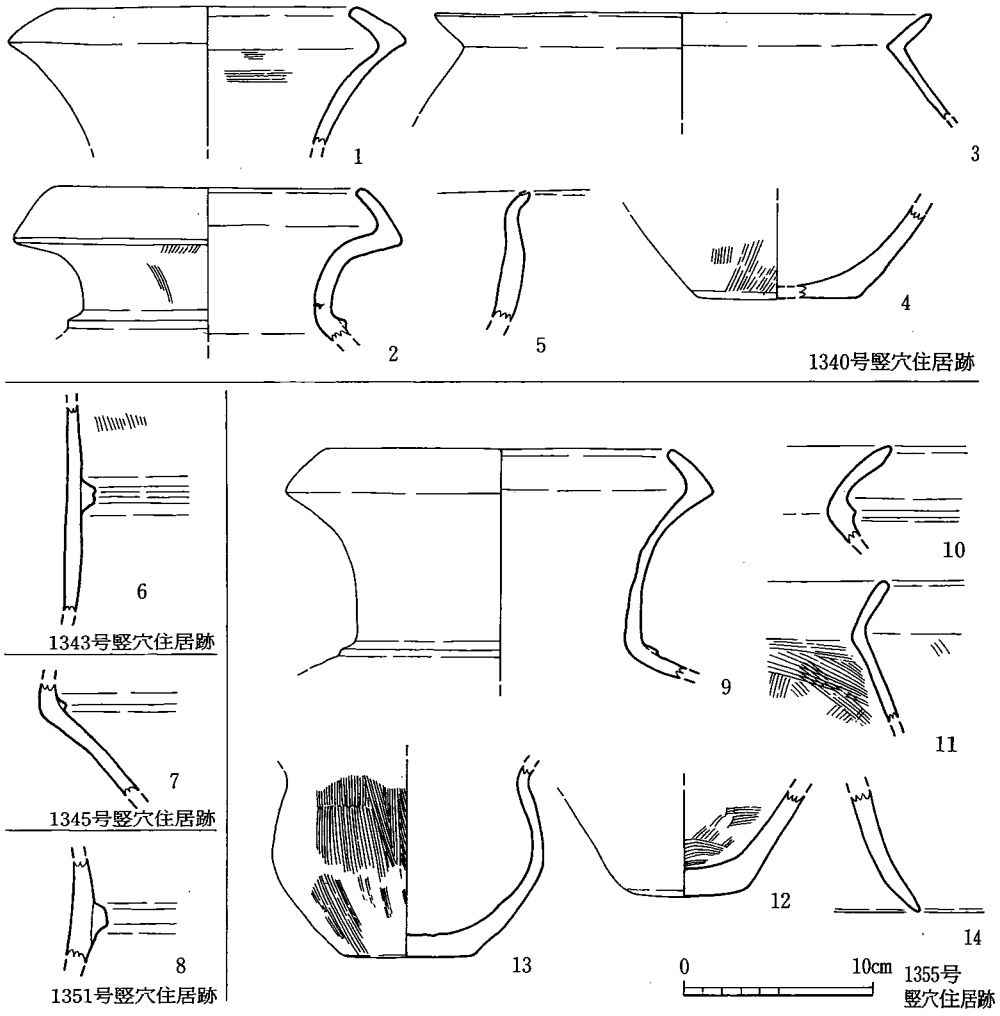
遺物（第41図３）３は復元口径7.2cmを測る。（杉原）

1329号竪穴住居跡

遺物（第41図４～８）４は口縁部から端部へ向かう中位で最も肥厚する。５は内面にわずかにナデ目が観察できる。６は内面屈折部に指頭圧痕を残す。７は全体に作りが厚く、所々凹凸を残す。８は外面くびれ部にミガキを施す。受部の復元径は12.4cm。（杉原）



第41図　1324・1325・1329・1331・1332・1338・1339号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4）



第42図　1340・1343・1345・1351・1355号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4）

1331号竪穴住居跡

遺物（第41図９）９の調整は不明。　（杉原）

1332号竪穴住居跡

遺物（第41図10）10は磨滅により調整不明。　（杉原）

1338号竪穴住居跡

遺物（第41図11～13）11は頸部が最も薄く端部付近で最も肥厚する。12の復元底径は6.6cm。13は底に径1.5cm程度の穿孔がある鉢である。　（杉原）

1339竪穴住居跡号

遺物(図版46　第41図14～24)14の器面調整は不明。15は壺の胴部片であろう。16は胴部に2条の三角突帯を貼付る。17は磨滅により調整不明。18は頸部で鋭く「く」字に外反する。復元口径は24.6cmを測る。19は胴部内外面ともにハケ目を施す。20は外底面はやや凸気味である。21の復元底径は9.0cm。22は胴部から底部へは急に細くなっていく。口縁は外彎する。23は内外面ともに横ナデ。24は外面にタタキ、内面には強い指ナデを残す。　(杉原)

1340号竪穴住居跡

遺物(図版46　第42図1～5) 1は屈折部から口縁端部にかけて肥厚する。 復元口径 15.6cm。 2は頸部下に三角突帯を貼付ける。 3は頸部が鋭く「く」字に外反し、復元口径は26.4cm。4は平底で外底面端部は鋭くナデる。 5は厚い胴部から徐々に薄くなり端部へ至る。(杉原)

1343号竪穴住居跡

遺物(第42図6) 6は、沈線の入る方形突帯が1条貼付く。　(杉原)

1345号竪穴住居跡

遺物(第42図7) 7は頸部に稜の鋭い三角突帯が1条貼付く。　(杉原)

1351号竪穴住居跡

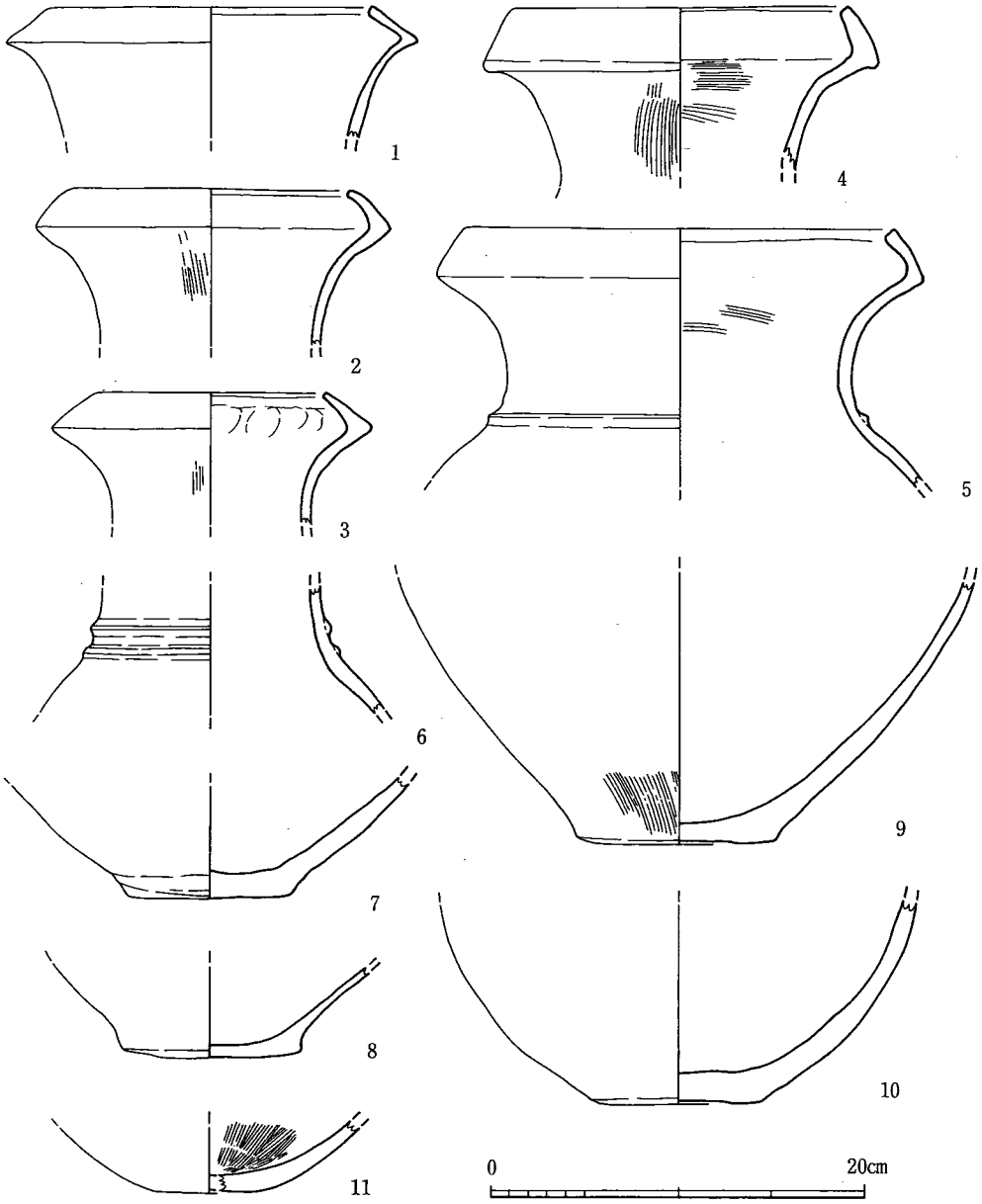
遺物(第42図8) 8は厚い胴部片に方形突帯が1条貼付く。　(杉原)

1355号竪穴住居跡

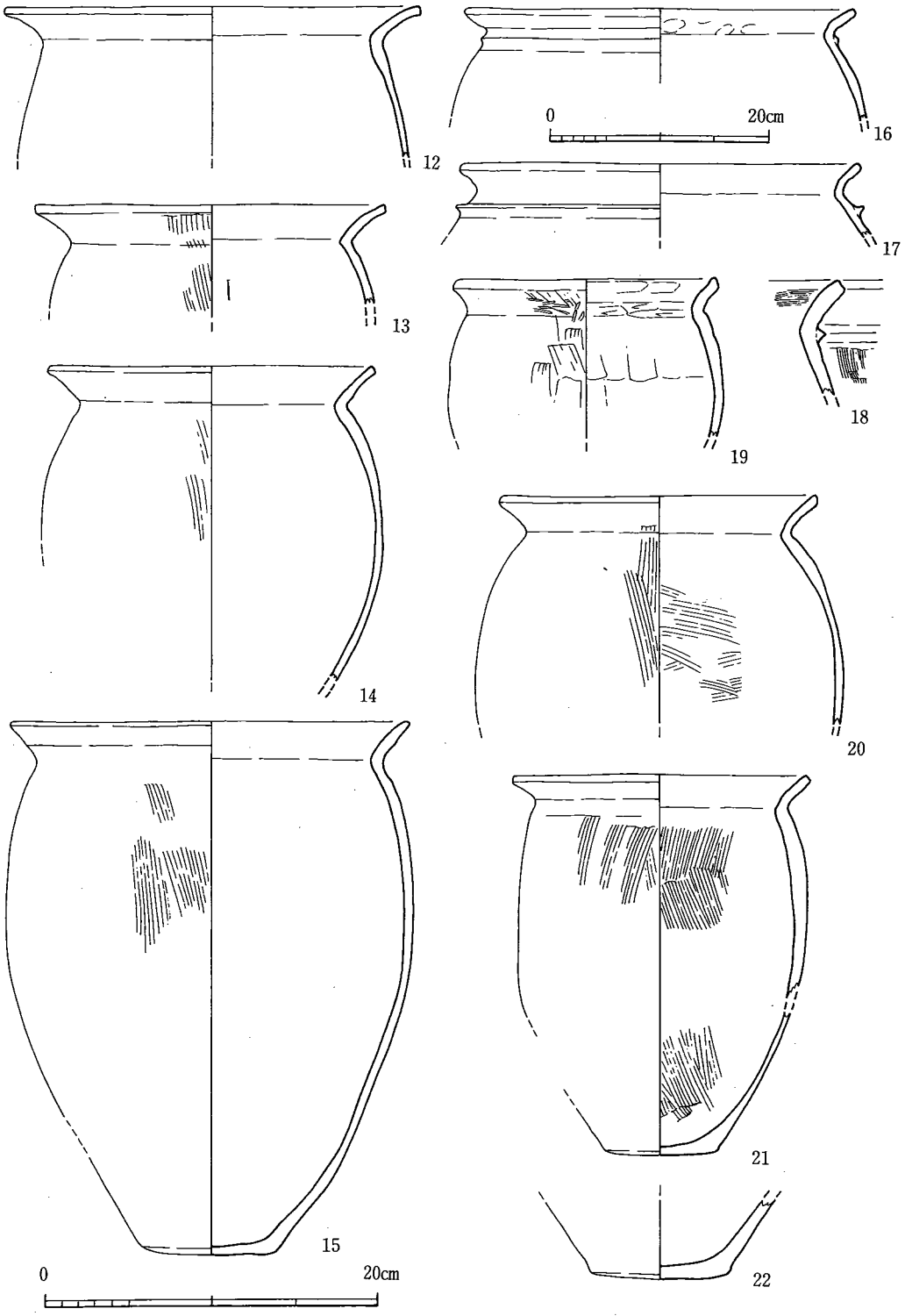
遺物(図版46、第42図9～14) 9は頸部から口頸部へは直線的に立ち上がり、屈折部へは急に開いて至る。復元口径18.2cm。10は頸部にわずかな三角突帯が貼付く。11は外面は磨滅ぎみだが、内面には頸部以下にハケ目を施す。12の外底部は凸レンズ状で、外面はナデ、内面にはハケ目を施す。13の底部付近には黒斑がある。14の器面調整は不明。　(杉原)

1356号竪穴住居跡

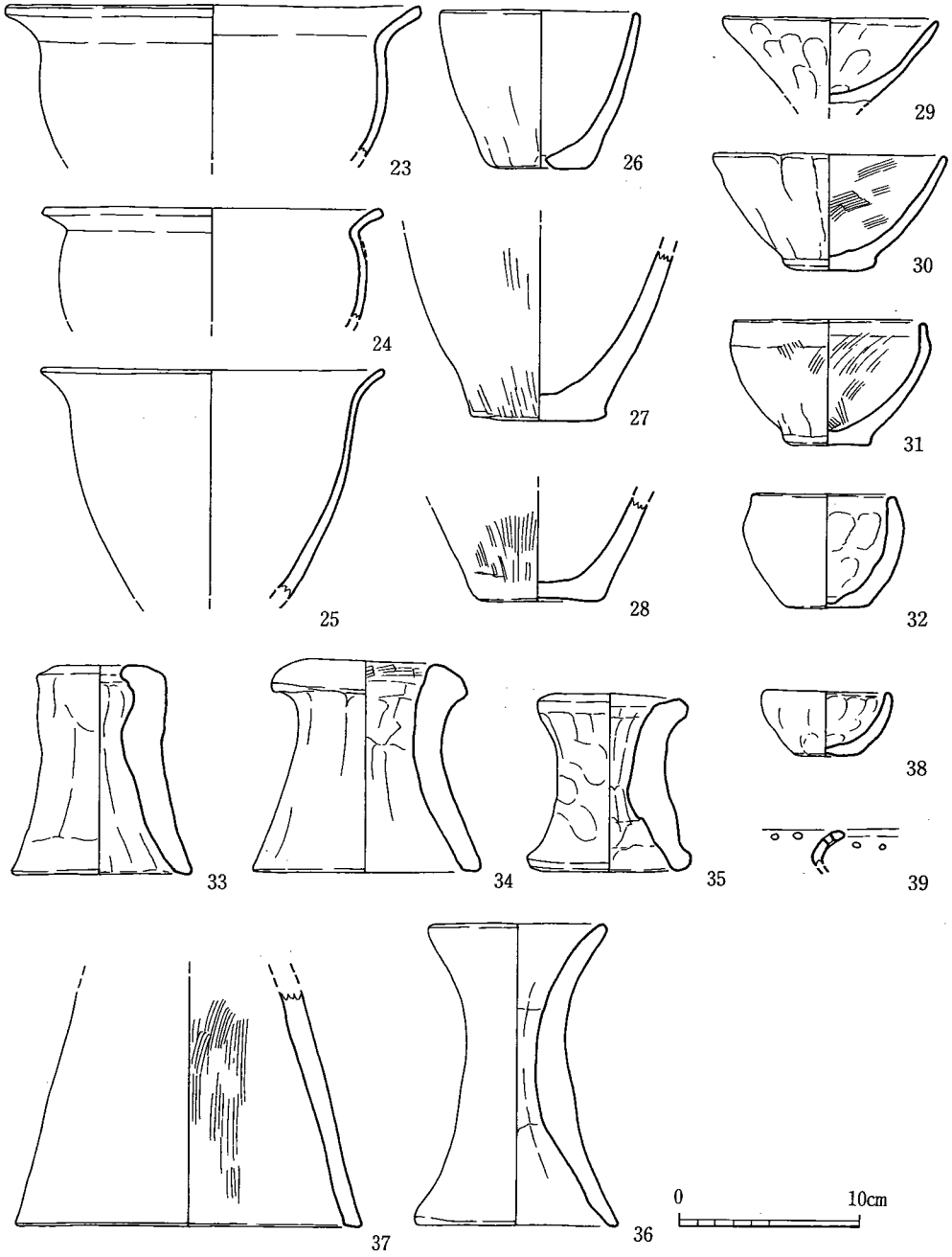
遺物(図版46～48　第43～45図) 1～5はいずれも複合口縁壺である。 1・2の口頸部はバチ状に開き屈折部へ至るが、 1が鋭い屈折部を持つのに対して2は丸みを持って肥厚する。 3は屈折部内面に指頭圧痕がある。 4は屈折部から口縁へは開きぎみで、屈折部外面がわずかに突出する。口径18.2cm。 5の口頸部は緩やかに外反し、頸部には三角突帯を1条貼付ける。 6はさほど鋭くない三角突帯を2条貼付ける。 7の外底面端部は丸く仕上げている。器面調整は不



第43図　1356号竪穴住居跡出土土器実測図．1 (1/4)



第44図　1356号竪穴住居跡出土土器実測図．2（1/4　16～18は1/6）



第45図　1356号竪穴住居跡出土土器実測図．3 (1/4)

明。8はやや凸ぎみの底部で復元底径9.8cmを測る。9の底部には黒斑がある。10は内外面ともに煤が付着し、断面にも及んでおり、二次的に熱を受けた可能性がある。11の外面の調整は不明。12～14はいずれも口縁部が「く」字に外反する。器厚も全体に薄く口縁部付近でわずかに肥厚する。13は屈曲部内面で鋭い稜を持つ。15の口縁と底部は同じ色調から、完全に接合しないものの同一個体と考えられる。口縁部形態は12～14に近く、底部はわずかに凸ぎみである。16～18はいずれも頸部下に突帯を有するが、17については少し下方にあり復元口径は36.0cm。18は頸部以下の外面には縦位のハケ目、胴部口縁部内面に横位のハケ目を施す。19は全体に作りは厚く、黒色に焼成している。口縁部外面には一部ミガキがあり、内外面とも粗いナデ、胴部外面の一部にハケ目も残るが、全体を工具によってナデる。20は復元口径19.2cmを測る。21は完全に接合しない。どちらも熱を受けている。22の復元底径は8.3cmを測る。23～25はいずれも大型の鉢で、24のみ口縁部の屈曲が強い。25の復元口径は19.0cmを測る。26は底部から口縁端部へは直線的に開いて至る。27の外面はハケ目のち粗いナデ、内面は工具によりナデられている。28の底径は6.8cmを測る。29～32はいずれも小型の鉢である。口縁端部へ直線的に開く29・30とやや内彎する31・32がある。器面調整も31の作りが丁寧なほかは指頭圧痕を残し、粗くナデたり雑な印象を受ける。30・32には底面付近に黒斑がある。32は完形で口径8.0cm、底径4.7cm、器高6.3cmを測る。33は頭部から胴部にかけては円筒状で、そこから裾部へかけて緩やかに外反する。34は受部が外側に折れ肥厚する。35は内外面に指頭圧痕をはっきり残し、器面の凹凸が激しい。36は口径9.9cm、底径11.2cm、器高8.8cm。37の裾部は直線的に開き、端部では丁寧な横ナデにより角を持つ。外面の調整は不明。38は手捏ね土器で内面には指頭圧痕をはっきり残す。黒色に焼成している。39は孔の径は約3㎜前後である。（杉原）

1359号竪穴住居跡

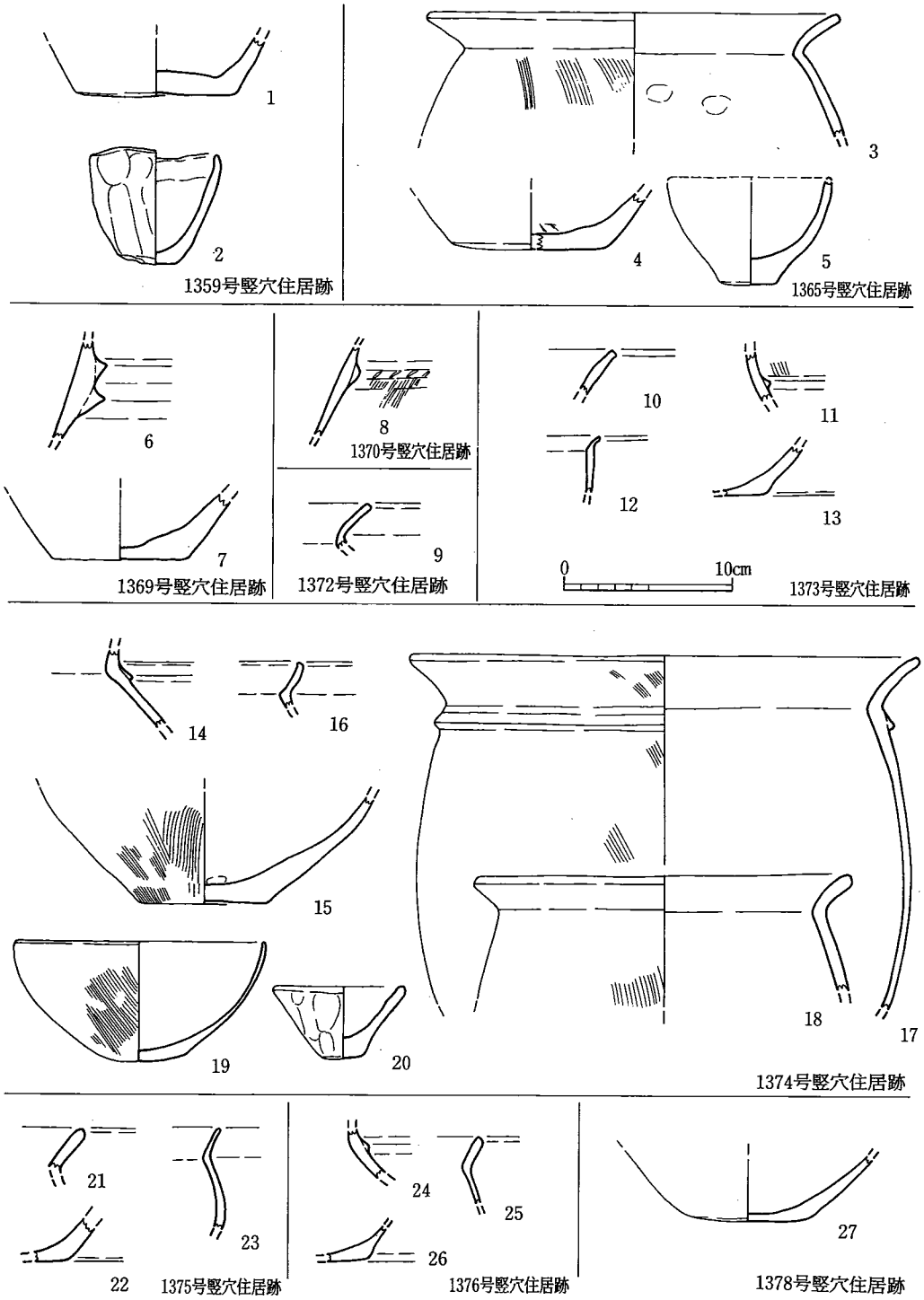
遺物（図版48　第46図1・2）1は平底で底径8.6cmを測る。磨滅により調整不明。2は手捏ねで整形内外面ともにナデによる調整。（杉原）

1365号竪穴住居跡

遺物（第46図3～5）3の口縁部は「く」字に鋭く外反する。外面にはハケ目、内面ナデで指頭圧痕を残す。復元口径22.4cm。4の底面はやや凸ぎみで端部に丸みを持つ。5は内外面ともにナデ調整。（杉原）

1369号竪穴住居跡

遺物（第46図6・7）6は稜の鋭い三角突帯を2条貼付ける。7は復元底径8.0cm。（杉原）



第46図　1359・1365・1369・1370・1372～1376・1378号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4）

1370号竪穴住居跡

遺物（第46図） 8には刻み目を持つ突帯が貼付く。 （杉原）

1372号竪穴住居跡

遺物（第46図９） ９の器面調整は内外面ともに横ナデ。 （杉原）

1373号竪穴住居跡

遺物（第46図10～13）10は端部まで横ナデしている。11は外面にわずかにハケ目を観察することができる。12は小型の鉢片である。口縁端部は先細りする。13は外底面端部に丸みを持つ。調整は不明。 （杉原）

1374号竪穴住居跡

遺物（図版48、第46図14～20）14の突帯は厚くないが、端部を鋭く仕上げる。15の外面にはハケ目のちナデ、内面にはナデを施し、底には指頭圧痕を残す。16は口縁端部がわずかに内彎する。17・18の口縁はいずれも「く」字に屈曲する。17の胴部の器厚は薄く、突帯の貼付く頸部付近が最も厚い。19はボール状の鉢で口径14.4cmを測る。20は手捏ね土器。 （杉原）

1375号竪穴住居跡

遺物（第46図21～23）21･22は磨滅により調整不明。23は頸部でわずかに屈曲したのち端部へは直線的に開いて至る。 （杉原）

1376号竪穴住居跡

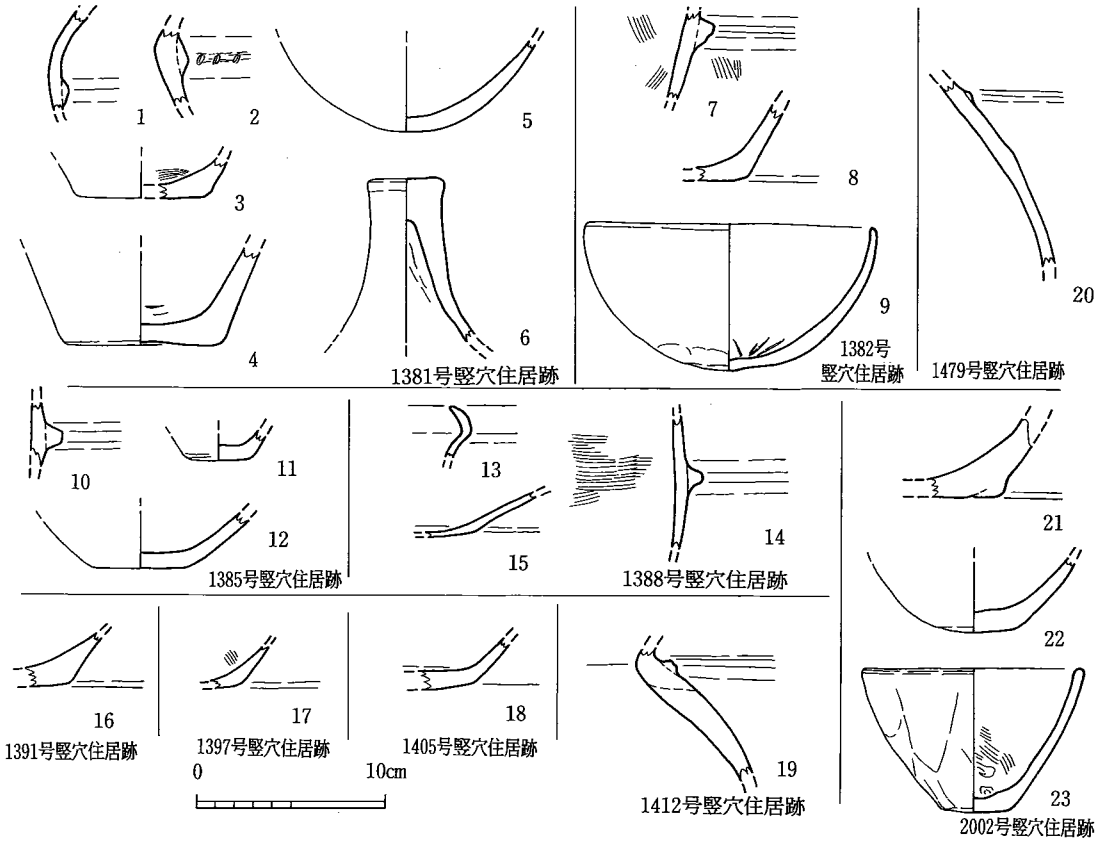
遺物（図版51　第46図24～26　第53図９）24は頸部付近に不明瞭な三角突帯を貼付ける。25は口縁の屈曲は緩やかで端部へ肥厚しながら至る。26は調整不明。P－2より石庖丁が１点出土している（第53図９）。粘板岩製。 （杉原）

1378号竪穴住居跡

遺物（図版48　第46図27）27は凸レンズ状の底部を持つ。底径は7.4cmを測る。 （杉原）

1381号竪穴住居跡

遺物（図版51　第46図１～６　第54図９）１・２に貼付く突帯はどちらも稜は鋭くないが、２は刻み目が入る。３の外面はナデ、内面はハケ目を施す。４の底径は8.2cm。５は調整不明。６の内面にはわずかにシボリ痕が観察できる。他に粘板岩製の砥石が出土している（第54図９）



第47図　1381・1382・1385・1388・1391・1397・1405・1412・1479・2002号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4)

厚さは薄いところでは、5㎜程度でかなり使いこまれている。　(杉原)

1382号竪穴住居跡

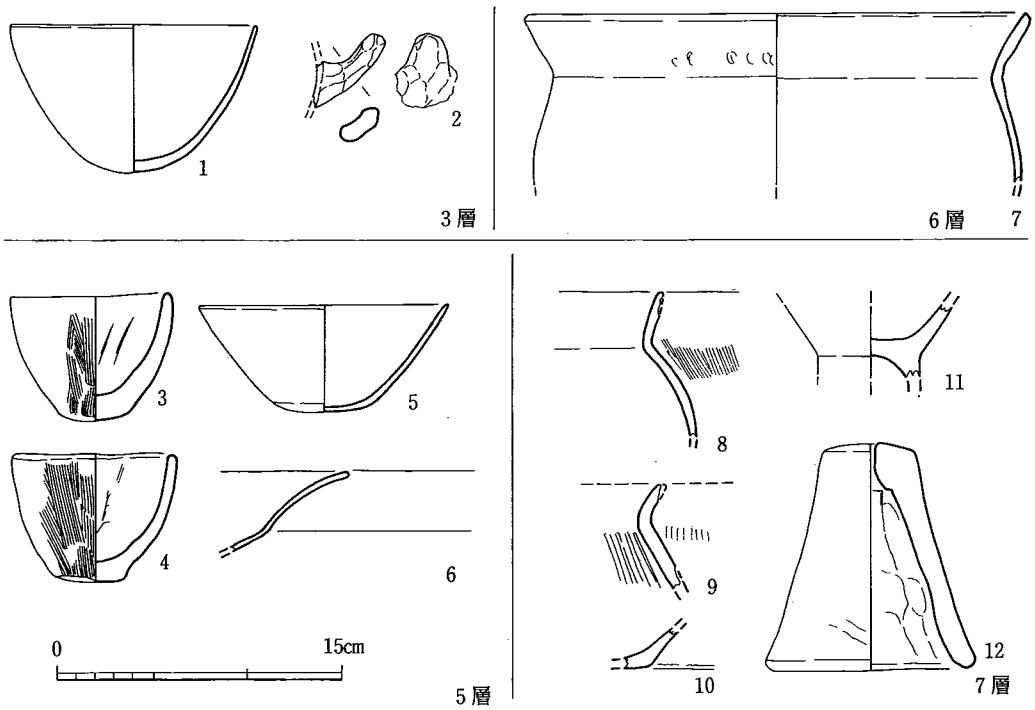
遺物（図版49・52、第47図７～９　第55図６）７は厚い方形の突帯が取りつく。８は調整不明。９は口径14.1cm、器高7.7cm。また、袋状の着柄部をもつ鉄斧が出土している（第55図６）。内底面には工具痕が観察される。　(杉原)

1385号竪穴住居跡

遺物（第47図10～12）10の調整は不明。11は内外面ともにナデ調整。12の外底部の端部は丸みを持つ。　(杉原)

1388号竪穴住居跡

遺物（第47図13～15）13は小型壺の口縁部片。14は外面の磨滅は激しいが内面には横位のハケ目を施す。15は高杯片で、屈曲部付近にはわずかに稜が入る。　(杉原)



第48図　斜面造成住居跡群Ｐ501—502ベルト内出土土器実測図（1/4）

1391号竪穴住居跡

遺物（第47図16）16の調整は不明。（杉原）

1397号竪穴住居跡

遺物（第47図16）17の内面にはわずかにハケ目を観察することができる。（杉原）

1405号竪穴住居跡

遺物（第47図18）18はやや凸ぎみの底部である。（杉原）

1412号竪穴住居跡

遺物（第47図19）19は頸部下に不明瞭な突帯が１状条貼付く。（杉原）

1479号竪穴住居跡

遺物（第47図20）20の器面調整は不明。（杉原）

2002号竪穴住居跡

遺物（第47図21～23）21は底面端部で丸みを持つ。22は内外面ともにナデ調整。23は外面ケズリのちナデ、内面はハケ目のちナデ調整。（杉原）

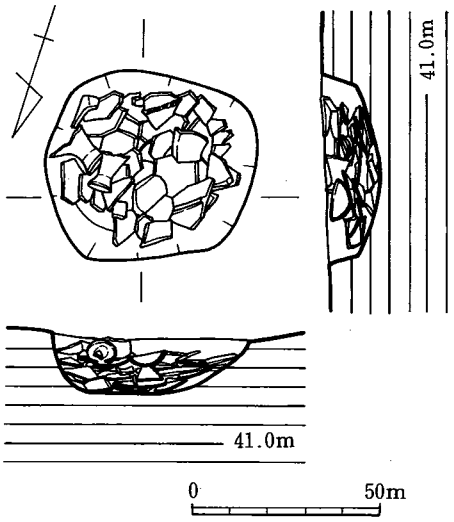
斜面造成住居跡群

遺物（第48図）P501-502のベルト内より出土した。１・２は３層中の出土である。１の復元口径は14.0cm。２は黒色で胎土も粗く黒色に焼成している。３～６は５層中からの出土。3・4はともに小型の鉢でともに外面はハケ、内面はナデにより仕上げるが、４のほうが器厚が薄く作りが丁寧な印象を受ける。５は直線的に開く鉢で端部へは細く鋭く至る。６はナデ調整を施すが口縁端部においては特に丁寧である。７は６層中からの出土である。強い横ナデ調整を施し、口縁部外面には指で押さえた刻み目を施す。外面黒色、内面端淡茶色に焼成する。８～12は７層中からの出土。８の口縁部は外面はハケ目のちナデ、内面は丁寧なナデ調整。焼成は良い。９の外面はミガキのちナデ、内面はミガキ。口縁部は横ナデ。11は台付鉢の欠損資料。12は内外面ともにナデ調整を施す。（杉原）

(2) 掘立柱建物

39号掘立柱建物跡（第49図）

遺物（図版49　第50図）１は複合口縁壺で、口縁部の複合部を水平に尖らせている。調整はハケ目が太い。２・３は甕の口縁部で、口縁は直線的で、傾きが少ない。４・５は鉢であろう。５は胴中位に削りが見られる。６はほぼ完形の甕で、外面はタタキの後をナデ消しており、中位には削りが見られる。底部は赤化しており、その上位から帯状に煤が付着している。鼓形器台を使用した痕跡であろう。７は甕棺の口縁部片で、口縁端部には×形の刺突文が入る。８は器台の脚部か口縁部であろう。９は沓形支脚で、使用時のものと思われる、煤と赤化が見られる。10はほぼ完形の高杯で、裾部の透かし穴は２つである。外面は磨きが施されており、作り・胎土ともに良好である。11は高杯の脚部である。（秦）

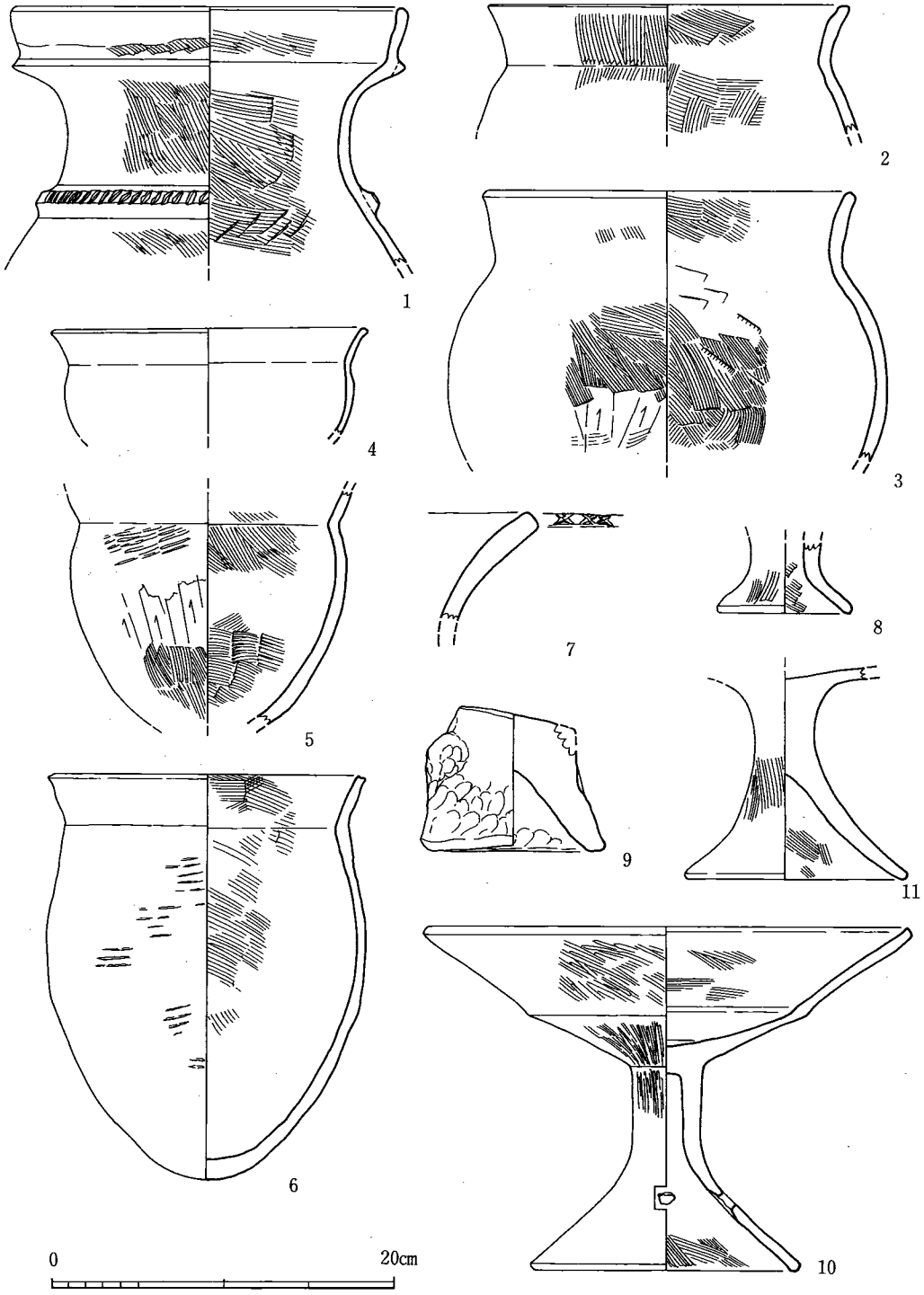


第49図　39号掘立柱建物跡 P1182遺物出土状態（1/20）

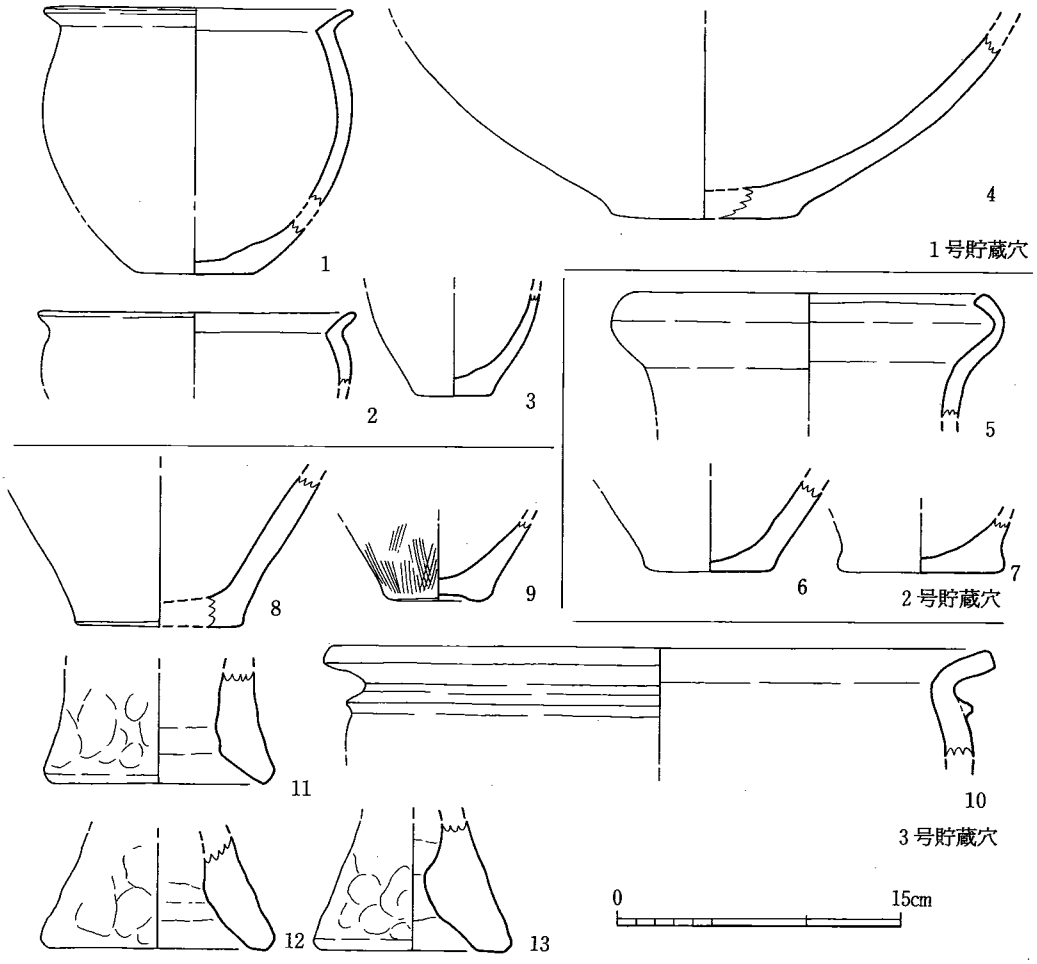
(3) 貯蔵穴

１号貯蔵穴

遺物（第51図１～４）１～３は甕。１は磨滅が激しく調整は不明だが、内面特に底部に強く熱を受けた跡がみられる。２も調整は不明。復元口径16.4・16.8cm。復元底径6.2cm。3は小型の



第50図　39号掘立柱建物跡出土土器実測図（1/4）



第51図　1～3号貯蔵穴出土土器実測図（1/4）

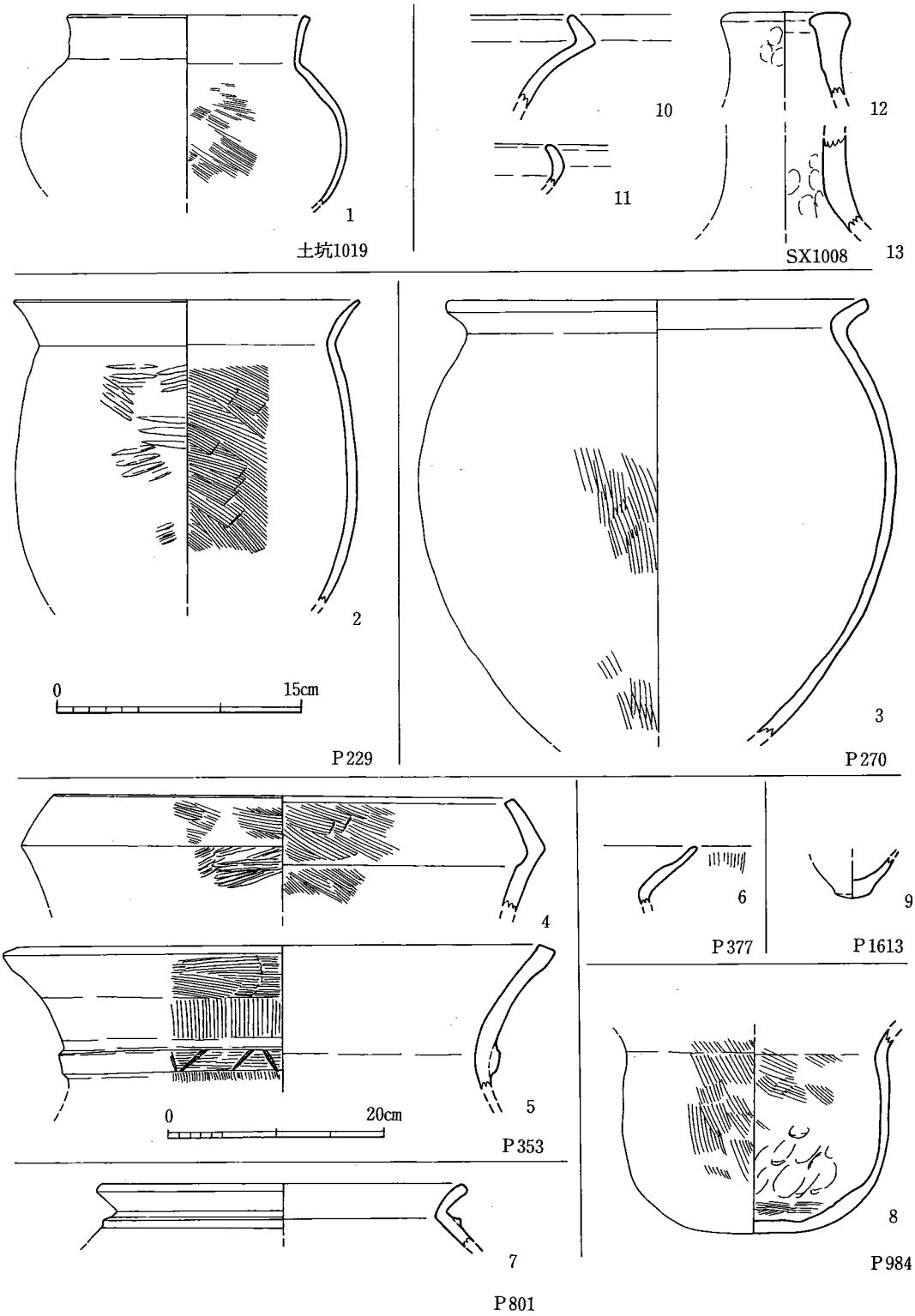
もので、外面底部付近に指圧痕が残る。外底部は熱を受けて赤色化する。4は壺の底部で、底が小さく胴部が大きく張るもの。底部は若干レンズ状になる。磨滅が激しく調整は不明。復元底径10.0cm。（齋部）

2号貯蔵穴

遺物（第51図5～7）5は袋状口縁壺で、屈曲は緩やか。外面をヨコナデする。復元口径18.4cm。6・7の底部片は磨滅のため調整不明。復元底径7.0・8.5cm。（齋部）

3号貯蔵穴

遺物（第51図8～13）8の底部片は磨滅のため調整不明。9は外底部中央を窪めて若干上げ底状に作る。外面はタテハケ、内面はヨコナデを施す。底径4.7cm。11～13は器台脚部で、全て外面に指圧痕が見られる。11・12は内面未調整で裾部のみヨコナデ。13は内面にも指圧痕がつき、裾部外面は面取りする。復元径11.2・11.6・9.8cm。（齋部）



第52図　土坑1019・SX1008・ピット229・270・353・801・984・1613出土土器実測図（1/4　4・5は1/6）

(4) おとし穴

1号おとし穴（図版6、付図7、表5）

重複関係や長軸方向・底面標高などは、住1417号の説明㉕などで詳述。

遺存規模は、検出面で長軸144cm×短軸約82cm、底面で同123cm×同53cm、深さ115cmを測る。

底面の中央やや南西寄りに、上面径37cm×39cm、深さ12cmの円形ピットを配すが、内部掘り下げでの径5cm前後の小ピット群例などは検出していない。（馬田）

2号おとし穴（図版6、付図7、表5）

重複関係や長軸方向・底面標高などは、住1417号の説明㉖などで詳述。

遺存規模は、検出面で長軸111cm×短軸66cm、底面で同93cm×同59cmを測る。

なお、底面には1号陥穴で確認された円形ピットは配されていない。（馬田）

3001号おとし穴（図版2、付図8、表8）

重複関係や長軸方向・底面標高などは、住1017号の説明⑮などで詳述。

遺存規模は、検出面で長軸約130cm×短軸約100cm、底面で同106cm×約60cmを測る。

底面は、長軸中央からやや北より部まで掘り進めたが、1号陥し穴で確認された円形ピットは配されていなかった。（馬田）

スナップ2　変りゆく以来尺遺跡

(5) 土坑

1019号土坑（図１）

遺物（図版49　第52図１）１は頸部から、口縁端部へは直立して至る。内面にはハケ目を施す。（杉原）

(6) ピット

ピット出土の遺物

ここでは、斜面地区を中心に未報告分についても取り上げた。

土器（第52図２～９）２は口縁部が緩やかに屈曲する。外面胴部にはタタキ、内面にはハケ目を施す。P229出土。３は胴部に最大径がある。内面は磨滅し調整不明。P270出土。４・５はP353より出土した。４は屈折部内面に段を持つ。内外面ともにハケ目を施す。５は復元47.0cmを測る。外面には丁寧なハケ目が施され、頸部には幅広で「ハ」の字に刻みを入れた突帯を貼付ける。６はP377出土。７は復元口径33.0cmを測る。P801出土。８は外面胴部にはハケ目、内面頸部から胴部にかけてはハケ目、胴部以下には指頭圧痕を残す。P984出土。９はP1613出土。（杉原）

石製品（図版51　第53図10～12）ピット1388から石庖丁が１点出土している。10の端部は刃部に対し、直角に折れる。珪質層灰岩製。11はP5102からの出土で砂岩製だが、穿孔されていない。刃部は丁寧に作り出されておりわずかに刃こぼれも観察できる。12はP5013からの出土で粘板岩製で欠損資料。（杉原）

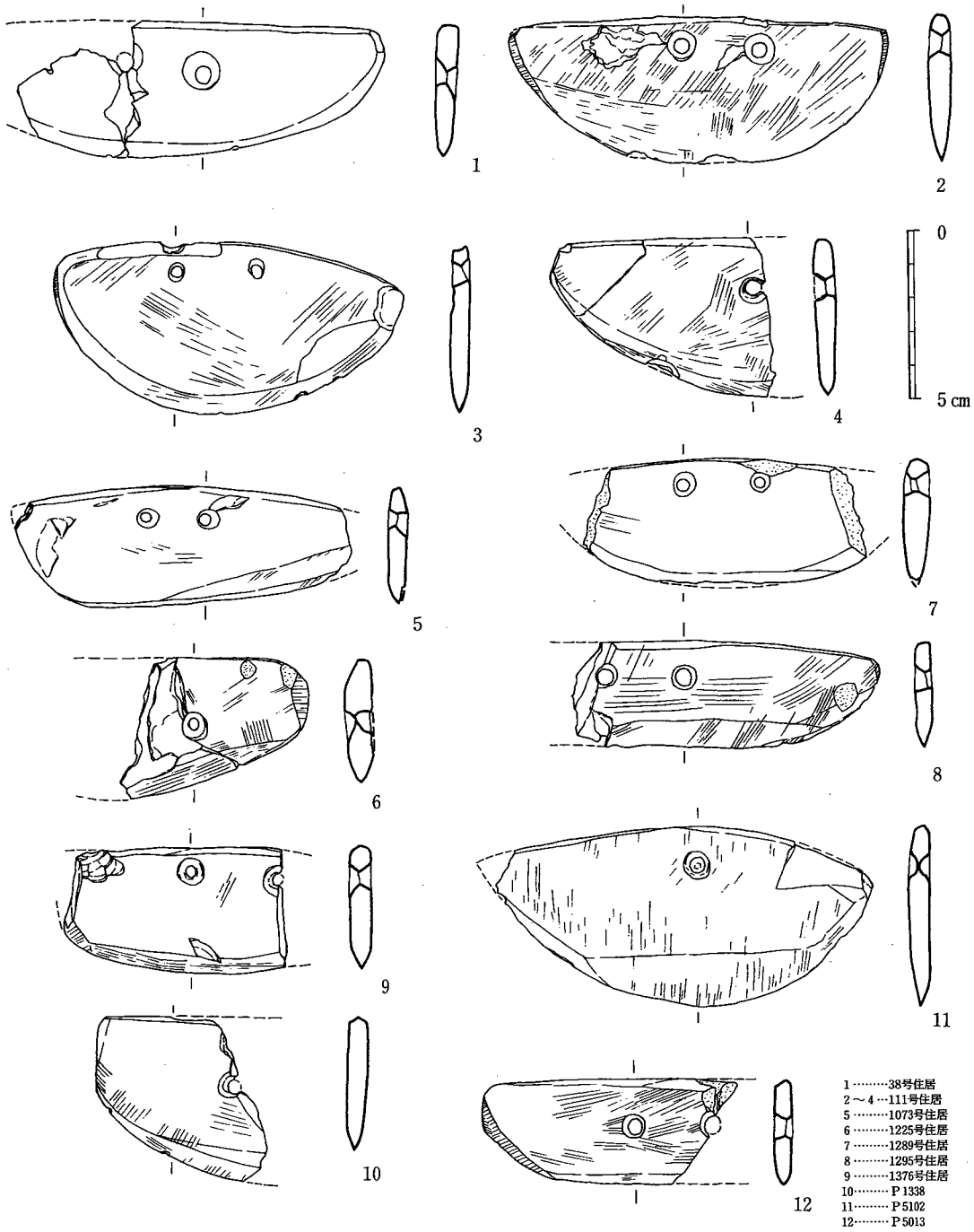
鉄製品（図版52、第55図２）ピット1613より１点出土している。２はやや断面が厚いが、鉄鏃の先端部と考えられる。（杉原）

(7) その他の遺物

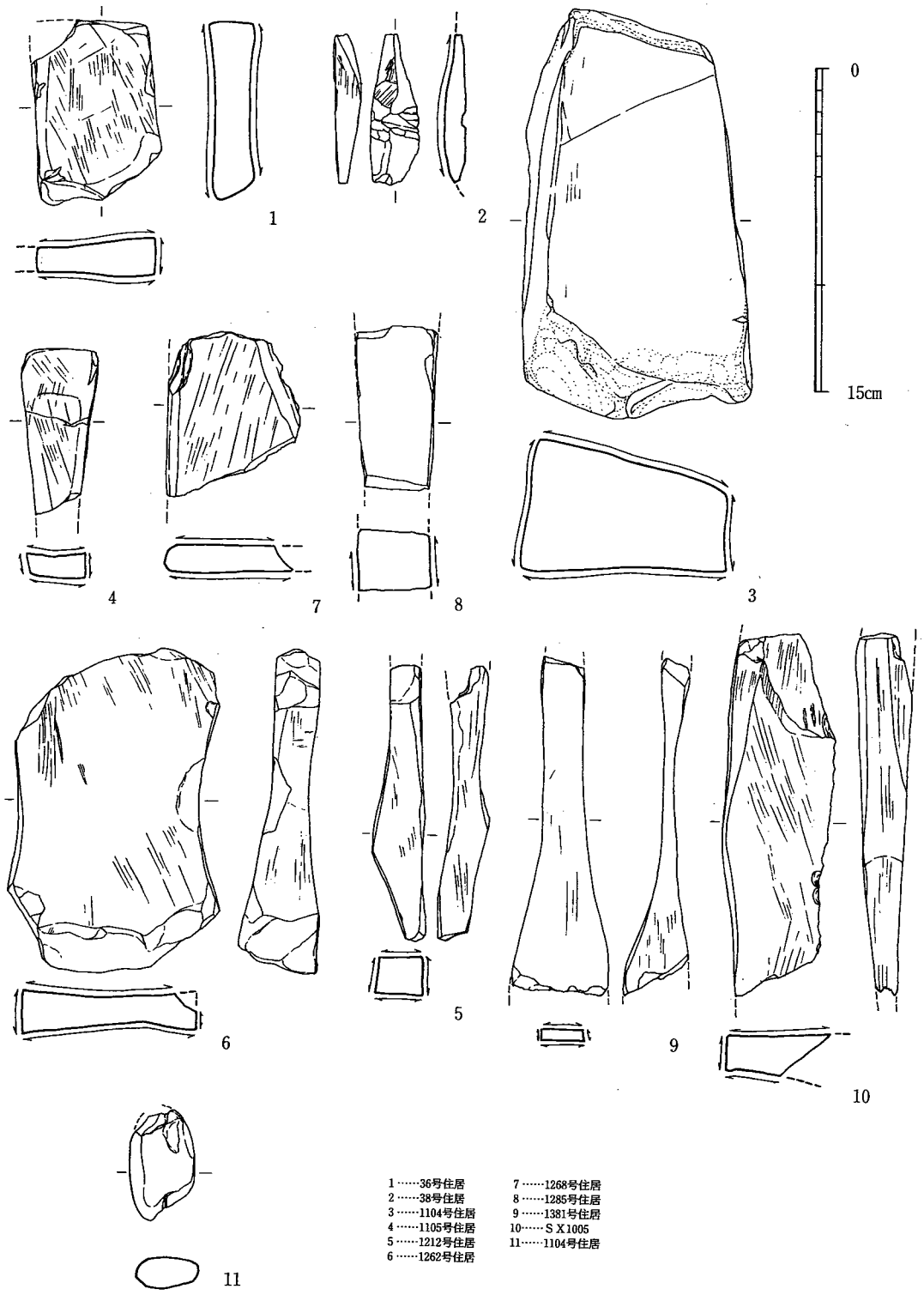
ここでは、遺構の報告のない資料について報告する。また、包含層・後世の遺構より出土したものや採集資料についてもあわせて報告する。

SX1008号

遺物（第52図10～13）10・11の口縁部小片は調整不明。12は、外面に一部指圧痕がつくが、内外面ともにナデを施す。13の内面には指頭圧痕が観察できる。（齋部）

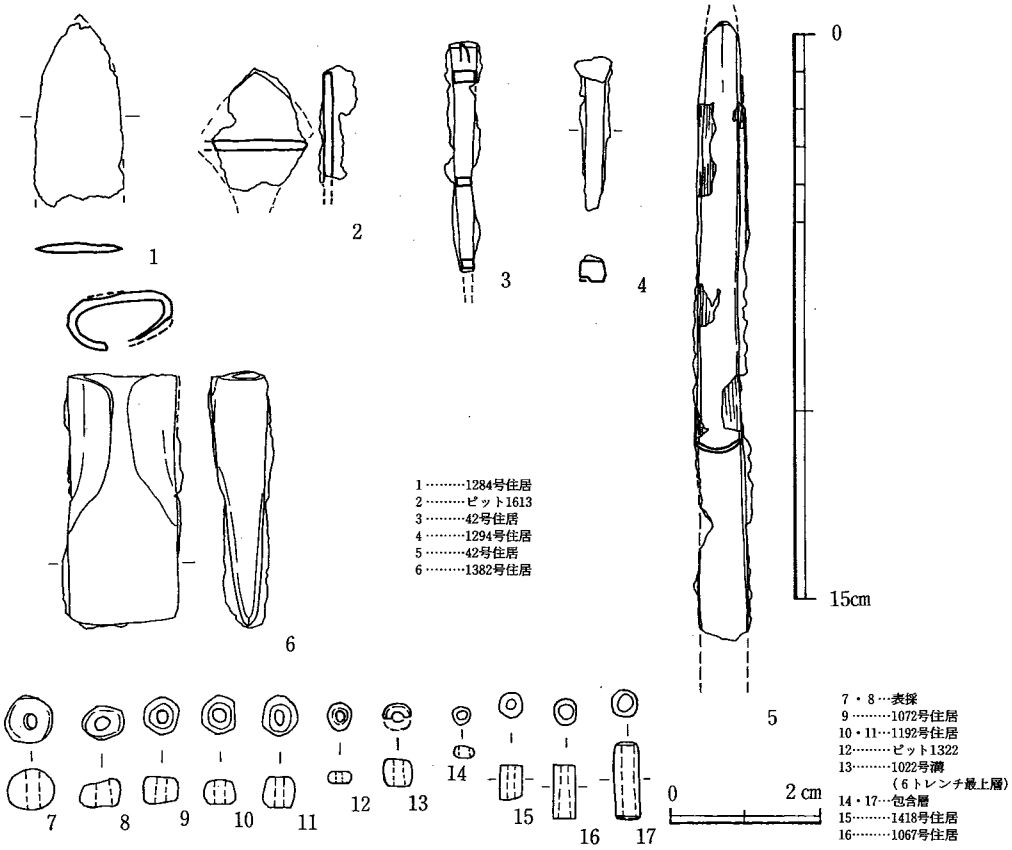


第53図　斜面地区出土石庖丁実測図（1/4）



1……36号住居
2……38号住居
3……1104号住居
4……1105号住居
5……1212号住居
6……1262号住居
7……1268号住居
8……1285号住居
9……1381号住居
10……ＳＸ1005
11……1104号住居

第54図　斜面地区出土砥石・石錘実測図（1/3）



第55図　斜面地区出土鉄製品・玉類実測図（1～7は1/2　8～18は1/1）

斜面地区その他の遺物

石庖丁（図版50　第53図6）1225号住居跡では、粘板岩で表面がやや磨滅ぎみの石庖丁の欠損資料が1点出土している（6）。

砥石（図版51　第54図3）1104号住居跡では、花崗岩製の大型の砥石が1点出土している（3）。SX1005は、粘板岩製(10)。

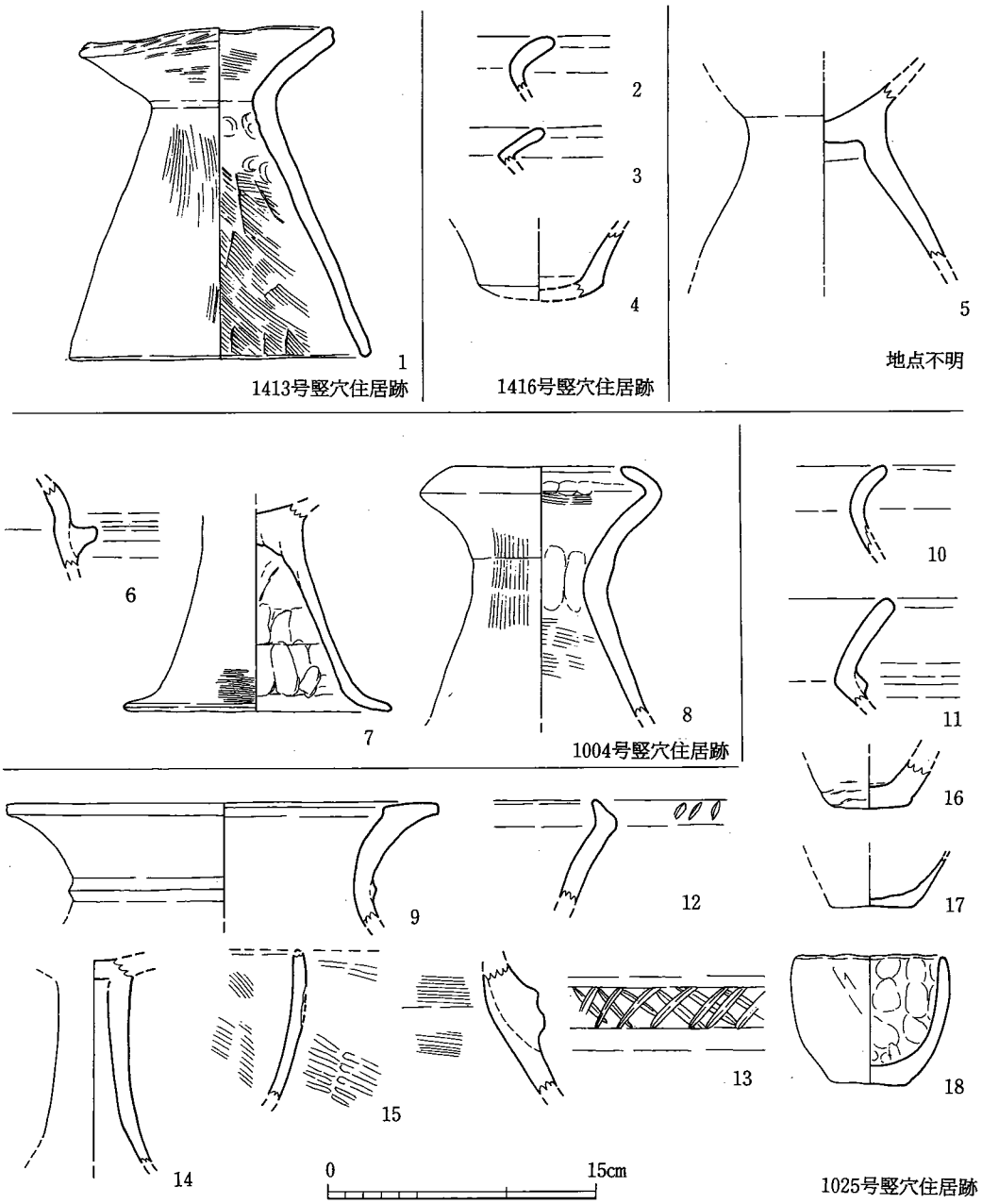
鉄器（図版51　第55図）4は先端を欠損するが、おそらく鉄鏃であろう。

石錘（図版51　第54図11）1104号住居跡で出土している。　（杉原）

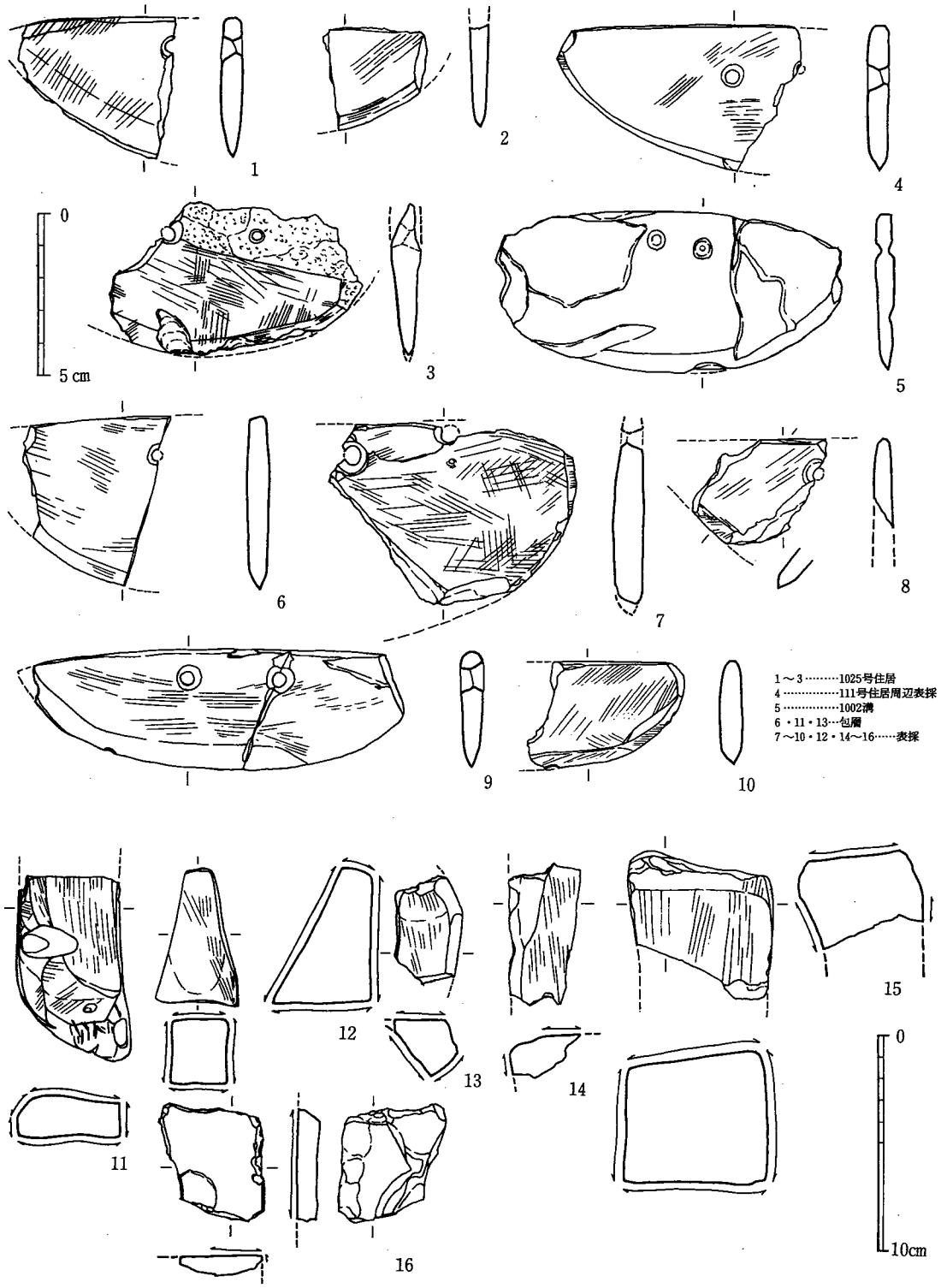
玉類（図版52　第55図7・8・13～17）　遺構内外より出土している。孔径1.5～2.0㎜に収まる。15は1418号住居より、16は1007号住居より出土。

包含層・その他

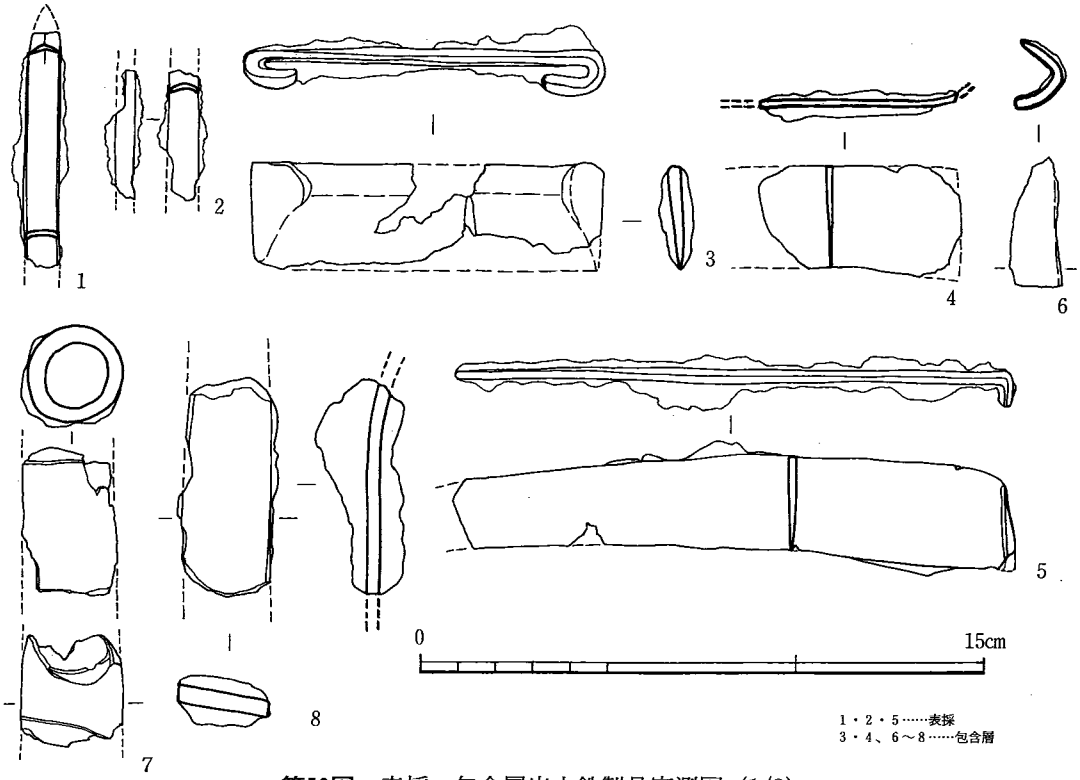
土器（第56図）1～4は掲載もれの遺物である。1は1413号P－2より出土した。くびれ部から受部へは直線的に至り外反する。また、裾部へも直線的に至る。内外面ともにハケ目を施す。2～4は1415号住居より出土。2・3はともに口縁を大きく外反する。4の底部は凸レンズぎみ。



第56図　その他の出土土器実測図（1/4）



第57図　表採・包含層・その他の遺構出土石庖丁・砥石実測図（1～7は1/2　8～18は1/3）



第58図　表採・包含層出土鉄製品実測図（1/2）

5は台付甕の脚台部で、出土地点不明。6～18は古墳時代の1004・1025号竪穴住居跡埋土より出土。6・7は丹塗り。6は瓢型壺で内外面ヨコナデで、突帯は若干磨滅する。7の高坏脚部は外面裾部付近に横方向のミガキが残る。内面は指圧痕があり粘土紐の巻き上げ痕が顕著である。8は器台上半部。外面はタテハケ、内面はヨコハケ調整で、屈曲部内面に指圧痕が並ぶ。外面下位は剥離する。9は壺で頸部に断面三角の突帯を巡らす。10～13は甕。10・11は磨滅のため調整不明。12は口縁端部を内側に屈曲させ、平坦面にギザミ目を施す。13は内面ヨコハケした後ナデ調整、外面には断面台形の突帯を貼付し、平坦部に「×」の刻み目を入れる。9は高坏。内面絞り痕有り、外面はナデ。16～18は小型の椀で、16は内面と外底部はナデ、外面は叩きの後ナデを施す。18は内面に指圧痕が杯、外面は削りが見える。16・18は底部は黒変する。

（齋部）

石庖丁（図版51、第57図1～10）1～3は1025号住居の埋土中より出土した。いずれも欠損資料である。1は砂岩、2は粘板岩、3は泥岩を石材に用いる。4は111号住居周辺より出土。砂岩製。5は1002号溝より出土。緑色片岩製で、穿孔していない未製品製。6は包含層出土で花崗岩質砂岩製。7～10は表採資料。7・10は砂岩、8は赤色泥岩、9花崗岩質砂岩。

砥石（図版51、第57図11～16）11・13は包含層より出土。その他は採集品である。11・14・16は粘板岩、12は砂岩、13・15は花崗岩質砂岩。（杉原）

鉄製品（図版52　第58図）１は出土地点不明の鉄鏃先端部で、薄く丁寧に側縁部を作出している。１は1441号住居の周辺部で採集した。鉋で先端と柄尻部を欠損する。２も同じく鉋の胴部片で東北斜面より出土。４・７～９は包含層出土。６・８は採集品。３の板状鉄斧は折曲げ部まで丁寧に仕上げていることが断面の観察よりわかる。４・５はわずかに刃部を観察できる。６は鉄斧の欠損品であろう。７は鉾の着柄部であろうか。８は不明鉄製品。　（杉原）

４．古墳時代の遺構と遺物

(1)　竪穴住居跡

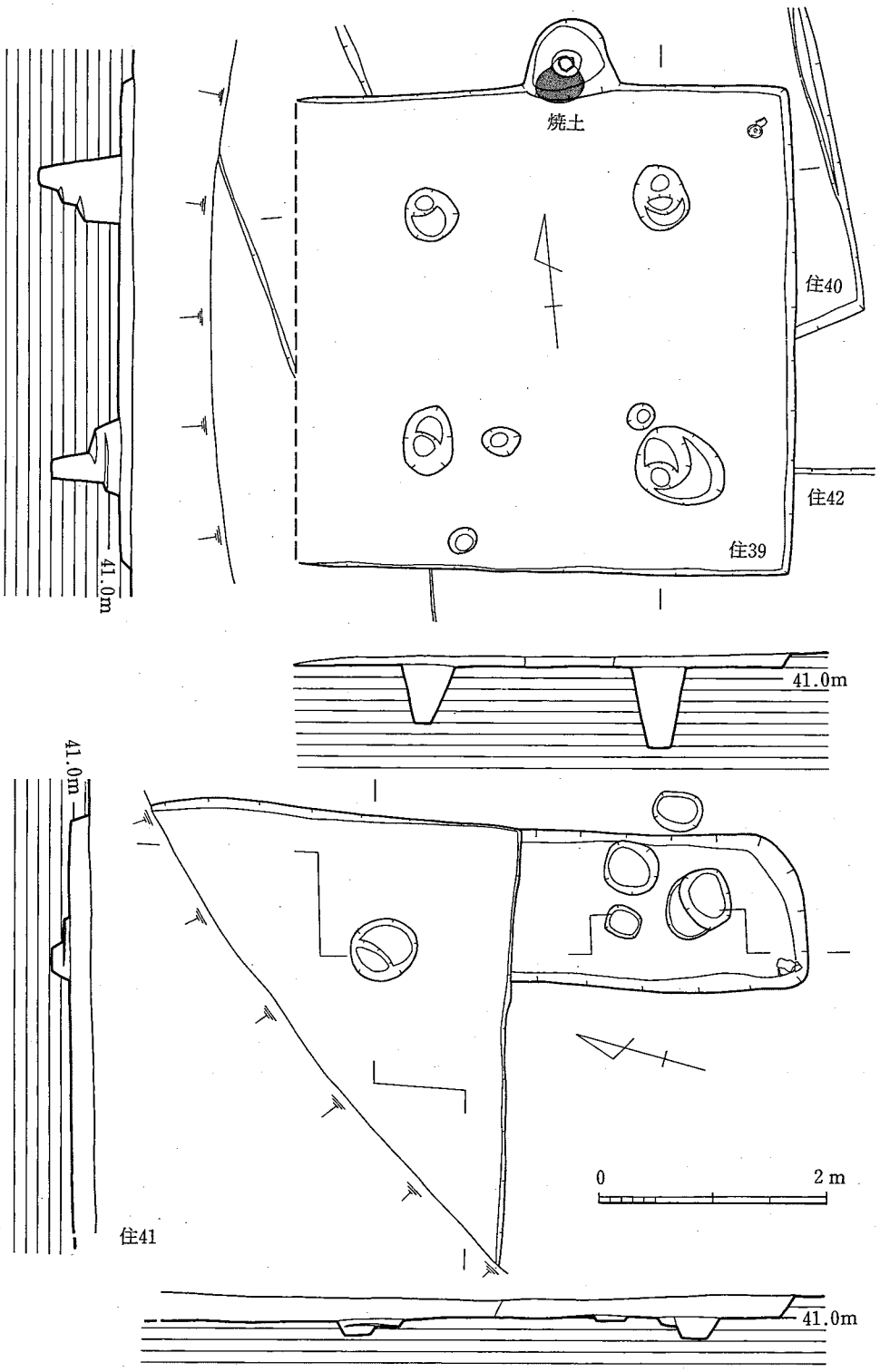
39号竪穴住居跡（図版53　第59図）

39号竪穴住居跡は斜面地区の南端部住居跡群の中でも、中央部北寄りに位置し、弥生時代の40・42号竪穴住居跡を切る。西壁は削平により検出できなかったが、カマドや主柱穴との位置関係から4.3×4.3m程度の正方形プランであったと考えられる。壁高は最高で12cm、主柱穴は４本で、いずれも径50～70cm、深さ50～60cmを測る。埋土は茶褐色土で、床面には炭化物が全体的に薄く広がる。北壁中央部には80×70cmの突出部が作られ、そこにカマドが付設されるが、カマドの袖は確認できなかった。カマド中央部には第61図２の口径14.0cmの甕上半部が支脚として据えられていたが、この支脚のカマド正面部は大きく口を開くように打ち欠かれ、そこから焼土が広がっていることから、ここが焚き口的機能も有していたと考えられる。すなわち、土製の移動式カマドに類似しており、したがってカマドの袖は検出されなかったのではなく、もともと存在していなかった可能性が想定される。しかし、このような類例は他にあまりなく、今後に課題を残すものである。

遺物（第61図１・２）１は床面から出土した土師質の高坏で、復原裾径は10cm。脚部には坏部との接合に際して生じた、捩れたようなしぼり痕が内外面ともに痕跡的に窺える。摩滅が著しく器面調整は不明。２は口径14.0cmの甕。加熱により全体的に器面の剝落が著しいが、外面にのみ部分的にハケが窺える。　（水ノ江）

41号竪穴住居跡（第59図）

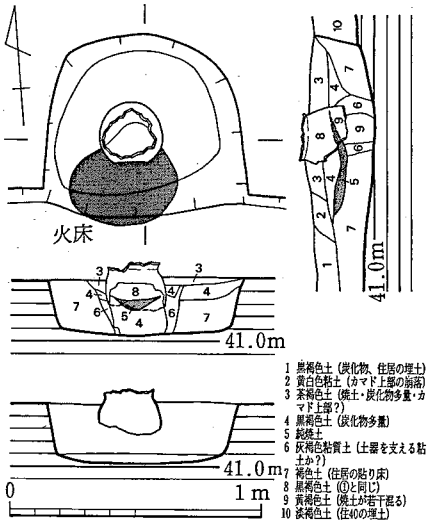
41号竪穴住居跡は斜面地区の南端部住居跡群の中でも、中央部北端に位置する。大部分は削平され全体の⅙程度、すなわち本来は方形プランであったが、現状では南東隅の南北3.2m、東西3.8mの三角形状にしか残らない。壁高は最高で15cm。主柱穴は４本であったと考えられるが、実際には径50cm、深さ20cmの１本しか確認できなかった。南東隅には2.5×1.4mの長方形プランで、深さ14cmの突出部が付くが、住居跡の東壁に沿うことと壁高がほぼ同じことから、



第59図　39・41号竪穴住居跡実測図（1/60）

本住居跡に本来伴うものである可能性が高い。

遺物（第61図３～６）３は埋土から出土した須恵器坏蓋で、復元口径は約11cm。ヘラケズリは外面天井部にわずかに施され、そこにはヘラ記号も見られる。４は本住居跡の突出部から出土した須恵器坏身の破片で、口縁部の状況から６世紀末頃のものと考えられる。５は埋土から出土した高坏坏部で、残存部分についてはすべてヨコナデ。焼成は不良のようで、淡白黄色で生焼けた感じ。６は甑で摩滅が著しいが、内面にはケズリが観察される。二次加熱により赤く変色している部分もある。（水ノ江）



第60図　39号竪穴住居跡カマド実測図（1/30）

107号竪穴住居跡（第62図）

南東部の斜面区南側に位置し、西側⅓を市道によって開削されている。北壁中央に焼土が広がり、石製支脚が傾きながらも遺存していたことから、竈が付いていたと考えられる。すでに袖は失われているが、この焼土の下からは、竈基底部と思われる浅い土坑が検出されたことも間違いないであろう。この竈の支脚を辺の中点とすると、北辺は約3.5ｍで、東辺が3.7ｍなので、平面正方形の竪穴住居跡が復元される。105・106号竪穴住居跡を切っているため、柱穴の帰属も判断が難しいが、竈の位置から推定された。主柱穴の掘形から見て、柱は抜き取られていない。東半部分の壁沿いには壁体保護のための板材の痕跡と思われる。短い溝が巡っていた。北隅には貯蔵穴がある。上面を大きく削平されており、壁は残りの良い東壁で25cm程しかなく、西側は床面が露出していた。そのため、遺物量も少なく、確実に遺構に伴い時期を特定しうる遺物はなかった。（秦）

1004号竪穴住居跡（図版54・55、付図９、表２・16・17）

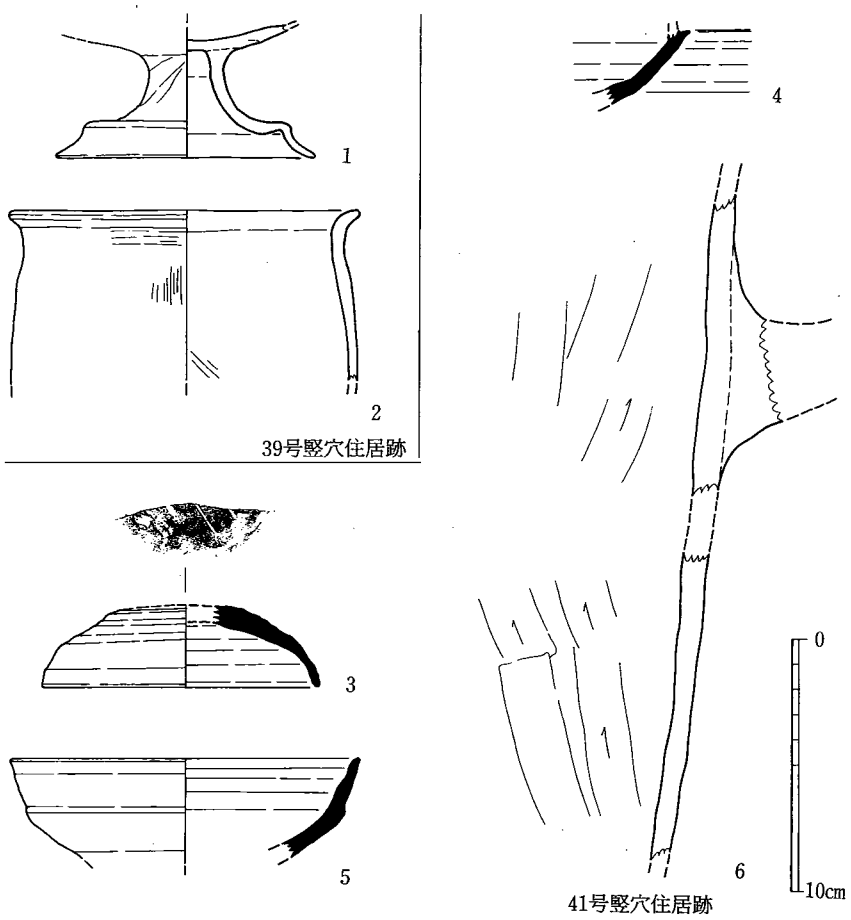
1004号Ａ住居

住居規模は、床面積約47.0m²（東－西壁間の桁行方向が約794cm、北－南壁間の梁行方向が約592cm）で、東・西側の柱筋に外接棟持柱Ｐ21・22を配し、棟持a_1換算の算出値は29.8cm。

カマド

主軸は住居主軸と一致し、桁行中軸から上記算出値とほとんど一致するに等しい27cmだけ東に片寄せて配することから、出入口部は西壁南半部か。

支脚は高杯脚が正位で出土したが、脚裾は燃焼室床から５～15cm浮いて１層灰・カマド壁・



第61図　39・41号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）

袖残滓～２層天井落下土中で検出したことから、カマド遺棄に伴う支脚再配置と天井・袖破棄の祭祀行為が指摘できる。

煙口室奥壁の傾斜角は67°を測り、支脚横断面図部での袖基部厚は約85cm。

1004号Ｂ住居

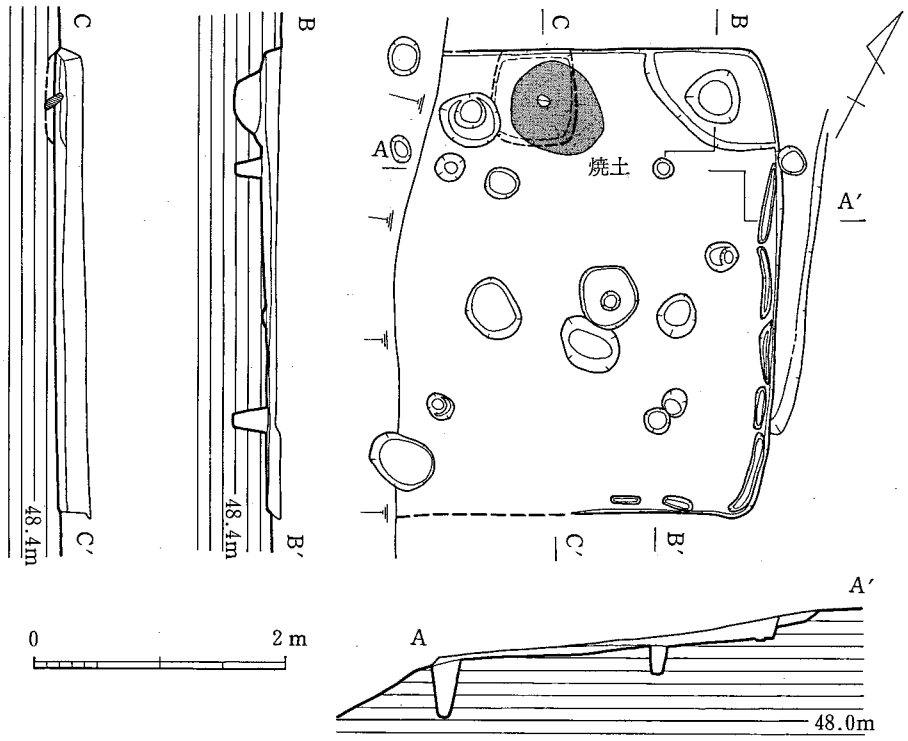
住居規模は旧住居と同じで、東・西側の柱筋下に棟持柱Ｐ21・22を配し、桁行Ａ（棟持a_1）・カマド支脚－東柱筋）間換算の算出値平均値は30.3cm。

カマド

第63図の断面図に示すように、カマド基盤床は住居床面に約20cmの９層盛土を加える。

また、煙口室奥壁も住居壁との間を９層で埋め、奥壁傾斜角を67°とする。

なお、住居北壁外へ張り出す煙口室上段の掘り形内の９層は、新住居のカマド破棄行為時に

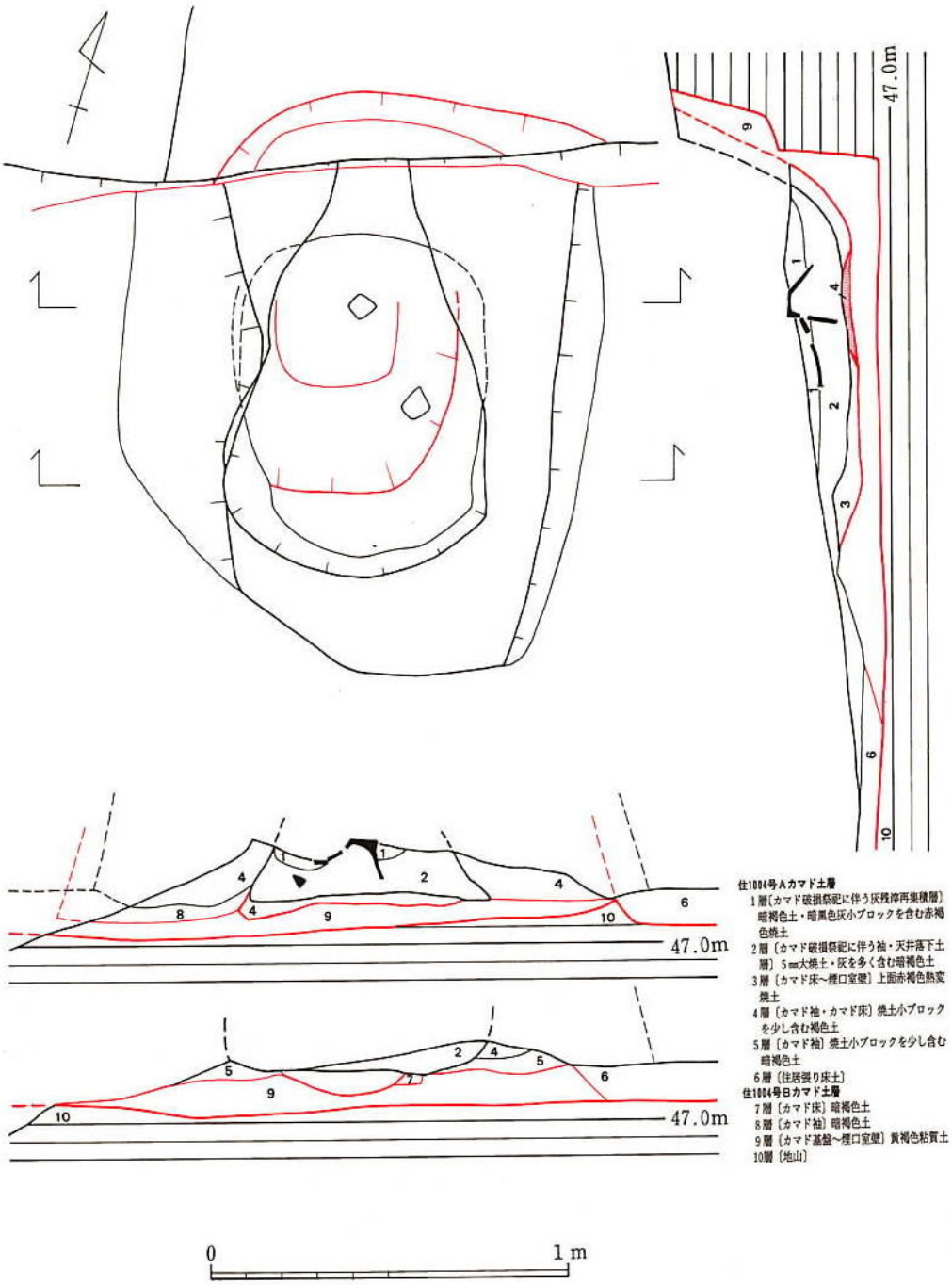


第62図　107号竪穴住居跡実測図（1/3）

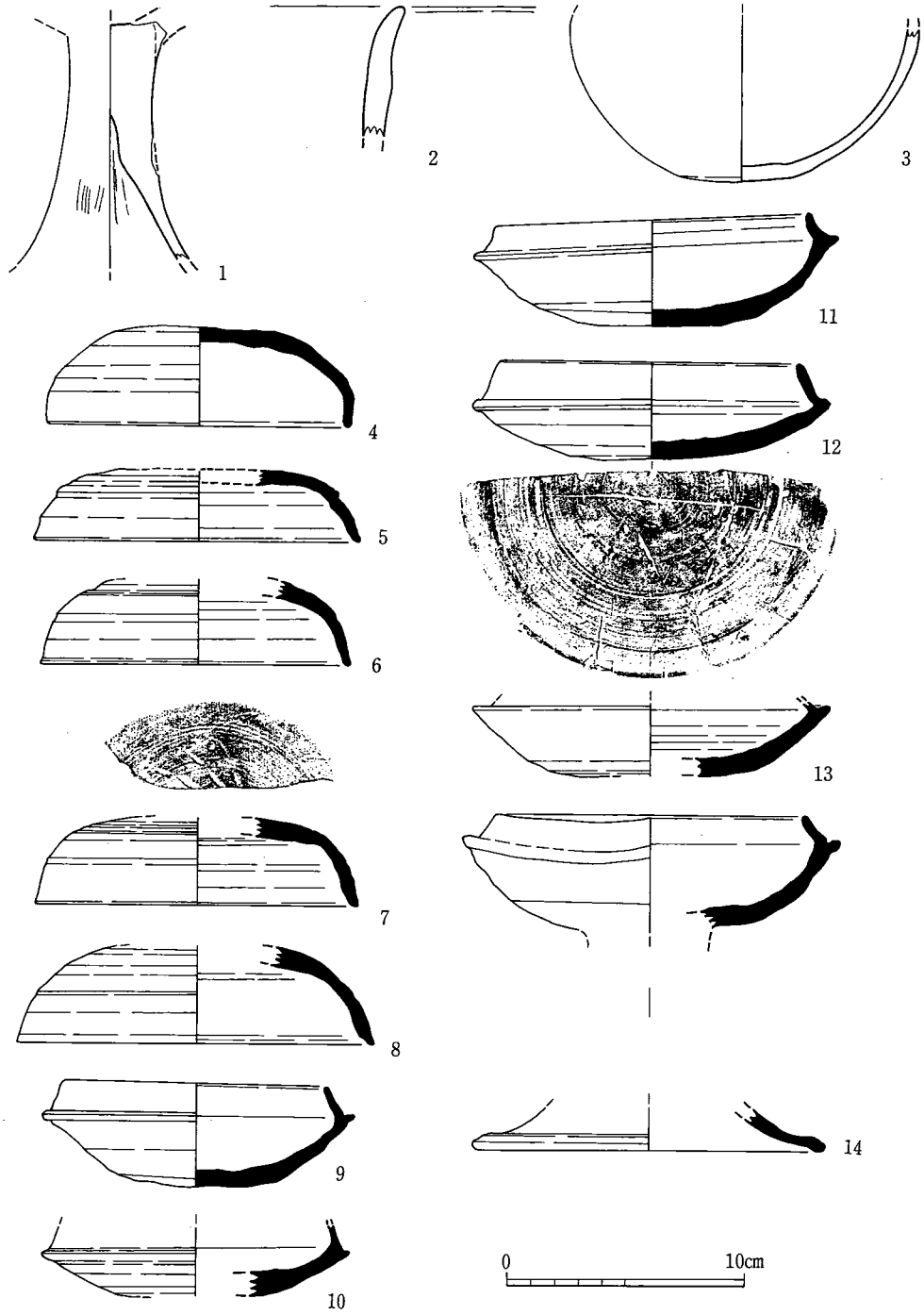
除去されている。　（馬田）

遺物（図版56、第64図）1～3は土師器。1は高坏で、坏部と脚裾を欠く。外面僅かにタテのハケ目と内面に絞り痕が見える。2は甑口縁部小片で、口縁部外面のヨコナデ以外は磨滅のため調整不明。3は壺胴部下半。胴部は丸く作り、底部は小さいが平坦に作る。4～14は須恵器。4～8は蓋。4・5・7・8は外天井部は回転ヘラ削りを施し、7の内天井部はナデ調整、他は回転ヘラナデ。6～8は屈曲部に凹線を巡らせ、7の天井部にはヘラによる放射状の文様がある。4のみが端部を僅かに内湾させる。復元口径は13.0・13.6・13.0・13.0・13.6・15.0cm、4の器高は4.0cm。9～13は坏身で、すべて蓋受けの返りを持つ。外底部は回転ヘラ削り、内底部は回転ナデ後ナデ、他は回転ナデ調整を施す。12は内底部に同心円の当て具痕があり、外底部には「—」のヘラ記号がある。口径は11.2・13.0・13.2・13.5cmで10・13は復元、9・11・12の器高は4.4・4.5・3.1cm。14は高坏で、坏部と脚部裾が出土したが、接合部が無く器高は不明。坏部は外底部を回転ヘラ削り、内底部はヨコナデ、他は回転ナデ調整を施す。脚部は回転ナデ調整。坏・裾部の外面に暗灰色の自然釉が被る。復元口径13.2cm、復元脚部径14.8cm。

（齋部）



第63図　1004号住居カマド実測図（1/20）



第64図　1004号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）

1025号竪穴住居跡

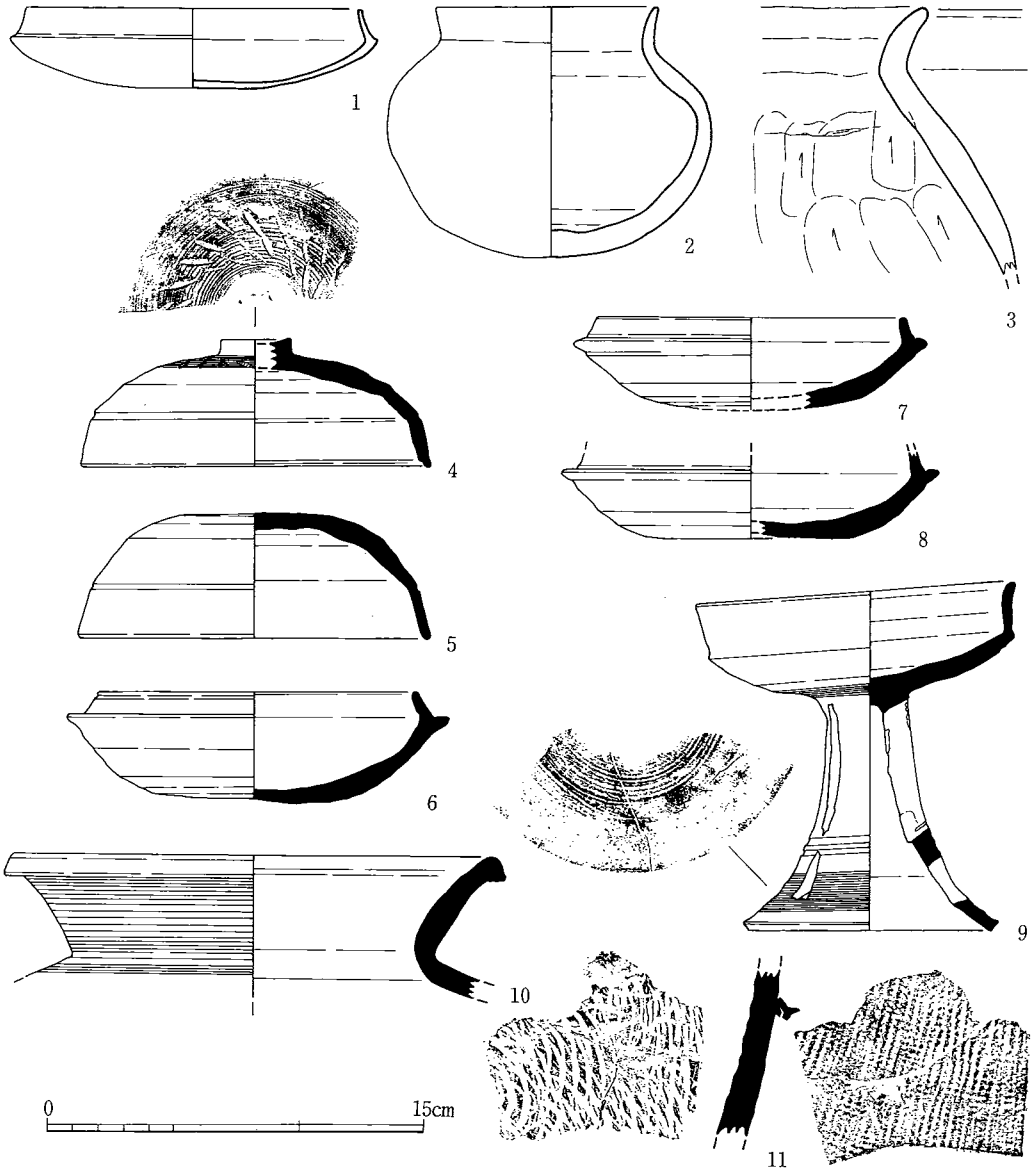
遺物（図版56・57、第65・69図８～15）第65図１～３は土師器。１の坏は磨滅が激しく調整不明。復元口径14.6cm、器高3.2cm。２は直口小型壺で、内面ヨコナデ、外面は磨滅が激しいが底部付近は削りか。外底部は熱を受けて赤色化し部分的に剥離する。３は短頸壺小片。外面は磨滅するが、内面に縦位の削りが見える。４～11は須恵器。４・５の蓋は外天井部ヘラ削り、内天井部はナデ、その他は回転ナデを施す。内面屈曲部に粘土紐の接合痕がみえる。４はつまみを持ち外天井部にカキメを施した後、放射状の刺突で文様を施す。復元口径14.0・14.0cm、器高5.1・4.9cm。６～８の坏は外底部は回転ヘラ削り、内底部は回転ナデ後ヨコナデ、他は回転ナデ調整を施す。６は内底部に同心円の当て具痕があり、受け部内面は丸い工具を当てたように窪みが巡る。外面は自然釉がかかる。口径12.8・14.0・15.0cmで８・９は復元。７の器高は4.4cm。９の高坏は坏外底部の一部と内底部を除いて回転ナデ調整。内底部はナデで、外底部は一部を回転ヘラ削り。外底部と脚部にはカキメを巡らせ、外底部に「―」のヘラ記号がある。透かしは長方形で上下２段を３カ所に入れる。粘土の切り離し方が粗く、取り残しが各所に見える。上下の間には２本の沈線を巡らせる。口径12.8cm、器高12.9～13.8cm、脚部径は10.1cmを測る。10・11は甕。10の口縁片は外面にカキメを巡らせる。11は外面格子叩き、内面同心円の当て具痕がつく。第69図８～13はガラス玉。８・11～13は水色を、９・10は紺色を呈する。９～13は気泡を含み、９・11・13は整形が粗い。８は今回出土した中でも大型のもので、整形が丁寧である。他に砂岩製の砥石が２点出土している（第69図14・15）。（齋部）

1227号竪穴住居跡

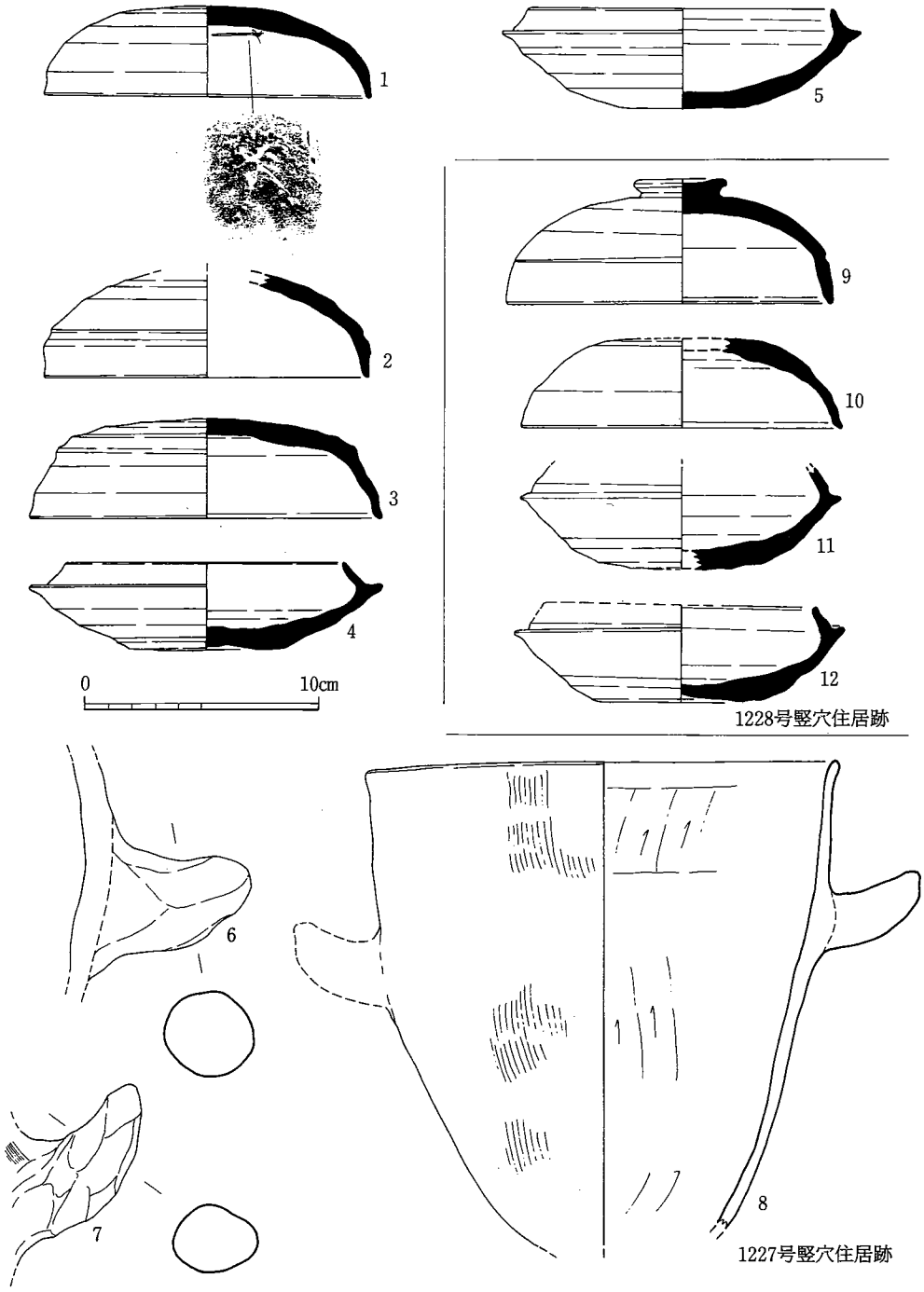
遺物（図版56、第66図１～８）１～５は須恵器。１～３は蓋で、天井部を回転ヘラケズリ、内天井部はナデ、他は回転ナデを施す。１は内天井部に「×」のヘラ記号を有する。２は屈曲が下位にあり、凹線を巡らせる。３は上位に屈曲部の稜線を持つ。口径は全て14.0cm、器高は3.8・4.2cm。４・５の杯は外底部回転ヘラケズリ、内底部ナデ、その他は回転ナデ調整する。復元口径11.8・13.8cm、器高・3.7・4.2cm。６～８は甑。６は把手上面に煤が付着し、下面は熱を受けて赤変する。８は外面タテ刷毛、内面はタテ削りを施す。口縁付近は粘土紐の継ぎ目が顕著である。部分的に煤が付着する。（齋部）

1228号竪穴住居跡

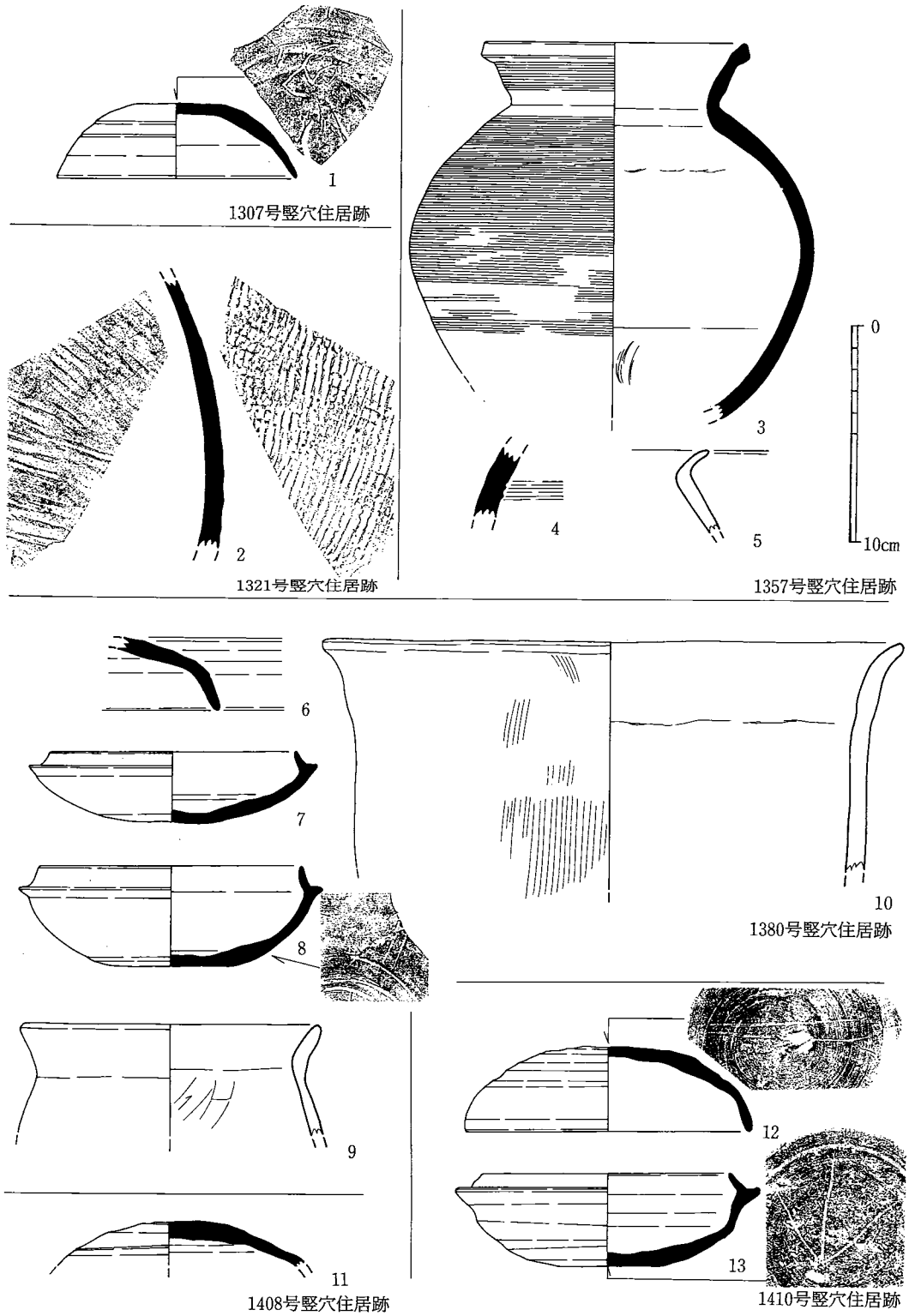
遺物（図版57、第66図９～12）全て須恵器。９の蓋は中位まで回転ヘラ削り、内面天井部はナデ、その他は回転ナデ。つまみはナデ調整し、中央を窪める。屈曲部には凹線を巡らせる。10は外天井の平坦部のみ回転ヘラケズリし、他は回転ナデ調整。端部内面に明確な稜線を持つ。11の坏は端部を若干欠く。11・12は外面中位まで回転ヘラケズリ、内底部はナデ、他は回転ナ



第65図　1025号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）



第66図　1227・1228号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）



第67図　1307・1321・1357・1380・1408・1410号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）

デ調整。12の受け部に重ね焼きの跡がつく。（齋部）

1307号竪穴住居跡

遺物（第67図１）１は天井部にわずかな平坦部を残し、体部から口縁部へは丸みを持って至る。また体部には「卍」のヘラ記号がある。口径11.0cm。（杉原）

1321号竪穴住居跡

遺物（第67図２）胴部片のみ出土した。（杉原）

1357号竪穴住居跡

遺物（図版57、第67図３～５）３は口径部は直線的に開いて端部を肥厚させる。また頸部から胴部へは緩やかに膨らみ至る。外面胴部下位はカキ目のちナデ、内面は口縁部から胴部までは回転ナデ調整で、底部ではわずかにタタキ痕が観察できる。口径12.0cmを測る。４の沈線以外はナデ。５は口縁が「く」字で丸みをもって外反する。（杉原）

1380号竪穴住居跡

遺物（第67図６～10）６は体部から口縁部へかけて急に折れる。７の復元口径は11.4cm。８の復元口径は12.0cm、器高4.6cmを測る。外底部にヘラ記号有り。９の外面はナデ、内面口縁は横ナデで、頸部以下は削りのちナデ。10は磨滅が激しいが、外面胴部には縦位のハケ目が観察できる。暗橙褐色に焼成している。復元口径27.0cmを測る。（杉原）

1408号竪穴住居跡

遺物（第67図11）11は口縁部を欠損するが、おそらく杯蓋であろう。天井部から体部にかけてはっきりした稜が付く。（杉原）

1410号竪穴住居跡

遺物（図版57、第67図12・13）12・13は住居内の土坑より一括して出土した。12の天井部は回転ヘラケズリ、胴部は回転横ナデ。天井部にヘラ記号有り。口径13.0cm。器高3.9cm。13も外底面にヘラ記号がある。また外底面から体部にかけては灰かぶりがある。口径11.2cm、器高4.3cmを測る。（杉原）

(2) 古墳

以来尺１号墳（図版15、付図１・12、表７）

１．立　地

古墳は、西から東方向にのびる幅広の丘陵尾根部中央（標高50.3ｍ）から50ｍ近く離れた南急斜面への移行部肩に立地し、羨門部掘り形床面標高が45.80ｍを測る。

石室は、南に開口し、南眼下の現水田面の標高が37.60ｍで、上記床面との比高差は8.20ｍ。

本墳の南南東方向に約0.8㎞には、県指定史跡の五郎山古墳（複室、装飾古墳、６世紀後半）が所在するが、本墳の周溝外径規模が約22～26ｍと大きいことも含めて、両者の関係は無視できない。

なお、主体部・掘り形内攪乱土中出土の石材・石材片については、装飾顔料の遺存に留意したが、確認できるものはなかった。

２．墳　丘

丘陵尾根部には、付図１に示すように、中世館が構えられ、館構築に伴い、主体部北側に１号溝、羨道部に1002号溝などが掘削され、後世の開墾に因る削平を経て、墳丘は消滅する。

ところで、後者の1002号溝は羨道と直交するが、付図12のＤ断面図に破線の見透しで示すように、この溝底の標高は、羨道東側掘り形から東に151㎝部分以東では46.56ｍ前後を保つが、この部分から掘り形間は46.71ｍへと標高を上げて浅くなり、掘り形内では羨道両側壁の最下段積み石上面の45.95ｍへと深くなり、掘り形以西では47.29ｍ前後を保つように掘削され、羨道部を界しての溝底差は約73㎝を測る。

なお、羨門閉塞石・塊石は検出されず、溝南壁相当部のみ攪乱土内から閉塞石材若干が検出されたが、石室床張り石材や河原石などの敷石材料の混入はなかった。

また、石室内は、後述するように掘り形地山床面部までが流入堆積土ではないブロック状の攪乱土で、青磁片、近世磁器片・陶器片、瓦片が出土し、Ｄ断面部の東掘り形側では1002号溝南壁と溝埋没土を切る攪乱坑を検出し、坑内から古墳石材１と穴２個が出土した。

以上のことから、中世の館構築当時まで古墳は開口されずに健在で、1002号溝が古墳の東側から掘り進められ、羨道東側壁の積み石及び羨門石・閉塞石・閉塞石塊部を掘り当てたため、側壁最下段積み石以外の積み石・閉塞石・閉塞石塊を除去はしたが、石室開口を眼前にして、それ以上の深い掘削を控え、また、石室の無用の破却をせず、掘り形以西ではより浅めに掘り進めたものと思われる。

なお、溝北壁相当部は後世の攪乱で遺存しないが、溝掘削での開口後はそのままとし、1002号溝に伴う貴重な石の室（ムロ）として転用し、墳丘も物見の高所として利したものか。

また、D断面部の既述の攪乱坑は、石室床面近くからも出土した新しい瓦片などの出土から、後世の新しい盗掘、床張り石・裏込め石材をも含めた奥壁・腰石など完全なまでの石材入手のための石材搬出用の丸太組み痕と思われる。

以上のように、後世の開墾や石材入手時の破壊を経て、墳丘は遺存しないが、復原規模は後述するように、墳裾の東西幅が約16.83m・周南北長が約20.8mと考えられ、大きい。

3. 主体部

本墳は、既述のように羨道東西壁の積石4個が原位置を保つ以外は浅石が無いが、後述するように、後室腰石の抜去痕・同掘り形・構築基準杭痕などの検出や周溝の一部が遺存したことなどから、仕上り主体部主軸、計画主体部主軸・計画掘り形主軸、いずれもがN－3°－Eをとり、丘陵がのびる方向（等高線方向）に直交して南に開口する複室の両軸型横穴石室である。

4. 古墳の仕上り規模と計画規模

古墳構造の3要素として、石室中心・主体部主軸・主軸直交軸0を使用し、周溝・掘り形の位置と規模を立地部に決定するに際しては、実際に縄打ちをし、掘削前の実際の杭打ちをもし、主体部構築に際しても0.31mの基準値（1規模）の採用と共に、2.5規模の一種の小棹・2.5規模等間で印された7.5規模の一種の大間棹の使用による設計規模での仕上げが計られ、奥壁・側壁石材の石面（イシヅラ）の実際に因り、仕上り規模が設計（計画）規模と一部変更さることもあり得ることなどについて、以前、県内の遠賀郡岡垣町所在の「山田沖1号墳」（6世紀後半でも古い段階の構造、単室型横穴式石室）について言及したことがある。〔註1〕

また、7世紀代の同築上郡椎田町所在古墳についても、同様に「石堂中後ヶ谷2号墳」で0.32mの基準値（1単位）を得て、若干言及したことがある。〔註2〕

以下、住居群の説明に加えて、古墳の説明にまで執拗に電卓を持ち込むことにはなるが、若干の蛇足を加える。

表７　以来尺１号墳の計画規模把握一覧表

規　　模	−27.0	−9.0	0	1.0	1.5	2.0	2.5	3.0
長　　さ	841.59	280.53	0	31.17	46.76	62.34	77.93	93.51
南北方向部位	墳裾南端	羨積南端	羨門南面	東玄・羨門西面 西羨門東面 羨掘床西		羨門北面 前・後室西面 羨積東面・P' (羨門幅)		後室西面 (玄門幅)
東西方向部位			基準杭Ｐ		羨積西面 羨掘床東		前室西面	

規　　模	4.0	4.5	5.0	6.0	8.0	9.0	10.0	13.0
長　　さ	124.68	140.27	155.85	187.02	249.36	280.53	317.00	405.21
南北方向部位	(前室長)			玄門南面	玄門北面	(羨積長)	(後室長)	後室中心０
東西方向部位		(前室幅)	(後室幅)				(後室掘床幅)	

規　　模	17.0	18.0	27.0	36.0	40.0	54.0	67.0	72.0
長　　さ	529.89	561.06	841.59	1,122.12	1,246.80	1,683.18	2,088.39	2,244.24
南北方向部位	基準石南面	後室南面			墳裾北		(墳裾長)	
東西方向部位		地山整形東・西端	東・西墳裾	溝東・西外端		(墳裾幅)		(溝外径)

既述のように、主体部内は攪乱され、攪乱は石材除去に伴い奥壁石・側壁腰石・玄門石などや裏込土・石・根石部まで及んでいたが、付図12に赤線で示すように、奥壁石・後室東側腰石２・同西側腰石１で石材最下部の抜去痕（スタンプ）を検出し得、その他の石材についても主体部プランの概要を把握できる地山への石材配置用の掘り形（以下、石材掘り形と略）を検出した。

加えて、羨門部では、付図12に青線で示すような径20cm前後の小ピット２個を検出し、その埋土は、後世の攪乱土ではなく、上述の石材抜去痕と石材掘り形の間隙の構築時の埋土であり、構築以降の落水に因る地山床面の穿孔痕でもなかった。

また、奥壁全面では、東西幅113cm・南北奥行45cmで床面が平坦仕上げの掘り込み部を検出した。

上述の状況から、羨門中央部の小ピットをＰ、東羨門部の小ピットをＰ'、奥壁前面の底平坦仕上げ掘り込み部をＱと仮称し、主体部の規模などについての把握概要を説明する（表７参照）。

付図12は、上記ＰとＱとの中軸線と、Ｐ中心を通る直交軸を赤線で示した。

また、中軸下の奥壁石抜去痕前面（南面）とＰ中心間を1/20平面実測図で計測（以下、同）し、561cmを得、既述の「山田沖ノ号墳」・「石堂中後ヶ谷２号墳」で得た0.31ｍ・0.32ｍの基準値の知見(先入観？)や既述住居群の規模算出事例多数から、561＝18.7×30と計算し、561cm＝31.17cm×18.0＝561.06cmとして、規準単位を算出し、１規模＝31.17cmの算出値を得て、31.17cm方眼を青線で示した。

上記方眼線と石室との関係では、既述のとおり奥壁抜去痕の南石面が南18規模となるのは当然であるが、Ｑ南面は南17規模でほぼ一致し、東・西両玄門石掘り形北面が南８規模と一致し、東・西両羨門石掘り形南面は０規模でほぼ一致し、後室東腰石掘り形西面１例が東２規模と一致し、同抜去痕西面２例は共に東２規模でほぼ一致し、東玄門石掘り形西接の掘り形西面が中軸と一致し、羨道東壁積み石西面は東２規模でほぼ一致する。

同様に主体部掘り形との関係では、後室北壁下端は北20規模でほぼ一致し、後室東壁下端では北10～18規模間で・同西壁下端では北８～16規模間で各東・西５規模でほぼ一致し、羨道下端が０～南１規模間で東側で東1.5規模・西側で西１規模と一致し、この中軸線を界しての規模の差位は南１規模以南でも認められる留意事項で、後述する前・後室西半部腰石西面の復原に利する。

同様に周溝との関係では、東側部では溝底中央が北８～18規模間（玄門石掘り形北面～奥壁抜去痕南面間、換言すると、後室南～北長間に相当することも留意事項である）で東27規模と一致あるいはほぼ一致し、西側部でもこの間で西27規模でほぼ一致する。

また、Ａ～Ｄ断面図に示すように、主体部の掘り形床面は、０～北６規模間が標高45.80ｍで水平を保ち(このことも、古墳構築の留意事項である)、北６規模以北ではＡ断面図に東側腰石抜去痕などを見透しで加えて示すように、Ｐ南面に向けて21cm深くなることなどから、Ａ～Ｄ断面では水平面（標高45.80ｍ）を０規模として、主体部・溝の掘削の深さの規模をも示した（石室床張り石上面の標高も、この０規模の45.80ｍに一致させたと考えられる)。

以上のことなどから、本墳の構築に際しても、「山田沖１号墳」で既述した３要素の実際の縄打ち・杭打ちをやり、打ち始めの祭祀こそ確認できないが、31.17cmを１規模として計画的な墳丘基底部の地山整形、主体部掘り形掘削、主体部構築、周溝掘削などの工程を処したものと考えられる。

また、小ピットＰは主体部掘り形床面掘削・主体部構築の規準杭Ｐ抜去痕、Ｐ'は主体部東半の各部位腰石・羨道東半の最下段積みの西面調整の補助規準杭Ｐ'抜去痕、奥壁石南面の掘り込み部Ｑは規準杭Ｐと対となり、各部位腰石配置・前～後室床石張りの際に、各石材の石面・稜を考慮して、計画主軸・計画規模通りに仕上げるための基準石（今様では定礎）と把握した。

なお、各部位別規模の把握は表７に示したので、詳細は省くが、後室床面の仕上り規模（所謂、石室プラン）は、南北長10規模317.00cm・東西幅５規模155.85cm、後室掘り形床面規模は

南北長12規模に奥壁石の厚さ２規模を加え計14規模436.38cmと把握でき、計画主軸・仕上り主軸は一致する。

また、後室の掘り形床面の東西幅規模は、中軸から各５規模で中軸対称形を呈すが、後室東西幅は東側が東２規模62.34cm・西側が西３規模93.51cmで対称形とならない。

上記のことは、計５規模は計画規模通りの仕上げではあるが、東･西各2.5規模計画が、腰石用材の規模差や石面の特徴差に起因するものか、当初の設計通りのものかについては、石室が遺存しないので不明であるが、既述の留意事項に加えて、玄門～羨道間の仕上りプランも、中軸を界して東・西対称形とならないことなどから、後者の設計通りと把握し、初葬者を奥壁前面、追葬第１者を西壁側とすることを考慮したもの、あるいは、立地丘陵が西から派生する地勢（西高所、西拝所）を意図したかとも考えられるが、被葬者の遺骸の出土なく、不明のままである。

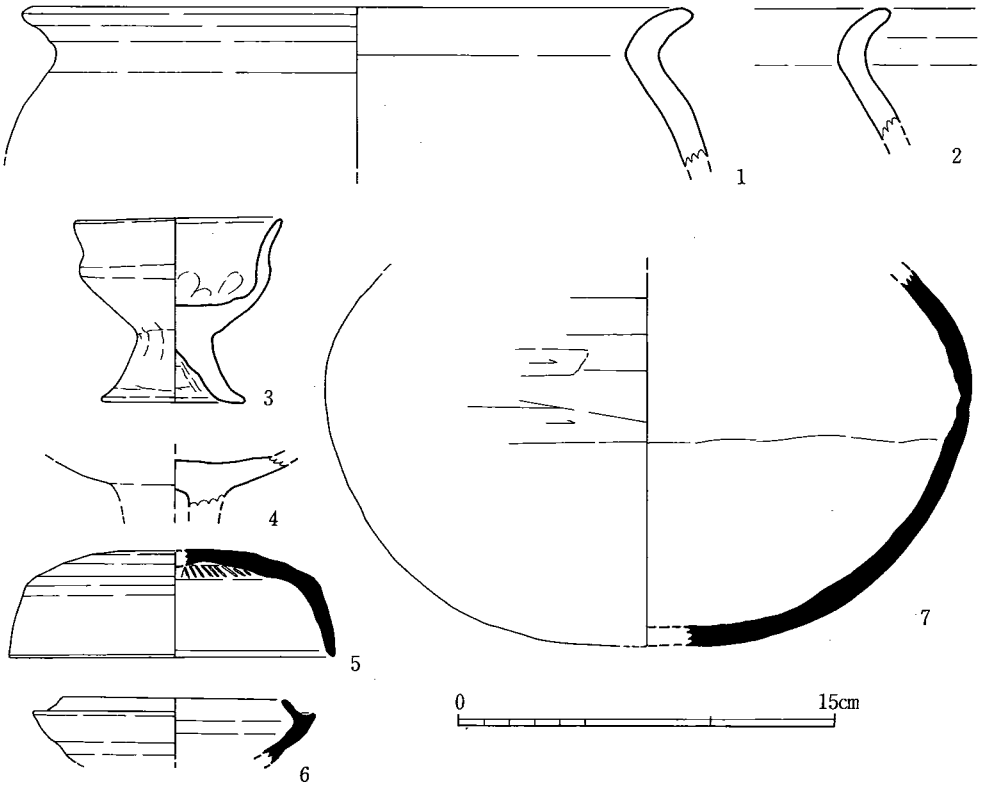
また、掘り形壁面は直線的な断面を呈すことから、墳丘基底部の地山整形面での後室掘り形上端は東西幅18規模、南北長が北６～27規模間の21規模654.57cmと大きく、仕上り床張り石上面までの深さも10規模に達したものか。

最後に、本墳では31.17cmの基準値（１規模）の採用と共に、0.5規模等間で印された３規模の一種の小棹・１規模等間で印された９規模の一種の大間棹を使用して縄打ち・杭打ち～掘削～構築をやり、古墳築造の基準となる３要素は、北13規模の後室中心０、Ｐ・Ｏ・Ｑを通る南北中軸、０を通る東西直交軸０と言えよう。

また、主体部掘り形が10規模317cmと深いため、奥壁を含めた側壁・玄門・羨門の各腰石材の搬入と掘り形掘削土の搬出に際しては、主体部掘り形の計画北壁規模に加えて、更に北側に東西幅６規模前後の拡幅坑を配するのも留意すべき事項と言え、掘り形東・西壁の傾斜角が石室構築に必要最低限の掘削排土総量（労力）の５～10°の級傾斜とせず、北壁拡幅部壁傾斜角は30°と緩く収めて、石材は端に落とし込むことをせず、緩傾斜を利しての組み合わせ石面方向をも考慮した丁重な搬入仕業であったと思われる。（馬田）

註１　馬田弘稔編「山田沖古墳群」（『一般国道３号線岡垣バイパス関係埋蔵文化財調査報告』第２集、福岡県教育委員会、1990）

註２　緒方　泉編「石堂中後ヶ谷古墳群」（『椎田バイパス関係埋蔵文化財調査報告』２、福岡県教育委員会、1990）



第68図　1号墳出土土器実測図（1/3）

1号墳

遺物（図版57　第68図・第69図2～6）第68図1・2は土師器の甕。磨滅のため調整は不明。3は台付壺。磨滅が激しく外面の調整は不明。脚の取り付き部に指ナデツケ痕が残る。内底部は指圧痕有り。脚内面はタテ削りの後ヨコナデする。中央付近は未調整。4は高坏だが、磨滅のため調整不明。5～7は須恵器。5の蓋は外面を天井部から中位まで回転ヘラケズリし、内天井部はカキメが放射状につく。その他は回転ナデ調整。復元口径12.9cm、器高4.2cmを測る。6の坏は口縁部の内傾が強く、残存部は全て回転ナデを施す。外面中位には強いナデを施す。7は甕の胴部。外面は叩きの後回転ナデを施すため、痕跡はほとんどない。平行叩きか。内面には同心円の当て具痕がつく。内底部はナデる。第69図2・3は銅製の耳環で鍍銀する。双方とも面取りし、丁寧に作り上げる。4は鉄製鞍金具。5・6は水晶の切り小玉。5は12面カットした大型のもので、穿孔は図面下方からするため上方は孔が細くなっている。全面あれが激しく白濁するが、材質は良いと思われる。6は小型で、算盤玉状にカットする。穿孔は図面上方から。質的には5と同様のものと思われる。（齋部）

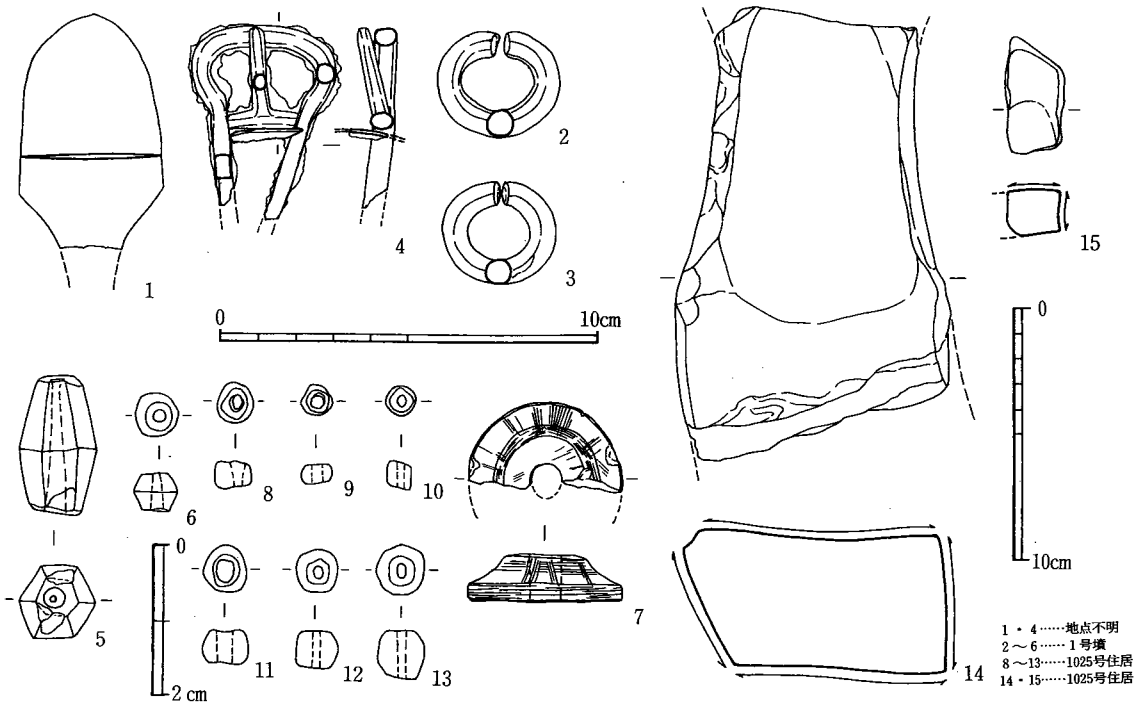
(3) その他の遺物

石器・石製品（図版57　第69図７）７は滑石製の紡錘車である。厚みはさほどなく、どちらかと言えば節理を利用した板状である。きれいに面とりをしている。

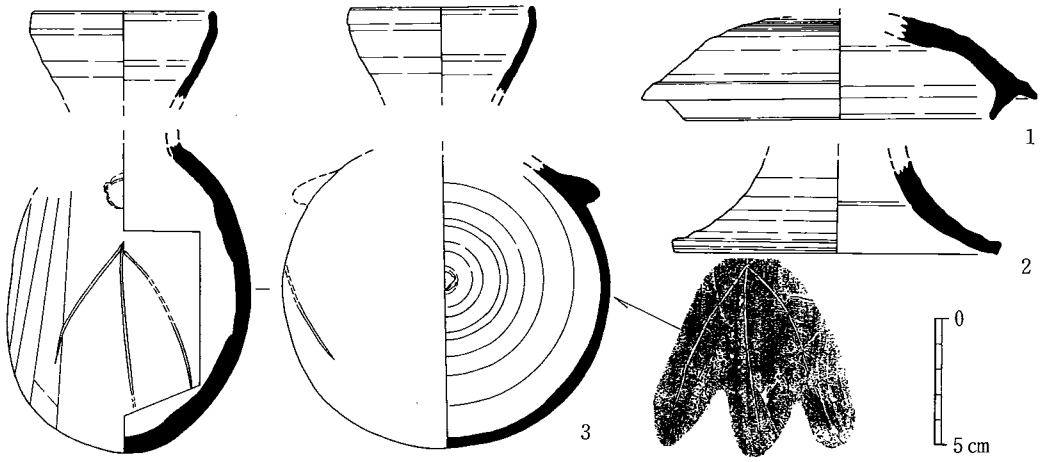
鉄器（図版57　第69図１・４）１・４はいずれも地点不明の遺物である。１の鉄鏃の側縁は鋭く作出されている。４は座金具がのこる鞍の鞍で先端を欠損している。

その他の遺構出土土器（第70図）

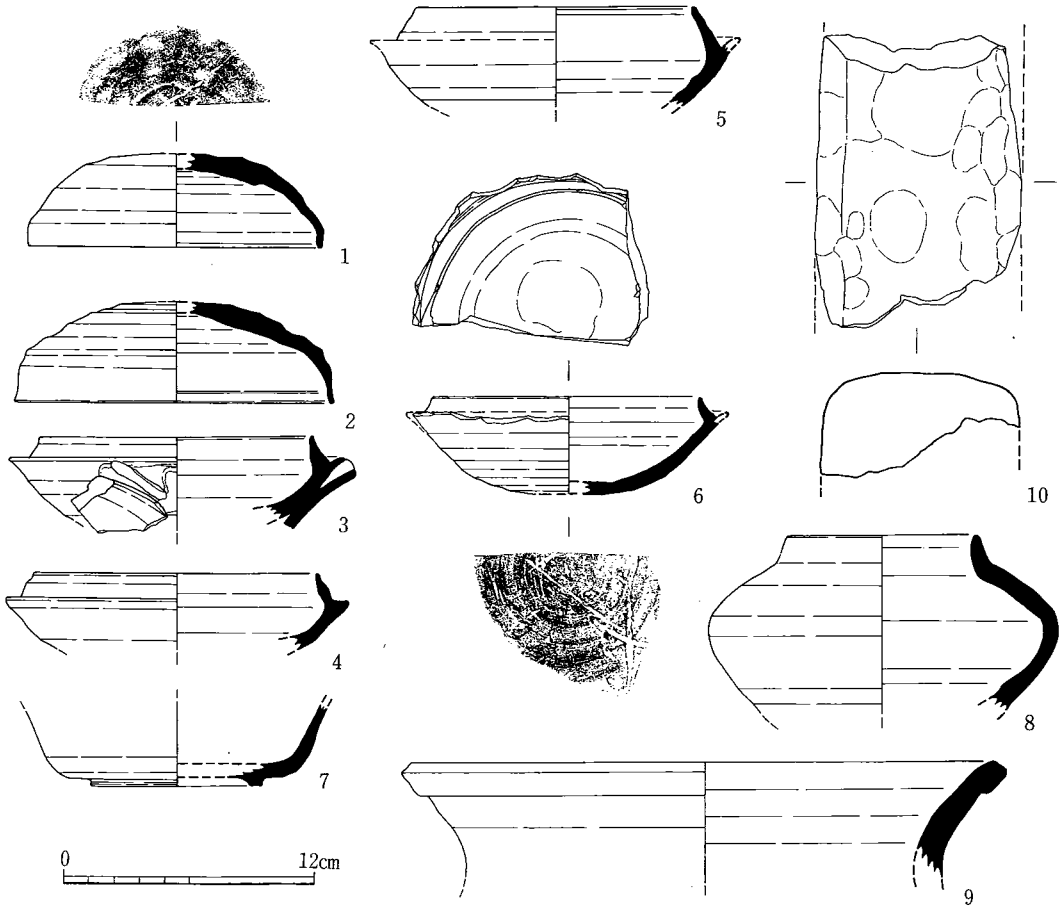
遺物（第70図）１の杯蓋は復元口径12.2cm。２は高坏脚部で、内外面とも回転ナデを施し、端部は四角で浅い段を持つ。内面に１条沈線が巡る。外面に薄い自然釉が掛かる。復元径12.8cm。３の堤瓶は接合点はないが同一個体のもの。口縁部片は全面回転ナデを施し、端部を内側に屈曲させる。胴部は前面が回転ヘラケズリ、背面は自然釉がかかり不明瞭だが、底部付近から推測すると回転ナデを施した後部分的にナデたと思われる。両側面にヘラ記号がある。内面は回転ナデ、中央は仕上げナデをするが突起が残る。また中央部の粘土接合面が明瞭に見える。把手部分はナデ。（齋部）



第69図　古墳時代のその他の遺物実測図（１～７は1/2、８～13は1/1、14・15は1/3）



第70図　その他の遺構出土土器実測図（1/3）



第71図　表採・包含層出土土器実測図（1/3）

表採・包含層出土の遺物（第71図）１・２は杯蓋で、１は復元口径11.8cm、器高4.8cmで、天井部は回転ヘラ切りの後、押さえで調整され、さらにヘラ記号が入る。２は復元口径12.8cm、器高4.1cmで、天井部は上約⅓が回転ヘラ削りである。３～６は杯身で、３は復元口径10.4cmで、外面に別個体の破片が融着している。４は復元口径10.4cmで、５は復元口径11.0cmで、６は体部の約⅓が回転ヘラ削りで、復元口径10.6cm、器高4.1cmで、受部が上からの敲打により打ち掻かれている。また外底にはヘラ記号が入っており、「×」印が２つ見られる。７は低い高台の付く杯身で、復元高台径で6.8cmを測る。８は甕で、口径7.7cmである。斜面の包含層より出土。器表は磨滅している。９は甕の口縁部で、復元口径23.1cmで、口縁端部を断面方形に肥厚させている。須恵器はいずれも焼成良好で、青灰色から灰色を呈す。10は土師質で、竈の土製支脚の破片と思われ、断面方形で１辺８cmを測る。押さえで成形されたもので、つくりは粗く、胎土は混入物が多い。外面は良く焼けて赤化している。斜面の包含層より出土した。　（秦）

５．歴史時代以降の遺構と遺物 ―中・近世の調査―

(1)　掘立柱建物跡

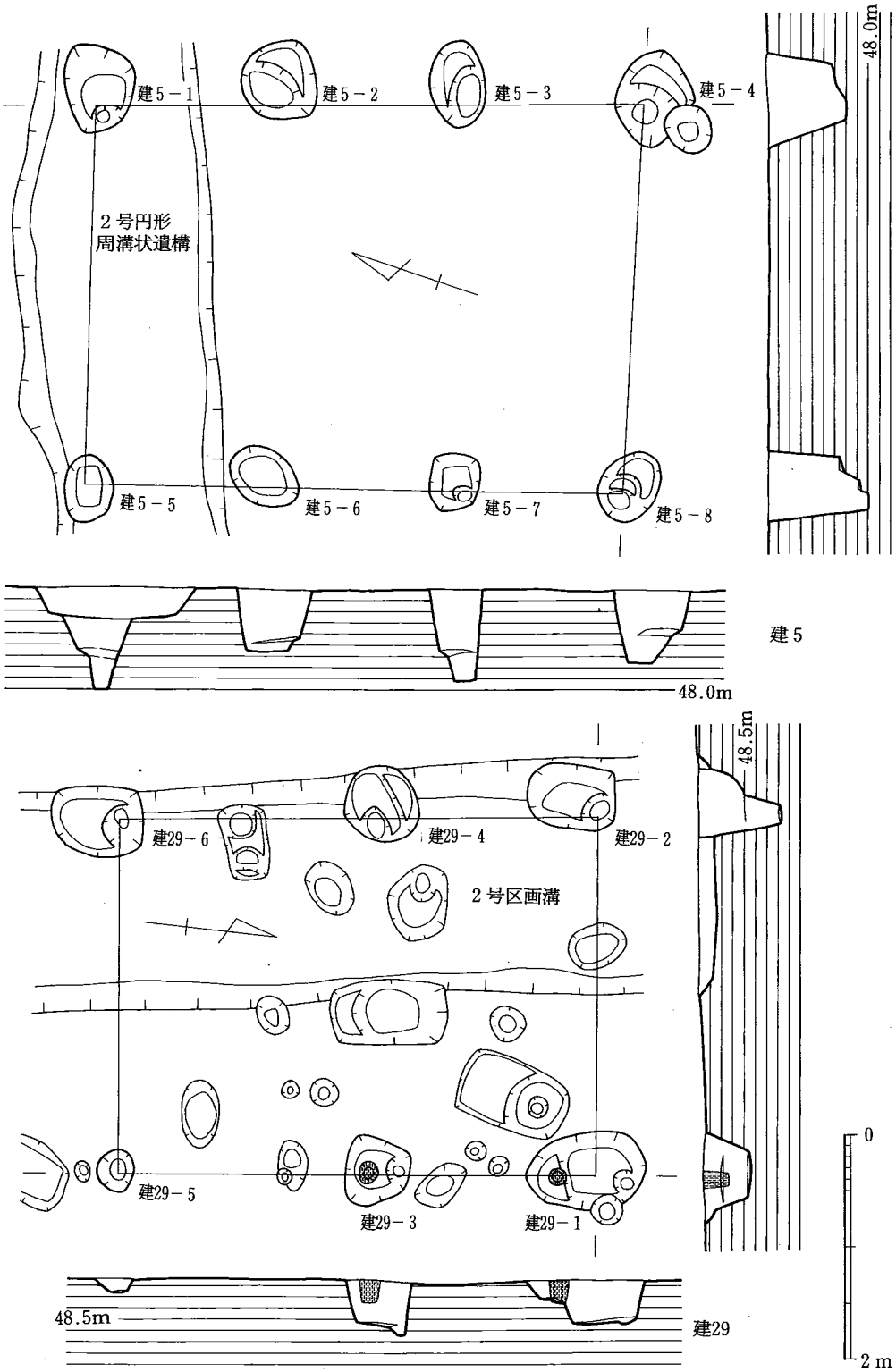
５号掘立柱建物跡（図版58　第72図）

５号掘立柱建物跡は丘陵平坦部地区の中央西端に位置し、中世の４号溝に切られる。平面プランは梁行4.9m、桁行3.3mの1×2間の長方形で、柱穴の径は50～70cm、深さは60～90cmを測る。埋土からは弥生土器の小片しか出土していないが、埋土は切り合い関係等から確実の中世に位置づけられる他の掘立柱建物跡と同様の灰褐色粘質土で、弥生時代の黒褐色土とは明瞭に異なるため、敢えて中世の掘立柱建物とした。

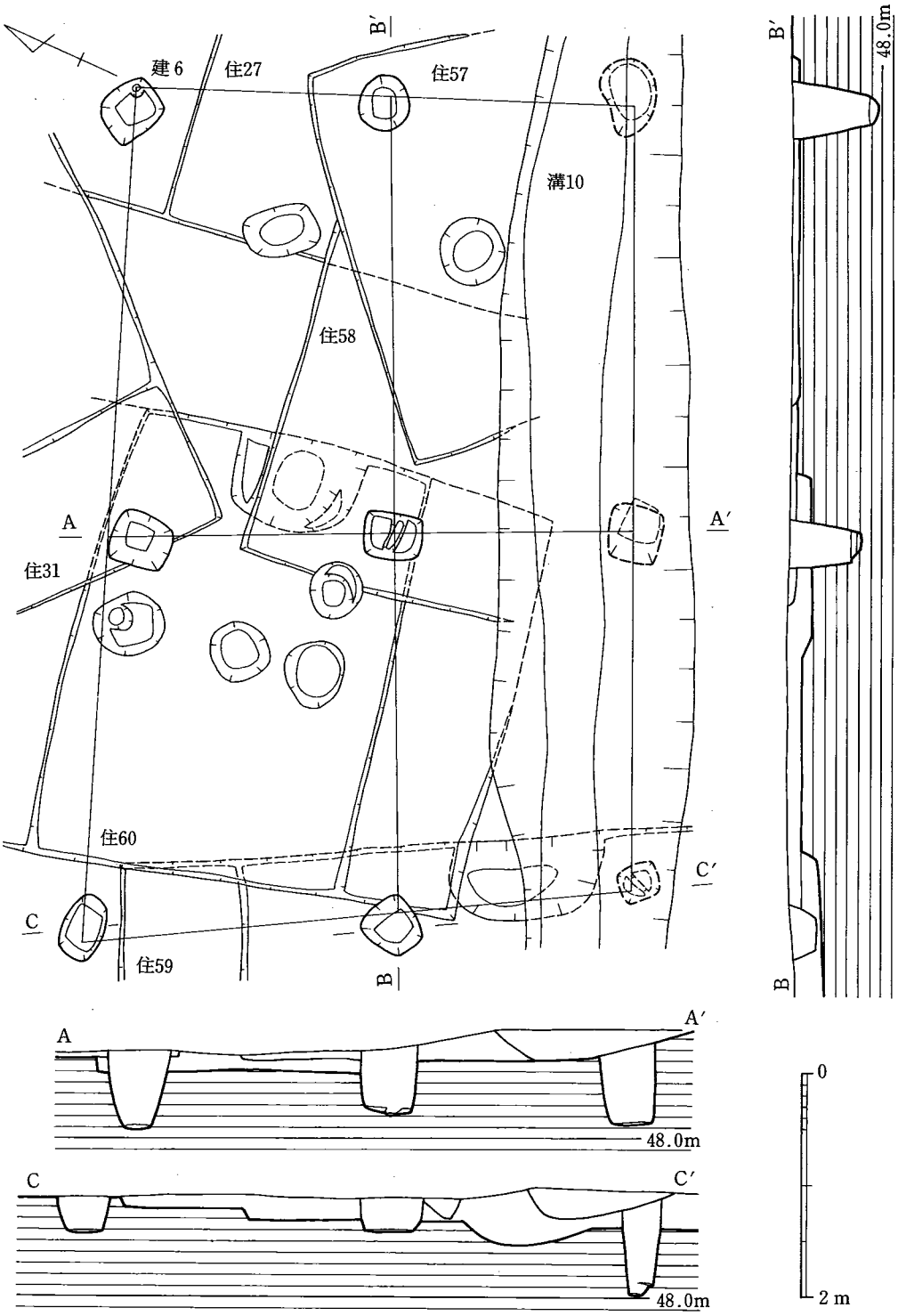
遺物（図版63　第74図　第90図９）柱１からは１・５が、柱３からは２・４・６が、柱５からは３・７・８が、柱８からは９がそれぞれ確認できるもの出土している。多くが摩滅の著しい小片で、口径の復原や器面調整の判別も難しい。その中でも、６・７の内面にはハケ、８の外面にはタタキによる器面調整が痕跡的に窺え、４～６の底部は順に７cm・７cm・８cmに底径復原が可能である。二次加熱による変色は１・５に見られる。９は完形の手捏ね土器で、口径6.6cm、器高4.0cmを測り、二次加熱等はない。第90図９は柱４から出土した残存長7.1cmの棒状の鉄器で、断面形態は10×９mmの方形を呈する。用途および全体像不明。　（水ノ江）

６号掘立柱建物跡（図版58　第73図）

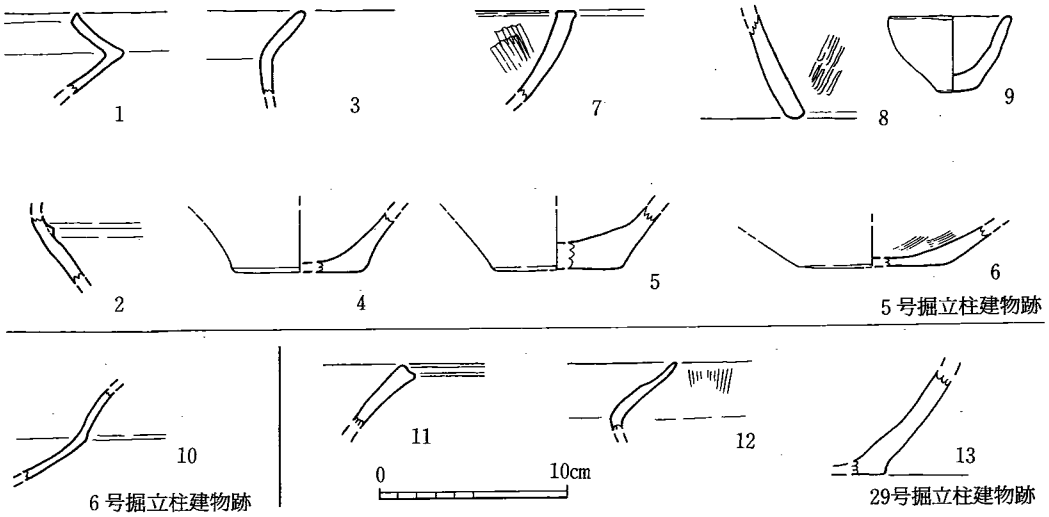
６号掘立柱建物は丘陵平坦部地区の中央部北端やや西寄りに位置し、弥生時代の27・57・58・60号竪穴住居跡は切るが、中世の10号溝には切られるという先後関係を有する。平面プランは



第72図　5・29号掘立柱建物跡実測図（1/60）



第73図　6号掘立柱建物跡実測図（1/60）



第74図　5・6・29号掘立柱建物跡出土土器（1/4）

梁行7.1m、桁行4.4mの2×2間の長方形。柱穴の平面形態は一辺45～60cmの隅丸方形で、深さは60～80cmを測る。埋土からは弥生土器の小片しか出土していないが、埋土は切り合い関係等から確実の中世に位置づけられる他の掘立柱建物跡と同様の灰褐色粘質土で、弥生時代の黒褐色土とは明瞭に異なるため、また弥生時代の遺構はすべて切るという先後関係からも、敢えて中世の掘立柱建物跡とした。

遺物（第74図10）本遺構から出土した遺物で実測できるのは、高坏坏部の屈曲部に相当する第74図10の小破片だけであるが、器面調整は摩滅により不明。（水ノ江）

29号掘立柱建物跡（図版58　第72図）

平坦面の北側中央に位置しており、1号区画溝との切り合い関係は明確ではなかったが、切られていると考えたい。1×2間で、3.2m×4.2mに規模である。柱の掘形は、柱5を除いて、平面方形で深さは40～60cm、北側に径20cm、深さ10cmほどのピットがある。柱痕は15～20cmで、底面のピットから大きくずれていることから、わずかに南にずらして建て替えた、同じ規模の2棟の建物が切り合った可能性もある。主軸はN－10°－Wである。

出土遺物はいずれも弥生土器で、確実に伴う中・近世の遺物は出土していない。

遺物（第74図11～13）　11は広口壺の口縁部片であろう。内外に赤色顔色が塗付されている。12は小型の甕か鉢の口縁部である。13は甕か壺の底部であろう。（秦）

(2) 堀・区画溝

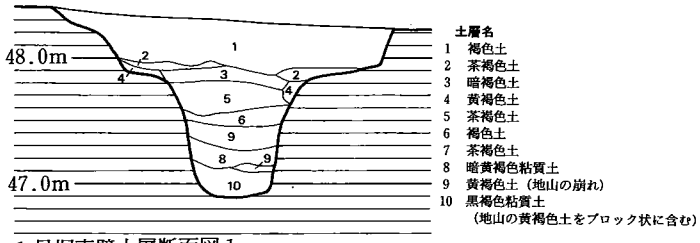
本遺跡では、大小数条の溝状遺構が検出されており、そのうち台地平坦面の南北端に検出された、幅3.5～4m、深さ1.5～2mの大溝は、その大きさと土塁との関連、出土遺物から比定される時期から、山城に伴う堀と考えられる。また、平坦面北半分に拡がる逆コの字形・L字形の浅い溝はその平面形態や、深さから区画溝と考えられる。この2者は、中・近世における本遺跡の性格を考える上で重要な遺構であることから、別に1章設けて報告する。

1号堀（図版59　第75図）

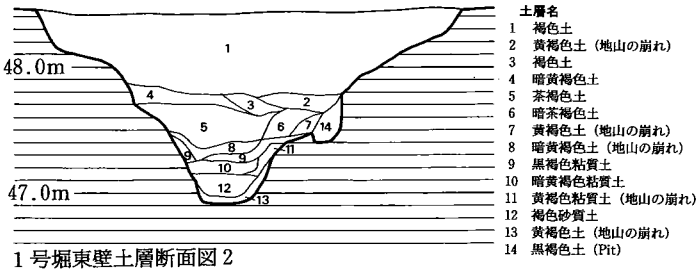
平坦面の南端に位置しており、東西方向に調査区を横断している。断面Y字形で、検出面での幅は3.0～3.5mである。深さは現状で1.0～1.7mでほぼ均一である。調査区内では、入口になる土橋や橋脚のピットは検出されなっかった。調査区より東側につくのかもしれない。1002号溝とは8～9.5m間をおいて併走しており、共存していた可能性が高い。本溝の規模や在り方が土塁に伴う2号堀と等しいことから、南側にも土塁が存在していた可能性もある。土層から見ると、下位までは自然堆積だが、中位から堆積の仕方が乱れ、上位は人為的埋め戻しと思われる。

遺物（図版63　第76～78図1～52　第90図7～13）

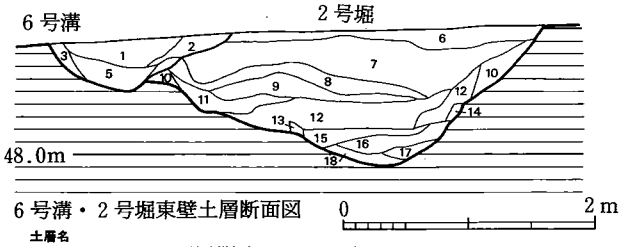
1は土師器の小皿で、底部は回転糸切りである。黄橙色を呈し、底径は4.4cmを測る。2は台付椀の底部で、高台径は7.4cmを



1号堀東壁土層断面図1



1号堀東壁土層断面図2



6号溝・2号堀東壁土層断面図

土層名

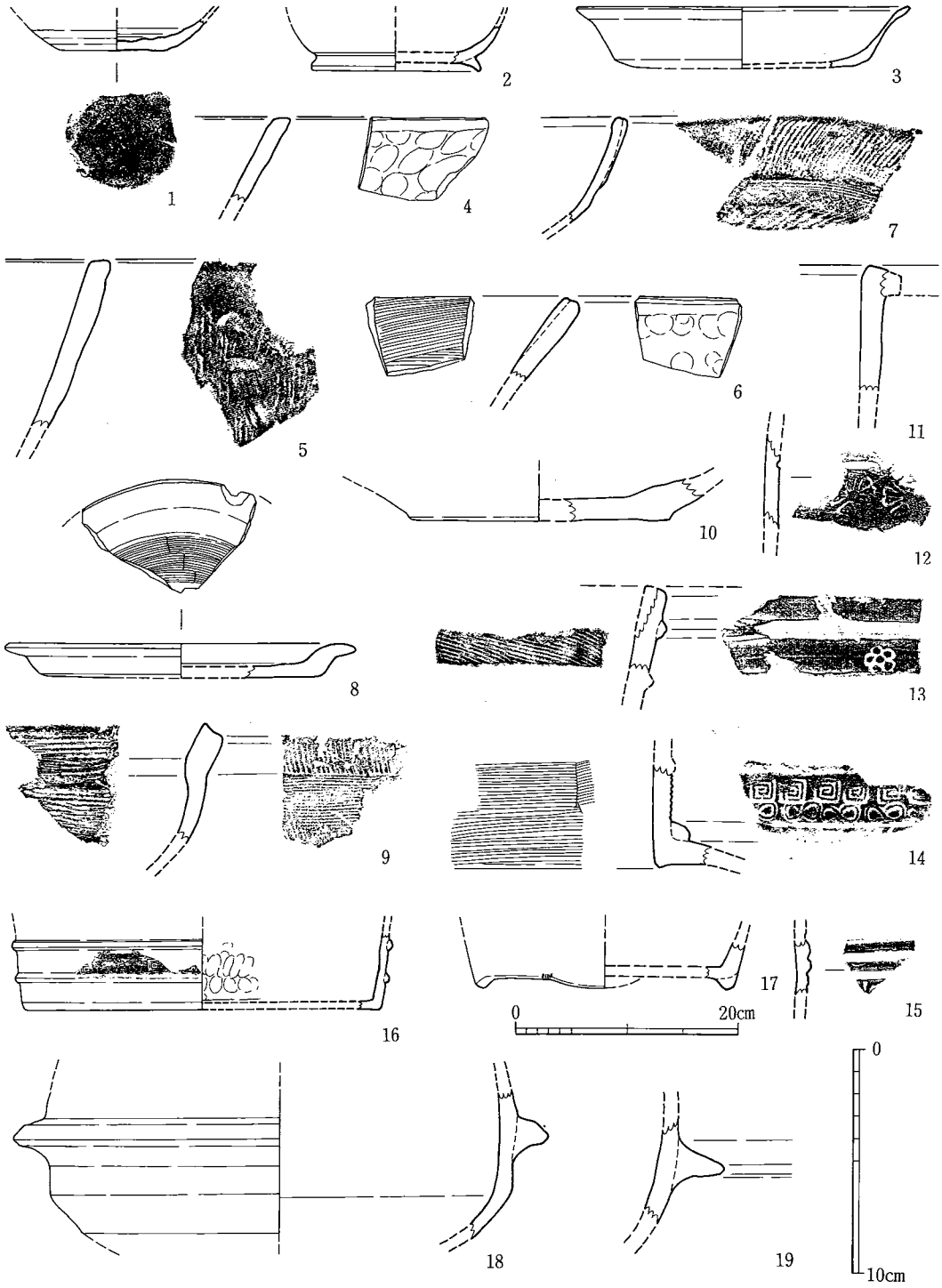
1	淡暗褐色土	9	淡暗褐色土	17	暗黒褐色土
2	淡暗褐色土	10	暗茶褐色土	18	黒褐色土
3	暗茶褐色土	11	淡暗黄褐色土		
4	〃	12	暗褐色土		
5	暗褐色土	13	〃		
6	暗黄褐色土	14	暗茶褐色土		
7	淡暗褐色土	15	やや明るい暗褐色土		
8	淡暗黄褐色土	16	黒褐色土		

第75図　1・2号堀（旧1号・7号溝）・6号溝土層断面図（1/60）

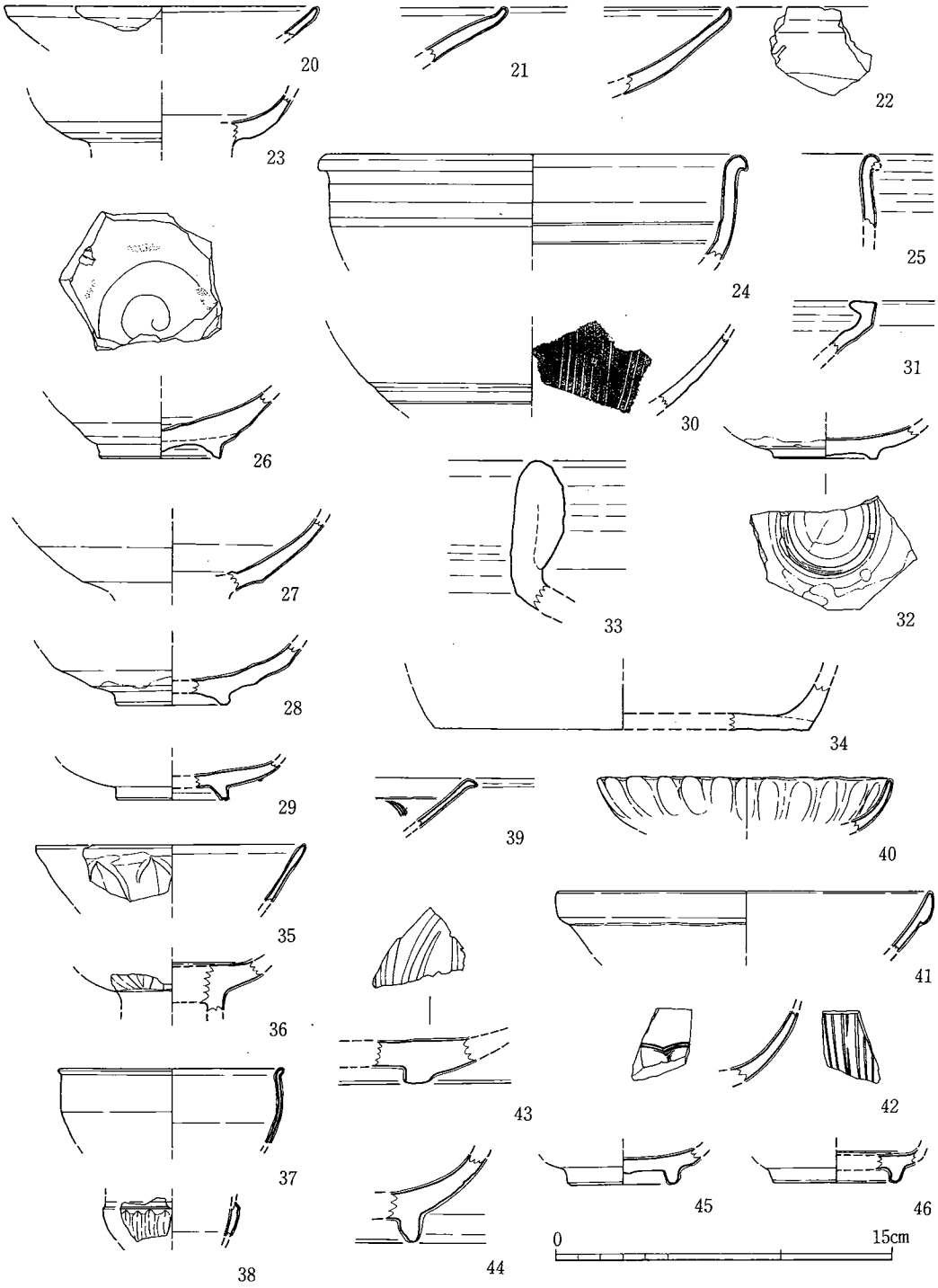
測る。３は口縁部が外反する身の浅い皿で、復元口径は15.0cm、器高は2.8cmを測る。

４～19は瓦器である。４～７は鉢の口縁部で、10は底部であろう。７は口縁下に斜め方向のハケが文様状に入り、口唇部は丸みをもつ。８は小皿で内底にはハケが入る。９は外反する口縁部は肥厚させており、口唇部の内側端部はやや跳ね上げている。外面は縦ハケの下に横ハケが入っており、文様のように見える。防長系の鼎であろう。10は焼成が悪く黄白色を呈し、外面は回転糸切りである。12・13・15～17は火鉢片である。11は直立する口縁の端部を折曲げて肥厚させたもの。12は５弁の菊花文の印刻が入る胴部片で、印刻文上の沈線は突帯の剝落した痕跡と思われる。13は口縁下の突帯が２条あったものと思われ、貼り付けの痕跡が残る。突帯間には５弁の菊花文の印刻が入る。内面は押さえの後ハケ目が入り、内外灰白色を呈す。15は２条の凹線下に菊花文の印刻が入る。16は胴下位に突帯が２条貼り付けてあり、その間に雷文が印刻されている。復元底径31.5cmを測る。17は火鉢の底部と思われ、弧形の脚がつく。14・18・19は湯釜で、14は頸部の屈曲部に貼り付け突帯があり、その上には雷文と横Ｓ字文が二段に印刻されており、さらにその上にも文様があるらしく、頸部外面を充塡していたものと考えられる。内面の調整は横ハケである。18・19は羽釜の胴部で、やや下垂する断面三角形の突帯が貼付けられている。18は突帯下面の外側と胴下位に煤が付着しており、鉄製の五徳を使用していたことがわかる。

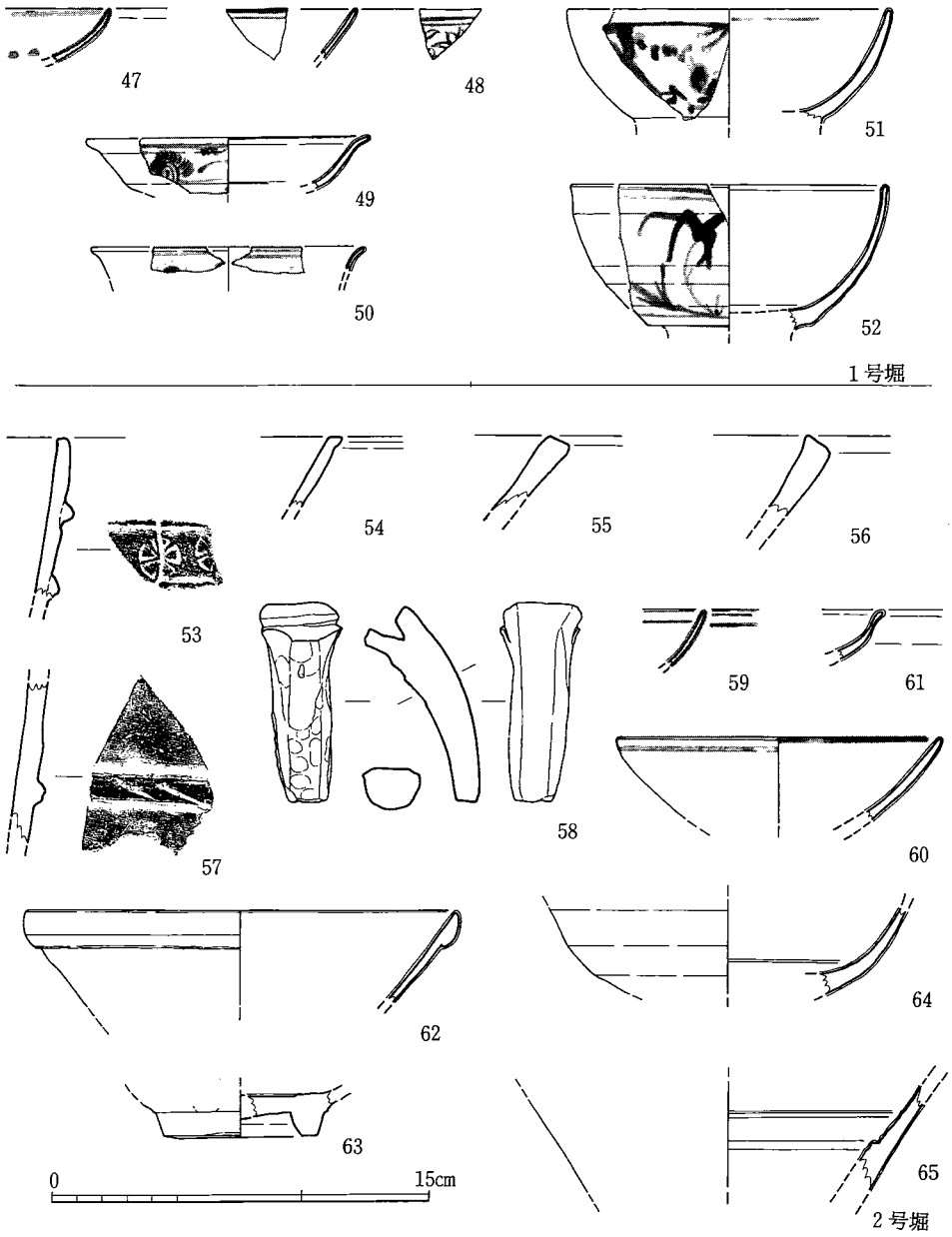
20～34は陶器である。20～22は鷹取系の皿の口縁部片で、20は釉は白色で均一にはかかっていおらず 胎は橙色である。器面は平滑で光沢がある。21･22は胎は橙色で、釉は緑がかった灰白色で、藁釉であろう。工具によるナデの痕跡が釉の上からも見ることができる。23は身の浅い高台付の皿で、釉は灰白色で、藁釉の繊維が付着しており、外底部は露胎で胎は橙色を呈す。24・25は鉢の口縁部片で、釉は淡黄緑色で藁釉であろう。胎は灰白色で、工具によるナデの痕跡が釉の上からも見ることができる。鷹取系と思われる。26は椀の底部で、釉は灰白色、胎は灰褐色を呈し、見込みに目土跡が付着している。高台は小さく、貼り付け後の調整が粗いため接合痕がはっきりしている。底部は中央を残した掻き取りである。27は唐津系の椀の胴下位で、釉は灰白色で、藁釉の繊維が付着している。外底部は露胎で胎は灰橙色を呈す。28は身の浅い削り出し高台付の皿で、釉は灰白色、胴下位から外底部は露胎で、胎は茶褐色を呈す。29は釉は灰白色で、内底の中央部と外胴下位と高台畳付に目跡が付着している。鷹取系と思われる。30は陶器の摺鉢の胴部片で、暗赤褐色を呈する。摺目は７本単位である。31は陶器の摺鉢の口縁部片と思われる。口縁端部は内側に折曲げて、上面を平坦に作っている。鉄釉を内面と外面の口縁下までかけており、露胎の胴部は灰黒色を呈する。32は鷹取系の陶器の皿の底部で、削り出し高台であり、畳付は削りで平坦になっている。釉は乳白色で、胴下位までかかっており、底部は露胎で暗灰白色を呈する。33は備前焼の甕の口縁部で、口縁端部を丸く折曲げて肥厚させている。34は備前焼の甕の底部と思われる。内面に灰白色の凝固物が残っていることから、



第76図　1号堀（旧1号溝）出土土器実測図（1/3　16・17は1/6）



第77図　1号堀（旧1号溝）出土陶磁器実測図（1/3）



第78図　1・2号堀（旧1・7号溝）出土土器・陶磁器実測図（1/3）

小便甕として使用したものと思われる。復元底径は16.9cmを測る。器壁が薄いので小型品であろう。

35～46は磁器で、35～38・40・42～46は青磁で、39・41は白磁である。35は青磁の蓮弁文椀の口縁部で、釉は淡緑色で、胎は灰白色である。復元口径は11.8cmを測る。36は青磁の蓮弁文

椀の胴下位で、釉は淡黄緑色で、胎は灰白色である。見込みは釉の掻き取りがあり、おそらく蛇ノ目状であろう。37は小型の鉢で、口縁部が丸く外反させている。器壁は非常に薄い。釉は淡黄緑色で、胎は灰白色である。復元口径は10.0cmを測る。38は青白磁の合子の胴部片で、外面に蓮弁文がある。釉は乳白色～淡青緑色で、胎は灰白色である。40は青磁の皿で型おこしによる花弁状の凹凸をもつ。釉は淡緑色で、胎は灰白色。胴下位から内椀して底部に至る。気泡が多いがつくりはよく、搬入品であろう。42は青磁の椀の胴部片で、釉は濃緑色、胎は灰白色で、外底は釉の掻き取りがあり、おそらく蛇ノ目状であろう。畳付は丸い。器壁も釉も厚いが作りがよいので、龍泉窯系のものと思われる。釉は淡緑色で、胎は灰白色。外面には細刻の細蓮弁文、内面には２本の片切彫り沈線による区画文が見られる。43は碁笥底に近い底部を持つ皿で、外面が乳白色、内面は濃緑色の釉が厚くかかっており、畳付けは露胎である。見込みには、片切彫りの花弁文が見られる。国産の青磁だろうか。45と46は青磁椀の底部で、釉は濃緑色、胎はにぶい灰白色である。45の外底には釉の掻き取りがある。39は白磁の皿の口縁部で釉は乳白色、胎は灰白色である。口縁端部は外に折曲げている。内面には毛彫りの界線と櫛目文がみられる。椀Ⅴ－４ｂ類である。41は玉縁口縁の白磁椀で、釉は乳白色、胎は灰白色である。椀Ⅳ－１類と思われ、復元口径は17.0cmを測る。

47～52は染付で、42は小皿で、内面の口縁下に界線があり、見込みにも文様が入っている。48は碗の口縁部で、内外の口縁下に２本界線があり、外面はその下に花文が入る。文様から輸入品の可能性がある。49は復元口径11.5cmの小皿で、内外の口縁下に界線があり、内面は見込みにもう１本界線が、外面は牡丹唐草文が入る。16c 前半の明代のものであろう。50は復元口径11.0cmの小皿で、内面の口縁下に２本と、外面の口縁下に１本界線があり、外面はさらにその下に文様が入る。51は復元口径13.0cmの椀で、内面の見込みと外面の口縁下に１本界線があり、外面はその下に草葉文が入る。釉が厚く、光沢がある。52は復元口径12.8cmを測り、外の口縁下に２本界線があり、その下に草葉文が入る。50～52は伊万里系と思われる。

第91図32は埋土上部より出土した小型の土馬で、頭部と右前脚だけが残っている。顔は刺突と線刻で描かれ、立髪の表現がある。第90図７～13は棒状の鉄器で、鉄鏃の茎の可能性が高い。断面は方形である。第90図８・12は刀子状の鉄器だが、茎部が断面円形で先端が反って細くなっている。刃部は１枚の薄い板を折曲げて断面半月状にし、合わせたところを刃として使用しているようだ。（秦）

２号堀（図版59・60　第75図）

平坦面の北端に位置しており、東西方向に調査区を横断している。断面は６号溝に北側立ち上がりを切られているものの、緩やかなＶ字形で、南壁の方が急勾配である。検出面での幅は４ｍ前後で、北にカーブする部分が最も幅が広く4.7ｍを測る。深さは現状で 1.2～1.8ｍで、

カーブする部分が最も深い。調査区内の溝の中央部分で、１・２号区画溝の間の北端の溝の南壁から底面には多くのピットが存在しており、入口になる木橋の橋脚のピットかもしれない。土塁との関係は土層断面の示すごとく、両者は共存していたと考えられる。また、２号堀も１号堀と同様に、下位までは自然堆積だが、中位から堆積が乱れ、上位は人為的埋め戻しと思われる。

遺物（図版63　第78図53～65　第90図14　第91図39・40）

53～58は瓦器である。54～56は鉢の口縁部で、53・57は火鉢片で、53は２条の貼り付け突帯の間に５弁の菊花文の印刻が入る胴部片である。57は貼付突帯にハケ目原体による刺突文が入るもので、内外灰白色を呈す。58は防長系の鼎の脚であろう。接合部は深い凹線が入る。外側はナデにより平坦化しており、内側は押さえにより凹凸が目立つ。

59・60は染付で、椀か皿の口縁部と思われ、内外の口縁下に１条の界線がある。

61は白磁の皿の口縁部で、口縁端部は外に折曲げている。釉は乳白色、胎は灰白色である。62は玉縁口縁の白磁椀で、椀―１類と思われる。釉は乳白色、胎は灰白色である。63は白磁椀の底部で、低い削り出し高台がつき、見込みに蛇ノ目の釉の掻き取りがあるので、Ⅷ―２類にあたる。64は白磁椀の胴下位で、釉は青味がかった乳白色で、胎は灰白色である。内面には沈線が１条ある。釉の掻き取りがある。65は陶器壺の胴下位で、内面は成形時の削りによる段がみられる。釉は淡緑白色、胎は灰白色である。

第91図39は鷹取系の皿の底部片の周縁部を打ち欠いて円盤形製品に転用したもので、内外露胎で、灰白色の釉の細線で１辺が弧形の６角形を描いている。胎はにぶい暗褐色である。第91図40は青磁椀の底部の周縁部を打ち欠いて円盤形製品に転用したもので、釉は淡緑色、胎は灰白色で、外底には釉の掻き取りがある。

第90図14は不明鉄片だが、断面円形で反っていることから、１号堀で出土した刀子状の鉄器の茎部と思われる。第90図19は不明鉄片で、厚さ0.5cmの板状を呈する。側縁はすべて欠損している。（秦）

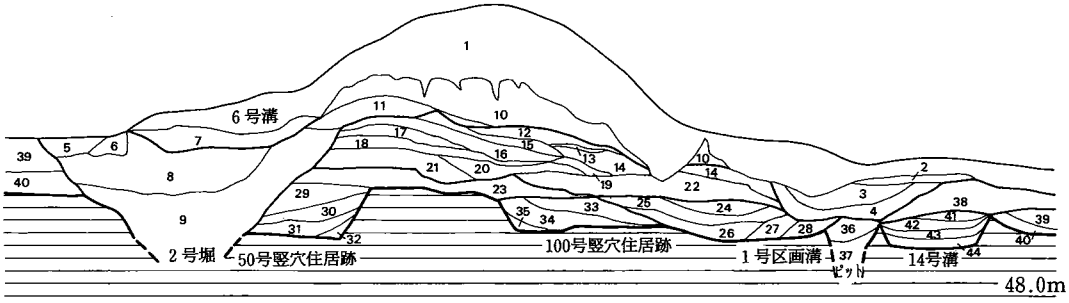
１号区画溝（旧８号溝）（図版61　第79図）

調査区平坦面の北西部に位置しており、「コ」の字形に検出されているが、調査区外では収束し、方形をなすものと思われる。方形の各辺は南北を意識しているようである。検出面での幅は1.0～2.1ｍで、深さは現状で1.0～2.1ｍで、ほぼ均一である。

土層の観察から、掘り直しは１回認められる。掘り直した溝は自然堆積で埋ったが、北辺の上部は土塁建設時に人為的に埋められ、そこから盛土が始まっている。

出土遺物のうち、５以外は14ｃ後半～15ｃ代のものであるので、５は混入品と考えられる。これを除くと、遺物の器種構成は生活雑器のみで占められる。

遺物（図版53　第80図１～５　第90図１・２　第91図31・35）



土層名

1	黒色土	12	灰茶色土	23	暗茶褐色土	34	暗茶褐色土
2	黒色土	13	暗茶褐色土	24	暗黄色土	35	暗茶褐色土
3	黒色土	14	暗茶褐色土	25	暗黄色土	36	茶色土
4	暗茶色土	15	暗灰茶色土	26	暗茶色土	37	暗茶色土
5	黒色土	16	淡灰色土	27	暗茶色土	38	黒色土
6	黒色土	17	淡灰色土	28	黒色土	39	暗茶色土
7	暗灰色土	18	暗灰色土	29	暗茶色土	40	暗黄色土
8	暗灰色土（3より明るい）	19	暗黄褐色土	30	暗茶褐色土	41	暗茶色土
9	暗灰茶色土	20	暗灰茶色土	31	暗茶褐色土	42	暗茶色土
10	暗灰茶色土	21	暗灰色土	32	暗黄茶褐色土	43	暗黄色土
11	暗灰茶色土	22	暗茶色土	33	暗茶褐色土	44	暗黄色土

第79図　土塁・2号堀（旧7号溝）1号区画溝（旧溝8）・6・14号溝土層断面図（1/60）

溝が浅いため遺物量は少ない。1は土師器の小皿で、底部は回転糸切りと思われるが磨滅のため明確でない。底径5.4cmを測る。胎土は精良で、内外黄橙色を呈す。

2は瓦質の鉢の口縁部で、調整は内外ナデのみ。にぶい暗黄灰色を底す。3は瓦質の摺鉢の底部片で、内外黄白色を呈する。4は瓦質の火鉢の底部片である。胴下位の外面には、2条の突帯がつくものと思われる。下の突帯の直下に粘土の積み上げ痕と思われる沈線がある。底部は他の部分に比べて磨滅が著しいが、これは使用によるものと思われる。内外灰白色を呈する。5は同安窯系青磁皿の底部で、外底から胴下位にかけては釉掻き取りで、内面が無文であることから皿Ⅰ—2a類にあたる。釉は淡黄緑色、胎は灰白色を呈する。

第90図1は頁岩製砥石の完形品で、6面使用している。部分的に使用されているが、上下端面は基本的には整形面であり、企画的な形態を呈する。使用痕は明瞭だが、使用による磨滅が少ないので、短期間の使用の後、廃棄されたものと思われる。第90図2は手持ち砥石の破片で、2面使用している。側面は整形面である。頁岩製だが、赤く細い筋の入る石材で、筑後川流域によく見られるものであることから搬入品であろう。第90図35は偏平な円礫だが表裏に摩った痕跡がある。安山岩質と思われる軟質の石材で、碁石として使用したものか。第91図31は宣徳通寶（宣宗　西暦1426～1433）で、底面からやや浮いて完形で出土した。　（秦）

2号区画溝（旧9号溝）（図版60・61　第81図）

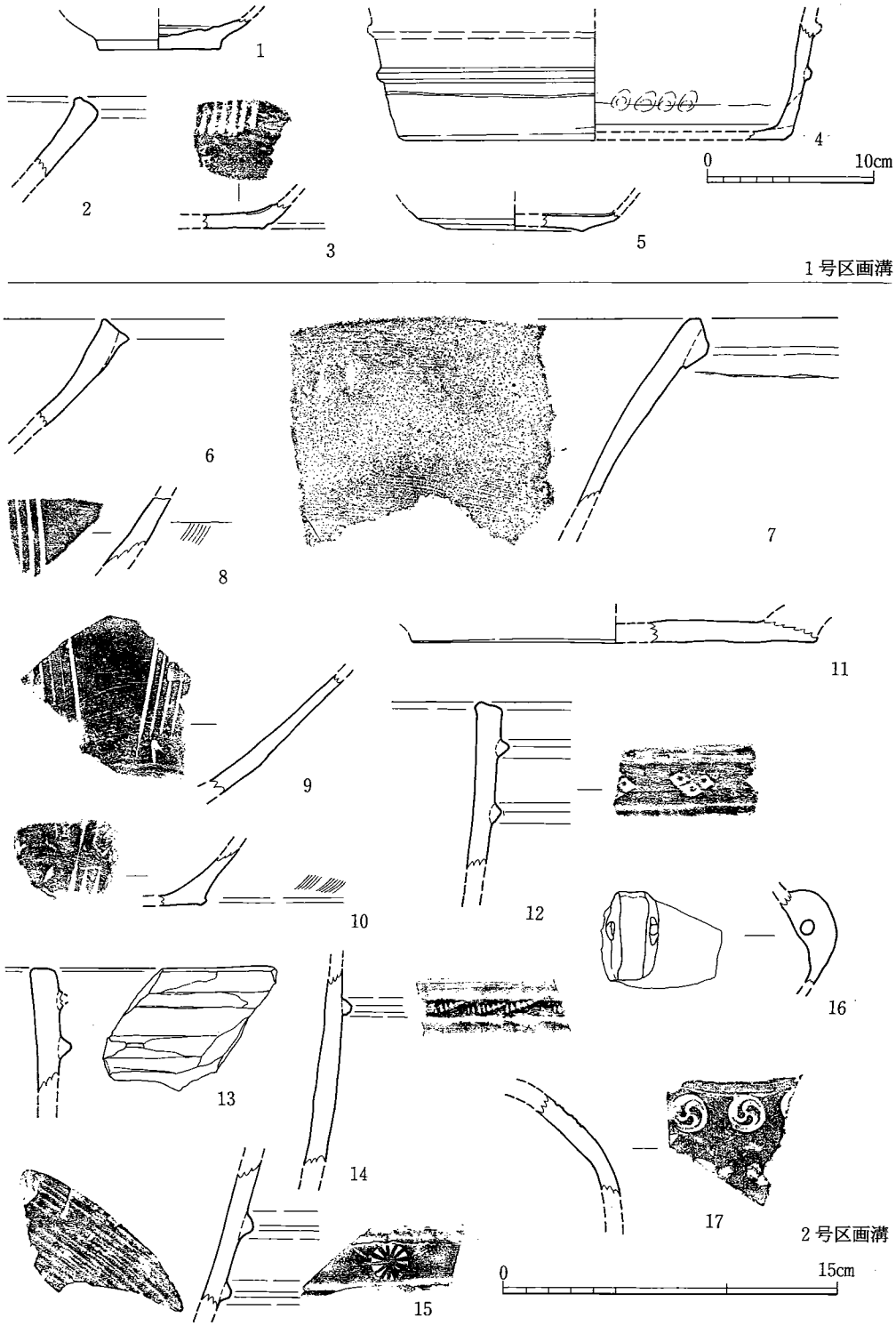
調査区平坦面の北東部に位置しており、「L」の字形に検出されている。北側はこのまま直進して北壁に接するか、東に折れ曲がって逆「コ」の字形であっただろう。東側も途中で北に折

れて方形を呈していた可能性が高い。南北に走る辺は、１号区画溝のそれと約６ｍの距離をおいて併走しており、東西方向の辺も１号区画溝のそれと直線的な在り方をしているので、両者は併存していたと考えて差し支えないであろう。方形の各辺は南北を意識しているようである。検出面での幅は1.2～2.6ｍである。深さは現状で30～50cmで、ほぼ均一である。西南のコーナーからやや東よりに、自然石の集積が見られたが、これはなんらかの架橋の下部構造の可能性がある。土層から３度掘り直されていると思われる。１度目の掘り直しは、溝の中央部分の細く深く掘ったもので、当初の溝とは深さは変わらないが、幅が狭くなっている。２度目の掘り直しの溝の幅は、最初の掘削時にものに近いが、深さは半分程である。３度目の掘り直しの溝は、１度目とほぼ同じ位置に同じ幅で設けられている、深さは２度目の掘り直し時のものと等しい。

本遺構出土遺物のほとんどが14c後半～15c代のものであり、20は12c中頃～13c初頭のものであることから、混入品であろう。８号溝と同様に、器種構成はほぼ生活雑器のみで占められている。

遺物（図版63　第80図６～18・第82図18・第90図３・４　第91図41・42）

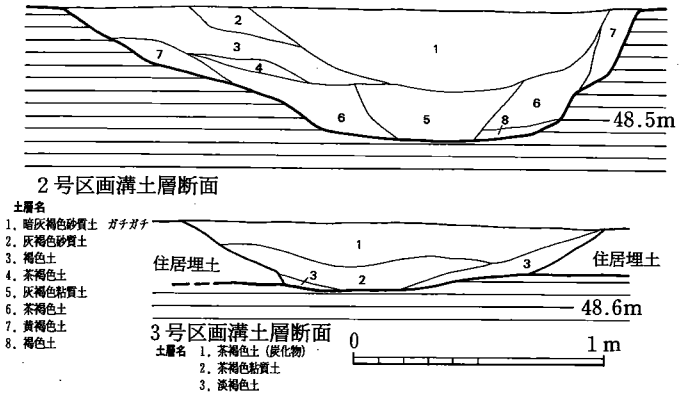
６～17は瓦質土器で、６は口縁部がわずかに内湾するが、胴部は直線的に開くタイプの鉢で、口縁端部外面に断面三角形の突帯を貼付けている。摺目の部分が欠損している可能性もある。内外黄白色を呈する。７は鉢の口縁部で外反していることから、胴部で屈曲して内湾するタイプで、佐賀平野から筑後平野を中心に分布するものである。口縁端部は外面に断面三角形状突帯を貼付けて肥厚させている。突帯貼付け後の調整は粗く、上端は接合部で窪んでおり、下端は未調整である。焼成も不良で、胎土は軟質で、粗放である。８～10は摺鉢で、８は胴部片で、内外灰黒色を呈す。９は外面は粗いハケ調整。内面は横方向の擦痕が良く残っている。摺目の下にある沈線も、摺目よりも浅く、意識的につけたように見えないことから、使用時に付いた擦痕と思われる。外面は煤の付着が見られ、暗黒褐色を呈し、内面は明橙色である。10は底部片で、外面はハケ、内面には使用時のものと思われる横方向の擦痕が見られる。摺目の下端部が残っており、内外にぶい淡灰褐色を呈する。11は復元底径18.0cmの杯か鉢の底部で、器表面は磨滅しており、調整不明。淡灰褐色を呈する。12～15は火鉢で、12は外面口縁下に突帯が２条付き、その間に四菱文が印刻されている。口唇部は内面の調整後、ナデによって平坦にされている。内外にぶい黄灰褐色を呈する。13は外面口縁下に突帯が２条付くが、その間の印刻文が見られない。印刻文の入らない部分にしては広すぎるので、磨滅したのかもしれない。内外淡灰橙色を呈する。14は口縁下の貼付突帯にハケ目原体による刺突文が入るもので、内外灰白色を呈す。15は胴下位に２条の突帯が貼付けられており、その間に菊花文状の印刻文が入る。内面はハケで、色調は外面青灰色、内面白灰色を呈する。16は湯釜の耳部で、孔の端部に紐ずれが見られる。器表面が剝落しており調整は不明。内外黄橙色を呈する。17は、偏球形の体部であることから風炉と思われ、肩部に巴文の印刻文が入る。18は龍泉窯系青磁椀で、内面にヘ



第80図　1・2号区画溝（8・9号溝）出土土器・陶磁器実測図（1/3　4は1/4）

ラ・片切彫りの蓮華文が入るⅠ—2b類である。

第91図42は土師質の柱状土製品の端部で、五徳のような用途が考えられる。押さえによる成形で断面正方形を呈す。第91図41は李朝陶器の椀の削り出し底部で、周縁を打ち欠いて円板形製品に転用している。釉は淡黄緑色で、胎は暗灰色。畳付は掻き取られ、6箇所の目土跡が見られる。



第81図　2・3号区画溝（旧9・10号溝）土層断面図（1/30）

第90図3は砂岩製砥石で、下端は欠損しており、5面使用している。第90図4は頁岩製砥石で、上下端は欠損しており、4面使用している。使用による磨滅は著しいが、本来は規格的な方形板状を呈していたと思われる。（秦）

3号区画溝（旧10号溝）（図版60・61　第81図）

幅1.6～1.8m、底面の深さは20～26cmを測り、東にいくほど若干浅くなる。壁は緩やかで、断面台形を呈す。土層は自然堆積と思われる。本遺構は、出土遺物が少なく、時期の特定が難しいが、1号区画溝（旧8号溝）と途中まで等間隔を保って併走しており、埋土も同様で、遺物の時期も大差ないことから、併存していた可能性が強い。

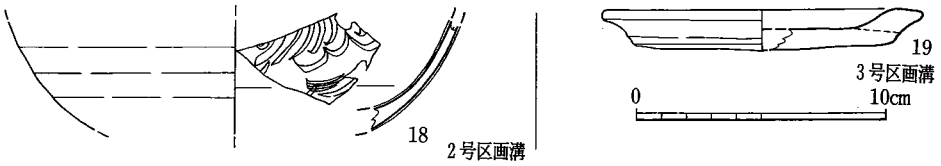
遺物（図版63　第82図19　第90図18）　19は瓦質の皿で、復元口径13.0cm、底径10.6cm、器高1.4cmを呈する。磨滅が著しく調整は不明。内外にぶい黄灰色を呈する。14～15C代のものであろう。

第90図18は鎌の基部で、刃部はほとんど欠損しているが背から刃までは最大で4.3cmを測る。基部は折曲げて肥厚しているが、袋状に曲げているのが特徴的である。第91図37は土師器の杯の底部片を円盤形製品に転用したものである。底径4.4cmで、外底には回転糸切りの痕跡が残っている。胎土は精良で、黄白色を呈する。（秦）

(3)　溝状遺構

3号溝（第81図）

1号円形周溝状遺構の北側中央を切り、2号円形周溝状遺構の南辺の西端部を切っている。幅は10m前後、深さは20～24cmと浅く、ほぼ均一である。確実に伴う遺物は出土していないが、



第82図　2・3号区画溝（旧9・10号溝）出土土器・陶磁器実測図（1/3）

埋土から中・近世の遺構と思われる。　（秦）

6号溝（図版60）

6号溝は2号堀が埋った後掘り直したもので、2号堀の北壁上部を切っている。幅は8.5～1.35mで、もっとも幅の拡がる湾曲部で2.5m程である。深さは20～40cmと浅く、断面略台形を呈する。土層から掘り直しが1回認められる。自然堆積と思われる。遺構の時期は、2号堀を切っていることから、1～5の遺物の時期である、17c代に比定してよいだろう。また、土層から2号堀に伴うと思われる土塁の上部が失われてから掘られたことがわかる。

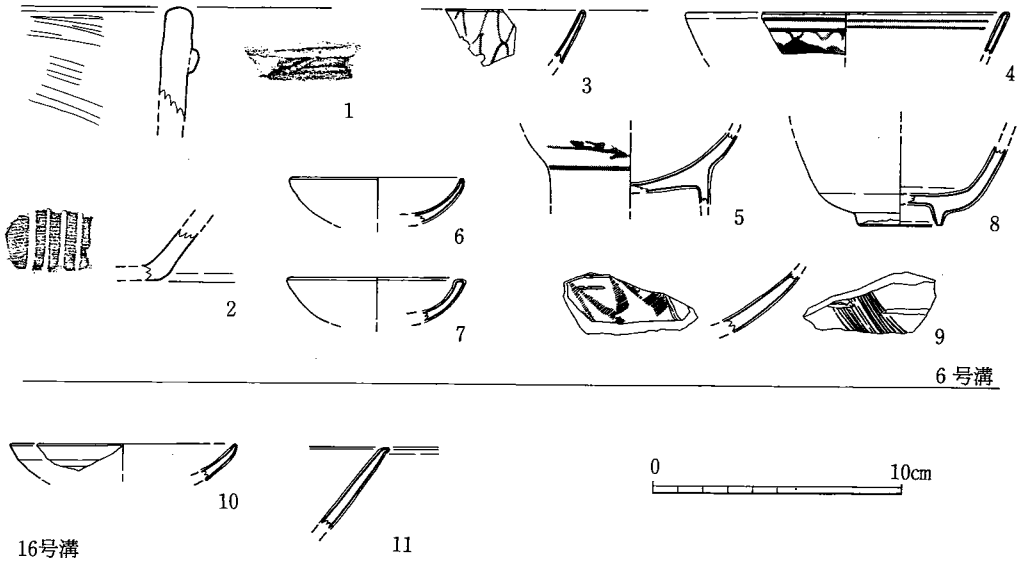
遺物（図版63　第83図1～9　第91図29）

1は瓦質火鉢の口縁部で、外面の口縁下には、刷毛の原体の刺突文を付す、断面蒲鉾形の突帯が貼り付けられている。内器面から口唇部にかけて煤が付着している。使用のためと思われるが、この付着状況からすると火鉢の他にも利用していた可能性が考えられる。外面は灰色、内面は変色により暗黒色を呈する。2は瓦質摺鉢の底部で、内面は摺目とハケがよく残っている。外面は黄橙色、内面は黄白色を呈する。3は網目文の肥前系の染付椀、4は染付椀の口縁部で、内外口縁下に界線が2条入っている。5は広東椀の底部片なので、18c後半～19c前半のものであろう。6と7は国産白磁の小杯で、復元口径7.0cmを測る。8は唐津系の陶器椀で胎は茶褐色、釉は乳白色を呈する。釉は畳付を除いて全体にかかっている。9は同安窯系の椀の胴部片で、櫛歯文が内外に入る、椀Ⅰ－1b類である。

第91図29は不明鉄片で、厚さ0.5～0.7cmの板状を呈する。鍛造品らしいので、剝離した可能性もある。　（秦）

15号溝（図版61）

平坦面南西部に位置し、南北方向に直線的に延びる。南端は1号堀に切られ、それより南側には続きは見られなかったが、溝が浅いために検出されなかった可能性もある。北端は16号溝に切られているが、16号溝は15号溝の掘り直しで、南端だけが新たに掘られた可能性がある。幅約0.7m、深さ8～15cmと浅く、底面はほぼ水平である。確実に溝に伴う遺物は出土していないが、埋土から中・近世の遺構と考えられる。



第83図　6・16号溝出土土器・陶磁器実測図（1/3）

16号溝（図版61）

平坦面南西部に位置し、南北方向に直線的に延びた後、東に湾曲する。東端は確実に途切れており、1004号溝との間に、幅約8.0mの空間を設けている。南端は1号堀に達する前に途切れているが、検出面が低くなっているためかもしれない。幅0.9m～1.4mで、深さ10～25cmと浅い。1004号溝は東端の延長上に位置しているため、一連の遺構と思われる。

遺物（図版63　第83図10・11）

10は白磁の小皿の口縁部で、外面の胴下位は露胎である。復元口径9.2cmを測る。胎は灰白色である。露胎部分が褐色を呈することから、国産品と思われる。11は同安窯青磁椀の口縁部で、椀Ⅰ－1a類と思われる。胎は灰白色、釉は淡黄緑色である。（秦）

17号溝（図版62）

平坦面北端中央部に位置し、南北に直線的に延びる。52号竪穴住居跡との切り合い関係は明確でないが、埋土から中・近世の遺構と考えられるので、切っていただろう。それより南には検出されておらず、2号堀・6号溝との関係は不明である。18号溝と併走しており、幅・深さもほぼ等しいことから、一連の遺構と思われる。幅30cm程で、深さ7～13cmと浅く、遺物量も少ない。確実に溝に伴う遺物は出土していない。（秦）

18号溝（図版62）

平坦面北端中央部に位置し、17号溝と同様に、南北に直線的に延び、52号竪穴住居跡を切っ

ていたと思われ、２号堀・６号溝との関係は不明である。幅・深さも17号溝とほぼ等しい。確実に溝に伴う遺物は出土していない。（秦）

19号溝

平坦面北東部に位置し、東西方向に直線的に延びる。東端は２号堀・６号溝に切られており、２号堀以東には続きは見られなかった。西端は検出面が低くなっているため途切れており、西に延びるかは不明である。幅0.7ｍ～1.0ｍで、深さ27～40㎝と浅く、遺物量も少ない。確実に溝に伴う遺物は出土していないが、埋土から中･近世の遺構と考えられる。16号溝と約1.2ｍ離れて併走しており、幅・深さもほぼ等しいことから、一連の遺構と思われる。（秦）

20号溝（図版62）

平坦面北東部に位置し、15号溝と同様に東西方向に直線的に延び、東端は２号堀・６号溝に切られ、西端は検出面が低くなっているため途切れている。幅0.6ｍ～1.4ｍで、深さ52～60㎝と浅く、遺物量も少ない。確実に溝に伴う遺物は出土していないが、埋土から中・近世の遺構と考えられる。15号溝と併走しており、幅・深さもほぼ等しいことから、一連の遺構と思われる。（秦）

21号溝（図版61）

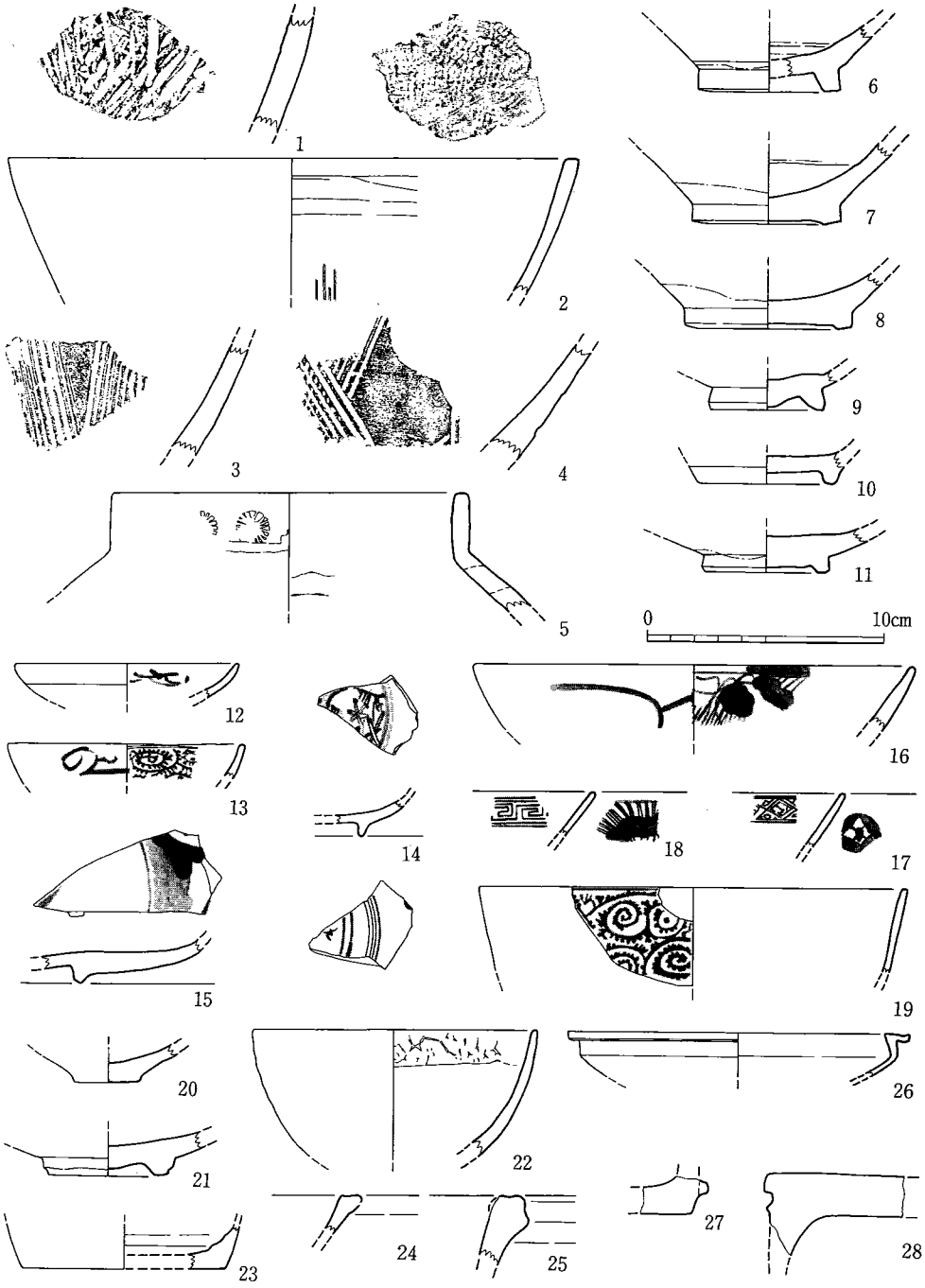
平坦面南西部に位置し、141号竪穴住居跡を切っている。幅約60㎝、深さ５㎝程の小さな溝で、西端は16号溝の手前で途切れており切り合わない。東端は検出されていないため不明である。1001号溝とは直線上に位置しているが、1001号溝は土器が集中的に廃棄されていることから、時期も機能も異なるので、一連のものとは考えられない。確実に溝に伴う遺物は出土していないが、埋土から中・近世の遺構と考えられる。（秦）

1002号溝

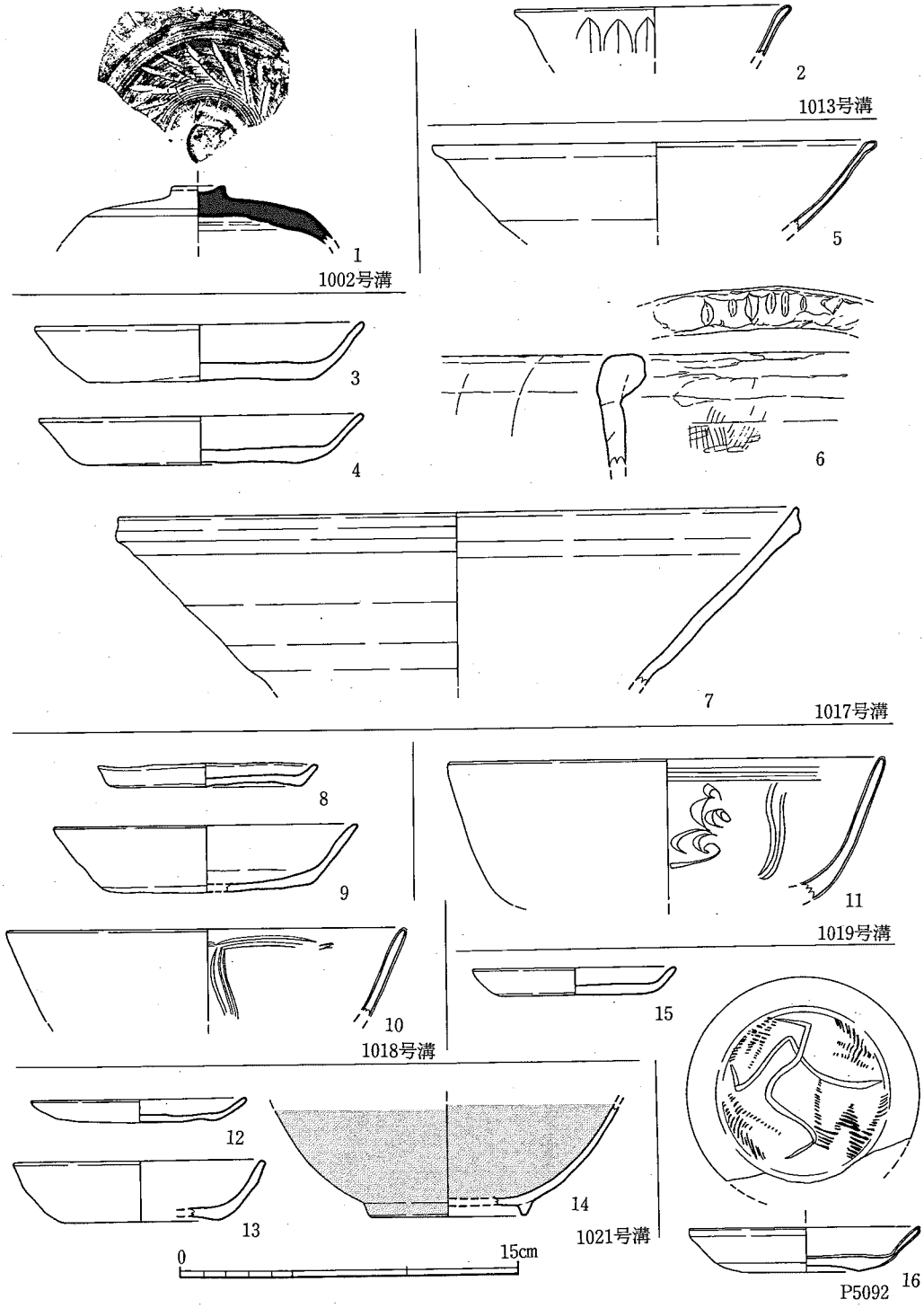
遺物（図版63　第85図１　第91図24･27）外天井部にカキ目と放射状の刻目が巡る。他に方形釘が出土している。端部は平坦をなす。27は組み合わせ式の鉄製品。柄状の部分は断面円形、先端は長方形で、中央に透かしをあけて細い棒を差し込む。用途不明（第91図24･27）。（齋部）

1008号溝

遺物（図版63　第84図）１は須恵器小片で、外面は格子叩き、内面には平行当て具痕が残る。２は土師質の鉢口縁部片で、磨滅が激しいが内面に僅かに下ろし目が見える。また上位には工具等によるナデの当たりがある。３・４は須恵質の鉢。３は備前焼で内面に下ろし目がつき、外面はナデ調整。４は内面に交叉する下ろし目があり、外面は工具による回転ナデ調整。５は



第84図　1008号溝出土土器・陶磁器実測図（1/3）



第85図　1002・1013・1017～1019・1021号溝ピット出土土器・陶磁器実測図（1/3）

瓦質の茶釜で、直口する口縁外面に菊花文のスタンプを押す。体部には粘土接合痕が見える。6～8は白磁椀の底部片。6はV類で高台を四角に作り外面は底部と高台が露胎になる。内面は見込みの釉を蛇ノ目状に掻き取る。胎土は灰白色、釉は茶白色に変色する。7・8はⅣ類。外面体部下位と高台、外底部は露胎になる。6は内面に沈線を巡らす。胎土は淡灰色・黄白色、釉は緑灰色・黄白色。9～11は青磁。9は同安窯系の椀。外面は露胎で内面見込みに沈線を巡らす。胎土は灰白色、釉は淡緑灰色。10はかまぼこ型の高台を持ち、体部が直に立ち上がる青磁椀。全面に青緑色の釉を施し、外底部のみ蛇ノ目状に釉を掻き取る。貫入多し。11は椀のⅠ類で高台畳付きと外底部が露胎。内面見込みに沈線が見える。胎土は淡灰色、釉は深緑色。12～19は肥前系の染付。12～14は小皿になる。12は呉須が明るい青、胎土は灰色で釉は透明である。13は型作りによるもので、内面にタコ唐草、外面に唐草を描く。14は底部小片。内面見込みに草花文を描き、外底部には「大明年製」明の「大」の字が見える。呉須は明るい青、釉は青みを帯びる。15・16は皿。15は内底に明るい青色の呉須で文様を描き、釉はやや青味を帯びる。底部は体部に比べて薄く作る。16は内外面とも唐草文を描き、呉須はやや暗い青で、釉は灰色味を帯びる。17・18は椀。17は内面に雷文を描く。外面は蓮弁か。18は外面に七宝文を、内面に菱繋ぎ文を描く。19は深皿で、外面にタコ唐草を描く。20～26は陶器。20は皿で外底部糸切り。釉は白色で、内面と外面中位までかける。見込みには輪状に重ね痕がつく。胎土は茶褐色を呈する。唐津系か。21も唐津系で内面に施釉し、外面も中位まで釉をかける。内面見込みには目跡がある。外面は削りで高台は外側を面取りする。胎土は茶灰色、釉は灰白色を呈する。22は肥前系の京焼き風椀。2度焼きするもので外面は化粧土と透明釉のみ、内面は口縁部以外に白色釉をかける。23は無釉の陶器で小壺か瓶になるか。内底部には段を有し、外底部は糸切りが残る。胎土は小豆色。24は福岡系の陶器で端部に沈線を巡らす。胎土は暗灰色、釉は濃赤茶色を呈する。25は小石原系。外面に黄灰色・青色の釉・内面に白黄色・茶色の釉を施す。26は陶器の鉢。口縁部は露胎で、内面は淡茶色の釉、外面は茶褐色の下絵を施す。27は瓦質の鉢底部片。突帯を一条巡らす。内外面ともナデ調整。28は軒平瓦。顎部が欠損するが、唐草が一部残る。内外面ともヨコナデ調整。（齋部）

1013号溝

遺物（図版63　第85図2）龍泉窯系の青磁椀Ⅰ－5類で、外面に鎬蓮弁を施す。胎土は淡灰色、釉は厚く緑青色を呈する。（齋部）

1017号溝

遺物（第85図3～7）3・4は土師器杯。底部糸切りで3は板状圧痕を有する。他は磨滅で調整不明。口径14.4・14.5cm、口径2.1・2.5cmを測る。5・6は瓦質の釜片で、端部に刻み目を

入れる。磨滅が激しく、調整は口縁部のヨコナデと５の外面にハケメが見えるのみである。どちらも外面に煤が付着する。７は瓦質の鉢。外面回転ナデの後ナデを施し、内面はナデ調整する。

1018号溝

遺物（第85図８～10）８・９の土師器は糸切り。９の杯は外底部に煤が付着する。10は龍泉窯系の青磁椀片。内面を二本沈線で分割する。胎土は灰色味を帯び、釉は暗緑色である。（齋部）

1019号溝

遺物（第85図11）龍泉窯系の青磁椀。内面を二本の沈線で分割し、その中に飛雲文を描く。（齋部）

1021号溝

遺物（第85図12～14）12・13の土師器皿・杯は糸切りで他は調整不明。14は両黒の黒色土器椀。磨滅のためミガキ等は不明瞭である。復元高台径6.9㎝。（齋部）

(4) 柵跡遺構

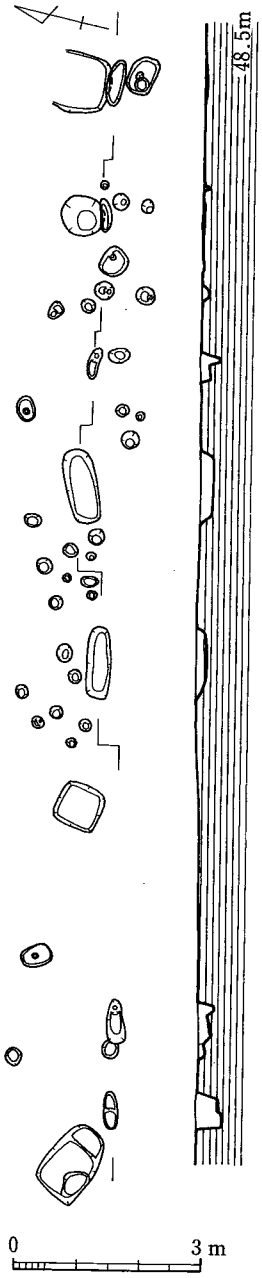
本遺跡からは、非常に多くのピットが検出されているが、確実に柵を復元できるものはほとんどなく、中・近世においては１基のみである。

１号柵跡遺構（図版柵　第86図）

平坦面中央部に位置する。埋土から中・近世のものと考えられるピット列で、平面形が長楕円形あるいは長方形を呈する。残りの良いもので、長さは約１ｍ、幅約50㎝で、東に行くほど残りが悪く、浅くなる。西側の残りの良いもので30～40㎝を測る。

ピットの平面形から、板塀の痕跡と推測される。出土遺物で実測できるものはないが、埋土の特徴から中・近世のものと思われる。

（秦）

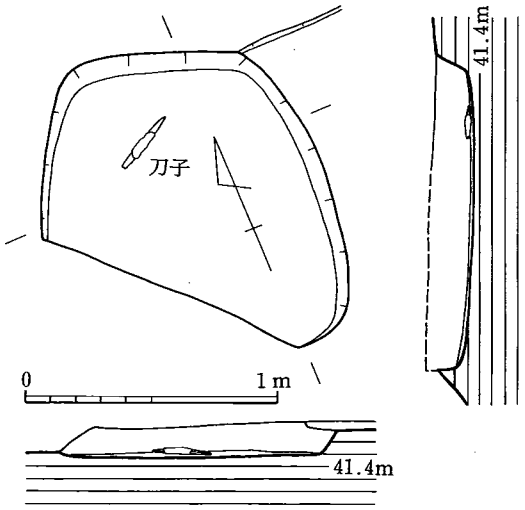


第86図　１号柵跡実測図（1/120）

(5) 土壙墓

1号土壙墓（第87図）

南東部の斜面区南側に位置し、115号竪穴住居跡を切っている。上面をかなり削平されているため、南西部が失われており、平面形が正方形に見えるが、本来略方形であったと思われる。現状で最も幅の広い所で約1.2mを測る。床面はほぼ平坦で、床面の北側から完形の刀子が、刃を壁側に向けて出土した。



第87図　1号土壙墓実測図（1/30）

遺物（図版63　第90図22）

22は刀子で、先端を欠損しており、現存長で24.5cmを測る。刃部の最大幅は2.3cmで、背の厚さは刀身の半程まで3.5mmであった。刀身がやや反っており、刃は鋭利である。関部は背と刃部の両方に段があるが、刃部の段は明瞭でない。茎部は、幅1.6cm、厚さ3mmの板状で尾部が尖根状に細くなっている。木質が若干残っており、径1.5mmの目釘穴が1つ確認された。

（秦）

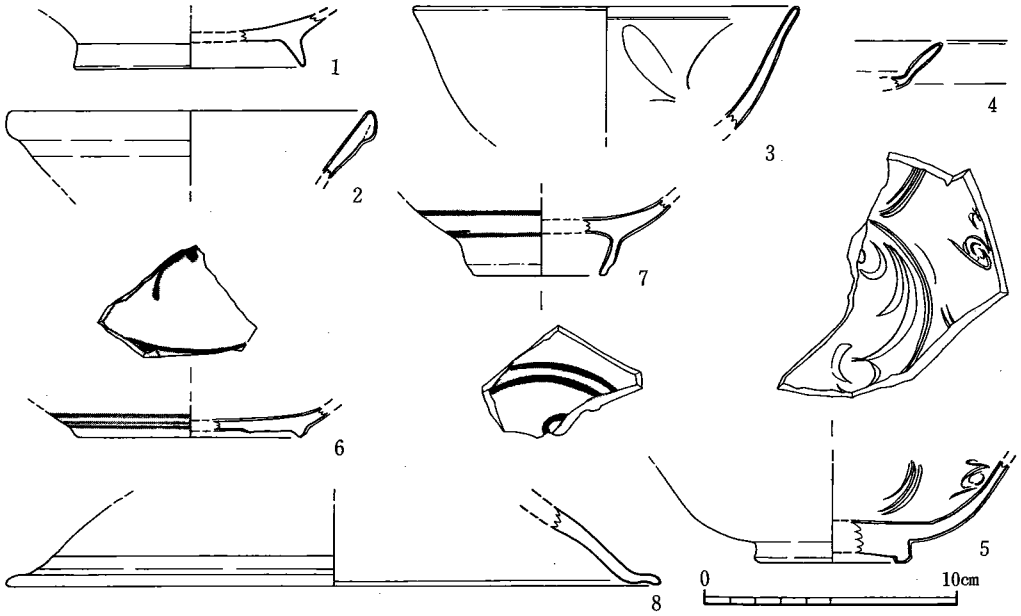
(6) ピット

ピット512・514・1016・1017・5092

ピット1016・1017は平坦面の中央東側に位置する。ピット1016は溝状で、幅40cm、深さ15cmである。1017は長さ1.55m、幅35cm、深さ12cmである。両者は約70cm離れて併走しており、共存していた可能性が高い。ピット512・514は、ピット1016・1017の西側延長上に位置していることから、一連の遺構であった可能性をもつ。これらは、埋土の特徴から中・近世の遺構と考えられる。遺物が少ないため時期を特定しにくいが、溝だとすると、走る方向や間隔が15・16号溝とほぼ等しいので同時期かもしれない。

遺物（図版63　第88図1・2）第84図15・16はピット5092より出土した。15の土師器皿は糸切り。16は同安窯系青磁皿。内面にヘラによる片彫りと櫛によるジグザグ文様を描く。体部下半と外底部は露胎。

（齋部）



第88図　その他の遺構出土中・近世土器・陶磁器実測図（1/3）

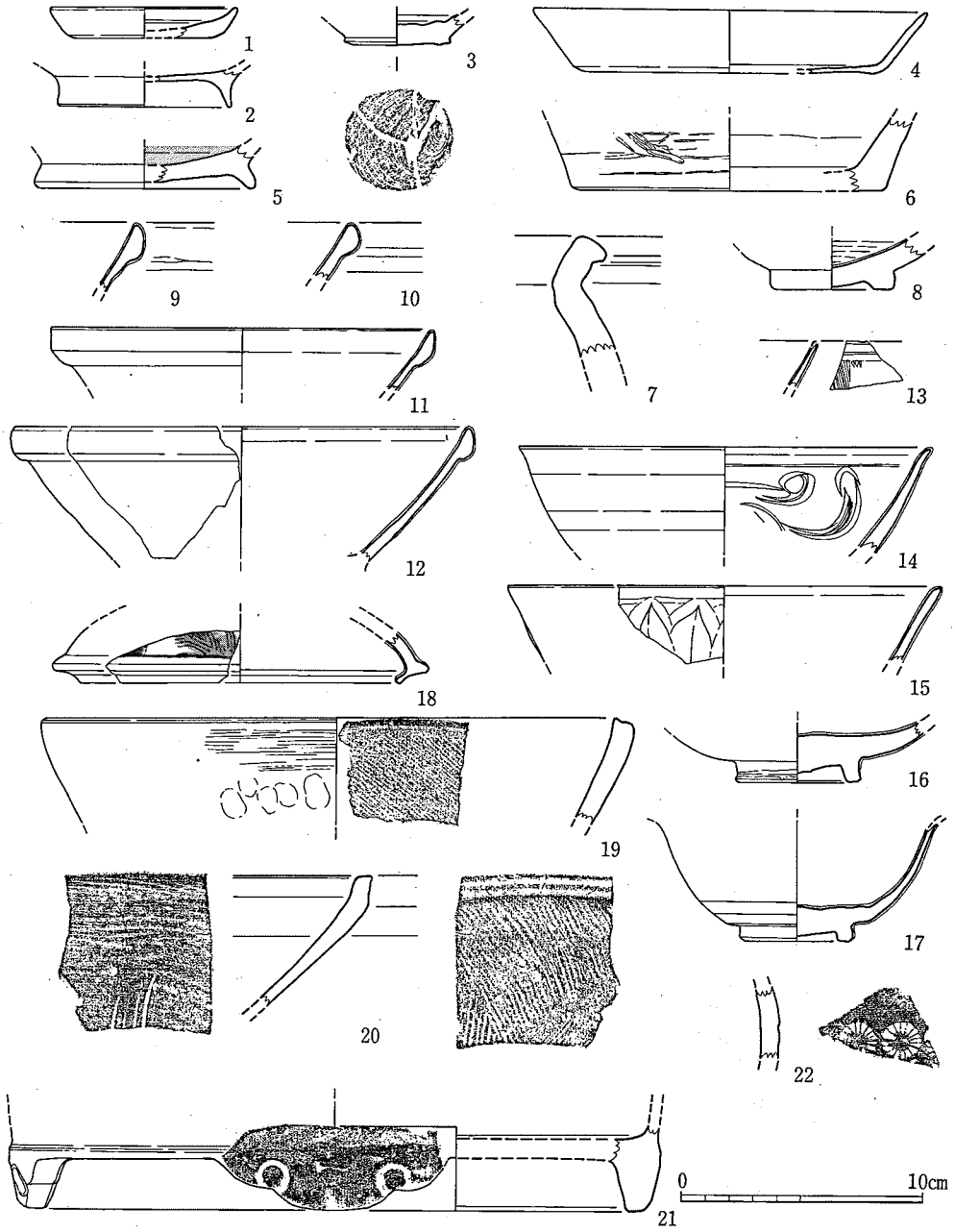
(7)　その他の遺物

ここでは、本来帰属しない遺構や包含層より出土したり、採集された遺物について報告する。

その他の遺構出土中・近世土器・陶磁器（第88図）

各種遺構は無視して配置した。1は土師器椀の底部小片。磨滅が激しく調整は不明。体部が直線的に立ち上がるものか。2は白磁の椀Ⅳ類。口縁は大きめの玉縁に作る。釉は灰色味を帯び、胎土は粗い。3～5は青磁片。4は皿、3・5は龍泉窯系椀。3は内面に草花文を配する。5は椀のⅠ－4類で、底部の器内が厚い。内面をタテ三本の沈線で分割し、間に飛雲文を配する。内底見込みには茸状の文様を片彫りする。畳付きと外底部は露胎。6・7は染め付け。6は皿で、体部最下部に三条、内面見込みに二条の圏線を、巡らせる。内面見込みには雲文と思われる文様を描く。高台内面は二段に作り出し、中心部は施釉するが外側は露胎にする。呉須の色は紺色で、白磁部分は灰色味が強い。7は椀で、薄く高い高台をとりつける。体部外面最下部に三条、外面高台付近に二条の圏線を巡らす。内面見込みにも文様が見える。呉須は淡青色で、白磁部分は灰青色味を帯びる。高台外端部は内側に屈曲させ、外端部の釉をかき取る。8は磁器の壺蓋の小片。全面回転ナデで、暗茶灰色の釉を施す。胎土はやや粗く灰色を呈する。

（齋部）

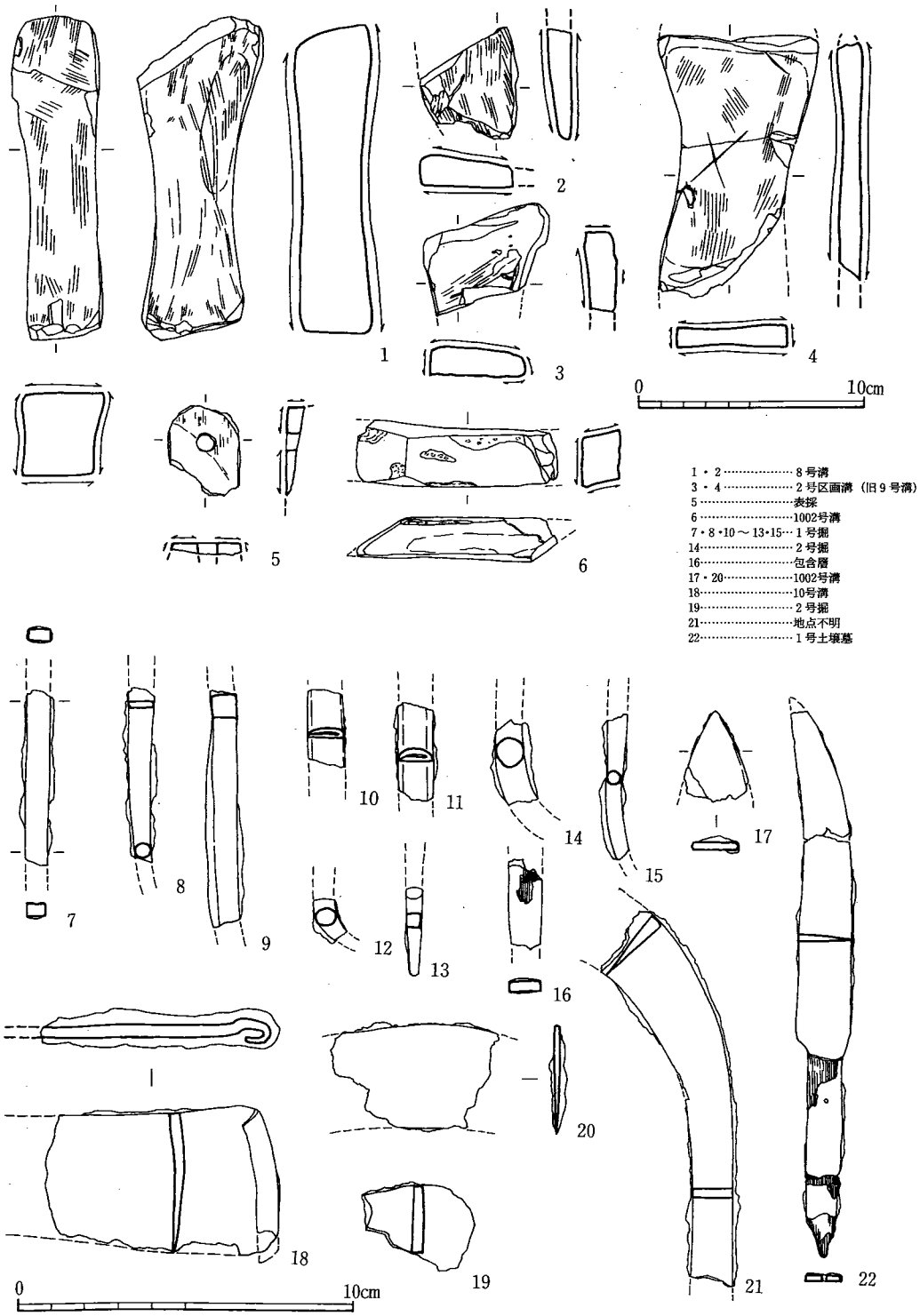


第89図　表採・包含層出土の中・近世土器・陶磁器実測図 (1/3)

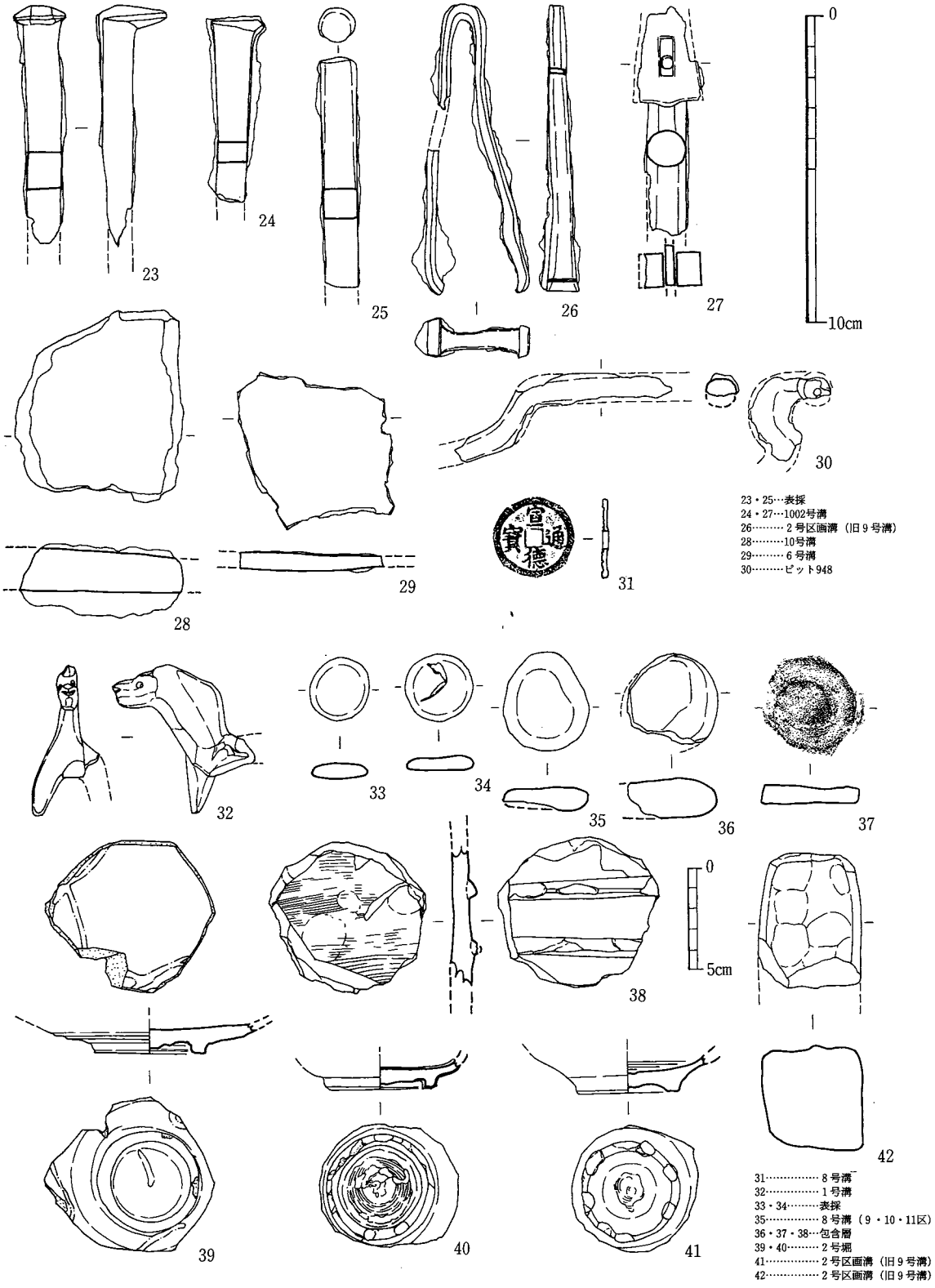
包含層出土・表採の土器・陶磁器（図版63　第89図）

1～4は土師器。1は糸切りで復元口径7.8cm、復元底径6.4cm、器高1.2cm。2は高台小片。3は底部が厚く高台状になり、糸切りが明瞭に残る。胎土は密で白黄色を呈する。4の杯は復元口径16.4cm。5は内黒の黒色土器。復元高台径9.2cm。6～8は陶器。6は備前焼の壺底部か。外面ヨコナデが残る。7は体部外面に自然釉がかかる。備前か。8は内面にのみ施釉。9～12は白磁。全て椀のⅣ類。底部付近は露胎になる。13～15は青磁椀。13は同安窯系で、釉は緑灰色、外面に櫛目文を施す。14・15は龍泉窯系。14の釉は萌葱色で内面に花文を描き、15の釉は青緑色で外面に鎬蓮弁を施す。16・17は国産の磁器椀。16は畳付きと外底部が露胎で釉は緑色と灰色が混じる。17は高台・外底部露胎で、内面見込みに沈線を施す。釉は淡い萌葱色。18は染付の蓋。呉須は濃い藍色、釉はやや青みを帯びる。受け部は露胎。19～22は瓦質土器。19は鉢で口縁部内外面ヨコナデ調整体部、外面は指圧痕が残り、内面は斜のハケ調整。端部は若干内側につまみ出す。20は摺り鉢で、外面口縁付近ヨコナデ、体部は斜のハケ調整。内面は口縁部斜のハケ調整で、下ろし目が見える。端部が平坦に作る。21・22は火鉢。21は脚のみ。低い突帯が付き、竹菅文が4つの脚にそれぞれ2つずつ施される。22は菊花文のスタンプを巡らせる。（齋部）

スナップ3　開通した筑紫野バイパス（原田付近）



第90図　中・近世遺構出土・表採の石製品・鉄製品実測図（1/2・1/3）



第91図　中・近世遺構出土の鉄製品・その他の遺物実測図（1/2・1/3）

Ⅲ　第２次調査の記録

１．調査の経過

平成９年10月、調査を実施予定の農道付け替え部分に重機が入り、調査着手前に削平を実施した旨が教育庁指導第二部文化課（当時）に連絡があった。現地に赴いた所、調査区の大部分が掘削を受け、斜面には竪穴住居跡と考えられる遺構や溝が断面に露出し、平面に柱穴や溝などの遺構が既に露出した状況であった。後述する２号溝は元々の残存状態が良好であったため削平後も平面に遺構の痕跡が見出せたが、多くの遺構は掘削されて消滅し、その存在は明らかにはできない状態であった。

調査前に掘削を実施した業者に厳重な注意をし、今後同様の行為をとらないようもとめ、遺構が残存している箇所について緊急調査を実施した。調査範囲はおおよそ110㎡である。

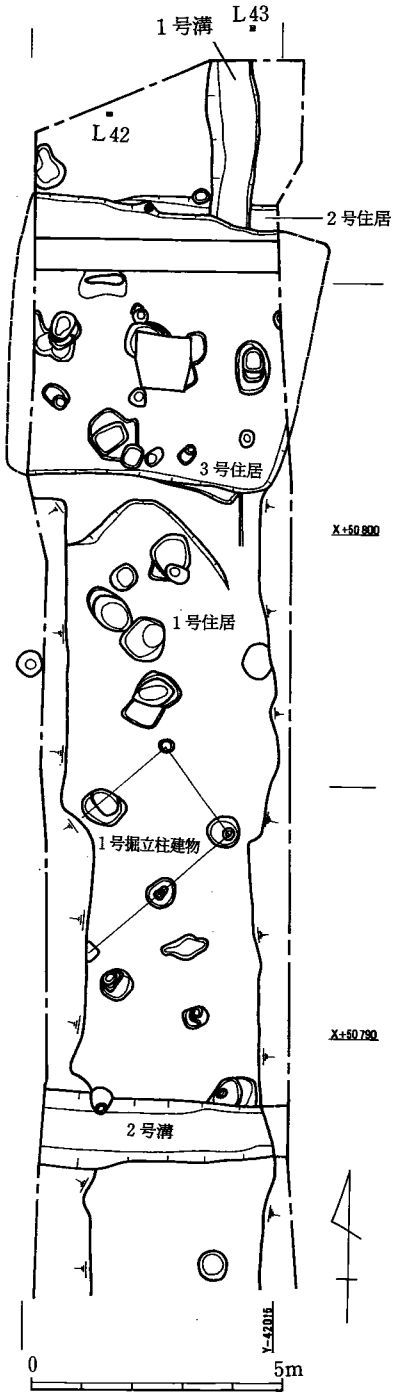
調査期間は平成９年10月29日から11月18日の間で実施した。第２次調査に従事された外作業員は以下の通りである。

井上繁利　中村百合子　原真樹雄　藤野藤子
吉郷恒雄　吉郷フジエ　吉郷カズエ

測量の基準点

第２次調査における測量の基準点および座標データは一般国道３号線バイパス建設の基準データを利用した。使用した杭は新設杭のL42.43.45の３点である。また、レベル高は同じくL45番杭の数値を用いた。数値は以下の通りである。いずれも国土座標法第二系に基づいている。

L42　X＝＋50808.550　Y＝－42018.550
L43　X＝＋50810.211　Y＝－42015.604
L45　X＝＋50787.142　Y＝－42011.661
L.H.＝T.P.＋45.812



第92図　２次調査遺構配置図(1/150)

2．遺構と遺物

第２次調査は、一般国道３号バイパスの東に近接する農道付け替え地点で実施した。調査着手以前に削平を受けてたために遺構の残存状況は決して良いものとは言えない。切り通し断面には竪穴住居のカマド跡と思われる焼土や柱穴・溝が半裁された状態で残っており、調査範囲内の削平箇所には少なくとも２～３棟の竪穴住居跡が存在していたようである。調査面積は、平面に遺構が残存していた範囲に限定したため約110m²となった。

調査の結果、竪穴住居跡３棟、掘立柱建物跡１棟、溝２条などの遺構を検出した。以下に詳細を記す。

出土遺物は、ほとんどが細片であり、胴部片など図化していない遺物がパンコンテナ１箱程度ある。２・３号住居出土品はほぼ同時に掘削しているため、層位的にとらえられたものはわずかで、大半が遺物の種類によって分類しており、一部で混乱している可能性がある。

(1) 竪穴住居跡

１号住居跡（図版64　第93図）

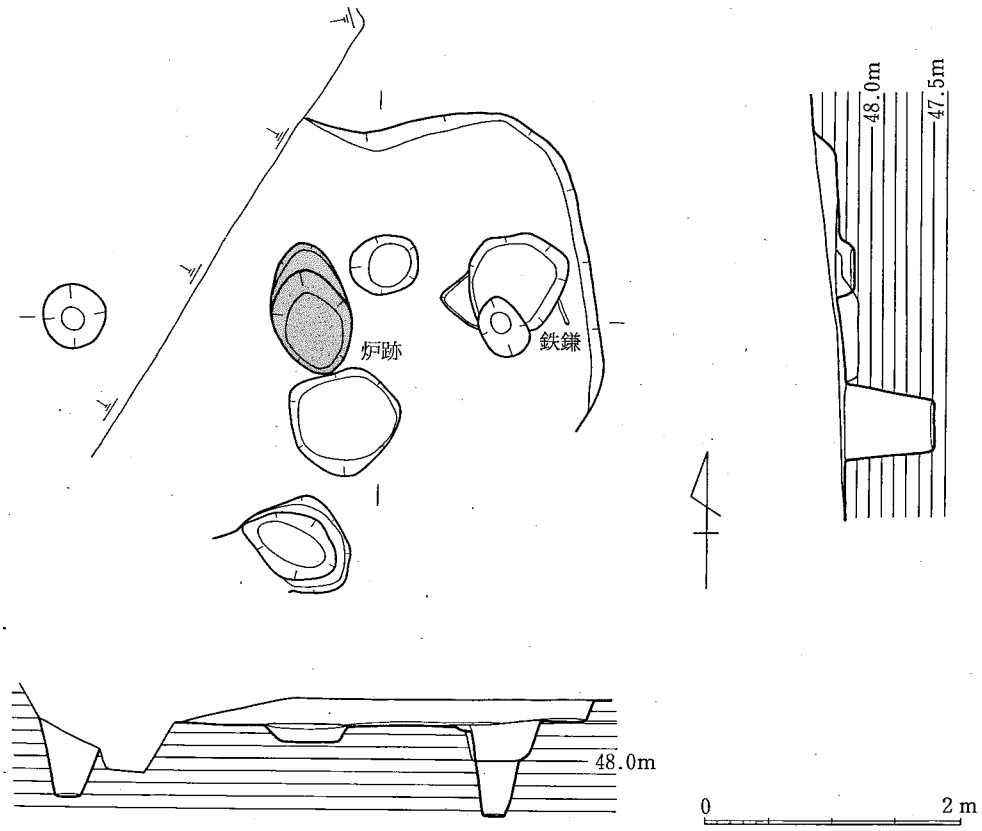
すでに全面にわたって削平を受け遺構面が露出しており、床面付近が僅かに残っていたに過ぎない。調査区内で検出段階での残存長は東西4.2m、南北3.66mを測る。

中央部に炉跡と考えられる焼土と炭がつまった1.05×0.66×0.17mの浅い土坑が存在し、0.96×0.74mの楕円形で深さ0.75mを測る柱穴掘形と西側壁面に削平されて痕跡として残っていた２本の主柱穴を検出している。主柱穴間は3.4mである。南側にある土坑が本住居の伴う屋内土坑であろうか。これまでの調査結果から、片側、もしくは両側にベッド状遺構が存在していた可能性が考えられるが、既に削平が著しいために確認には至っていない。規模から推定するとベッドを有していた可能性が考えられる。特に、東側の主柱穴が壁際であることから東側は削り出しのベッドである可能性が高く、その場合は規模が拡大する。また、遺構の前後関係も２・３号住居に切られていることとなり、両住居跡に先行する住居となる。

遺物（図版64　第97図１・４）出土遺物には床面直上で鉄鎌１本があり、主柱穴掘形内から打製石鏃１点が出土している他は土器などの時期資料は認められていないので断定しがたい。

２号住居跡（図版64　第94図）

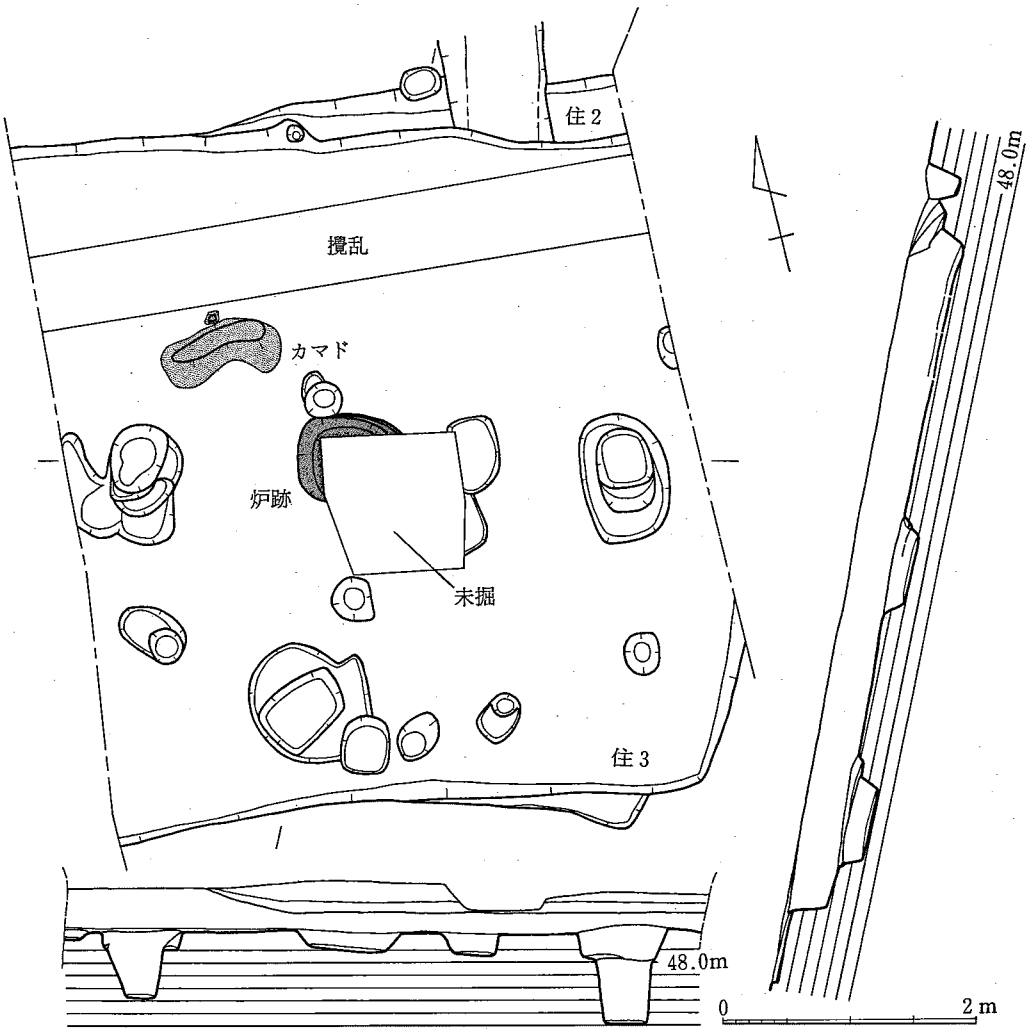
調査区の北側平坦面に位置する。２・３号住居は折り重なる状況で検出された。が、僅かに３号住居と軸線がずれているためにかろうじて存在を明らかにできた。１号溝に切られている。本調査区が里道として最近まで利用されていたことから残存状況は不良で、砕石を除去する際



第93図　2次調査1号竪穴住居跡実測図（1/60）

に床面をかなり削平してしまった。したがってわずかに床面付近が確認できたにすぎないが、辺の一部とかまど跡残欠から住居の復元はある程度可能である。推定規模は東西4.8m、南北5.6mの長方形プランである。西壁にかまどがとりつく。主柱穴数などは不明である。遺物は比較的多く残っており、須恵器・土師器の土器類の他にガラス小玉、石製紡錘車などが出土している。

遺物（図版64　第96図1～11）1～11まではいずれも2号住居出土である。1～5まではいずれも須恵器の杯身・杯蓋である。1は約½の個体で反転復元している。復元口径14.6cmの杯蓋で焼成は良好。端部はわずかに段が残るが全体的に作りは鈍い。2は焼き歪みの大きい。端部は明瞭な段があり、1に比べて作りはシャープである。復元口径13.3cm。4は完形の杯身で、かまど残欠部からの出土。支脚に用いられた石材にのせられたような状態で出土しており、かまどを破壊した後に供えられたものであろうか。立ち上がりの端部が研磨されている点もかまど祭祀に伴うものであることを伺わせる。口径13.4cm、器高さ3.9cm、色調灰白色でやや軟質である。6・7はいずれも土師器の甑と考えられる。同一個体の可能性もあるが、本稿では別個



第94図　2次調査2・3号竪穴住居跡実測図（1/60）

体として図化している。いずれの個体も赤褐色でタテハケが顕著に残る。8は甕の胴部片である。極めて軟質な焼き上がりで表面の磨耗も著しい。9・10・11はいずれも土師器口縁部の細片である。いずれの遺物にも大きな時期の隔たりはなく、6世紀の後半を示しており、2号住居の廃絶時期を示すものであろう。

3号住居跡（図版64　第94図）

3号住居跡は2号住居跡の下層にあり、今回調査では最も残存状況が良好な遺構である。

2号住居跡と同様に遺構中心部に基準杭が存在しているために未調査個所が存在する。また、

調査区外まで遺構が連続するために全体の規模は不明であるが、検出した規模は東西5.04m、南北が5.30mを測る。

1.0×0.68mの楕円形で深さ0.53mで2段掘りの柱穴と0.96×0.6mの不整円形で深さ0.53mの深さを測る2本の主柱穴と中央に炉跡1基を検出している。主柱穴間距離は3.90mを測る。炉跡は基準杭下にあるため完掘できなかったが、約0.9×0.7×0.15mの楕円形と推定される浅い土坑で、中に炭を多量に含んでいる。南側側壁に近接して不定形の屋内土坑が作られている。

出土遺物には細片が多く、図化に耐えうるものは少ない。

遺物(図版65　第96図) 2～17までは3号住居跡出土である。12は壺の口縁部である。13は底部である。外面のタタキが縄目状にみえるが明確ではない。表面の磨耗は著しい。14は甕の口縁の細片。口縁端部はほぼ水平で頸部に断面三角の貼り付け突帯を有する。他からの混入品であろうか。15は炉跡側のピット内からの出土遺物。3002号住居に伴う可能性もある。16は端部が磨耗しており口縁部が生きてこの形のままか、それとも続くものか不明。本稿では完結した形で図化した。内面はハケ、外面はタタキ状にみえるが判然としない。外面には大きく黒班が残る。ほぼ完形である。17は底部片である。

(2)　掘立柱建物跡

1号掘立柱建物跡（第95図）

掘立柱建物跡は1×2間以上のプランを持つ。P1は径0.82×0.66m、深さ0.35m、柱痕部径約0.26m、P2は径0.60×0.52m、深さ0.40m、柱痕部径約0.20m、P3は径0.64×0.60m、深さ0.31m、柱痕部径約0.20m、P4は0.28×0.22m、深さ0.10mを測る。P4は掘形のほとんどが削平を受け柱痕部のみが残ったものであろうか。

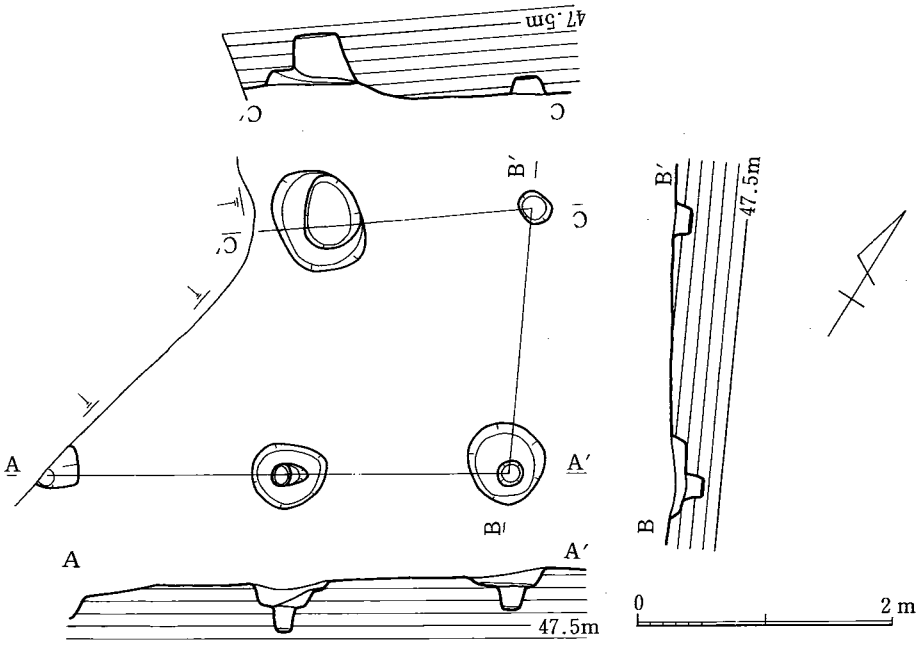
柱穴間距離はP1-P2 1.88m、P2-P3 1.80m、P3-P4 2.10m、P4-P1 1.72mでややひずんでいる。時期に関しては出土遺物がないために断定しがたい。

(3)　溝

1号溝

南北方向の溝である。すでに削平を受けており、残存状況は悪く、調査区北側の未削平箇所で検出されたものの削平を受けた箇所では続きが認められなかった。検出面での深さ約0.2m、幅0.8～1.1mである。遺物はわずかながら黒色土器、土師器、青磁片などが出土した。

遺物(図版65　第96図)18～20は1号溝からの出土遺物である。18は黒色土器椀である。底部は5条の沈線を回し高台部と接合し易くしている。器高8.0cm、口径16.4cm、高台部高さ2.0cm、



第95図　2次調査1号掘立柱建物実測図（1/60）

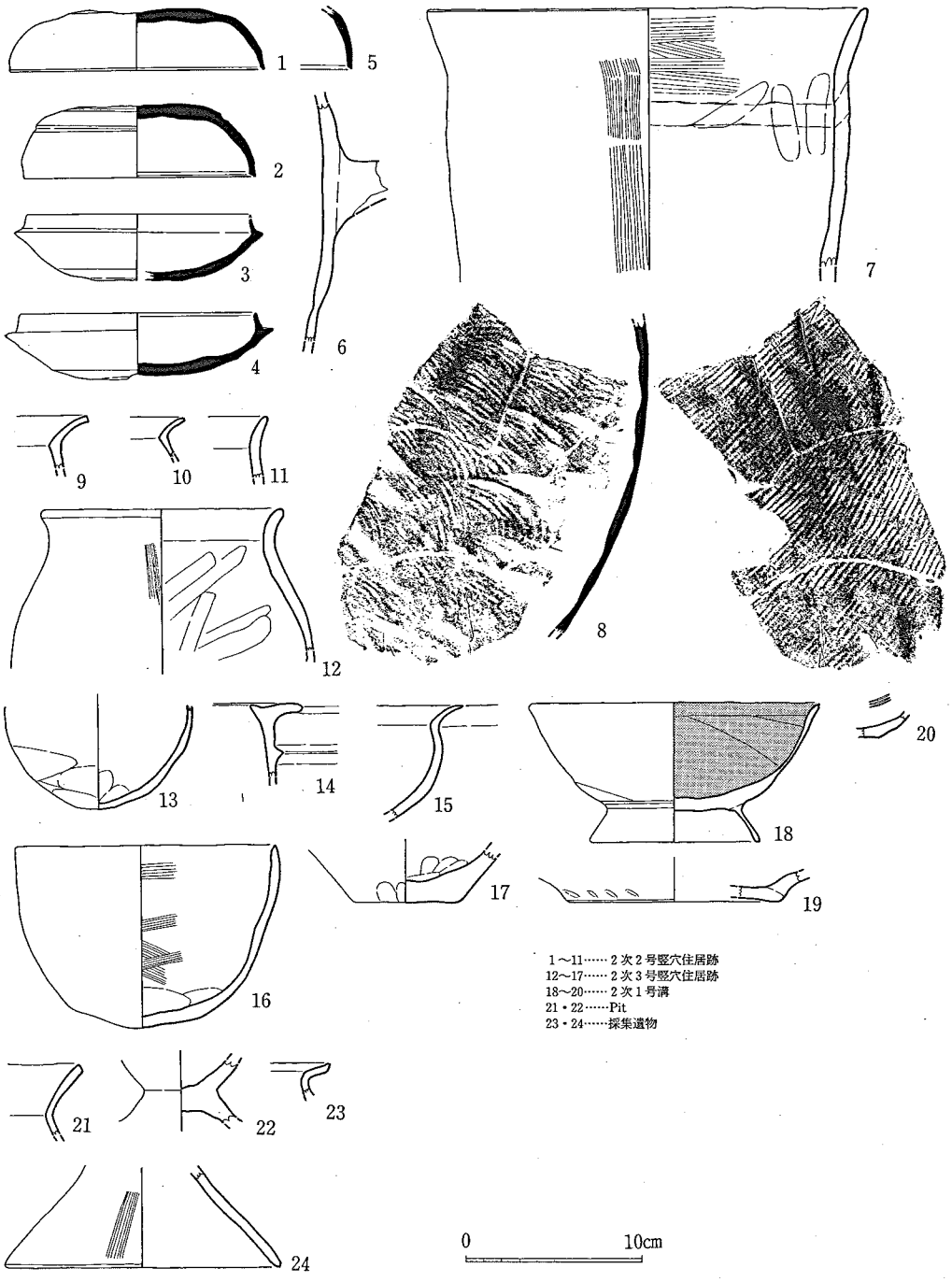
径9.2cmで高台部は高く、ふんばりが強い。内面は全面黒色を呈し、外面は乳白色である。約½片が残存する。19は土師器の底部である。細片であり詳細は不明だが中央部がややふくらんだ形状を呈す。20は青磁片である。他に細片のため図下していないが、白磁片1点も出土している。

2号溝（1次調査1002号溝）

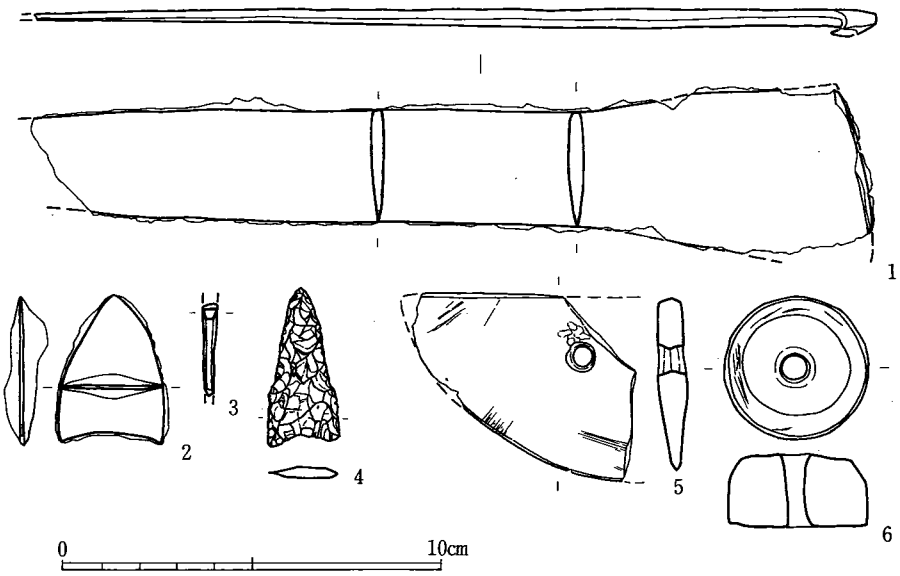
1次調査地点より連続する東西方向の大溝であるが、削平によりわずかに底面付近が残存していたにすぎない。逆梯子形を呈する溝である。出土遺物は認められていない。

(4)　その他の遺物

土器（図版65　第96図）21～24までは断面等で採集した遺物である。21･22は同一のピットからの出土である。21は土師器の口縁部である。細片であり口径の復元はできなかった。内外面ともに激しく磨耗しており、調整等は全くわからない。22は小型器台の脚部であろうか。やはり磨耗が激しい。外面に黒班が残る。23は壁面からの採集品。やや受け口気味の口縁を有する。細片であり口径復元はできない。24は調査区北側の壁面で採集した。土師器の小型器台の脚部片である。約⅓が残存しており、残存器高5.8cm、復元底径15.4cmを計る。表面はハケメ調整が残るが磨耗は著しい。焼成は良好で黒班が残る。図化していないが、壁面清掃時の採集品には



第96図　2次調査出土土器実測図（1/4）



第97図　2次調査出土鉄製品・石製品実測図（1/2）

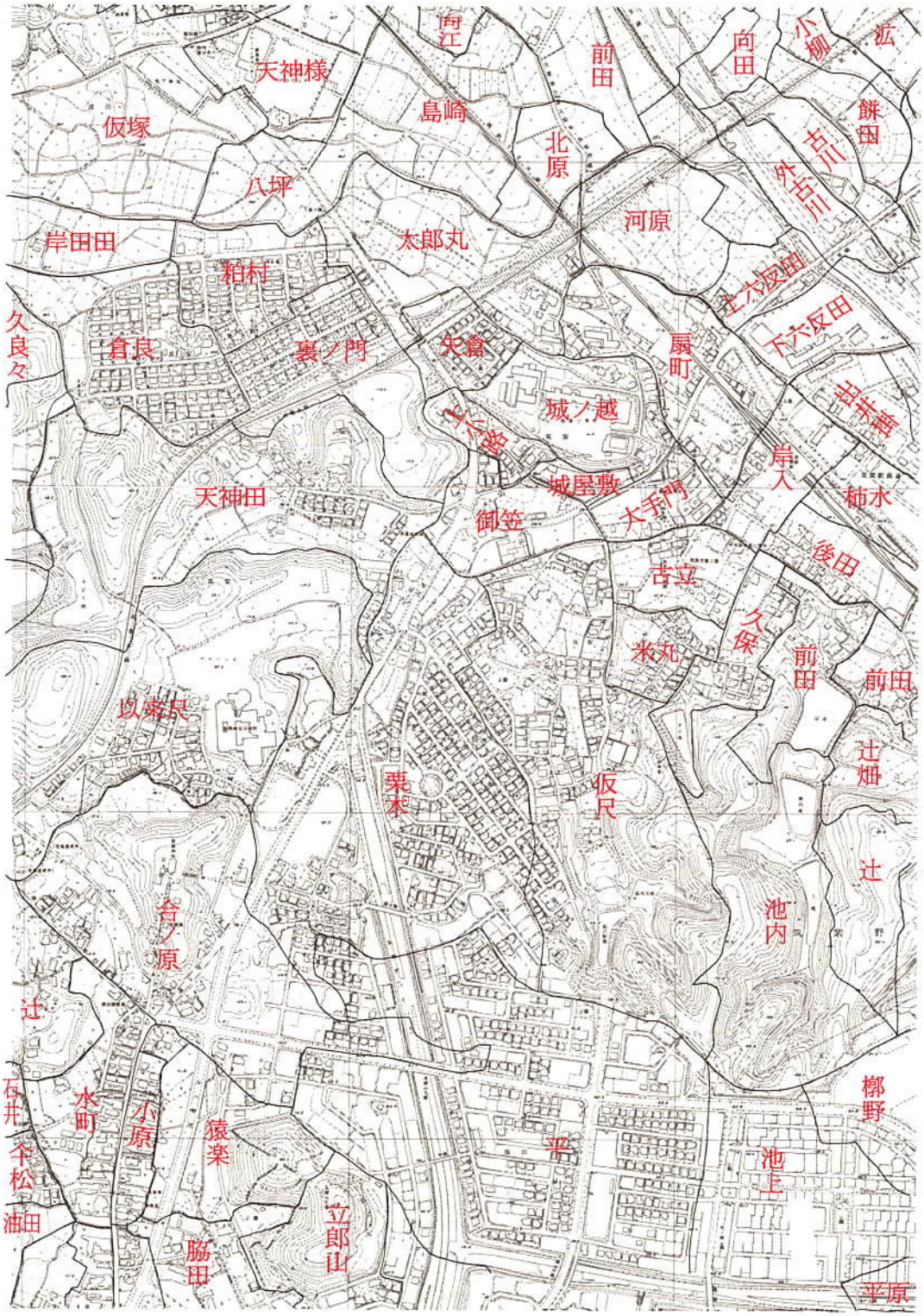
他に鉄滓片1点がある。

鉄器・石製品（図版65　第97図）

1は1号住居跡の北側床面直上から出土した鉄鎌である。先端部を欠損するもののほぼ完全な形である。残存長22.1cm、厚さ0.3～0.4cmを計る大型品である。2は削平されて露出した壁面を清掃中に採集した鉄鏃である。断面には竪穴住居跡と見られる遺構があり、本来はいづれかの竪穴住居跡の覆土内にあったものであろう。長さ4.0cm、幅は最大で2.6cmを計る。全体的に錆膨れが著しい。3も同じく壁面清掃中の採集品である。断面台形の有茎鉄鏃の鏃身である。4は1号住居跡の主柱穴から出土した石鏃である。全体的に細身である。表面は若干風化している。5は3号住居跡出土の石庖丁である。全体の約½を欠く。材質は軟質の石材を用いている。6は2号住居出土の石製紡錘車である。断面六角形を呈し、径3.8cm、厚さは1.9cm、孔口径は0.7cmを計る。石材は滑石で側面には細かな削痕が認められる。完形品である。他に図化していないがガラス製小玉（図版65）がある。色調はコバルトブルーを呈している。

(5)　まとめ

今回の調査では、狭い調査面積ながら1次調査の内容を補足するものである。調査が決定していながら着手前に削平を受けた事は極めて残念であったが、遺構密度は高く、出土遺物にも鉄器や玉類などが出土しており、本遺跡の重要性を考えさせるものといえる。集落域が本調査地点まで続いていたことが確認できたことも意義がある事と言える。



第98図　筑紫神社周辺字図（1/10,000）

Ⅳ おわりに

以来尺遺跡では、旧石器時代より人々の生活の舞台であった。特に、旧石器時代における国府系ナイフ形石器や縄文時代草創期の神子柴型石斧の検出はこれからの文化論を語る上で重要なものとなってくる。そのような人々の営みは、一部途切れつつ続くが、特に注目されるのは、弥生時代後期の大規模集落であろう。この以来尺遺跡の立地する丘陵は、現在においても福岡平野から筑紫平野へと抜ける要所で、広く筑紫平野、小郡丘陵を望むことができる好立地にある。この丘陵の平坦地から台斜面部にかけての範囲を利用し展開する集落は、当時としてもそれなりの重要な位置づけにあったことを窺わせる。その一端を示すのが10号掘立柱建物跡などであり、この建物の性格を考える上では当然立地も検討要素となってくる。その後、この大規模集落は急速に衰退して行き、古墳時代では、後期に古墳が築造され点在的に集落が残される程度になる。そして、再びこの丘陵が広範囲に使用されるのは、14～16世紀にかけての中世に入ってからである。特に今回検出した南北地域を東西に走る１・２号堀や土塁、区画溝の存在はここが山城であったと同時に、同じ頃に同地域に勢力があった筑紫氏の拠点として関わりを持つものとして注目される。また、これら各時代の遺構の時期については、このあとに一覧表として報告するのでそちらも参照していただきたい。

今回の報告を持って、昭和56年に調査を開始した筑紫野バイパス埋蔵文化財関係の調査報告を終える。この一連の調査がもたらした成果は、多大であり重要なものが多かった。今後、同地域の歴史を語る上での基礎資料となるだろう。一方、筑紫野バイパスは、平成10年の３月に無事開通し、いまや福岡都市圏の大動脈として、日々活躍している。今後も広く、利用され続けていくであろう。

最後になりましたが、このバイパス建設に際し、関わってこられた皆様がたに心よりお礼申し上げます。

報告書抄録

ふりがな	いらいじゃくいせき
書名	以来尺遺跡
副書名	福岡県筑紫野市大字筑紫所在遺跡の調査
巻次	III
シリーズ名	一般国道3号　筑紫野バイパス関係埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	第7集
編著者名	馬田弘稔・水ノ江和同・齋部麻矢・秦　憲二・杉原敏之（編集）・森井啓次
編集機関	福岡県教育委員会
所在地	〒812-8575　福岡県福岡市博多区東公園7番7号　TEL（092）651-1111
発行年月日	1999年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 m²	調査原因
以来尺（いらいじゃく）	福岡県筑紫野市（ふくおかけんちくしのし） 大字筑紫字以来尺（おおあざちくしあざいらいじゃく） 927・29・932他	402176	170142	33°27′25″	130°32′55″	19930506 ～ 19950120 19971029 ～ 19971118	12,360	道路（一般国道3号筑紫野バイパス）建設に伴う事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
以来尺	集落	旧石器		ナイフ形石器 台形石器 角錐状石器	
		縄文		石器・晩期土器	大型掘立柱建物跡
		弥生	竪穴住居跡 掘立柱建物跡 土坑 溝	弥生土器 石器・鉄器 土製品 玉類	通路状遺構 青銅製鋤先
		古墳	横穴式石室 竪穴住居跡 古墳	須恵器 土師器 石器・鉄器・銅製品 玉類	
		中世	溝 掘立柱建物跡	陶磁器・土師器 石器・鉄器	
	山城	近世	溝	陶磁器	

福岡県行政資料

分類番号　ＪＨ	所属コード 2133051
登録年度　H10	登録番号　12

一般国道3号　筑紫野バイパス関係埋蔵文化財調査報告　第７集

以来尺遺跡（いらいじゃくいせき）Ⅲ

上巻

福岡県筑紫野市大字筑紫所在遺跡の調査

平成11年３月31日

発行　福岡県教育委員会
〒812-8575　福岡市博多区東公園７番７号

印刷　有限会社　森田印刷所
〒810-0074　福岡市中央区大手門２丁目1-21